

高原町文化財調査報告書第1集

# 立切地下式横穴墓群

入木地区団体営ほ場整備事業に  
伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

平成 3 年 3 月

宮 崎 県 西 諸 県 郡

高 原 町 教 育 委 員 会

高原町文化財調査報告書第1集

# 立切地下式横穴墓群

入木地区団体営ほ場整備事業に  
伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

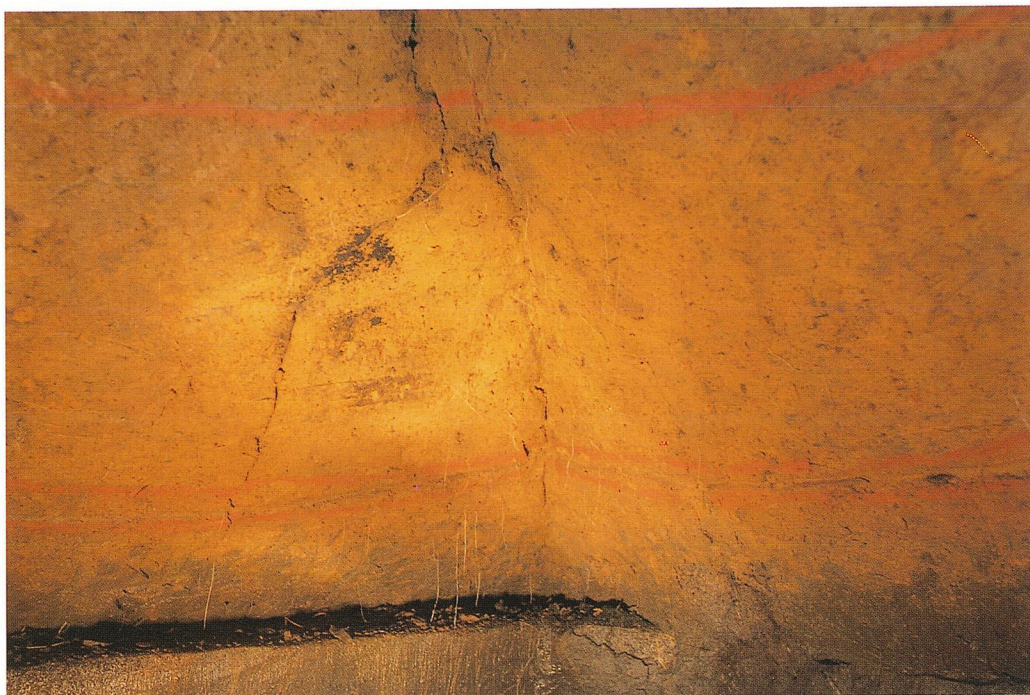
平成 3 年 3 月

宮 崎 県 西 諸 県 郡

高 原 町 教 育 委 員 会



54号 玄室左壁



54号 玄室奥壁～右壁



54号 玄室右壁



54号 玄室天井

## 序

本文化財調査報告書は、昭和62年度農業基盤総合整備事業入木地区ほ場整備にともない昭和62年度、63年度に調査を実施した高原町大字後川内字立切に所在する、立切地下式横穴墓群の発掘調査報告書です。

本調査では古墳時代の墳墓が数多く出土し、多大な成果をあげることができました。発掘で得られた成果は先人が残した私達の文化遺産であり、これらの成果を生かすことが我々に課せられた重大な責務と考えております。

本書が町内に所在する文化財の保存・保護に活用され、また、本町の学術資料として学校教育、社会教育に生かされるとともに、幅広く活用していただければ幸いに存じます。

尚、発掘調査にあたって、宮崎県教育庁文化課、長崎大学医学部、宮崎市教育委員会、都城市教育委員会、西諸県農林振興局等、各関係機関をはじめ関係者各位よりいただいたご指導、ご協力に対し心からお礼を申し上げます。

平成3年3月

高原町教育委員会

教育長 正入木 久 男

## 例 言

- 1, 本報告は、昭和62年11月入木地区団体営ほ場整備事業実施中、西諸県郡高原町大字後川内字立切において発見された地下式横穴墓群の発掘調査報告書である。
- 2, 発掘調査は、高原町教育委員会が調査主体となり、昭和62年12月及び昭和63年4月の2次にわたり実施した。
- 3, 1次発掘調査は、県文化課主任主事（現主査）面高哲郎、2次発掘調査は、同主任主事長津宗重、同主事（現宮崎県総合博物館学芸課主任主事）近藤協、県文化課主事（現主任主事）谷口武範、同主事吉本正典の4名が担当した。1次発掘調査の際は、都城市教育委員会、宮崎市教育委員会の協力があった。
- 4, 貝輪の同定については、大分市歴史資料館館長木村幾多郎氏の教示をいただいた。
- 5, 本報告の遺構・遺物の執筆は、面高哲郎、長津宗重、近藤協、谷口武範、吉本正典が担当し、遺物の計測及び計測表の作成は戸高真知子が担当した。
- 6, 本報告で使用した地下式横穴墓の遺構実測図は、面高哲郎、長津宗重、近藤協、谷口武範、吉本正典、都城市教育委員会主事矢部喜多夫、同栗畑光博、宮崎市教育委員会嘱託（現清武町教育委員会主事）伊東但が作成した。地形測量及び遺構実測を測量会社に委託したが、1次については大半を測量会社に委託している。
- 7, 出土遺物の実測図は、埋蔵文化財センターの戸高真知子、松浦由美、八木裕子、富永優子、押川保子、金子悦子、田村とし子、棧陽子が作成した。
- 8, 遺構、出土遺物のトレースは、面高哲郎、長津宗重、谷口武範、吉本正典、県文化課主事東憲章、埋蔵文化財センターの戸高真知子、松浦由美、八木裕子、富永優子、棧陽子が行った。
- 9, 本書の方位は磁北である。

# 本文目次

I	はじめに	1
1	調査に至る経緯	1
2	遺跡の位置と歴史的環境	2
II	調査の結果	7
1	調査の概要	7
2	立切 1号地下式横穴墓	8
3	立切 2号地下式横穴墓	9
4	立切 3号地下式横穴墓	11
5	立切 4号地下式横穴墓	13
6	立切 5号地下式横穴墓	15
7	立切 6号地下式横穴墓	15
8	立切 7号地下式横穴墓	18
9	立切 8号地下式横穴墓	18
10	立切 9号地下式横穴墓	19
11	立切10号地下式横穴墓	19
12	立切11号地下式横穴墓	22
13	立切12号地下式横穴墓	22
14	立切13号地下式横穴墓	24
15	立切14号地下式横穴墓	24
16	立切15号地下式横穴墓	24
17	立切16号地下式横穴墓	26
18	立切17号地下式横穴墓	28
19	立切18号地下式横穴墓	28
20	立切19号地下式横穴墓	30
21	立切20号地下式横穴墓	30
22	立切21号地下式横穴墓	30
23	立切22号地下式横穴墓	32
24	立切23号地下式横穴墓	32
25	立切24号地下式横穴墓	34
26	立切25号地下式横穴墓	34
27	立切26号地下式横穴墓	37

28	立切27号地下式横穴墓	37
29	立切28号地下式横穴墓	39
30	立切29号地下式横穴墓	39
31	立切30号地下式横穴墓	41
32	立切31号地下式横穴墓	43
33	立切32号地下式横穴墓	45
34	立切33号地下式横穴墓	47
35	立切34号地下式横穴墓	47
36	立切35号地下式横穴墓	47
37	立切36号地下式横穴墓	50
38	立切37号地下式横穴墓	52
39	立切38号地下式横穴墓	52
40	立切39号地下式横穴墓	55
41	立切40号地下式横穴墓	57
42	立切42号地下式横穴墓	59
43	立切43号地下式横穴墓	59
44	立切44号地下式横穴墓	61
45	立切45号地下式横穴墓	61
46	立切46号地下式横穴墓	64
47	立切47号地下式横穴墓	67
48	立切48号地下式横穴墓	67
49	立切49号地下式横穴墓	69
50	立切50号地下式横穴墓	69
51	立切51号地下式横穴墓	72
52	立切52号地下式横穴墓	75
53	立切53号地下式横穴墓	75
54	立切54号地下式横穴墓	77
55	立切55号地下式横穴墓	79
56	立切56号地下式横穴墓	81
57	立切57号地下式横穴墓	81
58	立切58号地下式横穴墓	83
59	立切59号地下式横穴墓	83
60	立切60号地下式横穴墓	87



61	立切61号地下式横穴墓	89
62	立切62号地下式横穴墓	92
63	立切63号地下式横穴墓	92
64	立切64号地下式横穴墓	95
65	立切65号地下式横穴墓	95
66	立切67号地下式横穴墓	100
67	立切68号地下式横穴墓	100
68	立切69号地下式横穴墓	102
69	立切70号地下式横穴墓	103
70	立切71号地下式横穴墓	103
71	立切72号地下式横穴墓	105
72	立切73号地下式横穴墓	105
73	立切74号地下式横穴墓	107
74	立切41号土坑	107
75	立切66号土坑	107
76	出土土器	107
III	まとめ	135

付論 立切地下式横穴墓群出土人骨

## 挿 図 目 次

第 1図	遺跡の位置及び遺跡分布図	3
第 2図	遺跡の地形図及び調査地	4
第 3図	立切地下式横穴墓群遺構分布図	5・6
第 4図	立切 1 号地下式横穴墓	9
第 5図	立切 2 号地下式横穴墓	10
第 6図	立切 3 号地下式横穴墓	12
第 7図	立切 4 号地下式横穴墓	14
第 8図	立切 5 号・7 号地下式横穴墓	16
第 9図	立切 6 号地下式横穴墓	17
第10図	立切 8 号・9 号地下式横穴墓	20
第11図	立切10号・11号地下式横穴墓	21

第12图	立切12号·13号地下式横穴墓	·23
第13图	立切14号·16号地下式横穴墓	·25
第14图	立切15号地下式横穴墓	·27
第15图	立切17号·18号地下式横穴墓	·29
第16图	立切19号·20号地下式横穴墓	·31
第17图	立切21号·22号地下式横穴墓	·33
第18图	立切23号·24号地下式横穴墓	·35
第19图	立切25号·26号地下式横穴墓	·36
第20图	立切27号·28号地下式横穴墓	·38
第21图	立切29号地下式横穴墓	·40
第22图	立切30号地下式横穴墓	·42
第23图	立切31号地下式横穴墓	·44
第24图	立切32号地下式横穴墓	·46
第25图	立切33号·34号地下式横穴墓	·48
第26图	立切35号地下式横穴墓	·49
第27图	立切36号·39号地下式横穴墓	·51
第28图	立切37号地下式横穴墓	·53
第29图	立切38号地下式横穴墓	·54
第30图	立切40号地下式横穴墓	·56
第31图	立切42号地下式横穴墓	·58
第32图	立切43号地下式横穴墓	·60
第33图	立切44号地下式横穴墓	·62
第34图	立切45号地下式横穴墓	·63
第35图	立切46号地下式横穴墓	·65
第36图	立切47号地下式横穴墓	·66
第37图	立切48号地下式横穴墓	·68
第38图	立切49号地下式横穴墓	·70
第39图	立切50号地下式横穴墓	·71
第40图	立切51号地下式横穴墓	·73
第41图	立切52号·55号地下式横穴墓	·74
第42图	立切53号地下式横穴墓	·76
第43图	立切54号地下式横穴墓	·78
第44图	立切56号地下式横穴墓	·80

第45图	立切57号·73号地下式横穴墓	82
第46图	立切58号地下式横穴墓	84
第47图	立切59号地下式横穴墓	85
第48图	立切60号地下式横穴墓	88
第49图	立切61号地下式横穴墓	90
第50图	立切62号地下式横穴墓	91
第51图	立切63号地下式横穴墓	93
第52图	立切64号地下式横穴墓	96
第53图	立切65号地下式横穴墓	98
第54图	立切67号·69号地下式横穴墓	99
第55图	立切68号地下式横穴墓	101
第56图	立切70号·71号地下式横穴墓	104
第57图	立切72号地下式横穴墓	106
第58图	立切74号地下式横穴墓	108
第59图	立切41号·66号土坑	109
第60图	立切1号·2号地下式横穴墓出土遗物	111
第61图	立切3号地下式横穴墓出土遗物	112
第62图	立切4号·5号地下式横穴墓出土遗物	113
第63图	立切6号·8号·10号·12号地下式横穴墓出土遗物	114
第64图	立切15号·16号地下式横穴墓出土遗物	115
第65图	立切23号·24号·25号·29号·31号·32号·34号·37号地下式横穴墓出土遗物	116
第66图	立切30号地下式横穴墓出土遗物	117
第67图	立切35号·40号地下式横穴墓出土遗物	118
第68图	立切38号·43号·45号·50号地下式横穴墓出土遗物	119
第69图	立切52号·53号·54号地下式横穴墓出土遗物	120
第70图	立切58号·59号·60号地下式横穴墓出土遗物	121
第71图	立切61号·63号地下式横穴墓出土遗物	122
第72图	立切63号·64号·65号地下式横穴墓出土遗物	123
第73图	立切45号·65号·67号·68号·71号·74号地下式横穴墓出土遗物	124
第74图	立切18号·51号·53号·54号·61号地下式横穴墓、立切A群·B群他出土土器	125

# 表 目 次

表 1 鉄器計測表..... 126

- 1, 剣    2, 刀    3, 鉄鏃    4, 鉄斧    5, 鍬鉋    6, 茎刀子  
7, 蕨手刀子    8, 鍬先    9, 鉄釧    10, 毛抜状鉄器

# 図 版 目 次

図版 1 立切地下式横穴墓群の遠景及び遺構分布状況、立切 1号地下式横穴墓  
図版 2 立切 2号・3号地下式横穴墓  
図版 3 立切 3号・4号地下式横穴墓  
図版 4 立切 4号・5号・6号地下式横穴墓  
図版 5 立切 7号・8号・9号・12号地下式横穴墓  
図版 6 立切15号・16号地下式横穴墓  
図版 7 立切19号・20号・21号・22号・23号地下式横穴墓  
図版 8 立切23号・24号・25号・26号地下式横穴墓  
図版 9 立切26号・27号・28号・29号・30号地下式横穴墓  
図版10 立切30号・31号地下式横穴墓  
図版11 立切31号・33号・34号・35号地下式横穴墓  
図版12 立切35号・36号地下式横穴墓  
図版13 立切37号・38号地下式横穴墓  
図版14 立切38号・40号・41号・42号地下式横穴墓  
図版15 立切43号・44号・45号・47号・50号地下式横穴墓・B-8区高坏出土状況  
図版16 立切51号・52号・53号・54号・60号地下式横穴墓  
図版17 立切54号・73号・58号・59号地下式横穴墓  
図版18 立切59号・60号地下式横穴墓  
図版19 立切61号・62号・63号・64号地下式横穴墓  
図版20 立切64号・65号・67号・68号・69号・70号・71号・72号地下式横穴墓  
図版21 立切 1号・2号地下式横穴墓出土遺物  
図版22 立切 3号地下式横穴墓出土遺物  
図版23 立切 4号・5号地下式横穴墓出土遺物  
図版24 立切 6号・8号・10号・12号地下式横穴墓出土遺物  
図版25 立切15号・16号地下式横穴墓出土遺物

図版26 立切23号・24号・24号・25号・29号・31号

32号・34号・37号地下式横穴墓出土遺物

図版27 立切30号地下式横穴墓出土遺物

図版28 立切35号・40号地下式横穴墓出土遺物

図版29 立切38号・43号・45号・50号地下式横穴墓出土遺物

図版30 立切52号・53号・54号地下式横穴墓出土遺物

図版31 立切58号・60号地下式横穴墓出土遺物

図版32 立切61号・63号地下式横穴墓出土遺物

図版33 立切63号・64号・65号地下式横穴墓出土遺物

図版34 立切64号・65号・67号・68号・71号・74号地下式横穴墓出土遺物

図版35 立切地下式横穴墓群出土遺物（把装具・鉄鏃・土器・平玉・貝輪）

# I は じ め に

## 1. 調査に至る経緯

高原町では、昭和62年度、国の補助をえて入木地区は場整備事業立切工区の工事に11月着手した。工事予定地は、標高約6mの丘の頂部から西側斜面で、西端と頂部との比高差は10mである。工事は、丘の頂部を下げる作業から実施され、まずB～D-7～10区で地下式横穴墓が発見されていたようである。それは、堅坑の欠損状況から推定されるが、これが古墳時代の遺構とは認識されなかったようである。その後、頭蓋に赤色顔料が塗布された人骨などを含む8体が埋葬されたD-10区の30号が発見され、11月19日、高原町教育委員会へ連絡された。11月24日、県文化課の永友主任主事の現地調査で地下式横穴墓であることを確認した。町では11月28日付けで遺跡発見の通知を提出するとともに発見された地下式横穴墓の周辺については工事を中断し、また、町に埋蔵文化財専門職員がいないため、併せて県教育委員会に職員の派遣依頼があった。工期の関係もあったので30号に影響のない部分については、工事が続行され、地下式横穴墓の発見が相次いだ。発掘調査は、県文化課の職員の日程の都合上、12月9日から25日までの予定で実施することになったが、その間、発見された地下式横穴墓は10数基となった。調査期間の関係で地形測量及び実測の一部を測量会社に委託し、併せて都城市及び宮崎市教育委員会の協力を求め、出土人骨の調査は、長崎大学医学部第二解剖学教室に依頼した。

調査は、12月9日から面高哲郎の担当で着手した。10数基の地下式横穴墓は、調査対象地の丘頂部から南西斜面部に分布し、地形及び地下式横穴墓の分布状況から未確認の地下式横穴墓が10数基はあるものと考えられた。そのため、発見されていた地下式横穴墓の調査と並行して、工事により削平予定約9,900㎡を全面重機を使用して耕作土等を剥いだところ、調査半ばごろにしてその数は40基をこえ、最終的に70余基となった。約10日間ですべてを調査することは困難である。1月に調査を継続するにしても調査員の確保が困難であったので、一部工事を繰り越し再度発掘調査を実施することで協議を行ったところ、理解が得られ、4月に2次調査を実施することになった。1次調査ではF区以西までを実施することとし、都城市及び宮崎市教育委員会の職員派遣などの協力ながら27日までの間に地下式横穴墓38基、土坑2基を調査した。2次調査は、長津宗重、谷口武範、近藤協、吉本正典の4名の担当で昭和63年4月4日から26日まで実施し、34基の地下式横穴墓を調査した。出土人骨については一次と同じく二次も長崎大学医学部第19解剖学教室に依頼した。

2次にわたる調査で72基の地下式横穴墓が発見されたが、地下式横穴墓の構造、立地、分布状況などに貴重な資料が得られた。これも工事関係者の理解により工事を繰り越すなどの協力があったためである。また、A-2区で発見され、玄室天井部に赤色顔料で垂木などが表現されていた54号地下式横穴墓は、畑の下にはいるが、保存されている。

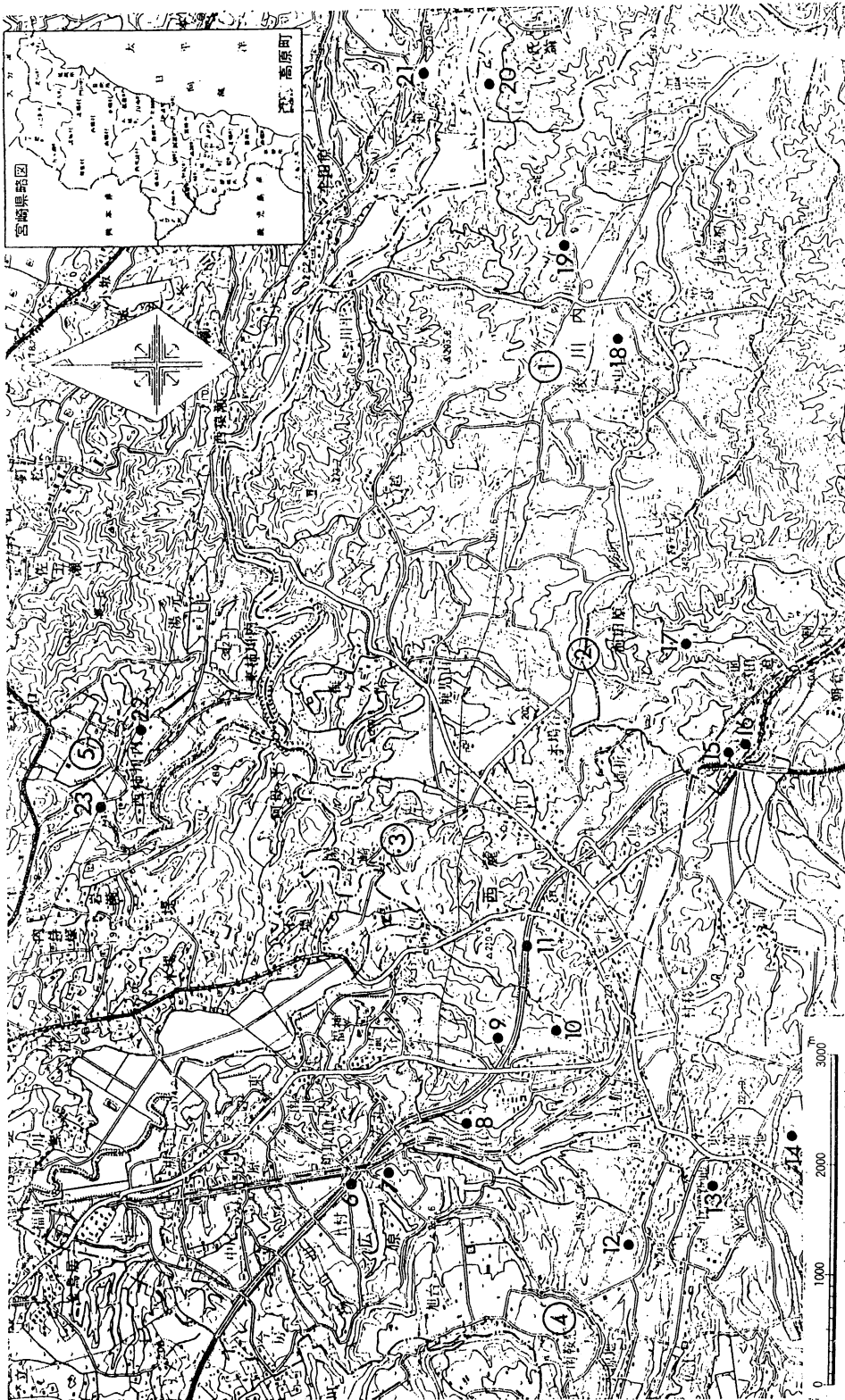
## 2. 遺跡の位置と歴史的環境

霧島連山の東麓には、諸県山地と呼ばれる比較的低い（海拔300～400m以下）、全体として北東から南西へ連なる丘陵状山地が発達しており、この山地は、都城盆地と小林盆地の界となっている。野尻町瀬戸ノ口から高崎町笛水へ続く山地と高原町霞原から高崎町新田へ続く山地との間にある凹地帯は、その中央部を炭床川が南東方向へ流路をとり、高崎町轟で北流してきた大淀川と合流する。炭床川の両岸には、流水により形成されたシラス層を基盤とする段丘が舌状の台地状に幾筋も見られ、沖積地は炭床川周囲に細長く見られるのみである。立切地下式横穴墓群は、その一段丘上に立地する。

立切地下式横穴墓群は、行政上は西諸県郡高原町大字後河内字立切に所在する。炭床川流域の凹地の南東部は、北諸県郡高崎町大字江平である。

炭床川流域の遺跡は、分布調査がある程度進んでいる高崎町側では縄文時代の遺跡が大川毛A遺跡など3か所、弥生時代の遺跡が石蓋土壌が検出された朴木遺跡など3か所、古墳時代の遺跡では鶉ノ原地下式横穴墓群の1か所が確認されているが、高原町側では古墳時代の湯ノ崎地下式横穴墓、日守地下式横穴墓群の他、時期や遺跡の性格が不明の川除遺跡、宮ノ谷遺跡が確認されているのみである。確認されている遺跡は段丘上に立地し、地下式横穴墓を除けば、弥生時代以前の時期のものが多い。また、炭床川流域の周縁についても高原町内では九州縦貫自動車道建設に伴う調査で立山遺跡などが確認されてはいるが、時期や性格が不明の遺跡が多い。高崎町側については、確認されている遺跡は多く、縄文時代の遺跡17か所、弥生時代の遺跡16か所、古墳時代の遺跡17か所でうち5か所は墳墓群である。平安時代の遺跡は1か所である。古墳時代の遺跡の中で発掘調査された遺跡は、高崎町の上示野原遺跡と柏木遺跡があり、中期から後期の成川系の刻目突帯を持つ土器が出土している。上示野原遺跡は、長方形プラン及び花卉状堅穴住居跡から成る集落跡である事が確認されている。この時期の宮崎平野部では花卉状堅穴住居跡は消滅しており、この地域の集落の調査例が少ないため詳細は不明であるが、注目される。

高原町及び高崎町の墳墓については、前方後円墳は高崎町南東の塚原古墳群に1基あるのみである。都城盆地域では最西端にあたり、宮崎県内では最も内陸部に位置する前方後円墳である。塚原古墳群では、このほか円墳19基、方墳1基があるが、この地域では地下式横穴墓が主流である。立切周辺で発掘調査されている地下式横穴墓は、霧島山の東腰部の舌状台地に立地し、13基が調査された高原町旭台地下式横穴墓群、1基が調査された同町湯ノ崎地下式横穴墓、現在まで23基が確認されている日守地下式横穴墓群である。また、諸県山地で隔てた北側には、38基が調査されている野尻町の大萩地下式横穴墓群がある。この調査例から見ると立切周辺の地下式横穴墓の構造は、玄室が家型で羨道が片袖のものが多いが、これは、高原町、野尻町、小林市地域の一特徴である。

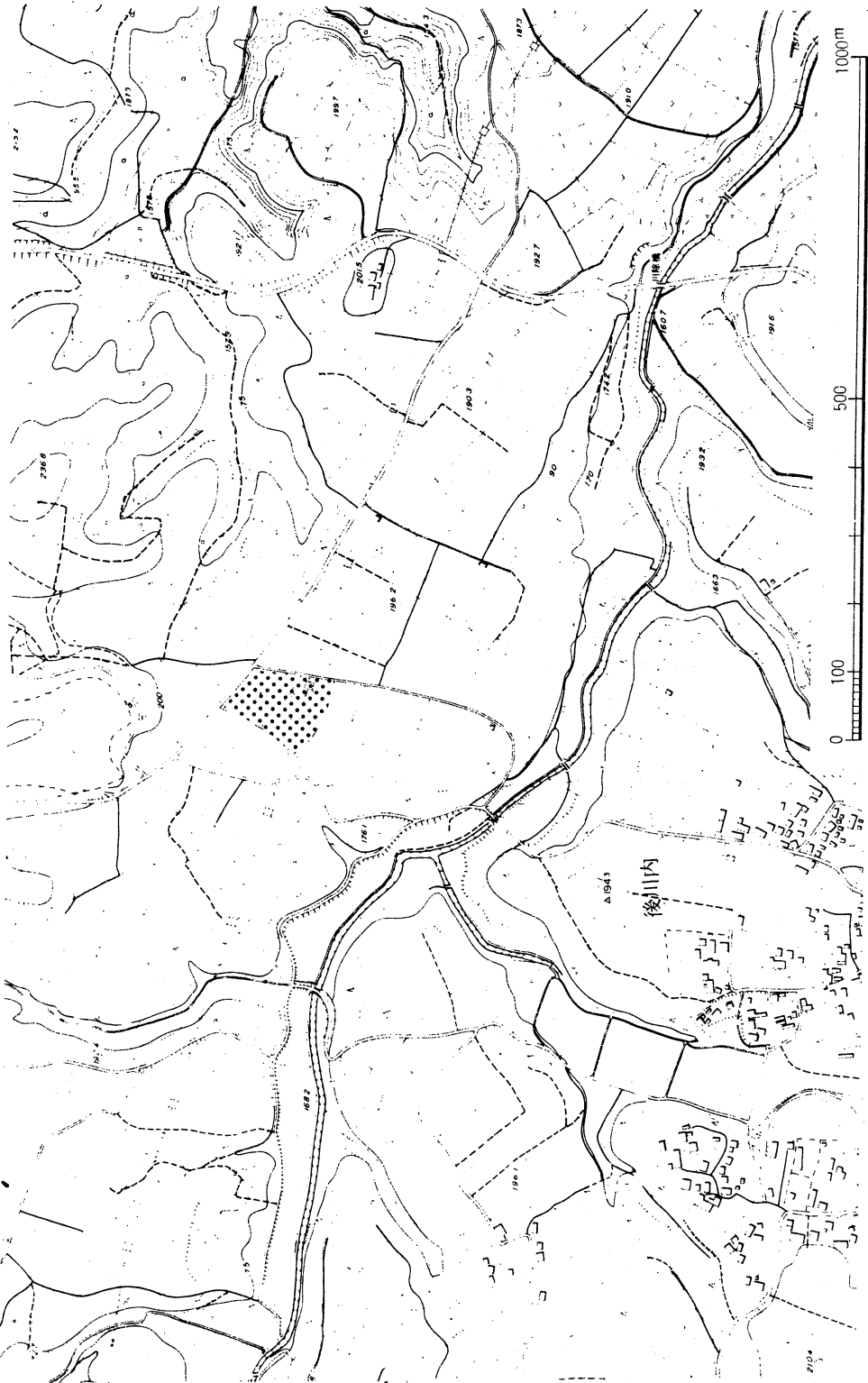


1. 立切地下式横穴墓群
2. 日守地下式横穴墓群
3. 湯ノ崎地下式横穴墓群
4. 旭台地下式横穴墓群
5. 大萩地下式横穴墓群
6. 鷹巣原遺跡
7. 柳野遺跡
8. 高原畜産高校遺跡
9. 荒迫遺跡
10. 広原遺跡
11. 立山遺跡
12. 常盤台遺跡
13. 刀脇遺跡
14. 小塚遺跡
15. 谷川遺跡
16. 様屋敷遺跡
17. 仮屋尾遺跡
18. 宮ノ谷遺跡
19. 川除遺跡
20. 上原遺跡
21. 大笹遺跡
22. 柿川内第2遺跡
23. 大萩遺跡G地区

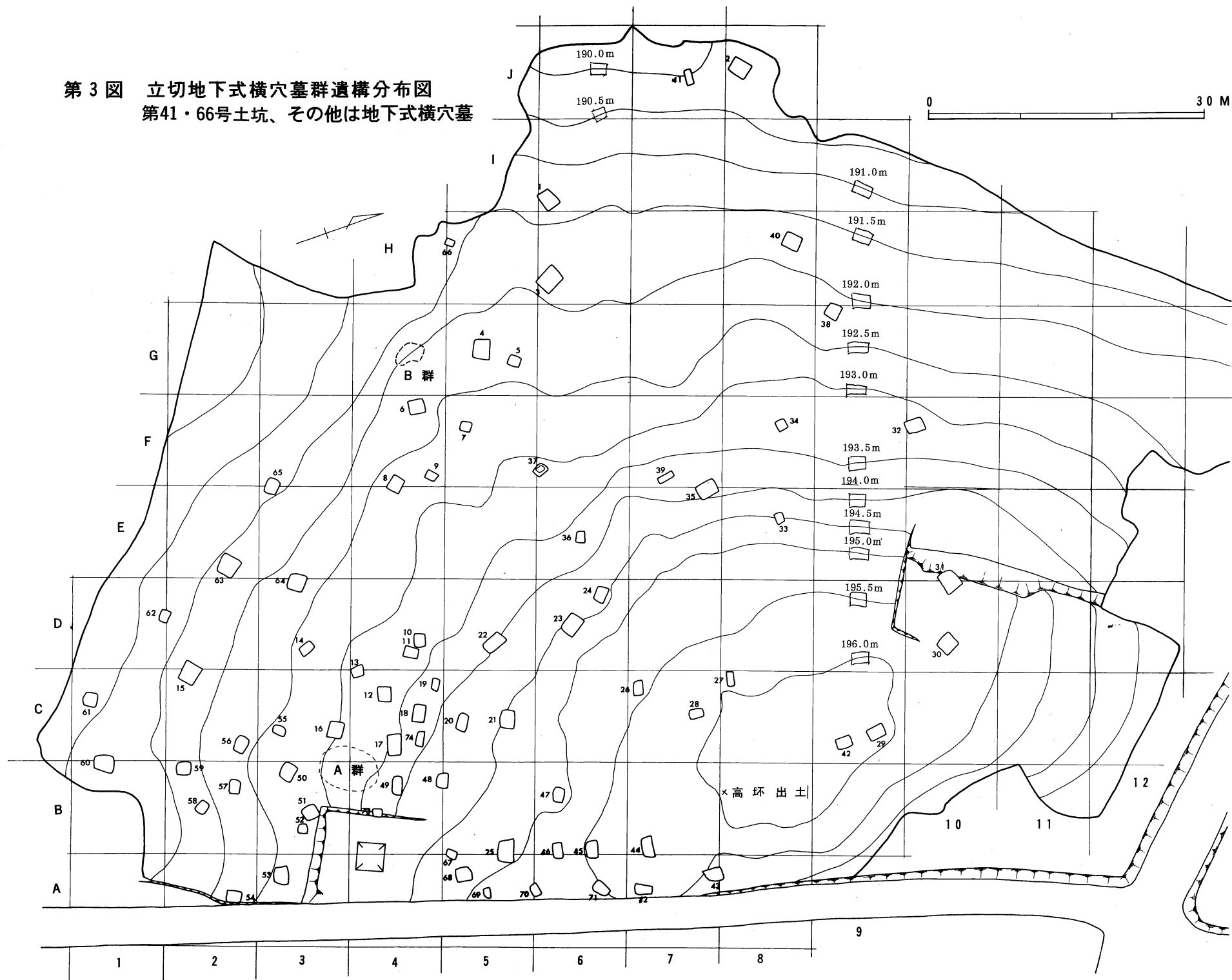
第1図 遺跡の位置図及び遺跡分布図



第2図 遺跡の地形図及び調査地



第3図 立切地下式横穴墓群遺構分布図  
 第41・66号土坑、その他は地下式横穴墓



## II 調査の結果

### 1 調査の概要

立切地下式横穴墓群は、今回のほ場整備事業によって発見されたものである。遺跡は、標高196mの丘であり、西および南に小谷、北に低丘陵があり、東には緩やかに傾斜している地形を呈し、南面する丘と見ることもできる。丘頂部の南側を町道がほぼ南北に走り、今回の発掘調査対象となったのは、ほ場整備事業が実施されていた町道より西側畑である。

発掘調査に着手した時点では、当地では最高所に当たるD10区の30号を避けて、工事は、3～6区を中心に表土剥ぎ等が継続されており、その中で地下式横穴墓の竪坑部分が10数箇所確認された。当地には、他の地下式横穴墓群と同様まだ未確認の地下式横穴墓が10基程は存在すると予想されたので、確認済みの地下式横穴墓の調査と並行して、工事により削平される部分の約10,000㎡を重機を数台使用して耕作土や攪乱土、黒色土等を除去することとした。その中で検出された遺構については、発見順に番号を付記したため、番号がとんだ状態となった。

調査地の土層は、第I層耕作土、第II層黒色土、第III層黄褐色土、第IV層アカホヤ、第V層は砂状で灰青色を呈する火山灰で、カシワバンと通称される。第VI層黒褐色土、第VII層褐色土となっている。第V層のカシワバンは堅くしまっており、また、第III層黄褐色土も締まった土層である。立切地下式横穴墓群では、玄室は、規模によって床面になっている土層は異なるが、第III層黄褐色土～第VII層褐色土層中に構築されている。

耕作土等の除去作業の結果、丘の頂部にあたるB～D-7～10区では、耕作土・攪乱土の下は第III層の黄褐色土或いは第IV層のアカホヤであったが、斜面部においては第II層黒色土が良好に残っていた。地下式横穴墓の確認は、この面においてアカホヤやカシワバンのブロック等を含む黒色土が埋土の竪坑が長形状に検出され、また、玄室が陥没している地下式横穴墓は、第III層ないし第IV層面で黒色土が埋土で確認された。その結果、調査対象地内で検出された遺構は74基と2群の土器散布地で、遺構は74基中72基が地下式横穴墓、2基が土坑である

地下式横穴墓の分布図は、対象地内に10mのグリッドを組み1/100で作成した。地形図は50cmコンタであるが、作成面は地下式横穴墓の検出面であるので、B～D-7～10区については第III層ないし第IV層面での地形図で、斜面部の地形図は第II層中層或いは第III層面である。作成した地形図は、地下式横穴墓構築時の地形図ではなく、概念図である。

発掘作業は、竪坑から掘り進めた。竪坑の半載は、竪坑の規模、平面形、竪坑の位置関係から決めたが、竪坑の中には竪坑が再度掘られた可能性があるものや、板閉塞の際の土層等が確認することができた。

今回、立切地下式横穴墓群では72基の地下式横穴墓が調査されたが、櫛着装の人骨の発見や地下式横穴墓の構造は多形式あり、構造によって副葬品の種類・量に差があり、構造によって

立地場所が異なる分布状況、また、立切地下式横穴墓群に伴う可能性の高い土器群の発見など多大な成果が得られた。

## 2 立切1号地下式横穴墓

### (1) 遺構 (第4図)

I-4区の標高191.5mに位置し、主軸は東北東で高位方向に向かう。右前方6mには3号が所在し、1号と3号の主軸はほぼ直交する関係にある。竪坑は長方形で短辺に羨道を持つ。上場は220cm×164cm、下場は78cm×75～112cm、深さ157cmで足掛け用の段が1か所ある。羨道は、平入りの両袖で全長43cm、最小幅55cm、高さ69cmである。閉塞は、羨門閉塞で板を使用していると思われる。玄室は長方形で、天井は寄棟造りで稜線も明瞭であり、棟木も表現している。壁面は調整痕が残るなど粗く、U字形鋤先の刃先痕も残存している。玄室の規模は奥行113cm、幅171cm、高さ92cmである。壁は外傾し、右壁、奥壁、左壁に柵様施設を持つが、幅は3cm～5cmで各壁で独立している。床には2cm～5cmほどの層が見られたが、これは締まりがなく竪坑の土と類似していたので流入土と考えられる。

副葬品は鉄鏃1点で1体が埋葬されていた。

### (2) 人骨の出土状況

人骨は玄室の右を頭位にして1体が埋葬されていた。保存状況は悪く、粉状で埋葬位置が判明するのみで性別等は不明である。人骨の残存している全長は約139cmである。頭の部分には土塊が1個置かれていた。

### (3) 遺物 (第60図)

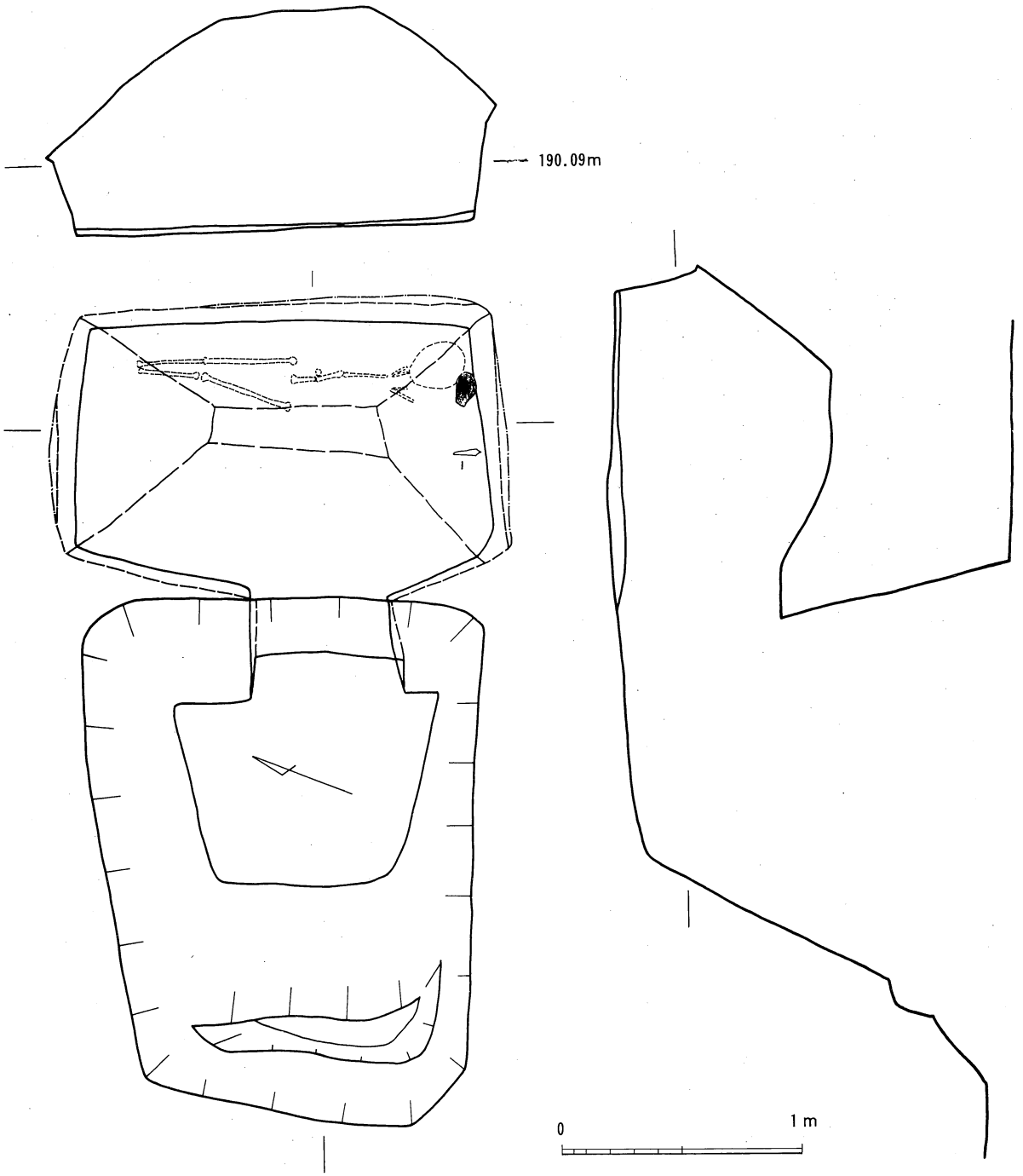
副葬品は、圭頭鏃1点が頭の近くに副葬されていた。

## 3 立切2号地下式横穴墓

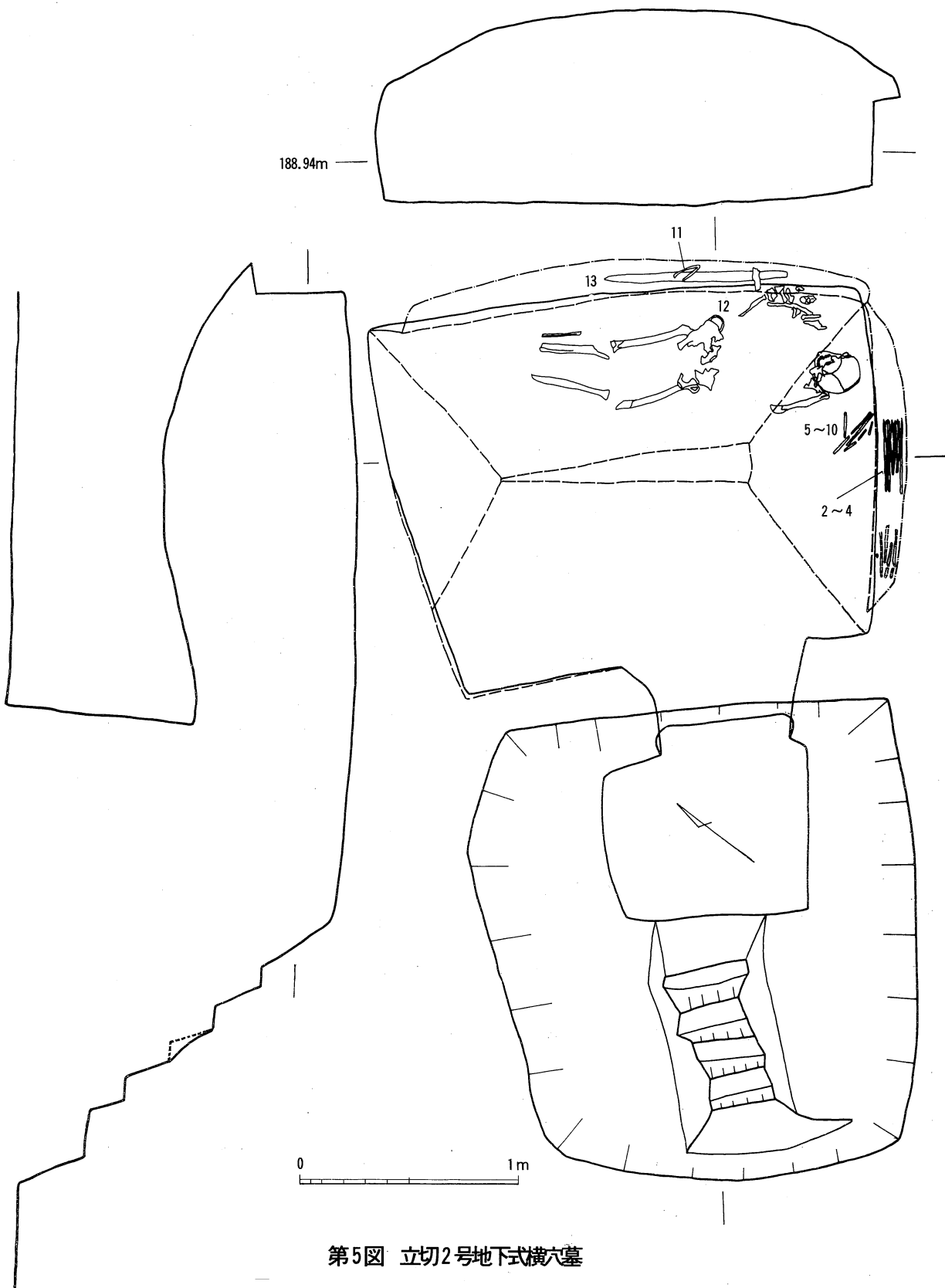
### (1) 遺構 (第5図)

J-8区の標高190mに位置し、当地下式横穴墓群の中では最も低位にある。主軸は東北東で高位方向に向かう。竪坑は方形ぎみで短辺に羨道を持つ。上場は220cm×202cm、下場は77cm×97cm、深さ155cmで足掛け用の5段の階段が設けられている。羨道は、平入りの両袖で全長44cm、最小幅61cm、高さ75cmである。閉塞は、羨門閉塞で板を使用している。玄室は長方形で、天井は稜線が不明瞭ながら寄棟造りを表現している。壁面は調整痕が残るなど粗く、U字形鋤先刃先痕も残存している。玄室の規模は奥行170cm、幅224cm、高さ90cmである。壁はほぼ直立し高さ40～50cmで、右壁、奥壁に柵状施設をもち、幅は15cm～20cmほどである。右壁、奥壁、奥天井部に濃淡はあるが、塗朱されている。

人骨は1体が埋葬されていて、副葬品は、剣、鑷子、鉄釧、鉄鏃である。



第4図 立切1号地下式横穴墓



第5図 立切2号地下式横穴墓

## (2) 人骨の出土状況

人骨は玄室の奥に右を頭位にして壮年の男性1体が埋葬されていた。保存状況はあまり良くなく、頭蓋、上腕骨の一部、腰骨、大腿骨、脛骨等が残存している。

## (3) 遺物 (第60図)

副葬品は奥壁の棚状施設上で剣、鐻子、腰骨の右下で鉄釧、右壁の棚状施設上で鉄鏃、その下でも鉄鏃が出土した。右棚状施設上の鉄鏃は矢柄の全長の痕跡があり、その端部およびそれから10cmほどの2か所に赤色顔料がそれぞれの矢柄で認められた。鉄鏃から矢柄までの全長は約73cmである。

剣(13)は、把縁に木製装具をもち一部に赤色顔料が認められる。把には緒が巻かれ、把頭にも装具があった痕跡が見られる。鞘口に装具があり、鞘に幅8mmの布が巻かれている。鐻子(11)は先が尖りぎみである。鉄釧(12)は、一端が切れており、それぞれの端部に穿孔があり、内径は11.2cmである。鉄鏃は、1点(2-A)が圭頭鏃の他は、片刃で逆刺のある長頸鏃である。棚状施設上では矢柄の痕跡が残存していたが、鏃身からの全長は約73cmである。刀子(10)は、茎刀子で把は木質で1.1cmの脛巾の痕跡があり、また、把には布が付着している。

## 4 立切3号地下式横穴墓

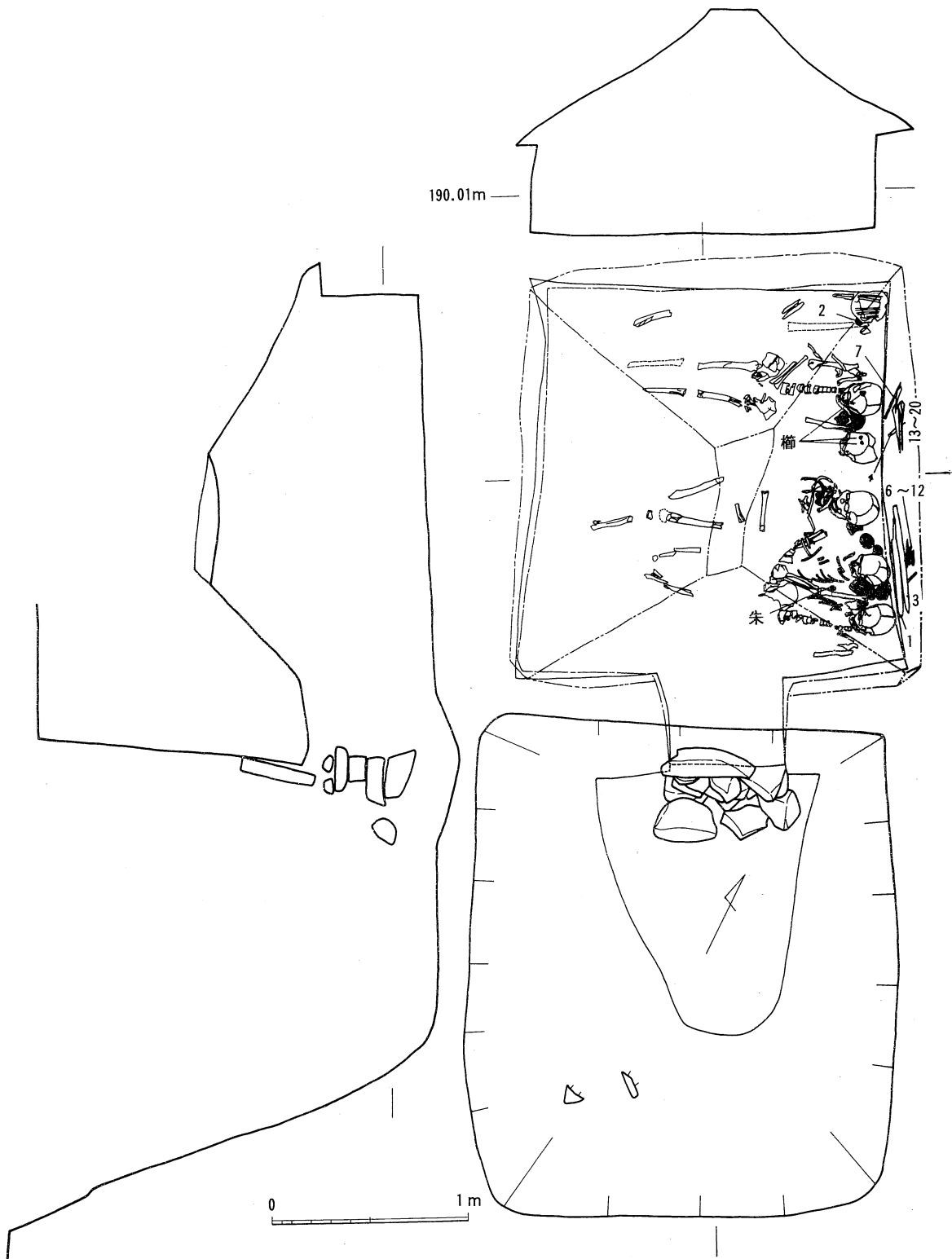
### (1) 遺構 (第6図)

H-6区の標高約192mに位置し、主軸は北北西で低位方向に向かい、3号の左前方6mには1号が所在している。1号と3号の主軸はほぼ直交する関係にある。竪坑は方形ぎみで短辺に羨道を持つ。上場は250cm×221cm、下場は135cm×40~116cm、深さ213cmで足掛け用の穴が2か所ある。羨道は、妻入りの両袖で全長50cm、最小幅61cm、高さ約70cmであるが、羨門下は7cmほど深くなっている。閉塞は、羨門閉塞で河原石を使用し、河原石は羨道に水平に入れている。玄室は長方形ぎみで天井は寄棟造りである。稜線は明瞭で棟木も表現している。壁面は、一部調整痕を残すが、わりに丁寧である。玄室の規模は奥行198cm、幅180cm、高さ115cmである。壁はほぼ直立しその高さは50cmほどである。4壁に棚状施設をもち、幅は袖部が8cmと狭いが、他は15cm~20cmほどである。

人骨は6体埋葬され、副葬品は、鉄鏃、剣または刀の茎部、剣、直刀、刀子、朱玉様のものが出土している。

### (2) 人骨の出土状況

人骨は玄室の右を頭位にして6体が埋葬されていた。頭蓋は残るが、保存状況はあまり良くない。1号人骨は熟年の男性で、前頭部に櫛の歯が残り頭蓋左に櫛の一部(1)が落下している。2号人骨は壮年の男性で、保存状況は割りに良く上腕骨、脊椎、大腿骨等の一部が残存し



第6図 立切3号地下式横穴墓



ている。また、頭部には小型の櫛が歯を右方向にして残存している。左側頭部に枕様にして土塊が1個あった。3号人骨は小児で保存状況は悪く頭蓋が残るのみであるが、前頭部に歯を後頭部に向けて小型の櫛が2点着装されていた。4号人骨は熟年の男性で保存状況はあまり良くない。左後頭部には枕様にして土塊が1個あった。5号人骨は小児で保存状況はあまり良くない。頭蓋周辺部には枕様にして土塊4個が頭蓋を支え0るように配置されていた。6号人骨は壮年の女性で保存状況はあまり良くない。6体の顔面には赤色顔料の付着が認められ、3・4・6号人骨の赤色顔料は少量である。

### (3) 遺物 (第61図)

遺物は右壁の棚状施設上に置かれている。2・3号人骨の上で鉄鏃(13~20)、剣または刀の茎部(4)、5号人骨の上での剣、直刀、鉄鏃(12)、刀子(5・6)が出土した。また、5号人骨の右肋骨の付近で朱玉様のものも出土している。

剣(1)は、把縁に木製装具をもつ。剣(2)は、把縁に鹿角製装具をもち、把に緒が巻かれている。刀子は、いずれも茎刀子で、把は8, 9の鹿角製の他は、木製である。鉄鏃は、7が頸部に逆刺のある三角形長頸鏃の他は、圭頭鏃である。14, 18, 20の鉄鏃の鏃身にはタガネでつけられた線状の刻印があり、17には鏃身の両面に点の刻印が見られる。櫛は竹製の堅櫛で、2は結束部で4.5cmあり、さらに半円形の頭では糸で固定している。歯は約40本である。2・3号人骨の頭の櫛は、小型で結束部幅が2cmほどである。

## 5 立切4号地下式横穴墓

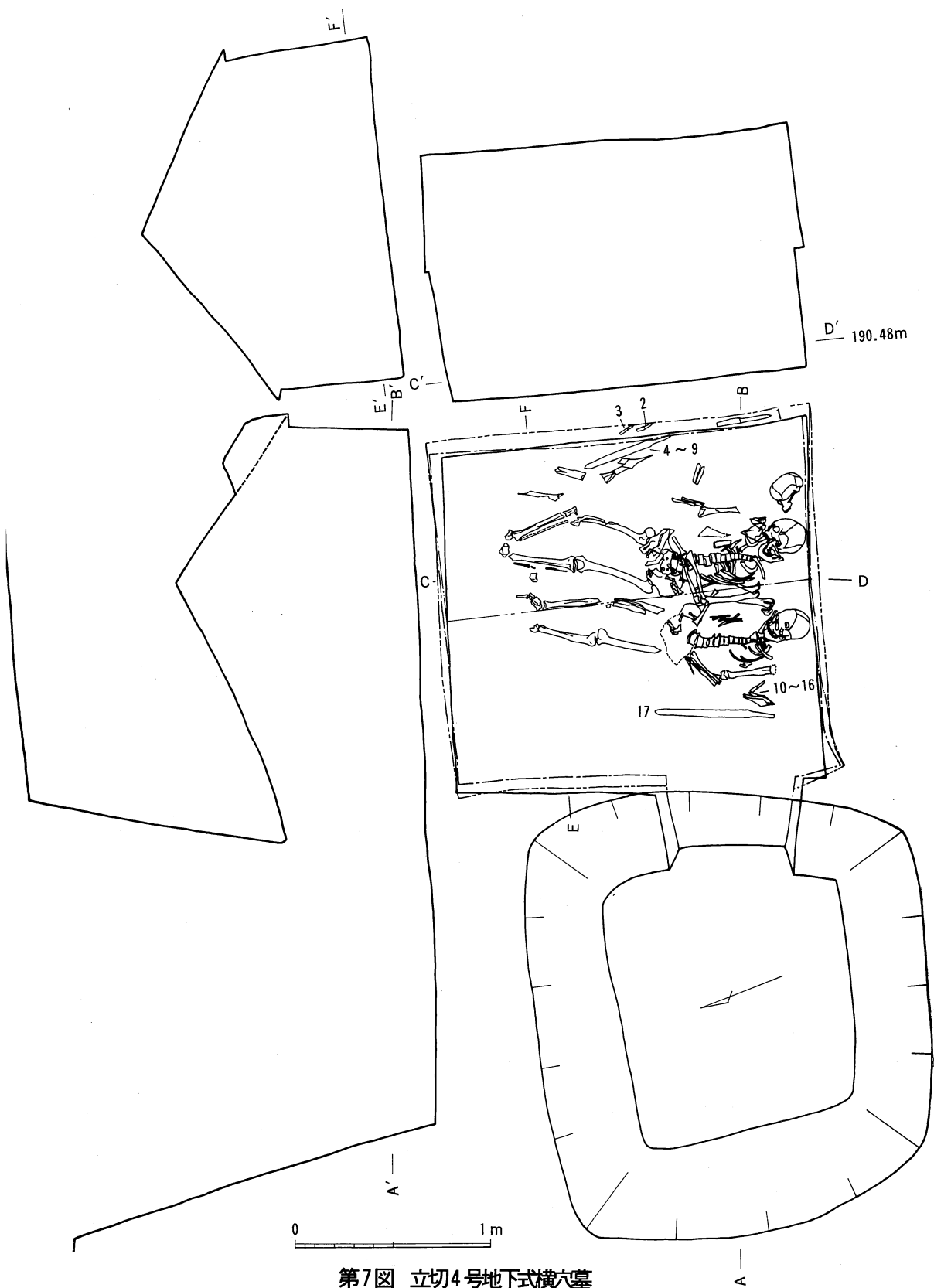
### (1) 遺構 (第7図)

G-5区の標高約192mに位置し、主軸は東南東で高位方向に向かい、左横2mには5号が、前方7mには7号が、右方7mには6号が所在し、主軸がほぼ1点に集まる関係にある。竪坑は長方形ぎみで短辺に羨道を持つ。上場は229cm×203cm、下場は132cm×121cm、深さ199cmである。羨道は、平入りで右側に12cmほどの袖をもつが片袖の範疇に入る。全長43cm、最小幅70cm、高さ73cmである。閉塞は、羨門閉塞で板を使用していると思われる。玄室は方形で、天井は切妻棟造りである。稜線は明瞭であり、また、壁面の調整も丁寧である。玄室の規模は奥行184cm、幅188cm、高さ125cmである。壁はほぼ直立し、高さはやや高く60cm~70cmである。4壁に棚状施設をもつが、幅は奥壁が5cmほどで他は5cm前後である。竪坑から玄室の床面のレベルは、玄室の方向に上がっている。

人骨は3体が埋葬され、副葬品は、剣、鉄鏃、刀子、鉈が出土した。

### (2) 人骨の出土状況

人骨は玄室の右を頭位にして3体が埋葬されていた。1号人骨は熟年の女性で、頭蓋は残存するが、その他は極めて悪い。顔面には赤色顔料の付着が認められる。2号人骨は熟年の男性



第7图 立切4号地下式横穴墓

で、保存状況は割りに良く上腕骨、肋骨、脊椎、腰骨、大腿骨等の一部が残存している。右腰骨の上には1号人骨の一部が乗っている。3号人骨は壮年の男性で保存状況は割りに良い。3号人骨の右上腕骨の上に2号人骨の左上腕骨が乗っている。

### (3) 遺物 (第62図)

副葬品は奥壁の棚状施設上で剣(1)、刀子(2・3)が出土した。刀子は、壁に突き刺していた。奥壁の棚状施設下で剣(4)、鉄鏃(5～7・9)、刀子(8)が出土し、3号人骨の右上腕骨の近くで剣(17)、鉄鏃(11～13)、刀子(10・15)、鉈(14)が出土した。

剣(1)は、短剣で把に糸を巻いている。剣(4)の把は、木製で緒を巻き、関と把の間は1.1cmの間隔がある。剣(17)の把は鹿角製である。鉄鏃は圭頭鏃である。刀子はいずれも茎刀子で、把は2が木製の他は鹿角製である。鉈(14)は、くぼみ形溝をもつ木柄に紐で固定している。

## 6 立切5号地下式横穴墓

### (1) 遺構 (第8図)

G-5区の標高約192cmに位置し、主軸は西北西で高位方向に向かい、右横2mには4号が所在している。竪坑は隅丸方形で長辺に羨道を持つ。上場は概ね120cm×145cm、下場は概ね85cm×104cm、深さ80cmである。羨道は、平入りの両袖で全長25cm、最小幅約85cm、高さ33cmである。閉塞は、羨門閉塞で板を使用していたと思われる。玄室は隅丸長方形で、天井はアーチ状である。玄室の規模は奥行56cm、幅192cm、高さ43cmである。壁は湾曲して天井にいたる。

人骨は残存していない。副葬品は鉄鏃・刀子が出土した。

### (2) 遺物 (第62図)

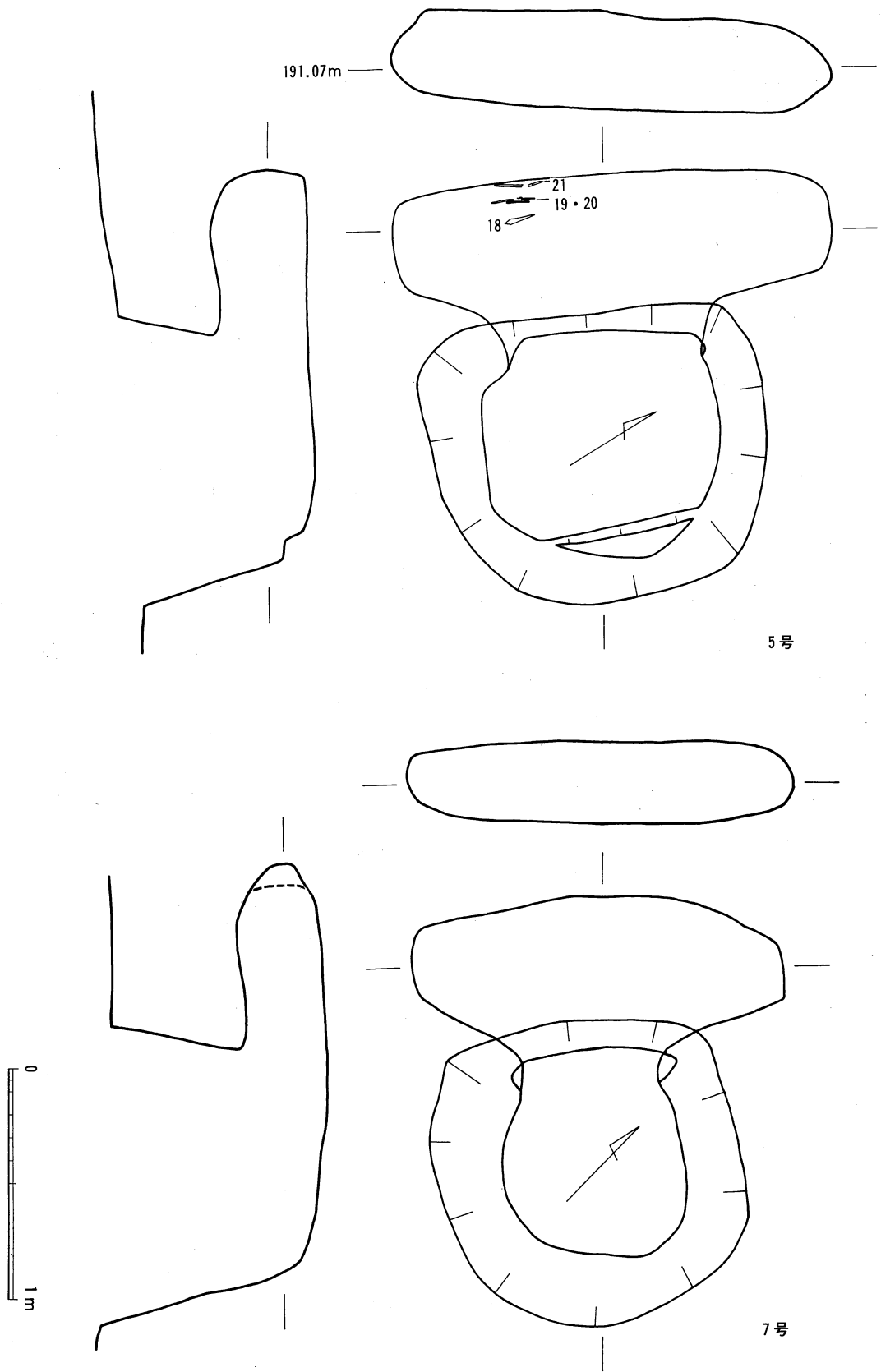
副葬品は、奥壁際左寄りで鉄鏃・刀子が出土した。

鉄鏃(18)は圭頭鏃で、19・20は片刃で逆刺のある長頸鏃である。

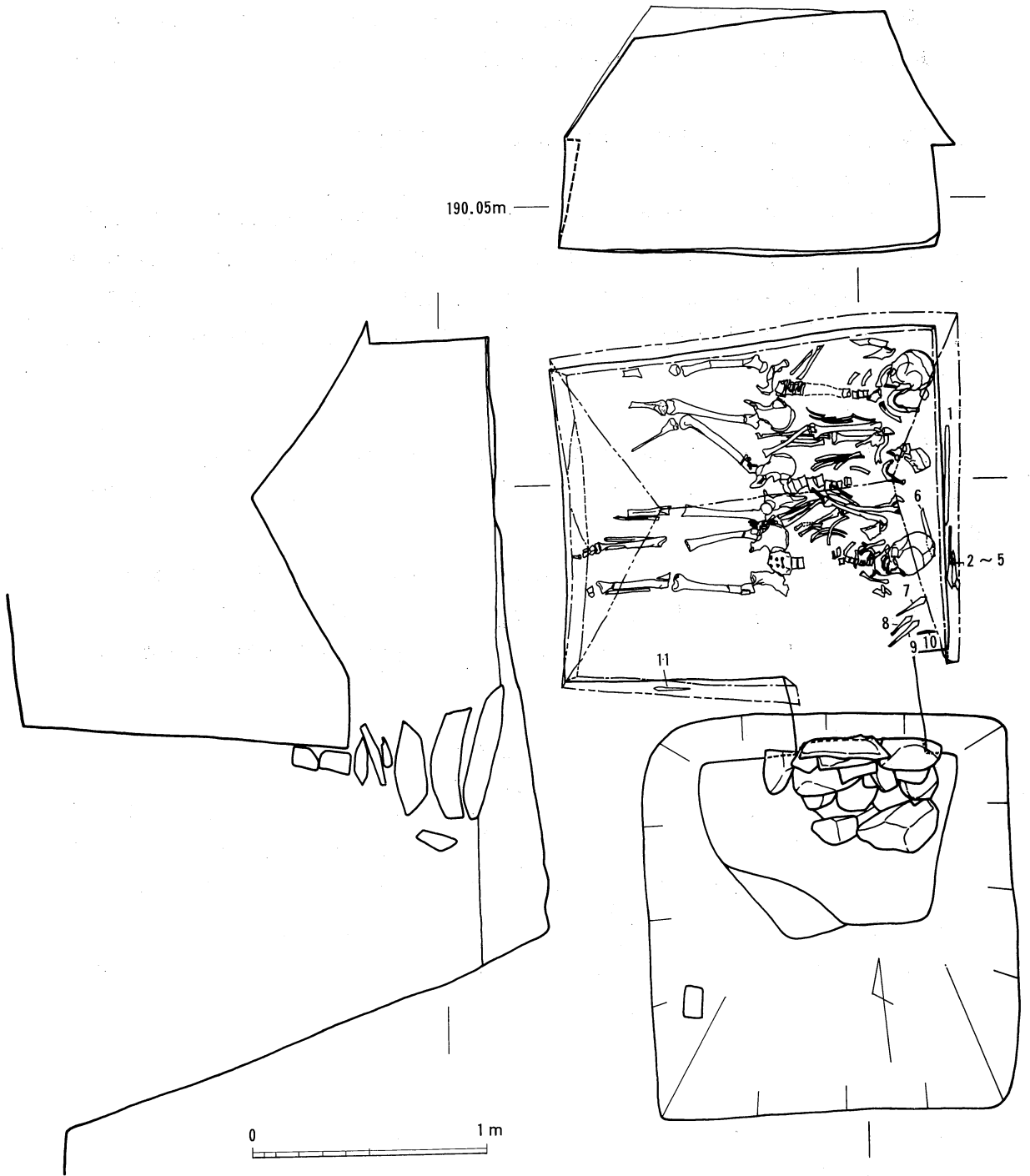
## 7 立切6号地下式横穴墓

### (1) 遺構 (第9図)

F-4区の標高192.5mに位置し、主軸は北で高位方向に向かい、6号の右前方4mには7号が、左前方7mには4号が所在している。竪坑は方形組みで短辺に羨道を持つ。上場は158cm×171cm、下場は71cm×63～110cm、深さ218cmで足掛け用の穴が1か所ある。羨道は、平入りで右側に14cmの袖をもつが片袖の範疇に入る。全長約38cm、幅55cm、高さ約78cmである。閉塞は、羨門閉塞で河原石を使用し、河原石は羨道に水平に入れ羨門から上では河原石を立て掛けている。竪坑の下部には約28cmの硬化面があり、閉塞石はその面から積まれてい



第 8 图 立切 5 号 · 7 号地下式横穴墓



第9图 立切 6号地下式横穴墓

る。玄室は長方形である。天井は寄棟造りで稜線は明瞭で、壁面の調整は丁寧である。玄室の規模は奥行141cm、最小幅168cm、高さ105cmである。壁は内傾し、4壁に棚状施設をもち、幅は6cm～10cmほどである。堅坑の硬化面下の床面レベルは、玄室に向かって高くなっている。

人骨は3体が埋葬され、副葬品は、剣、鉄鏃、刀子が出土した。

#### (2) 人骨の出土状況

人骨は玄室の右を頭位にして3体が埋葬されていた。人骨の遺存状況は割りに良く、頭蓋、脊椎、腰骨、大腿骨等が遺存している。1号人骨は熟年の男性で顔面に赤色顔料の付着が認められる。2号人骨は女性で、年齢は不明である。3号人骨は壮年の女性である。1号人骨の左上腕骨の上に2号人骨の右上腕骨がのり、2号人骨の左上腕骨の上に3号人骨の右上腕骨がのっている。

#### (3) 遺物 (第63図)

副葬品は棚状施設の上或いは床面に置かれている。2号人骨頭蓋上の棚で剣(1)、3号人骨頭蓋上の棚で鉄鏃(2～5)、3号人骨頭蓋の左で鉄鏃(7～9)、刀子(10)、前壁棚上で鉄鏃(11)が出土した。

剣(1)は、関と把との間に把縁装具の痕跡が残っており、また、把纏緒は木質部の1、4cm手前まであり、露出部に鹿角と思われる一部が見られる。鉄鏃は、すべて圭頭鏃で2の鏃身部には線状の刻印がある。刀子は茎刀子で把については錆のため木製か鹿角製か不明である。

### 8 立切7号地下式横穴墓

#### (1) 遺構 (第8図)

F-5区の標高約192.5mに位置し、主軸は北西で高位方向に向かい、西前方7mには4号が、左4mには6号が所在している。堅坑は半円方形で直線ぎみのところに羨道をもつ。上場は概ね135cm×155cm、下場は73cm×80cm、深さ95cmである。羨道は、平入りの両袖で全長18cmほどで最小幅58cm、高さ35cmである。閉塞は、羨門閉塞で板を使用していたと思われる。玄室は隅丸長方形で中央部が膨らみ、楕円形状を呈する。天井はアーチ状である。玄室の規模は奥行69cm、幅163cm、高さ36cmである。壁は湾曲して天井にいたる。

人骨及び遺物は出土していない。

### 9 立切8号地下式横穴墓

#### (1) 遺構 (第10図)

E・F-4区の標高約192mに位置し、主軸は北西で高位方向に向かい、右前方2mには9号が所在している。8号と9号の主軸はほぼ直交する関係にある。堅坑は長方形で長辺に羨道を

もつ。上場は158cm×181cm、下場は104cm×137cm、深さ96cmである。羨道は、平入りの片袖で全長40cmほどで最小幅58cm、高さ43cmである。閉塞は、羨門閉塞で偏平な河原石を使用している。石は下部に2個を置き、その上から羨門上部に偏平な河原石を立て掛けている。玄室は隅丸梯形で羨道から玄室のプランは逆P字状を呈する。壁は直立或いは外傾して立ち上がり天井にいたる。天井の形状は、中央部が陥没しているため全形は不明であるが、アーチを基本としたものと思われる。玄室の規模は奥行130cm、幅176cm、現存する最大高は61cmである。

副葬品は鉄鏃、刀子が出土している。人骨は遺存していない。

## (2) 遺物 (第63図)

遺物は玄室奥壁右寄り出土している。鉄鏃(12)は圭頭鏃で、刀子(13)は茎刀子の把部分で身は欠損している。

## 10 立切9号地下式横穴墓

### (1) 遺構 (第10図)

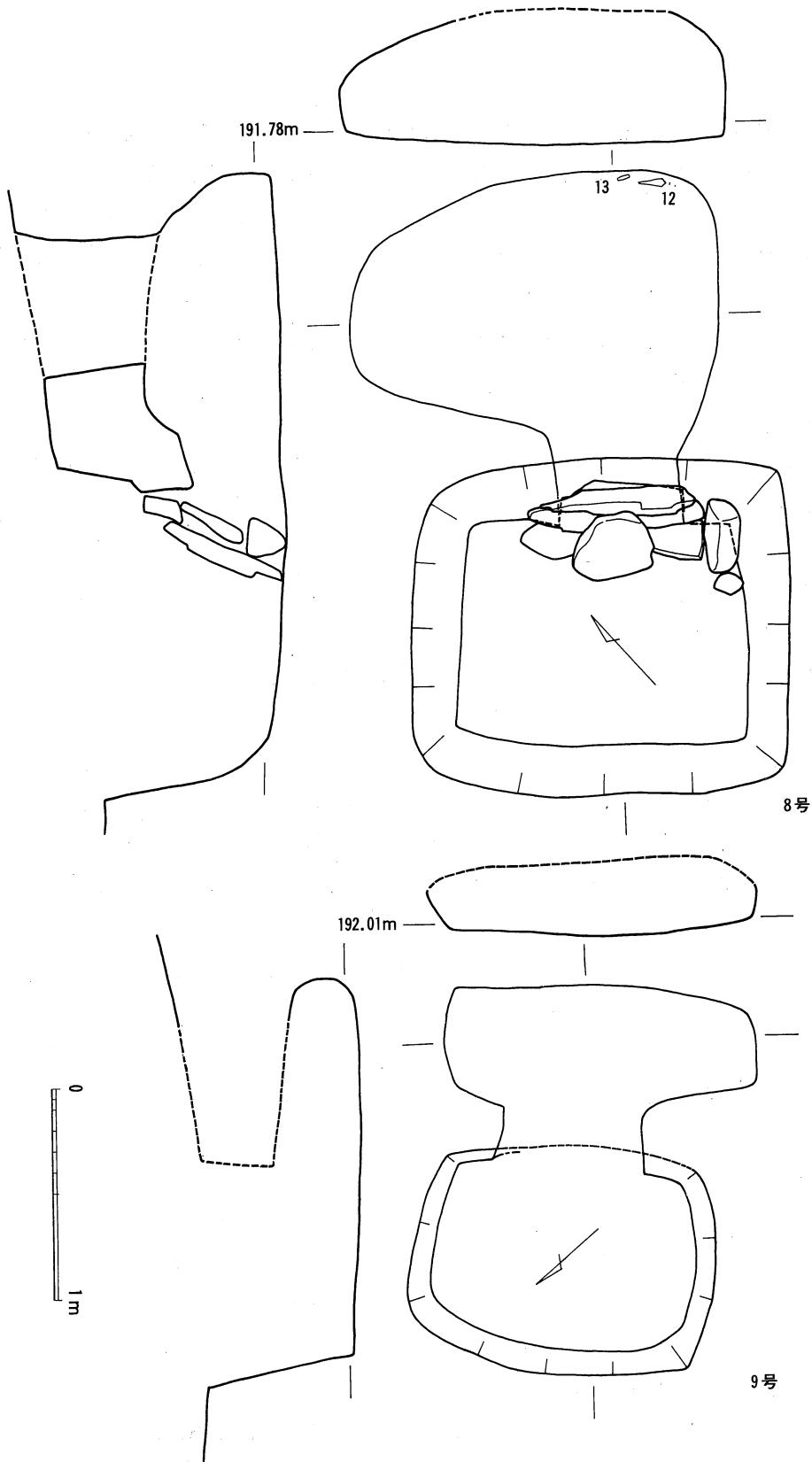
F-4区の標高約192.5mに位置し、主軸は南東で等高線に平行で、左前方2mには8号が所在している。羨道から玄室中央部は陥没している。竪坑は隅丸長方形で長辺に羨道をもつ。上場は(110cm)×414cm、下場は86cm×125cm、深さ74cmである。羨道は、平入りの両袖で全長26cm、最小幅65cmで高さは約45cmほどが推定される。閉塞は、羨門閉塞で板を使用していたものと推定される。玄室の平面形は長方形であるが、玄室の左部分が奥行きが広くなっていて隅丸梯形に近い。壁は外傾して立ち上がり天井にいたる。天井の形状は、中央部が陥没しているため全形は不明であるが、平らで、羨道から玄室にいたる天井の形状は、直線的であったと思われる。玄室の規模は奥行61cm、幅149cm、現存する最大高は33cmである。

副葬品は出土せず、人骨も遺存していない。

## 11 立切10号地下式横穴墓

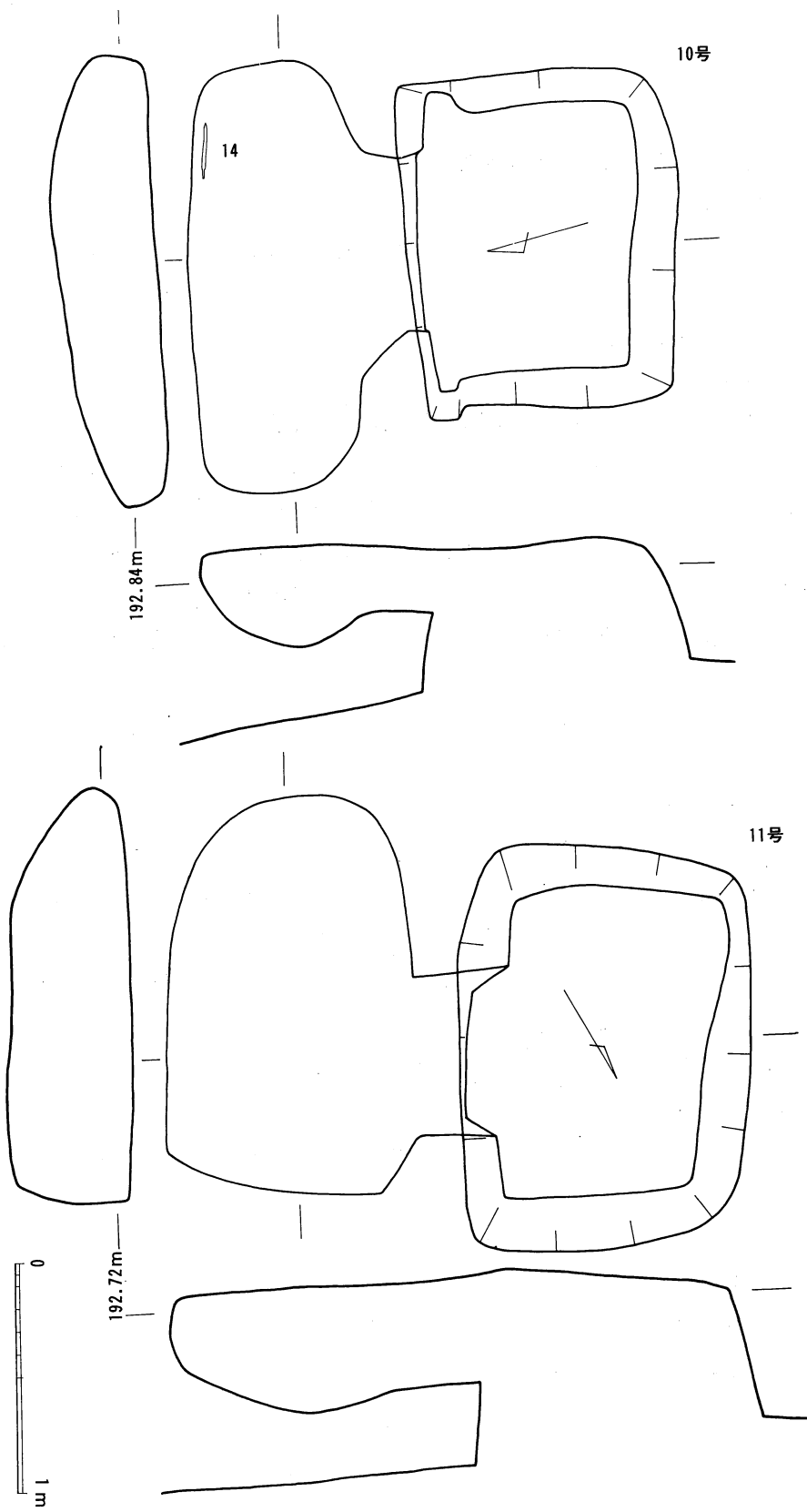
### (1) 遺構 (第11図)

D-4区の標高約193mに位置し、主軸は北北東で高位方向に向かう。右に11号が隣接している。羨道から玄室にかけて陥没している。竪坑は長方形で長辺に羨道をもつ。上場は(110cm)×146cm、下場は91cm×115cm、深さ57cmである。羨道は、平入りの両袖でハの字に開いて玄室にいたる。全長26cm、最小幅70cmほどで高さは約30cmほどが推定される。竪坑の両側に竪坑上端まで続く抉り込みがあり、幅は、左が9cm、右が13cmである。この抉り込みは閉塞用で、閉塞に板を使用していたものと推定される。玄室は隅丸長方形で、壁は外傾して立ち上がり天井にいたる。天井の形状は、一部が陥没しているため全形は不明であるが、アーチを基本としたものと思われる。玄室の規模は奥行77cm、幅186cm、高さは33cmである。



第10图 立切8号・9号地下式横穴墓





第11图 立切10号·11号地下式横穴墓

副葬品は、剣が1点出土した。人骨は遺存していない。

## (2) 遺物 (第63図)

副葬品の剣(14)は、奥壁の右よりで出土した。剣は短剣で、把は木製である。

## 1 2 立切11号地下式横穴墓

### (1) 遺構 (第11図)

D-4区の標高約193mに位置し、主軸は東南東で等高線に平行きみである。左に10号が隣接している。竪坑は長方形で長辺に羨道をもつ。上場は129cm×176cm、下場は90cm×134cm、深さ73cmである。羨道は平入りで、左の30cmほどの短い袖であるが、片袖に近い。全長40cm、最小幅68cmほどで高さは46cmである。閉塞は、板を使用していたものと推定される。玄室は半円長方形で、全体は平面形はP字形に近い。左壁は外湾して立ち上がり、右壁は外傾して短く立ち上がる。天井の形状はアーチ状である。玄室の規模は奥行110cm、幅172cm、高さは55cmである。

人骨は遺存していず、また、副葬品も出土していない。

## 1 3 立切12号地下式横穴墓

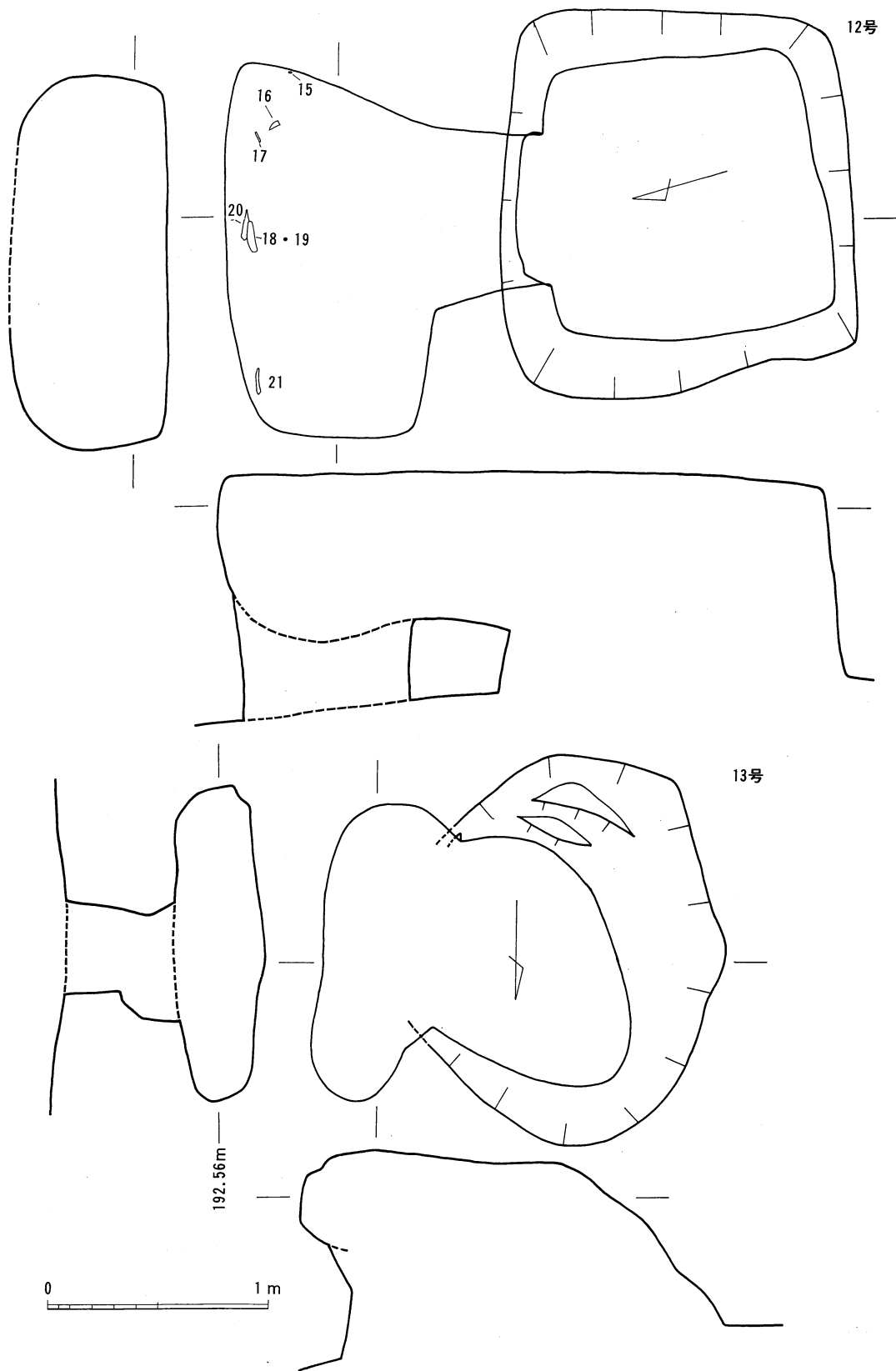
### (1) 遺構 (第12図)

C-4区の標高約193mに位置し、主軸は北北東で高位方向に向かう。左4mに11号が所在している。玄室中央部が陥没している。竪坑は隅丸長方形で長辺に羨道をもつ。上場は160cm×174cm、下場は124cm×127cm、深さ95cmである。羨道は、平入りの片袖で全長51cm、最小幅67cmほどで高さは約66cmほどである。閉塞に板を使用していたものと推定される。玄室は隅丸長方形で、玄室左辺は羨道から外湾して続き全体の平面形逆P字形である。壁はやや外傾して立ち上がって天井にいたる。天井の形状は、一部が陥没しているため全形は不明であるが、アーチを基本としたものと思われる。玄室の規模は奥行94cm、幅161cm、現存する最大高は72cmである。

副葬品は、剣、鉄鏃が出土した。人骨は遺存していない。

### (2) 遺物 (第63図)

副葬品は、奥壁に沿って剣(16・17)の一部、鉄鏃(15・18~23)が出土したが、まとまりはない。鉄鏃は圭頭鏃で大型と小型がある。



第12图 立切12号·13号地下式横穴墓

#### 1 4 立切13号地下式横穴墓

##### (1) 遺構 (第12図)

C-4区の標高約193mに位置し、主軸は南南東で等高線に平行している。左前方2mに12号が所在している。羨道から玄室中央部が陥没している。竪坑は楕円形状で長辺に羨道をもつ。上場は(140cm)×175cm、下場の奥行は90cm、深さ80cmである。羨道は、平入りで右に偏り片袖の範疇に入る。羨道は幅84cmほどで「ハ」の字に開き玄室との堺は不明瞭である。閉塞に板を使用していたものと推定される。玄室は長楕円形状で全体の平面形逆P字形を呈する。壁はやや外傾して立ち上がって天井にいたる。天井の形状は、一部が陥没しているため全形は不明であるが、アーチを基本としたものと思われる。玄室の規模は奥行55cm、幅135cm、現存する最大高は38cmである。

副葬品は出土せず、人骨も遺存していない。

#### 1 5 立切14号地下式横穴墓

##### (1) 遺構 (第13図)

D-5区の標高約192.5mに位置し、主軸は東北東で高位方向に向かう。左前方4.5mに13号が所在している。竪坑は隅丸長方形で長辺に羨道をもつ。上場は111cm×161cm、下場は53cm×118cm、深さ79cmである。羨道は、平入りの両袖で全長20cm、最小幅72cmほどで高さは約34cmほどで羨道から玄室へは「ハ」の字に開き、天井は玄室へ湾曲して下向する。閉塞に板を使用していたものと推定される。玄室は隅丸長方形で、壁はやや外傾ないし外湾して立ち上がる。天井の形状は、平らに近いアーチ状である。玄室の規模は奥行67cm、幅123cm、高さ31cmである。

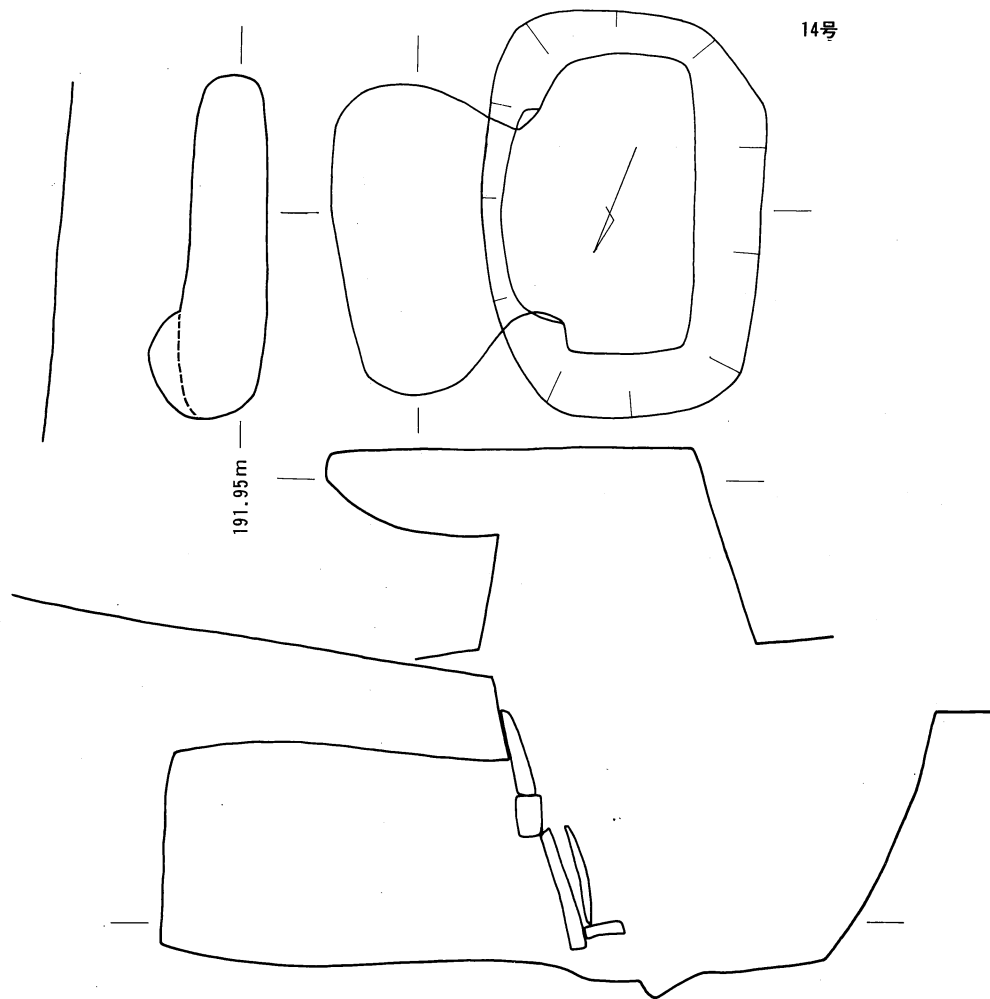
副葬品は出土せず、人骨も遺存していない。

#### 1 6 立切15号地下式横穴墓

##### (1) 遺構 (第14図)

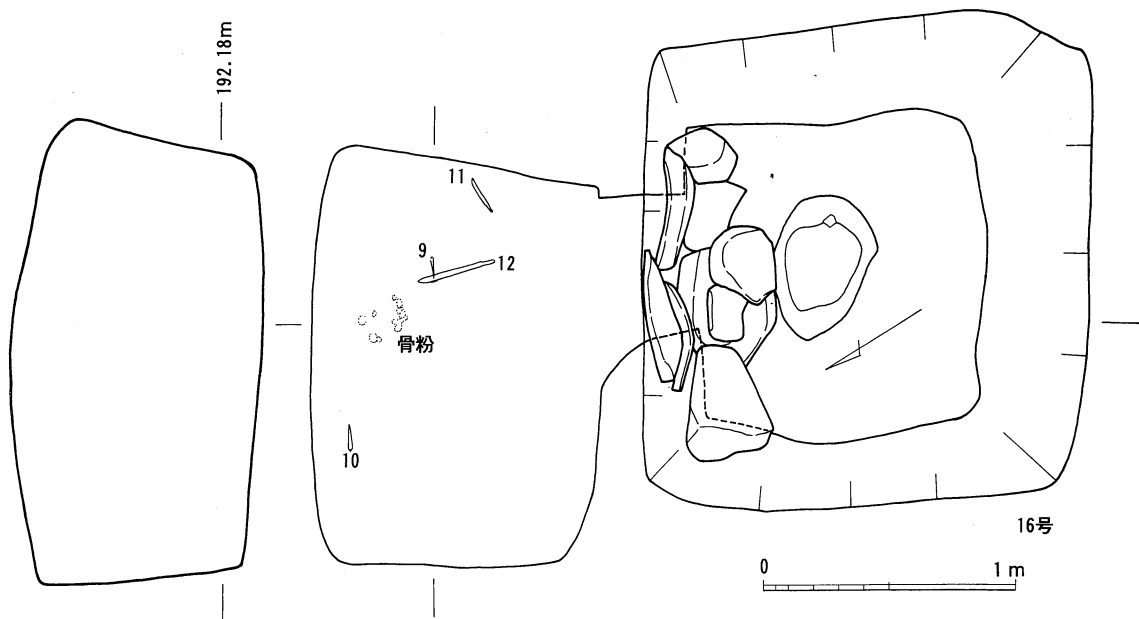
D-2区の標高約191.5mに位置し、主軸は西北西で等高線に平行する。左前方5mに62号が所在している。玄室中央部に亀裂が入っており、そこから黒色土が流入していたので安全のため玄室は天井をぬいて調査した。竪坑は隅丸長方形で短辺に羨道をもつ。上場は223cm×179cm、下場は97cm×90cmほど、深さ205cmである。竪坑左壁に足掛け用の穴が1か所ある。羨道は、右に11cmの袖を持つが片袖の範疇に入る。全長45cm、最小幅58cmほどで高さは約72cmほどである。羨道は玄室の短辺に付くが基本的には平入りと見て良いだろう。閉塞は河原石を使用している。羨道部分では河原石を水平におき、そのうしろに河原石を立て掛け、また最上部でも羨門に立て掛けている。羨道の床レベルは、竪坑床面が6cmほど高くなり、さら

14号



191.95 m

192.18 m



16号

0 1 m

第13图 立切14号·16号地下式横穴墓

に玄室に向かって床レベルは高くなっている。玄室は長方形でコーナーも角をなし、壁面の調整も痕を一部残すが割りに良い。壁は直向ぎみに立上がり、天井は切妻に近い寄棟造りと考えられる。棚状施設は4壁に設けられ、その高さは60cmほどである。玄室の規模は、奥行217cm、幅177cm、高さは不明である。幅は、右壁、奥壁が10cm～15cmで、左壁、前壁は3cm～6cmと狭くなっている。

副葬品は、剣、茎、刀子、鉄鏃、刀等が出土した。人骨は、遺存していない。

## (2) 遺物 (第64図)

遺物は、右棚の奥で剣(2)、茎(1)が、奥棚の右で刀子(3・4)、鉄鏃(5・7・8)、刀の一部(6)が出土した。人骨は遺存していないが、右壁下の奥で朱が径7cm～15cmの円形状に3か所認められた。埋葬数は不明であるが、玄室右が頭位であったと思われる。

茎(1)は剣または刀の茎で把纏緒が遺存し、目釘穴は2か所である。剣(2)は木製柄縁装具を持つ剣である。突出部は欠損するが、その他は遺存状況が良い。台形部分出は、一部に黒色の膜状のものが見られ、内部は腐食するが、外面は膜状に残っているので漆塗りの可能性がある。刀子(3・4)はいずれも茎刀子で、3は1か所に穿孔があり、4は鹿角製である。鉄鏃はいずれも圭頭鏃で大型である。

## 17 立切16号地下式横穴墓

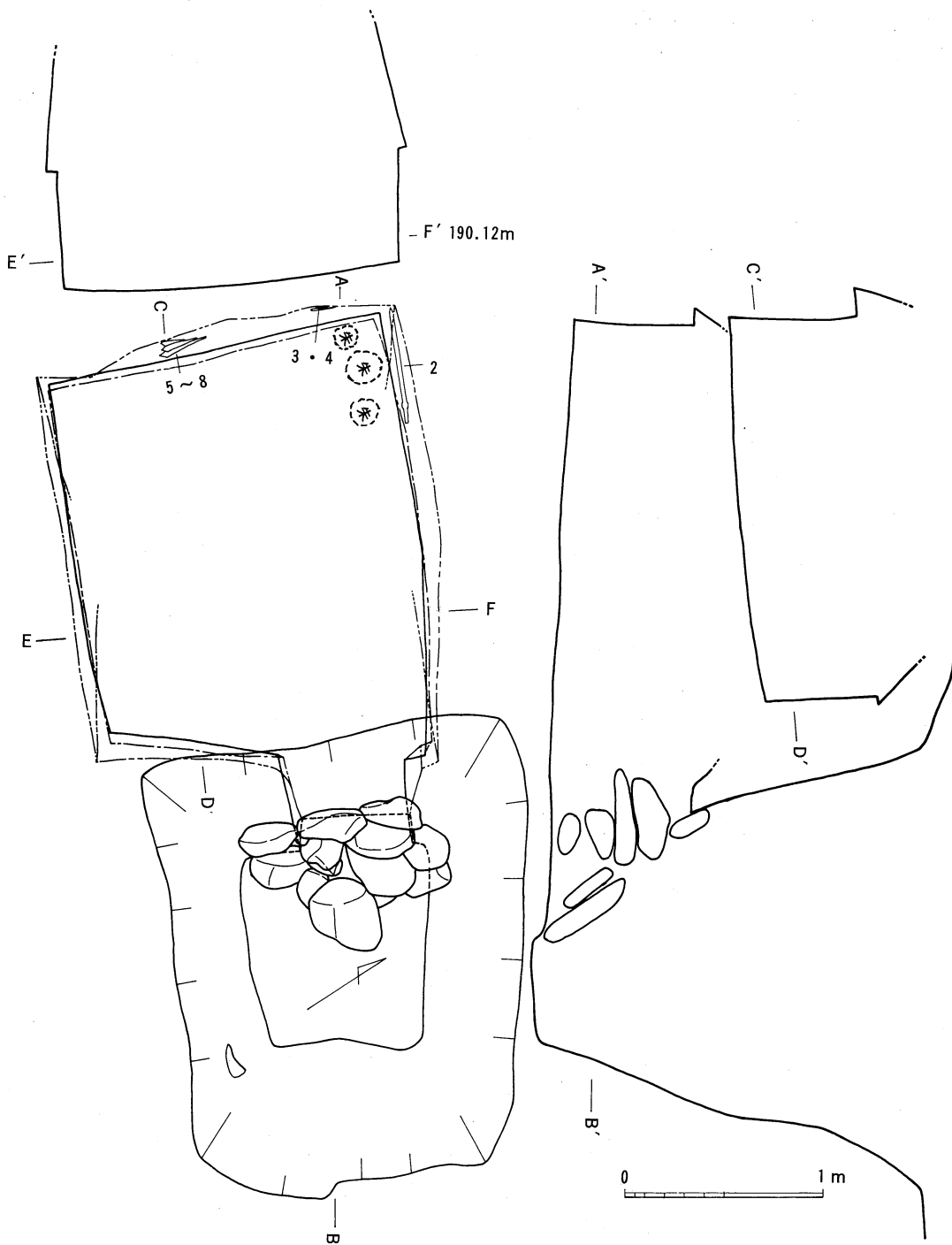
### (1) 遺構 (第13図)

C-3区の標高約193mに位置し、主軸は北東で高位方向に向かい、前方右5mには17号、左前方4.5mには12号、5mには13号が所在している。また、右前方には土器群Aがある。竪坑は長方形で長辺に羨道をもつ。上場は179cm×191cm、下場は118cm×126cm、深さ111cmである。羨道は、平入りの片袖で全長36cmほどで最小幅54cm、高さ79cmである。羨道の右壁には赤色顔料が塗られている。閉塞は、羨門閉塞で扁平な河原石を使用し、羨門上部に扁平な河原石を立て掛けているが、床面より10cmほど浮いた状態である。竪坑の中央部にはすり鉢状の窪みがあり、その中で土器片が1点出土した。竪坑から羨道にかけての床面レベルは、羨道の部分で6cmほど高くなり、玄室と竪坑の床面レベルでは、玄室の方が高い。玄室は長方形で左右の壁は外傾して立ち上がり、その高さは右壁で73cm、左壁で80cmある。奥壁は直立し高さ75cmで、天井は平らに近いアーチ状である。玄室の規模は、奥行115cm、幅161cm、高さ89cmである。

副葬品は、棒状の鉄製品、短剣、鉄鏃が出土している。人骨は遺存していないが、骨粉が中央よりに見られた。

### (2) 遺物 (第64図)

遺物は玄室中央右寄りで棒状の鉄製品(11)、剣(12)、鉄鏃(9)、奥壁左で鉄鏃(10)



第14图 立切15号地下式横穴墓

が出土している。鉄鏃(9)は剣(12)の上で出土した。

鉄鏃はいずれも圭頭鏃で小型である。9の茎は端部を曲げられている。棒状の鉄製品(11)は断面長方形の棒状鉄製品で一端が欠損している。刃は見られない。剣(12)は短剣で目釘穴は1か所である。

## 18 立切17号地下式横穴墓

### (1) 遺構(第15図)

C-4区の標高193.5mに位置し、主軸は北北東で高位方向に向かい、前方約1.5mには74号が、左前方2mには18号が、右横2mには49号が所在している。羨道から玄室中央部は陥没している。堅坑は長方形で長辺に羨道を持つ。上場は156cm×237cm、下場は94cm×183cm、深さ109cmである。堅坑の土層は、最下層にアカホヤを多量に含む層が6cmほどほぼ水平に堆積し、その上の層は、カシワパン・アカホヤのブロックを含むあまり締まりのない層があった。また、羨門付近には20cmほどを最大に孤を描いて締まりのない黒色土があり、羨門から玄門へ一部流れ込んでいた。この土層の状態から、閉塞は、板を使用していたと推定される。羨道は、平入りの両袖で全長41cm、最小幅86cm、高さ45cmほどあったと思われる。堅坑から羨道にかけての床面レベルは、羨道の部分で4cmほど高くなり、玄室と堅坑の床面レベルでは、玄室の方が高い。玄室は長方形で、壁は、右壁が42cm、左壁が36cm外傾して、奥壁は74cm外湾して立ち上がる。天井は不明であるが、アーチ状であったと推定される。玄室の規模は、奥行121cm、幅185cmで現存する最大高74cmである。

副葬品は出土せず、人骨も遺存していない。

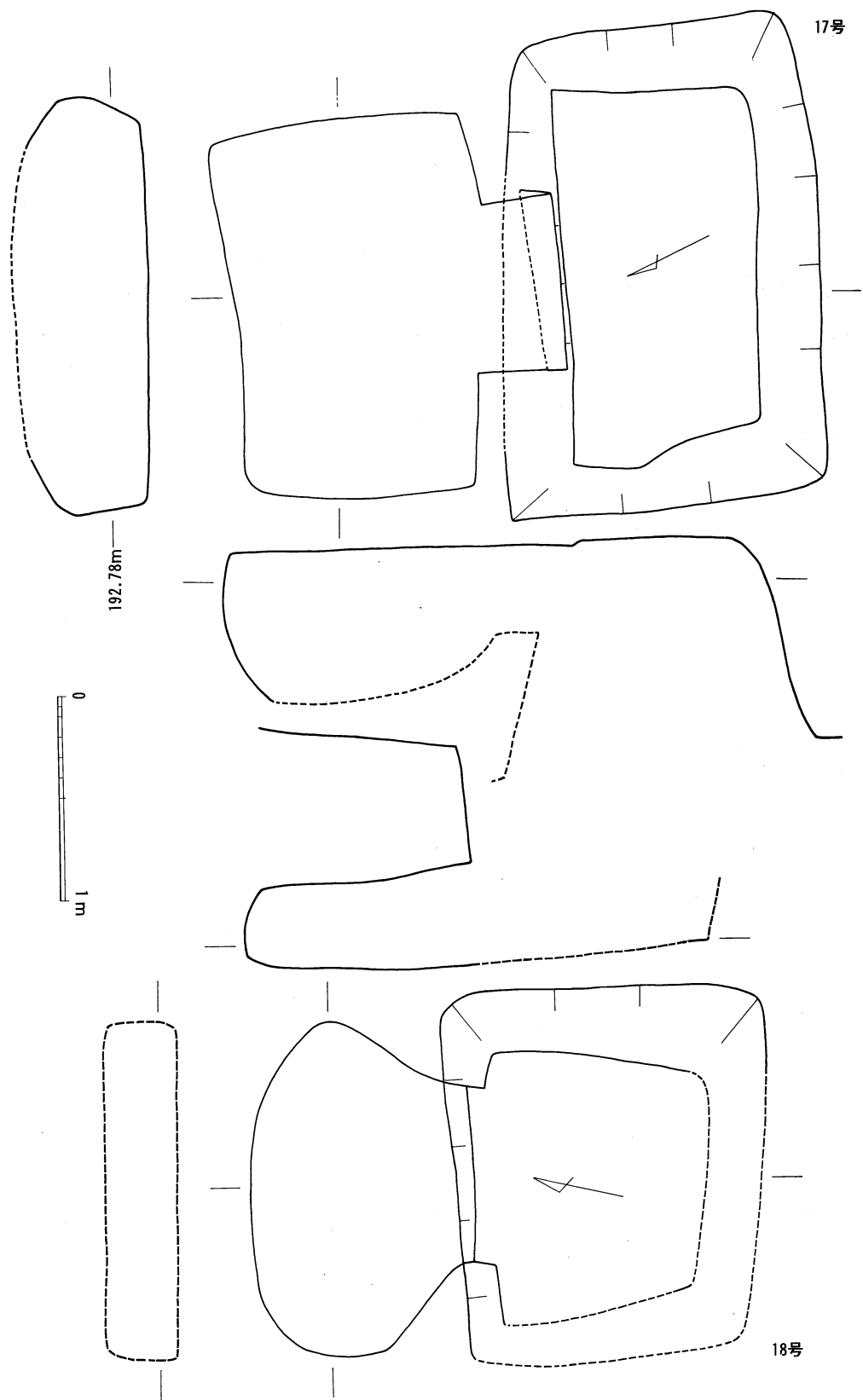
## 19 立切18号地下式横穴墓

### (1) 遺構(第15図)

C-4区の標高194.5mに位置し、主軸は北北西で高位方向に向かい、前方3.5mに20号、左2mに19号、右1mに74号が所在している。堅坑は、工事により1/2は破壊されているが、平面形は長方形で規模は153cm×183cmが復元される。深さは羨門付近で107cmである。羨道は長辺につく。羨道は、平入りの両袖で全長17cmほどで最小幅87cm、高さ49cmで、玄室の袖は「ハ」の字に開く。閉塞は板使用と思われる。玄室は楕円形を呈し、両壁は直立し、奥壁は外湾して天井にいたる。天井の形状は、羨道から直線的に続き、平らである。玄室の規模は奥行102cm、幅162cm、高さは46cmほどである。

副葬品は出土せず、人骨も遺存していないが、堅坑で壺の肩部が1片出土している。





第15图 立切17号·18号地下式横穴墓

## 20 立切19号地下式横穴墓

### (1) 遺構 (第16図)

C-4区の標高約193.5mに位置し、主軸は北東で高位方向に向かい、右前方3.5mに20号が所在している。竪坑は、隅丸梯形で上場は79cm×131cm、深さは35cmほどである。羨道は長辺につく。羨道の区分は不明瞭でそのまま玄室へ続く。閉塞は板使用と思われる。玄室は奥の両角は隅丸で、平面形は長方形を基本としている。両壁は外傾し、奥壁は直立して天井にいたる。天井の形状は平らである。玄室の規模は幅162cm、高さは29cmほどである。羨道を含めた奥行は102cmである。当地下式横穴墓群の中では、最小の地下式横穴墓である。

遺物は出土せず、人骨も遺存していない。

## 21 立切20号地下式横穴墓

### (1) 遺構 (第16図)

C-5区の標高約194mに位置し、主軸は北東で高位方向に向かい、前方3.5mには21号が所在している。羨道から玄室中央部は陥没している。竪坑は長方形で長辺に羨道をもつ。上場は110cm×191cm、下場は61cm×151cm、深さ98cmである。竪坑の埋土は、アカホヤ、カシワバン・褐色土等のブロックを多量に含み全体は黄褐色を呈する。羨門付近では幅35cm、高さ75cmの範囲は、アカホヤ等の粒子が入る黒色土が入るしまりない黒色土である。この黒色土は羨道にも流れ込んでいた。これは、閉塞に板を使用していたためと推定される。羨道は、平入りの両袖で全長16cm、最小幅103cmで高さは41cmほどであったと思われる。羨道の床面レベルは、竪坑より7cmほど高くなり段を持つ。玄室は隅丸長方形で、両袖は「ハ」の字に開く。壁は、右壁が高さ41cm、奥壁が高さ34cmで内傾ぎみに、左壁は高さ23cmで直立ぎみに立ち上がる。天井は不明であるが、平らであったと推定される。玄室の規模は、奥行125cm、幅173cmで現存する最大高41cmである。

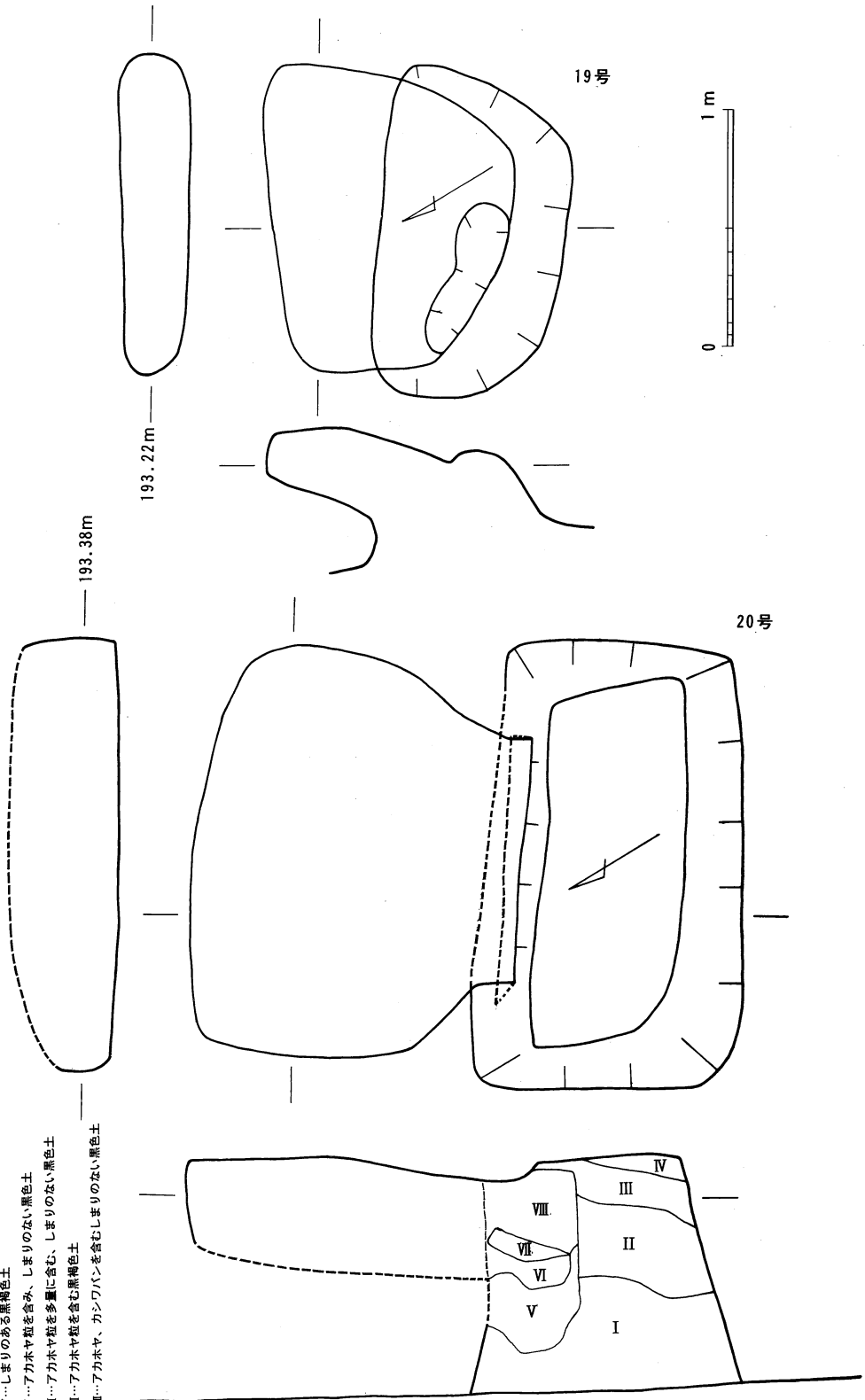
副葬品は出土せず、人骨も遺存していない。

## 22 立切21号地下式横穴墓

### (1) 遺構 (第17図)

C-5区の標高194.5mに位置し、主軸は北北東で高位方向に向かう。竪坑は長方形であるが、中央部は工事により欠損している。羨道は長辺につく。上場は139cm×(185cm)、下場は105cm×(150cm)、深さ103cmが推定される。閉塞は、板を使用していたと推定される。羨道は、平入りの両袖で全長23cm、最小幅96cm、高さ49cmで、床面レベルは、竪坑より7cmほど高くなって段をもち、玄室へと続く。玄室は長方形で、両袖は「ハ」の字に開いている。壁は、直立ぎみに立ち上がり高さは53cm～57cmである。天井は平らでコーナーは角を

- I...アカホヤ、カシワパンを含む黒褐色土
- II...アカホヤ、カシワパンのブロックを含む黒褐色土
- III...IIに類似するがややしまりのない黒褐色土
- IV...しまりのある黒褐色土
- V...アカホヤ粒を含み、しまりのない黒色土
- VI...アカホヤ粒を多量に含む、しまりのない黒色土
- VII...アカホヤ粒を含む黒褐色土
- VIII...アカホヤ、カシワパンを含むしまりのない黒色土



第16図 立切19号・20号地下式横穴墓

なし、全体の形状は箱型である。壁面の仕上げは丁寧である。玄室の規模は、奥行127cm、幅186cm、高さ61cmである。

副葬品は出土していないが、人骨は遺存している。

## (2) 人骨の出土状況

人骨は玄室右を頭位にして中央から奥で3体分出土した。遺存状態は悪く頭蓋も大半が縫合部分から外れていて、3号人骨の頭蓋は一部粉状になっている。1号人骨は熟年で性別不明、2号人骨は壮年の女性である。3号人骨の腰付近では赤色顔料が見られた。

## 2 3 立切22号地下式横穴墓

### (1) 遺構 (第17図)

D-5区の標高194mに位置し、主軸は東北東で高位方向に向かう。右前方6mに21号、左前方5.5mに23号が所在している。竪坑は長方形で、羨道は長辺につく。上場は151cm×230cm、下場は96cm×194cm、深さ93cmである。閉塞は、板を使用していたと推定される。羨道は、平入りの両袖で全長20cm、最小幅115cm、高さ53cmで、床面レベルは、竪坑より5cmほど高くなって段をもち、玄室へと続く。羨道から玄室にかけての中央部には径15~25cmほどの浅い窪みが4か所ある。玄室は隅丸長方形で、両袖は「ハ」の字に開いている。壁は、右壁が直立ぎみに立ち上がる他は内傾している。天井はアーチ状である。玄室の規模は、奥行136cm、幅204cm、高さ72cmである。

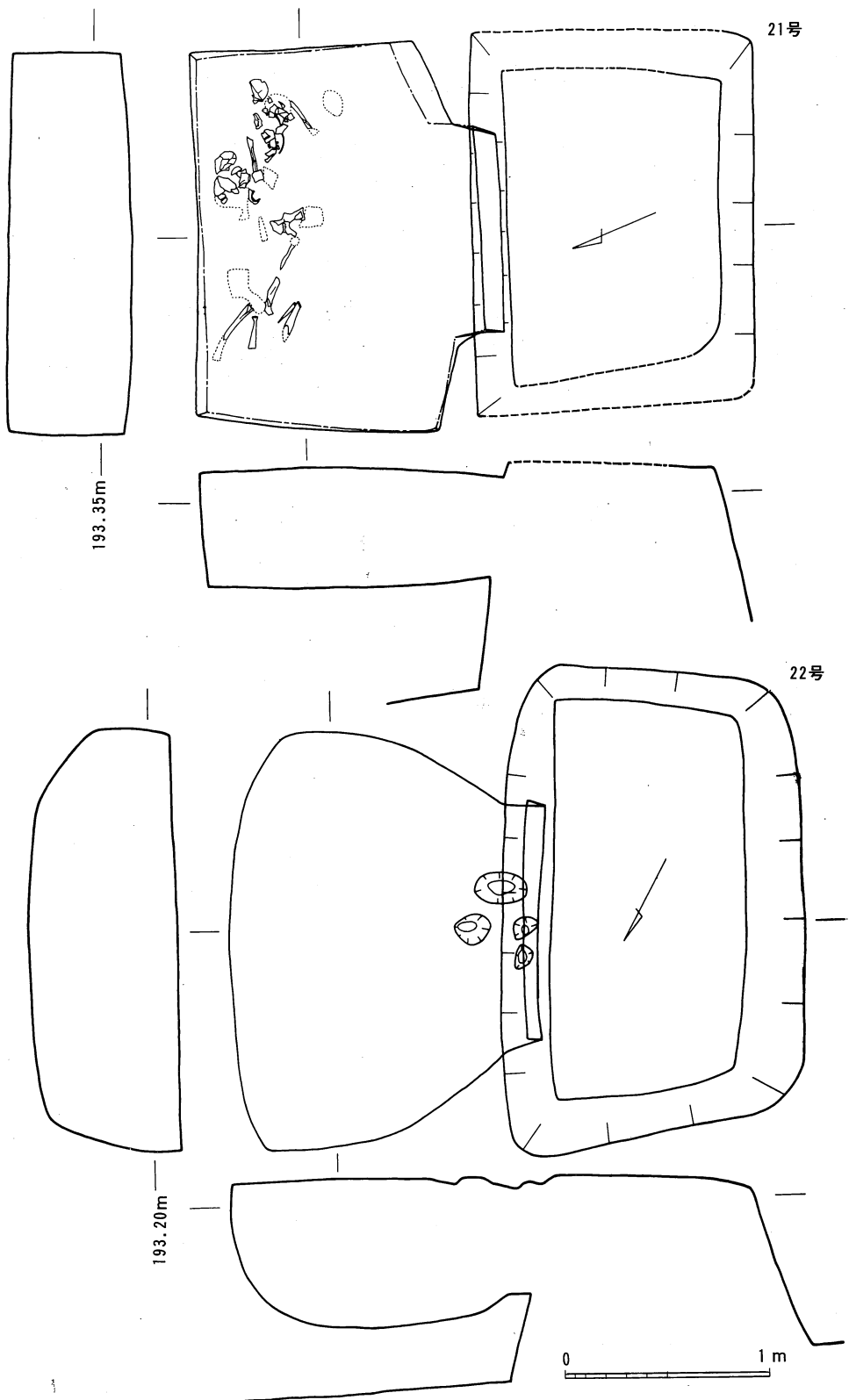
副葬品は出土せず、人骨も遺存していない。

## 2 4 立切23号地下式横穴墓

### (1) 遺構 (第18図)

D-6区の標高194.4mに位置し、主軸は北東で高位方向に向かう。右前方8mに26号、左2.5mに24号が所在している。羨道から玄室中央部が陥没している。竪坑は長方形で、羨道は長辺につく。上場は176cm×226cm、下場は123cm×180cm、深さ86cmである。竪坑の埋土は、ほぼ中央あたりで縦方向に分層され、羨道よりアカホヤ小塊、カシワバンブロックを含む黒褐色土、その反対側がアカホヤ塊やカシワバンブロック等を含む黄褐色土である。閉塞は、板を使用していたと推定される。羨道は、平入りの両袖で全長23cm、最小幅109cmで高さは不明である。床面レベルは、竪坑より数cmほど緩やかに高くなっている。玄室は長方形で、壁は内傾して立ち上がり、天井はアーチ状であったと推定される。玄室床面には、シラスが厚さ5cmほど敷いてありほぼ水平であるが、その下では凹凸が見られた。玄室の規模は、奥行118cm、幅194cmで現存する天井の最大高は75cmである。

副葬品は剣、鉄鏃が出土し、人骨は3体遺存していた。



第17图 立切21号・22号地下式横穴墓

## (2) 人骨の出土状況

人骨は、玄室奥よりで右を頭位にして埋葬されている。頭蓋の位置も乱れており、その他の部位の骨も折り重なっている。1号人骨は熟年の男性、2号人骨は熟年の女性、3号人骨は壮年の男性である。

## (3) 遺物 (第65図)

副葬品は、玄室奥壁の右よりで出土した。剣(1)は短剣で茎、鋒が欠損している。鉄鏃は、2が柳葉鏃、3が腸袂三角形鏃、4が小型の圭頭鏃で5は鏃の茎である。

## 2 5 立切24号地下式横穴墓

### (1) 遺構 (第18図)

D-6区の標高194.5mに位置し、主軸は北東で高位方向に向かう。右2.5mに23号が所在している。竪坑は隅丸梯形で、羨道は長辺につく。上場は138cm×185cm、下場は106cm×120～168cm、深さ68cmである。閉塞は、板を使用していたと推定される。羨道は平入りの両袖で全長24cm、最小幅93cm、高さ47cmである。床面レベルは、竪坑より6cmほど緩やかに高くなって玄室へいたる。玄室は隅丸長方形で、壁は右壁が直立するほかは内傾して立ち上がり、天井はアーチ状である。玄室の規模は、奥行85cm、幅158cm、高さ63cmである。

副葬品は鉄鏃、鉈が出土したが、人骨は遺存していない。

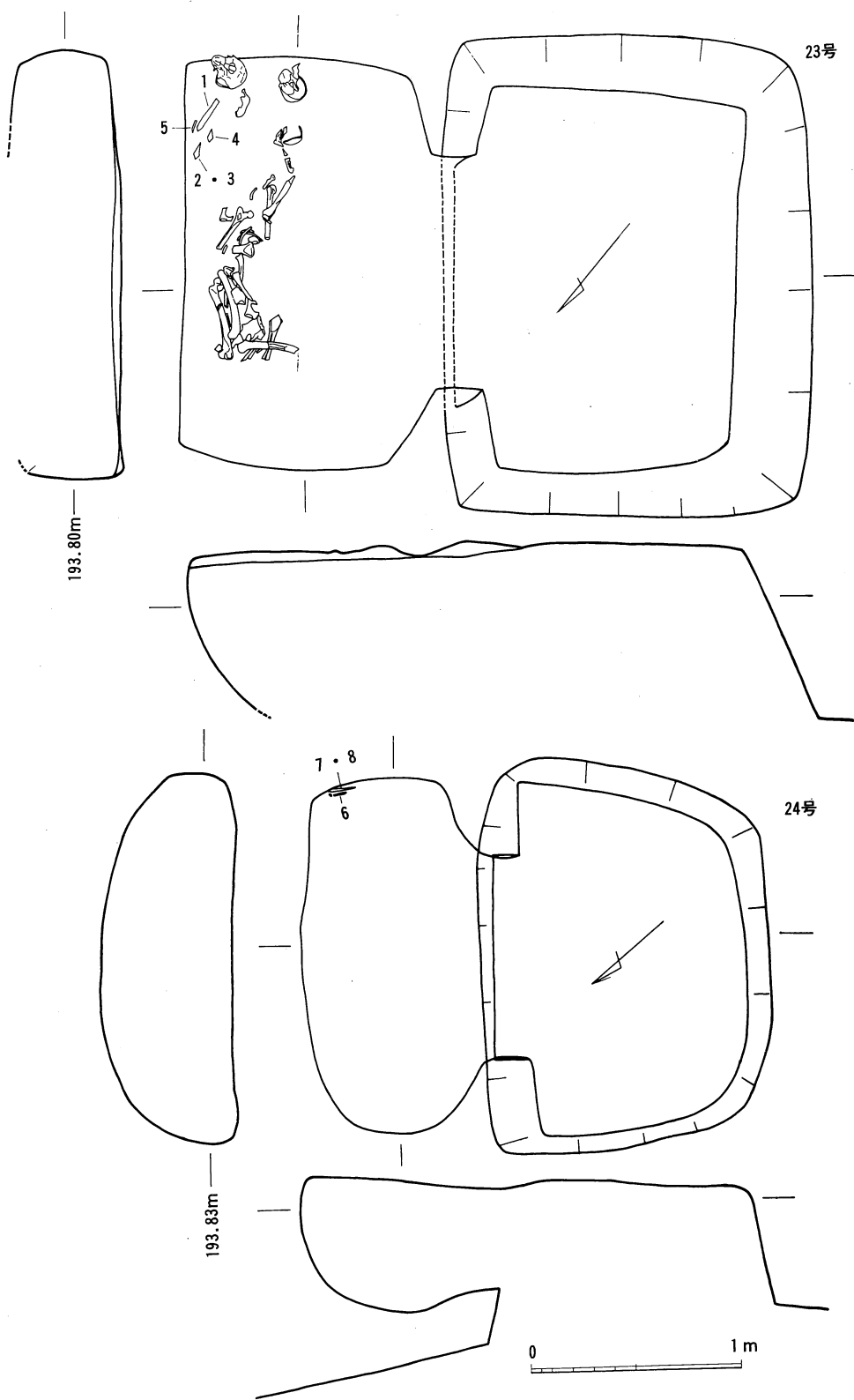
### (2) 遺物 (第65図)

副葬品は、玄室右壁の奥よりで鉄鏃、鉈がまとまって出土した。鉄鏃(8)は、鋒よりふくらをもち内湾する無茎鏃で矢柄に挟まれている。固定用の紐がかかる小溝が認められる。鉈(6)は溝を持つ木柄に固定されている。

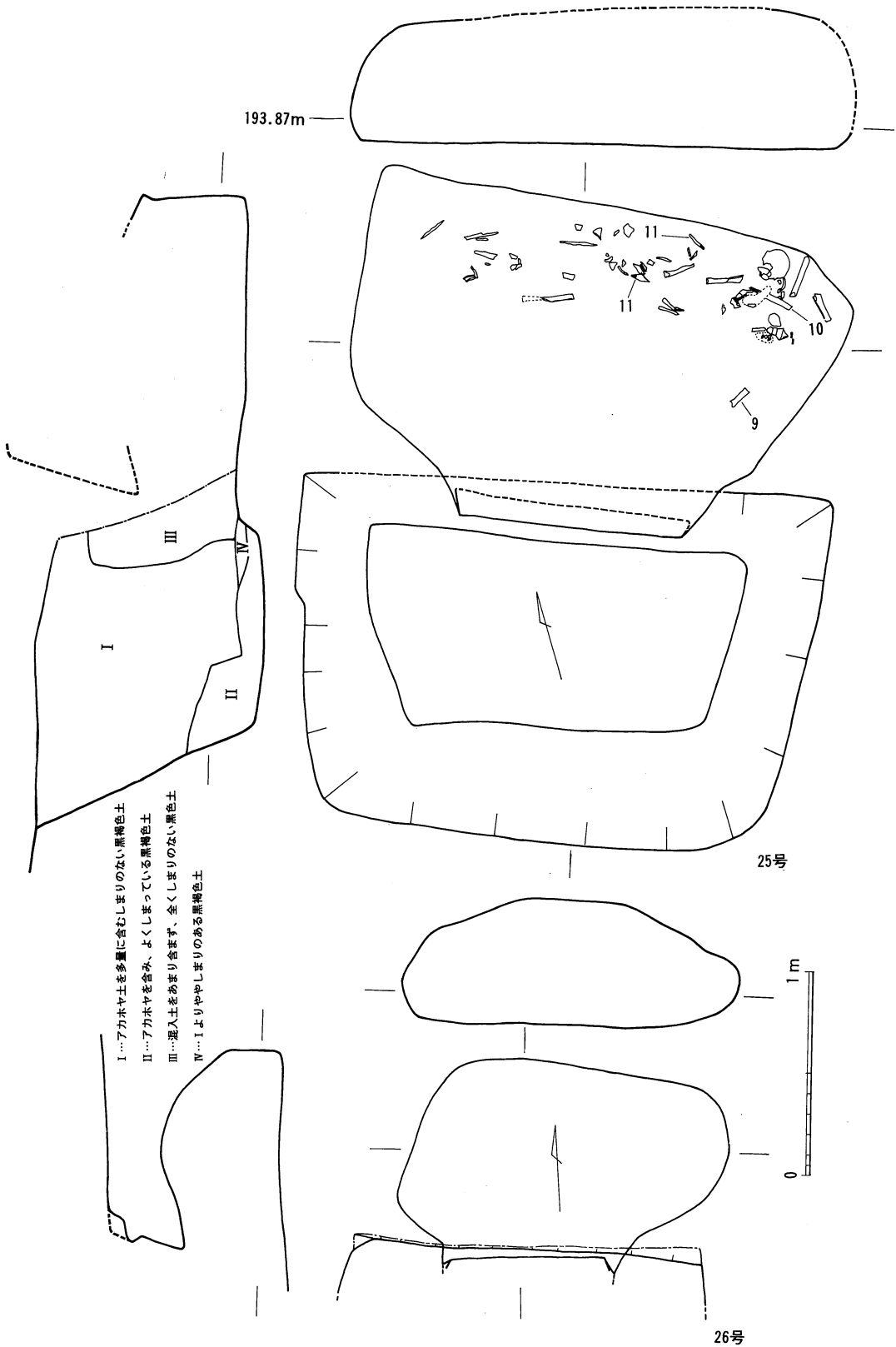
## 2 6 立切25号地下式横穴墓

### (1) 遺構 (第19図)

B-5区の標高約195.5mに位置し、主軸は北北東で高位方向に向かう。前方3.5mに46号、右前方3mに70号、左前方6mに47号が所在している。羨道から玄室中央部は陥没している。竪坑は隅丸長方形で長辺に羨道をもつ。上場は178cm×262cm、下場は92cm×150cm～190cm、深さ111cmである。竪坑前壁に足掛け用の穴が1か所あった。羨道は平入りの両袖で、幅113cm、高さ50cmほどが推定される。玄室へは「ハ」の字状に大きく開くため、長さ不明である。羨道の床面は12cmほど段をもって立ち上がり、玄室へはやや低くなりながら続く。竪坑の埋土は、最下層がアカホヤを含む堅く締まる黒褐色土の層で、その上層はアカホヤを含む締まりのない黒褐色土の層である。羨門部付近にはアカホヤをほとんど含まない締まりのないふかふかした黒色土で、竪坑は埋めた後1回は掘られているようである。閉塞は板を使用し



第18图 立切23号·24号地下式横穴墓



第19図 立切25号・26号地下式横穴墓



ていると推定される。玄室は隅丸梯形で、左右の壁は内湾し、奥壁は内傾して立ち上がり、天井はアーチ状と推定される。奥壁には、壁と天井の境に庇状に外へ5cmほど張り出している部分がある。玄室の規模は、奥行160cm、幅246cm、現存する最大高は69cmである。

副葬品は、短剣、鉄鏃が出土し、人骨も3体分が遺存している。

#### (2) 人骨の出土状況

人骨は遺存状況が悪く、各部の骨の位置も乱れている。1号人骨は壮年の男性、2号人骨は壮年の女性、3号人骨は男性で年齢不明である。

#### (3) 遺物 (第65図)

副葬品は、剣(10)、鉄鏃(11)が人骨下或いはその周辺で出土した。鉄鏃は鏃身部と矢柄部とは25cm離れていたなどまとまりのある出土状態ではない。

剣(9)は身半分以下が欠損している。剣(10)は短剣で茎に目釘穴が1か所あり、関は明瞭でない。鉄鏃(11)の鏃身部には竹様のものが付着している。

### 27 立切26号地下式横穴墓

#### (1) 遺構 (第19図)

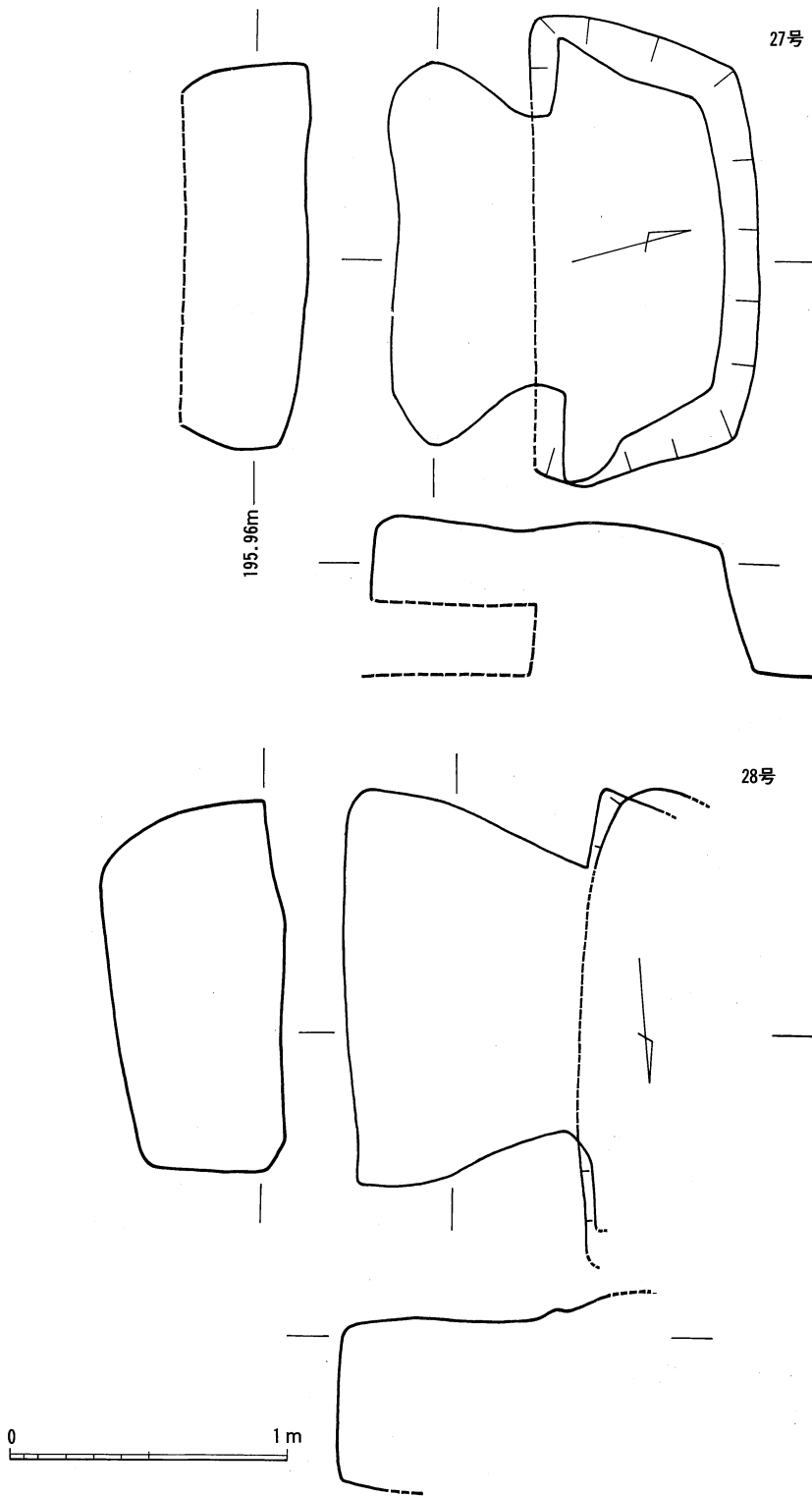
C-7区の標高195.5mに位置し、主軸はほぼ北で高位方向に向かう。右前方5mに28号が所在している。竪坑は工事で大半が欠損している。羨道がついている部分の竪坑幅は175cmである。この部分の傾斜は、上場から直線的に下がるのではなく、羨門上、20cmほどの位置で6cmほど段をもって下がっている。閉塞は板を使用していたと推定される。羨道は、平入りが左に30cmほどの袖をもつが、片袖での範疇に入る。羨道は、幅86cm、高さ51cmであるが、全長は欠損のため不明である。玄室はいびつな隅丸長方形で、壁は奥壁が直立し、左壁が外傾、右壁が外湾して立ち上がり、天井はアーチ状である。玄室の規模は、奥行87cm、幅167cm、高さ62cmである。

人骨は、5体分の頭蓋が羨道を向いて出土したが、これは最近並べられた状態であった。そのため詳細は不明である。副葬品は出土していない。1号人骨は熟年の女性で顔面に少量の赤色顔料の付着が認められる。2号人骨は壮年の女性、3号人骨は壮年の男性、4号人骨は小児で、5号人骨は歯のみが遺存している小児である。

### 28 立切27号地下式横穴墓

#### (1) 遺構 (第20図)

C-8区の標高196mに位置し、主軸は西南西で低位方向に向かう。左前方約4mに26号、前方9mに26号が所在している。羨道から玄室の天井部は陥没している。竪坑は梯形で羨道は長辺につき、羨道のつく両端には三角形の抉りがある。この両端の抉りは閉塞に係る



第20图 立切27号·28号地下式横穴墓

施設で、閉塞に板を使用していたと推定される。上場は82cm×159cm、下場は61cm×128cmである。羨道は両袖の平入りで全長15cm、幅97cm、高さは不明である。竪坑から羨道にかけての床面のレベルは7cmほど高くなり、玄室へ続く。玄室は長楕円状で、壁は奥壁が直立し左右壁が外湾して立ち上がっている。天井は平らであったと推定される。奥行45cm、幅138cmで現存する最大高は42cmである。

副葬品は出土せず、人骨も遺存していない。

## 29 立切28号地下式横穴墓

### (1) 遺構 (第20図)

C-7区の標高196mに位置し、主軸は東で高位方向に向かう。前方15mに43号が所在している。羨道から玄室の天井部は陥没している。竪坑の大半は工事により欠損しているため、平面形は不明である。竪坑の右端部は内傾している。閉塞は板を使用していたと推定される。羨道は両袖の平入りで「ハ」の字に開き、わずかに外湾しながら玄室奥壁へ続くため、羨道と玄室の区分は困難である。羨道の幅は95cm、高さは不明である。竪坑から羨道にかけての床面のレベルは10cmほど緩やかに高くなり、玄室へ続く。玄室は梯形である。壁は奥壁・右壁が直立し、右壁は外湾して内傾している。天井は平らである。羨道から玄室の奥行は88cm、玄室の幅143cmで現存する最大高は62cmである。

副葬品は出土せず、人骨も遺存していない。

## 30 立切29号地下式横穴墓

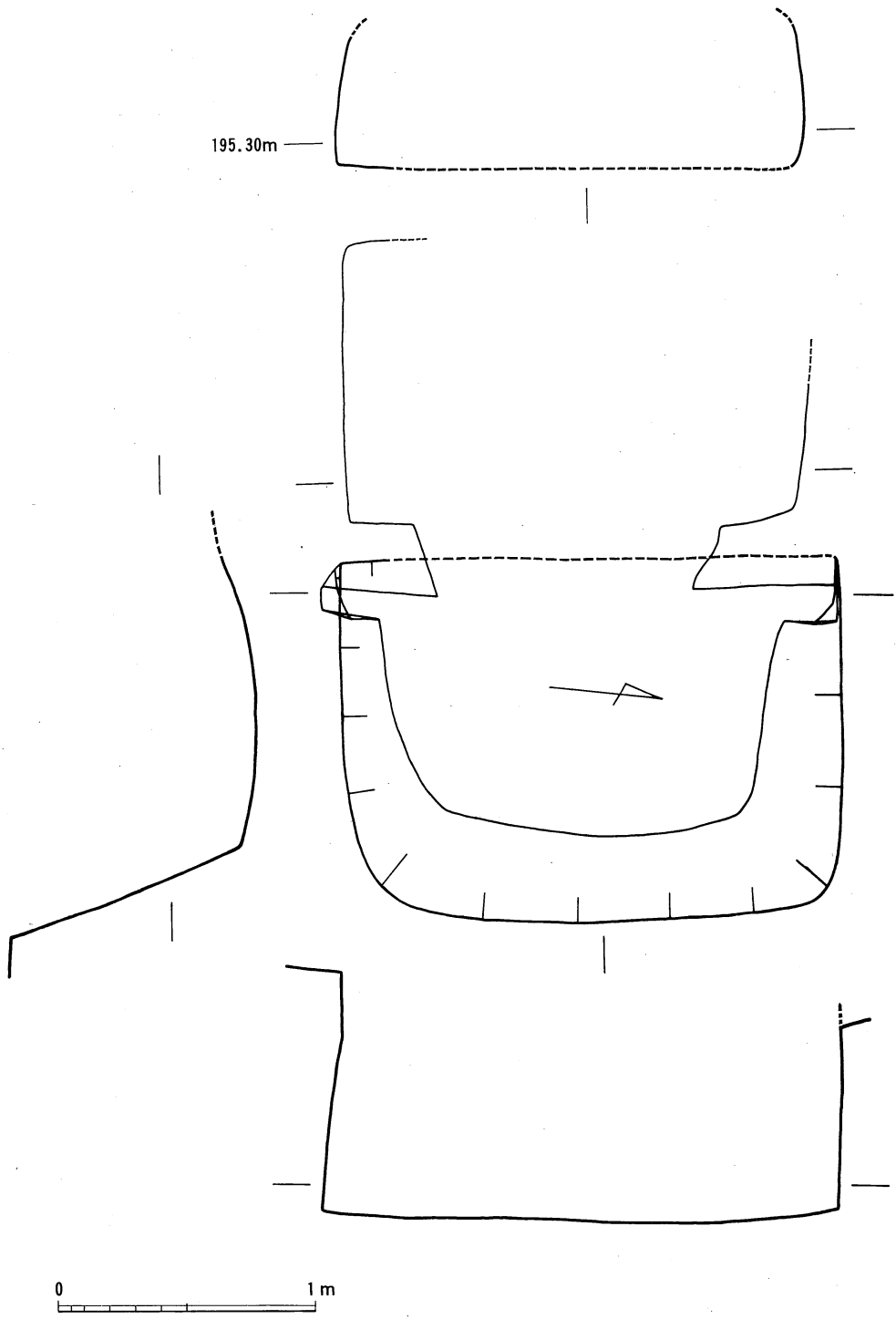
### (1) 遺構 (第21図)

C-9区の標高196mに位置し、主軸は西南西である。左2mに42号が所在している。羨道から玄室の天井部は陥没し、玄室の大半は工事により欠損している。竪坑は長方形で羨道は長辺につき、羨道のつく両端には右が14cm、左が10cm幅の抉りが入る。この両端の抉りは閉塞に関係する施設で、閉塞に板を使用していたと推定される。竪坑の上端は142cm×198cm、下端は96cm×147cm、深さ99cmである。羨道は両袖の平入りで「ハ」の字に開く。羨道の全長は25cm、最小幅101cm、高さは不明である。竪坑から羨道にかけての床面のレベルは緩やかに高くなり、羨道が11cmほど高くなる。玄室は長方形で、左右壁が内傾して立ち上がっている。天井は不明である。奥行110cm、幅183cmで現存する最大高は55cmである。

右袖の隅の攪乱土で鉄鏃、人骨片が出土した。

### (2) 人骨の出土状況

壮年の男性の人骨片が右袖の隅で出土したが、攪乱土内である。



第21图 立切29号地下式横穴墓

### (3) 遺物 (第65図)

副葬品は、右袖の隅の攪乱土内で鉄鏟(12)が出土した。鏟身の半分は欠損しているが大型の柳葉鏟と考えられる。

## 3 1 立切30号地下式横穴墓

### (1) 遺構 (第22図)

D-10区の標高195.5mに位置し、主軸は北北東である。左4.5mに31号が所在し、主軸の方位はほぼ直交する。玄室の天井部は工事の際陥没し、陥没部が保護されていた地下式横穴墓である。竪坑は隅丸長方形で羨道は短辺にある。竪坑の上場は212cm×188cm、下場は95cm×128cm、深さ148cmである。竪坑の埋土は2層に大別され、第I層はアカホヤ、カシワバン等のブロックを含む黒色土で、全体の色調は暗褐色を呈する。第II層は竪坑の下層にあたり、第I層の混土と同じながらブロックが小さく、良く締まる層である。土層の状況から30号は、竪坑は埋め戻した後少なくとも1回は追葬のため掘られていると推定される。羨道は、右に25cmの袖をもつが、片袖の範疇に入る。全長43cm、最小幅47cm、高さ65cmである。羨道の床面のレベルは、竪坑の床面より10cmほど段をもって高くなり、玄室へ続く。閉塞は河原石を使用している。河原石は水平に羨道に入れられ、最下の河原石は5cmほど床面から浮いている。

玄室は、方形に近い長方形で奥行198cm、幅178cmである。壁は右・奥壁が直立ぎみに高さ40cm、左壁は外傾ぎみ42cmに立ち上がっている。棚状施設は右・奥壁にもち、幅は最大18cmである。天井は寄棟造りで現存する最大高は84cmである。

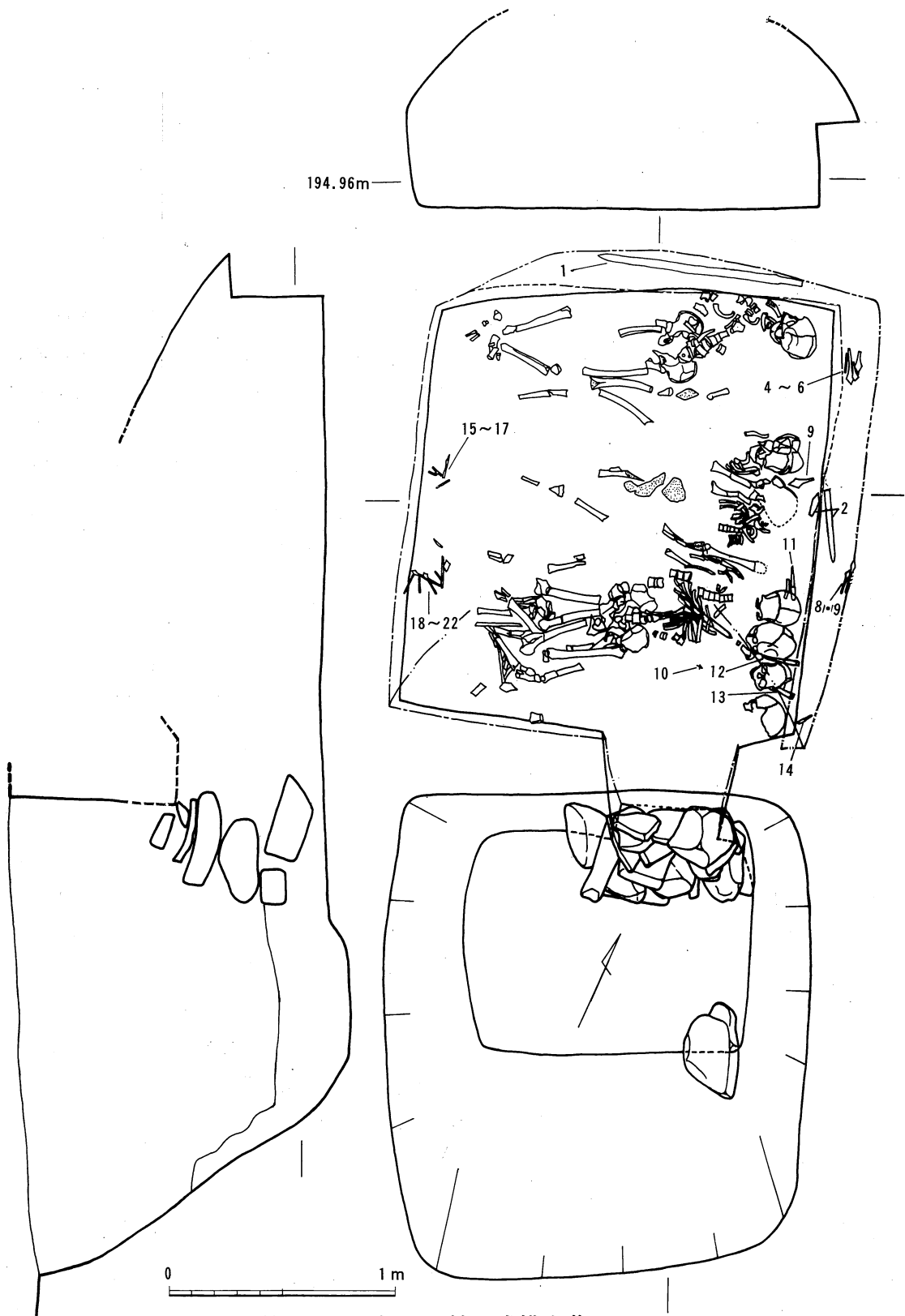
副葬品は、剣、直刀、刀子、鉄鏟が出土し、人骨も遺存している。

### (2) 人骨の出土状況

人骨は、玄室右を頭位にして7体出土した。2号人骨と3号人骨は天井部の落下のため頭蓋などが押し潰されている。人骨の出土状況は、1号から3号の人骨は、頭蓋の下に遺存状態は悪いながら体の各部の骨が続くが、4号から7号人骨の頭蓋は玄室の羨道右の袖付近に並べられているが、上半身以下の各部の骨は、その配列を保ちながら4号・5号人骨の下に折り重なって出土している。1号人骨は熟年の男性、2号人骨は熟年の男性、3号人骨は熟年の男性、4号人骨は熟年の男性、5号は壮年の男性、6号は年令不明の女性、7号は熟年の男性である。1～7号人骨は顔面には赤色顔料の付着が認められる。赤色顔料は、1号人骨が多量で、4・6号人骨が少量である。

### (3) 遺物 (第66図)

副葬品は、直刀(1)が奥壁の棚状施設上で、鉄鏟(4～6)が1号人骨の上の右壁の棚状施設上で、鉄鏟(7)が2・3号人骨の頭蓋間で、剣(2)は身が棚状施設上で茎が3号人骨の頭蓋の上で出土した。鉄鏟(8・9)は奥壁の棚状施設の中央部で、刀子(14)も奥壁の棚



第22图 立切30号地下式横穴墓

状施設で出土した。刀子（11）は4号人骨頭蓋下で、刀子（12）は5号と6号人骨の頭蓋の間で、刀子（13）は6号と7号人骨の頭蓋の間の壁に突刺していた。剣（3）は7号人骨の肋骨の下で出土している。管玉（10）は玄門付近で出土し、鉄鏃（15～17）と鉄鏃（18～22）は左壁下で出土した。

直刀（1）は、把縁に木製装具があり、把には把纏緒がみられる。鞘口にも装具があった痕跡が残っている。目釘穴は1か所である。剣（3）は、把縁に鹿角製装具があり、目釘穴は1か所である。鉄鏃の4～9、20～22は圭頭鏃で4・21・22の茎には糸巻きが見られる。鉄鏃15～19は長頸鏃で、16・17は片刃で逆刺がある。15・18・19も同様な鏃であろう。刀子は、いずれも茎刀子で、把は14が木製以外は鹿角製である。

### 3 2 立切31号地下式横穴墓

#### (1) 遺構（第23図）

31号地下式横穴墓は、調査された72基の地下式横穴墓の中では北東西端部のE・D-10区の境に位置し、標高195mと高位である。1墳丘を共有するように30号地下式横穴墓と約81度の角度で玄室が向き合っている。調査時には天井部は良く残っていたが、人骨取り上げ後から亀裂が大きくなり始めたため、実測時には安全管理のために重機で天井部を除去した。

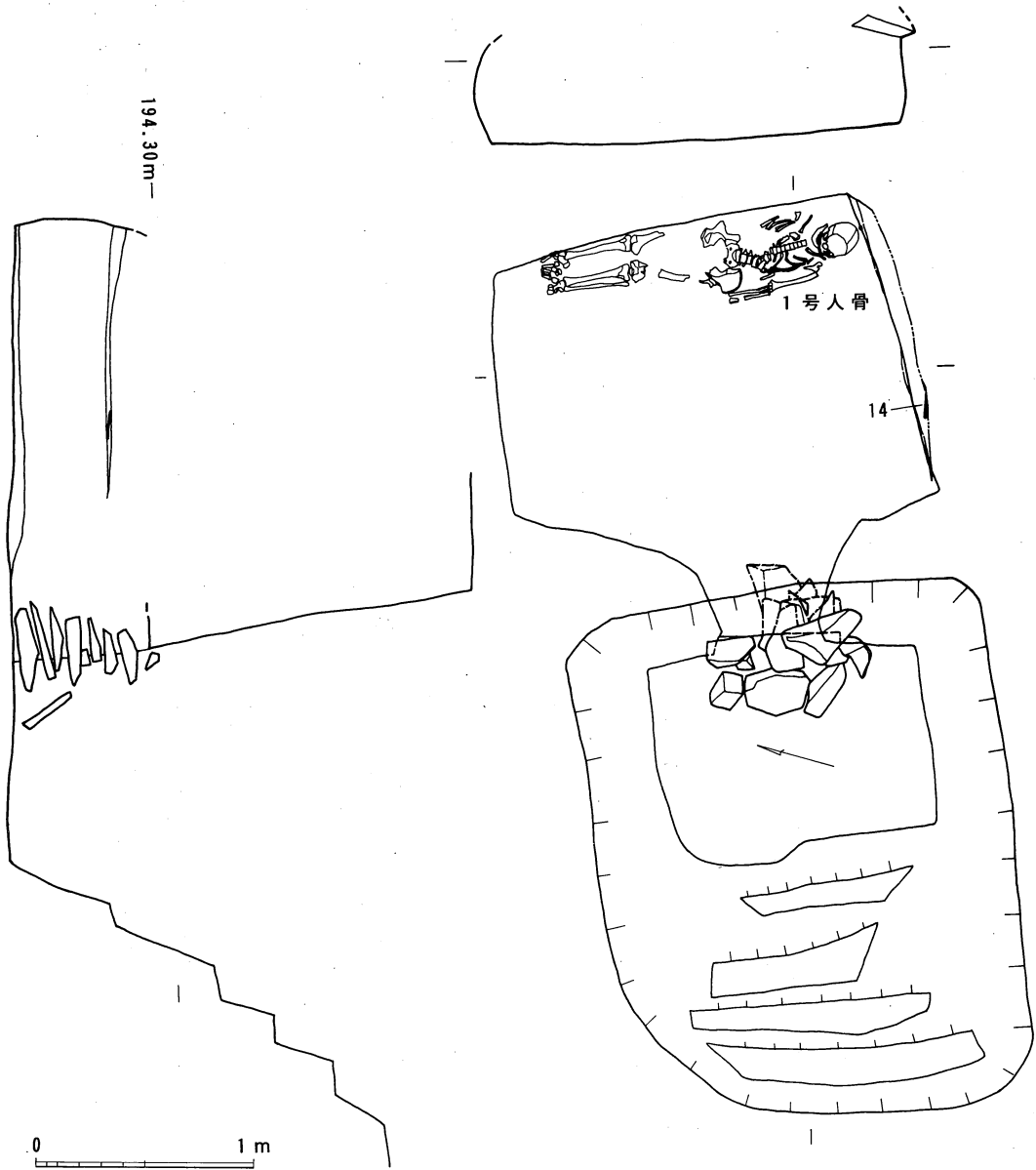
その調査の結果、竪坑の規模は上場が245cm×195cm、下場が128cm×98cmの縦長長方形プランで、検出面（アカホヤ面）からの深さ212cmであり、断面は逆台形である。この大形の竪坑には地山を削りだして4段の階段を設けている。

羨門部は15個の河原石を使って長さ77cm、幅70cm、高さ65cmの厚みで閉塞されている。竪坑から玄室に向かって緩やかに高くなっており、羨門部幅53cm、玄門部幅93cm、羨道部の高さは64cmである。羨門部の両壁には赤色顔料を塗布している。羨門部の主軸はN-72°-Eである。

玄室は平入りの両袖式であるが、左袖が86cmであるのに対して右袖が37cmと短い。床面は奥行150cm、幅189cm、右壁長さ144cm、左壁長さ114cmの横長長台形プランである。天井部の高さは現存が53cmであり、壁面の棚状施設は右壁部のみにあり、幅9cm、床面からの高さは39cm～43cmである。玄室の主軸はS-22°-Eである。

#### (2) 竪坑の土層

竪坑はアカホヤ上面で検出された。竪坑の埋土は、I層が黒褐色土層、II層が褐色土層、III層がにぶい黄褐色土層（アカホヤブロックを含む）、IV層はにぶい黄褐色土層（アカホヤブロックが大きくなる）、V層はにぶい黄褐色土層（黒色ローム塊を含む）、VI層はにぶい黄褐色土層（混入物の径が大きくなる）、VII層は暗褐色土層（V層よりアカホヤブロックの割合が少ない）である。



第23图 立切31号地下式横穴墓



### (3) 人骨の出土状態

壮年の女性人骨は奥壁に寄せて右壁の下に頭を置き、頭位は北東である。人骨は、頭蓋骨から中足骨まで良く残っているが、右上腕骨から指骨、左手の指骨、足の指骨が完全に欠如している。頭蓋骨には赤色顔料が付着している。この人骨は追葬を意図して奥壁に寄せられたが、結果的には追葬は行われなかった。

### (4) 遺物 (第65図)

副葬品は、棚状施設の羨道部寄りから茎刀子1本出土しているだけである。

#### 茎刀子 (第65図14)

茎刀子は直背の刃部幅が関に向かって広がるタイプであるが、関が刃部に対して斜行するか直角可は錆のため不明である。木質の柄の着装範囲は刃部の関の所までである。切先が折れており、現長は13.1cm、身長7.3cm+ $\alpha$  身幅0.9cm、身厚0.2cmである。

## 3 3 立切32号地下式横穴墓

### (1) 遺構 (第24図)

E-10区の標高193mに位置し、主軸は北で低位方向へ向かう。付近の地下式横穴墓31号・34号・38号とは13m~15mの距離を隔てている。竪坑は隅丸長方形で羨道は短辺にある。竪坑の上場は208cm×157cm、下場は85cm×88cm、深さ122cmである。羨道と反対側の竪坑のり面には、レリーフによる3段の階段が設けられ、またその左には足掛け用の穴が2か所ある。竪坑の埋土は3層に大別され、第I層はアカホヤのブロック(5cm~6cm)等を含む黒色土、第II層は竪坑の中層から下層にあたり、土層の混入等は第I層と同じながら締まりのない黒色土である。羨門上から羨道付近は、アカホヤ等をほとんど含まず締まりのないふかふかした黒色土で、この土は羨道にも流れ込んでいる。土層の状況から竪坑は再度掘られたとは考えにくい。また、この土層の状況と閉塞用の河原石がないことから、閉塞は板使用と推定される。

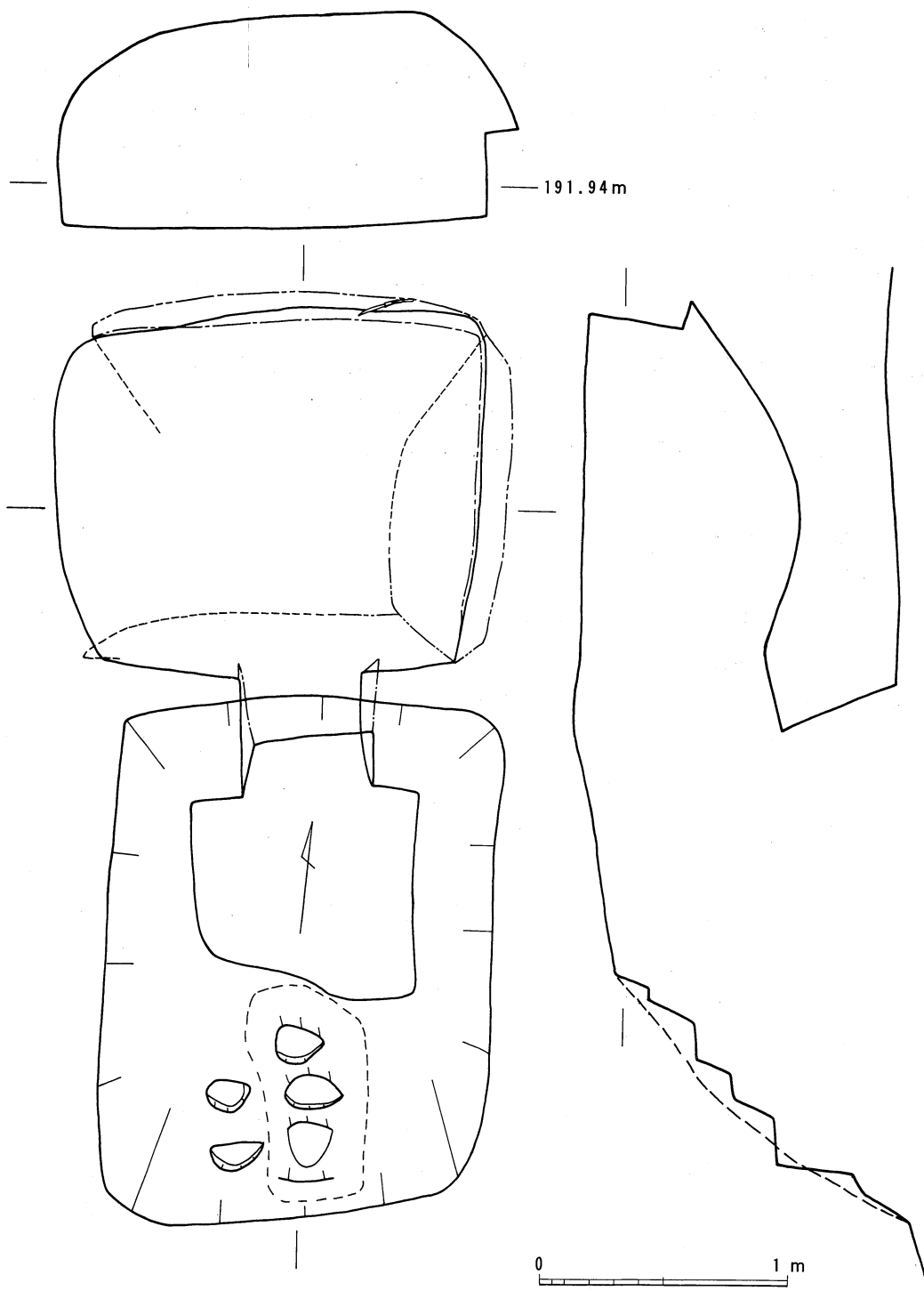
羨道は、やや右に偏るが、全体の平面形から両袖の範疇に入る。羨道の全長45cm、最小幅48cm、高さ75cmである。床面のレベルは、竪坑から緩やかに傾斜して羨道に至り、そのレベルで玄室に至っている。

玄室は、長方形で奥行148cm、幅172cmである。壁は、左右の壁が直立ぎみに高さ35cmほどに、奥壁は内傾して38cmに立ち上がっている。棚状施設は右・奥壁にもち、幅は最大12cmほどである。天井はアーチ状であるが、右天井では稜線は不明瞭ながら寄棟造りを意図した作りである。天井の最大高は88cmである。

副葬品は、刀子が出土し、人骨は遺存していない。

### (2) 遺物(第65図)

副葬品は、刀子2点が奥壁の棚状施設上に置かれていた。刀子は茎刀子で、柄は15が鹿角製、



第24图 立切32号地下式横穴墓

16が木製である。

### 3 4 立切33号地下式横穴墓

#### (1) 遺構 (第25図)

E-8区の標高約194.5mに位置し、主軸は西で低位方向に向かい、右前方9mには34号、左前方6.5mには35号が所在している。羨道から玄室右半分が陥没している。竪坑は隅丸長方形で段をもって下がり、短辺に羨道を持つ。上場は概ね136cm×102cm、下場は概ね78cm×77cm深さ90cmほどである。羨道は平入りで、左にやや偏り片袖ぎみの両袖で全長25cm、最小幅84cmで高さは不明である。床面のレベルは、羨道部で12cmほど高くなり、また下向して玄室へいたる。閉塞は、羨門閉塞で板を使用していたと思われる。玄室は長楕円形で、天井は平らに近い。壁は、奥壁が外傾し、右壁が直立し、左壁が外湾して天井に至る。玄室の規模は奥行76cm、幅153cm、現存している最大高は32cmである。

人骨は遺存していず、副葬品も出土していない。

### 3 5 立切34号地下式横穴墓

#### (1) 遺構・遺物 (第25・65図)

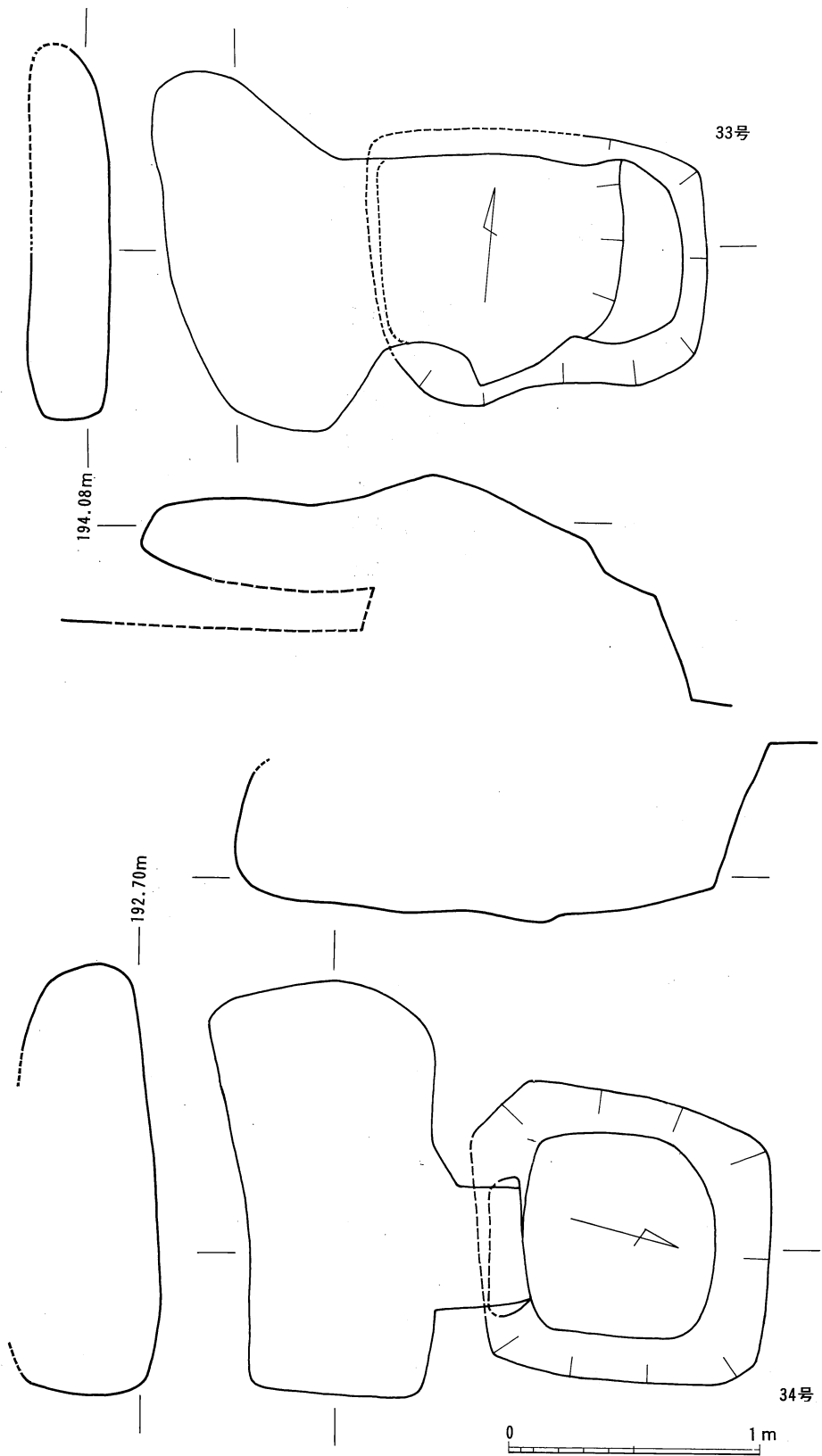
F-8区の標高約193.5mに位置し、主軸は南南西で高位方向に向かい、前方5mには35号、左前方9mには33号が所在している。羨道から玄室中央部が陥没している。竪坑は方形を基調としており、羨道は短辺につく。上場は概ね118cm×116cm、下場は78cm×78cm、深さ68cmほどである。羨道は平入りで、左にやや偏り片袖ぎみで全長39cm、最小幅45cmで高さは不明である。閉塞は、羨門閉塞で板を使用していたと思われる。玄室は長方形で、天井はアーチ状と推定される。壁は、奥壁が内傾ないし外湾して天井に至る。玄室の規模は奥行74cm、幅165cm、現存している最大高は50cmである。

人骨は遺存していず、副葬品は、刀子の身(17)の部分が1点出土している。第65図17鉄鎌あり

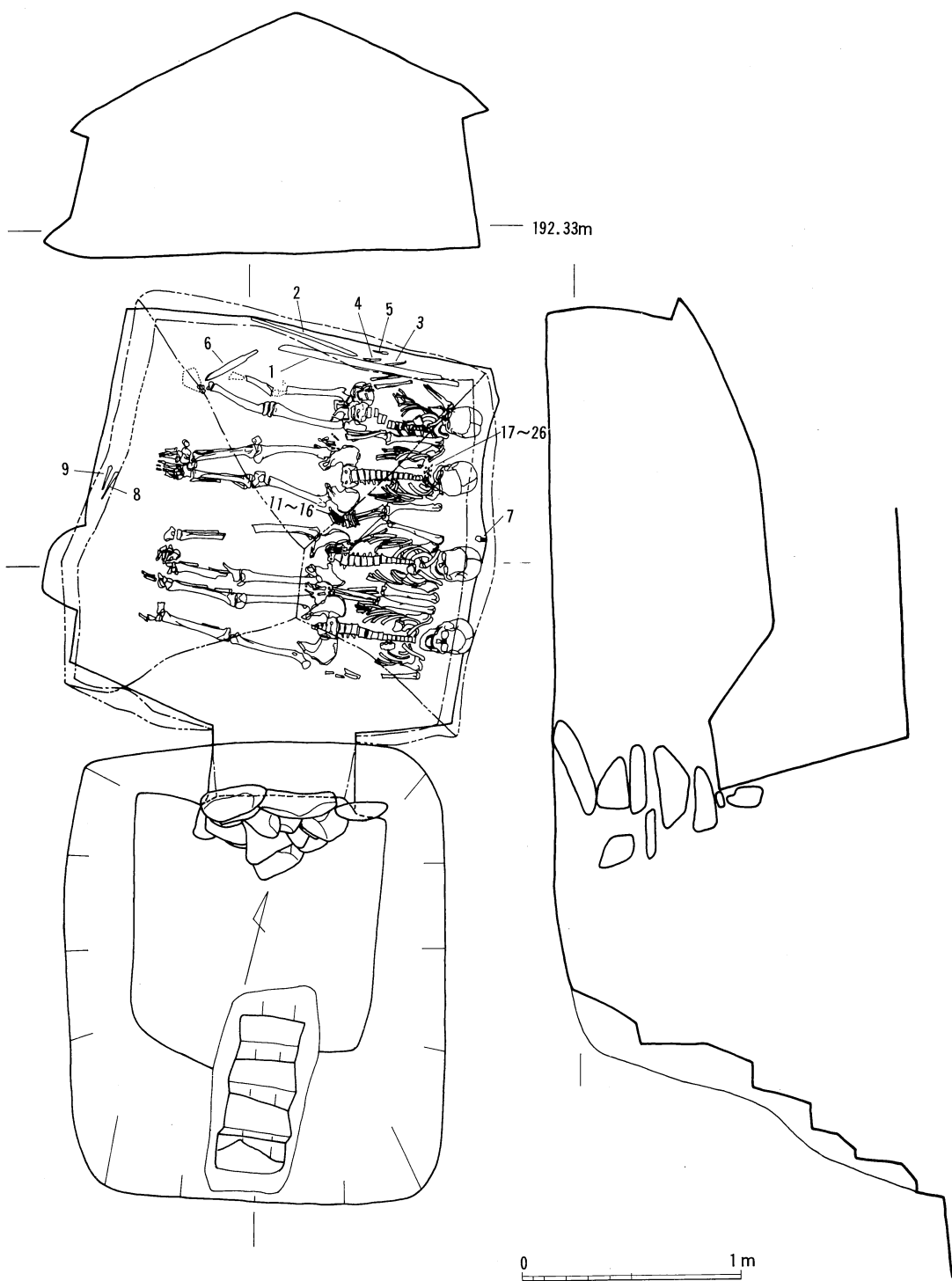
### 3 6 立切35号地下式横穴墓

#### (1) 遺構 (第26図)

F-4区の標高192.5mに位置し、主軸は北北西で低位方向に向かい、前方9mには34号が、右前方6.5mには33号が所在している。竪坑は長方形で短辺に羨道を持つ。上場は212cm×176cm、下場は107cm×115cm、深さ170cmでレリーフによる5段の階段が設けられている。羨道は平入りで、両袖である。全長36cm、最小幅66cm、高さ75cmである。閉塞は、羨門閉塞で河原石を使用し、河原石は羨道に水平に入れ最上部では羨門上に河原石を立て掛けている。



第25图 立切33号·34号地下式横穴墓



第26图 立切35号地下式横穴墓

玄室は方形で、天井は寄棟造りで稜線は明瞭であり、壁面の仕上げも丁寧である。玄室の規模は奥行182cm、幅180cm、高さ101cmである。壁は内傾ないし外湾して立ち上がる。4壁に棚状施設をもち、幅は右棚が最大13cm、奥棚が最大16cm、左棚が最大10cm、手前棚も最大10cmほどである。床面レベルは、竪坑、羨道、玄室ともほぼ同じである。

人骨は4体が埋葬され、副葬品は、剣、直刀、鉄鏃、刀子、鉄斧、貝輪、玉が出土した。

### (2) 人骨の出土状況

人骨は玄室の右を頭位にして4体が埋葬されていた。1号人骨は小児で、2号人骨は壮年の女性で、3号人骨は壮年の女性、4号人骨は熟年の女性である。人骨の遺存状況は良く、頭蓋、脊椎、腰骨、大腿骨、足骨などほぼ残存し、1号人骨の脊椎に一部乱れがある他は、ほぼ人骨の各部の位置を保っている。4体の人骨の腰骨がほぼ一直線上に並んでいる。また、1号人骨の左上腕骨の上に2号人骨の右上腕骨が乗り、2号人骨の左上腕骨の上に3号人骨の右上腕骨が乗り、3号人骨の左上腕骨の上に4号人骨の右上腕骨が乗っている。

1号人骨と2号人骨及び4号人骨の顔面及び前頭部には赤色顔料の付着が認められた。

### (3) 遺物 (第67図)

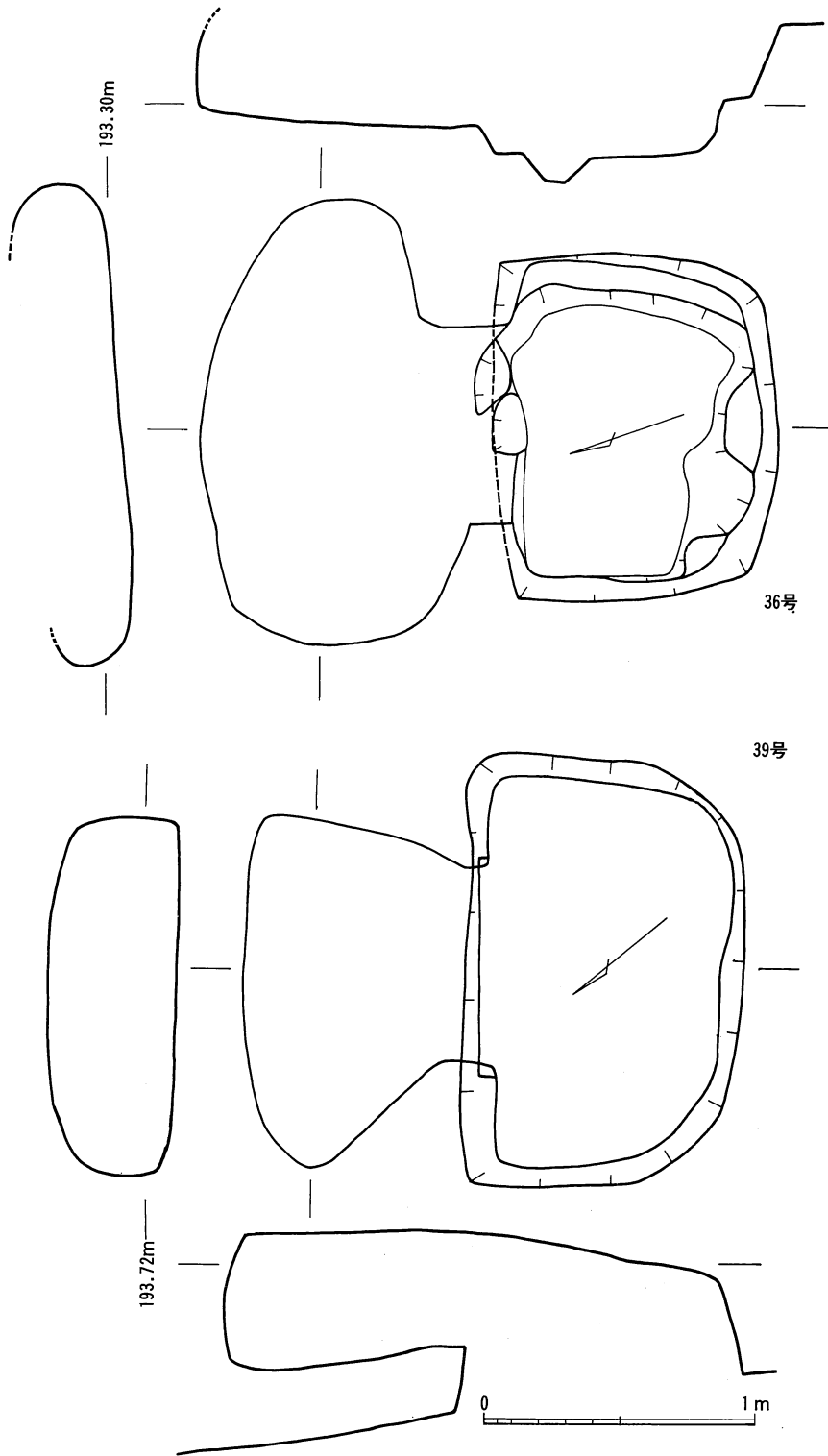
副葬品は棚状施設の上或いは床面に置かれ、貝輪・玉は2号人骨から出土している。直刀(1)は、1号人骨の左上腕骨の横で鋒を左にして出土した。木質部が遺存し、目釘穴は2か所である。剣(6)は、1号人骨の右足元で出土し、木質部が遺存している。鉄斧(7)は、3号人骨頭蓋の右上の壁ぎわに突き刺していた。袋部に柄にあたる木質が残っている。貝輪(11~16)はイモガイ製で横型の貝輪で2号人骨の左手首に装着されており、11からが手首側である。玉は、2号人骨の首の周辺で100数個出土した。玉は、琥珀製が1点、暗赤色の硬質の石製1点、黒褐色或いはオリブ灰色を呈する石製の平玉(17~26)が100数個ある。剣(2)、刀子(3~5)は奥壁の棚状施設上に置かれていた。剣(2)は鹿角製把縁装具が遺存し、把は緒が巻かれている。刀子は、3が蕨手刀子で、4、5が茎刀子で把は木製である。

## 3 7 立切36号地下式横穴墓

### (1) 遺構 (第27図)

E-6区の標高約194mに位置し、主軸は北北東で高位方向に向かい、左前方5mには24号が所在している。羨道から玄室天井部が陥没している。竪坑は方形で、羨道は長辺につく。上場は106cm×129cm、下場は概ね70cm×100cm、深さ50cmほどである。羨道は平入りで、左にやや偏りぎみの平入りで全長25cm、最小幅72cmで高さは不明である。閉塞は、羨門閉塞で板を使用していたと思われる。玄室は楕円形で、天井はアーチ状と推定される。壁は外湾して天井にいたる。玄室の規模は奥行92cm、幅164cm、現存している最大高は35cmである。

人骨は遺存していず、副葬品も出土していない。



第27图 立切36号·39号地下式横穴墓

### 3 8 立切37号地下式横穴墓

#### (1) 遺構 (第28図)

F-6区の標高193.5mに位置し、主軸は北西で高位方向に向かい、前方7mには36号が所在している。37号は立切地下式横穴墓群の中で唯一の堅坑上部閉塞の地下式横穴墓である。堅坑は二段掘りで、上段堅坑は隅丸方形で、上場は133cm×163cm、下場は概ね119cm×125cm、深さ13cmある。下段堅坑は方形で、上場は72cm×72cm、下場は82cm×75cm、深さ121cmで袋状となっている。堅坑内および玄室内は、黒色土が充満していた。閉塞物の遺存していないが、堅坑内の埋土から板を使用していたと考えられる。羨道は、右に3cmの袖を持つが、片袖の範疇である。全長25cm、最小幅49cm、高さ61cmである。玄室は梯形で右辺が長い。天井は切妻造りに近い寄棟造りで稜線は明瞭で、壁面の仕上げも丁寧である。玄室の規模は奥行171cm、幅185cm、高さ118cmである。壁は内傾立ち上がる。4壁に棚状施設をもち、幅は右棚が最大11cm、奥棚が最大13cm、左棚が最大6cm、手前棚が最大11cmほどである。床面レベルは、堅坑、羨道、玄室ともほぼ同じである。

副葬品は、刀、鉄鏃、刀子、鉞が出土した。人骨は遺存していない。

#### (2) 遺物 (第65図)

副葬品は奥壁の棚状施設上に置かれていた。直刀(18)の扱は、合せ木を緒巻きで固定している。鉞(20)は茎部の大半が欠損している。木柄に紐で固定している。22は茎刀子で木柄である。鉄鏃(23~25)は圭頭鏃で、19は圭頭鏃の茎部で23~25のいずれかのものであろう。

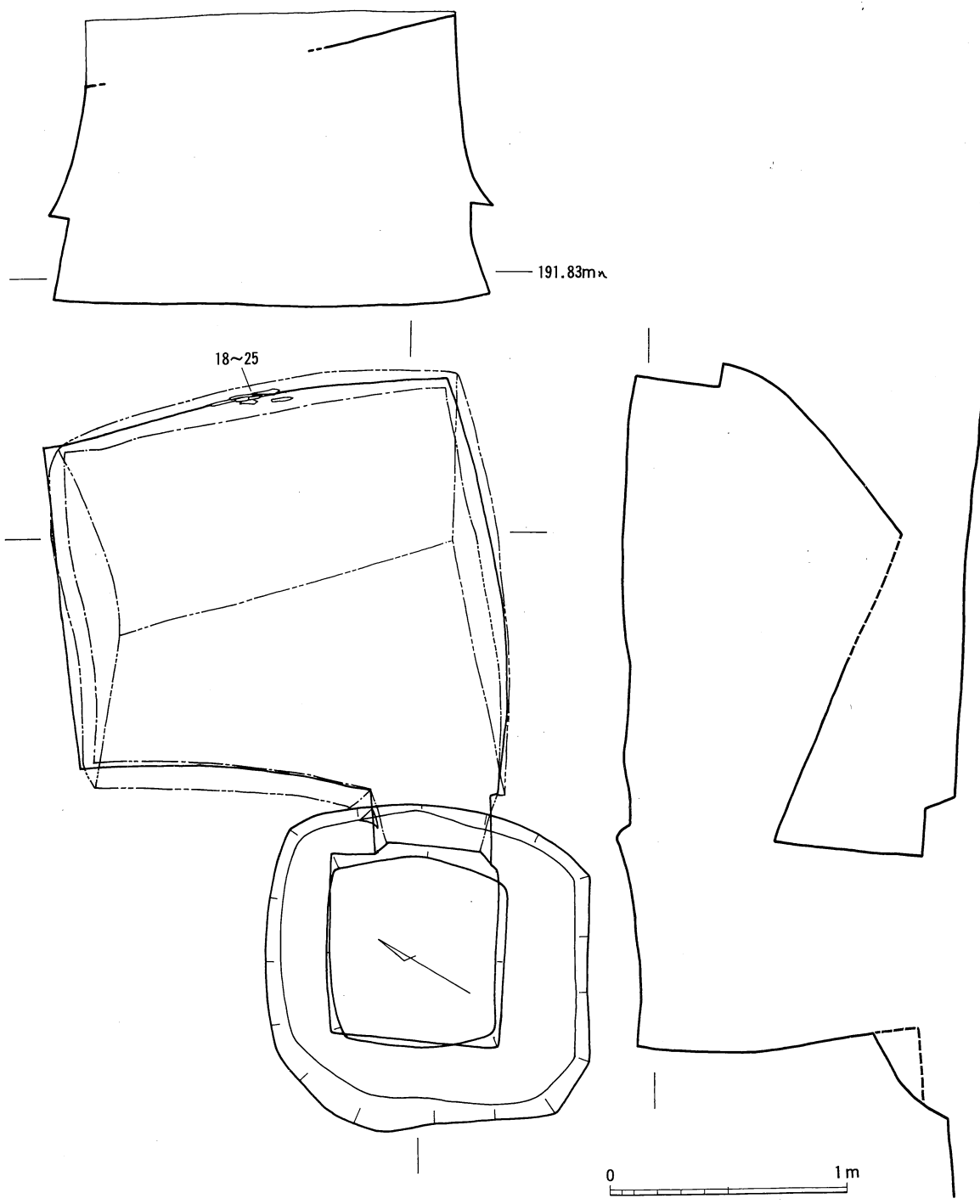
### 3 9 立切38号地下式横穴墓

#### (1) 遺構 (第29図)

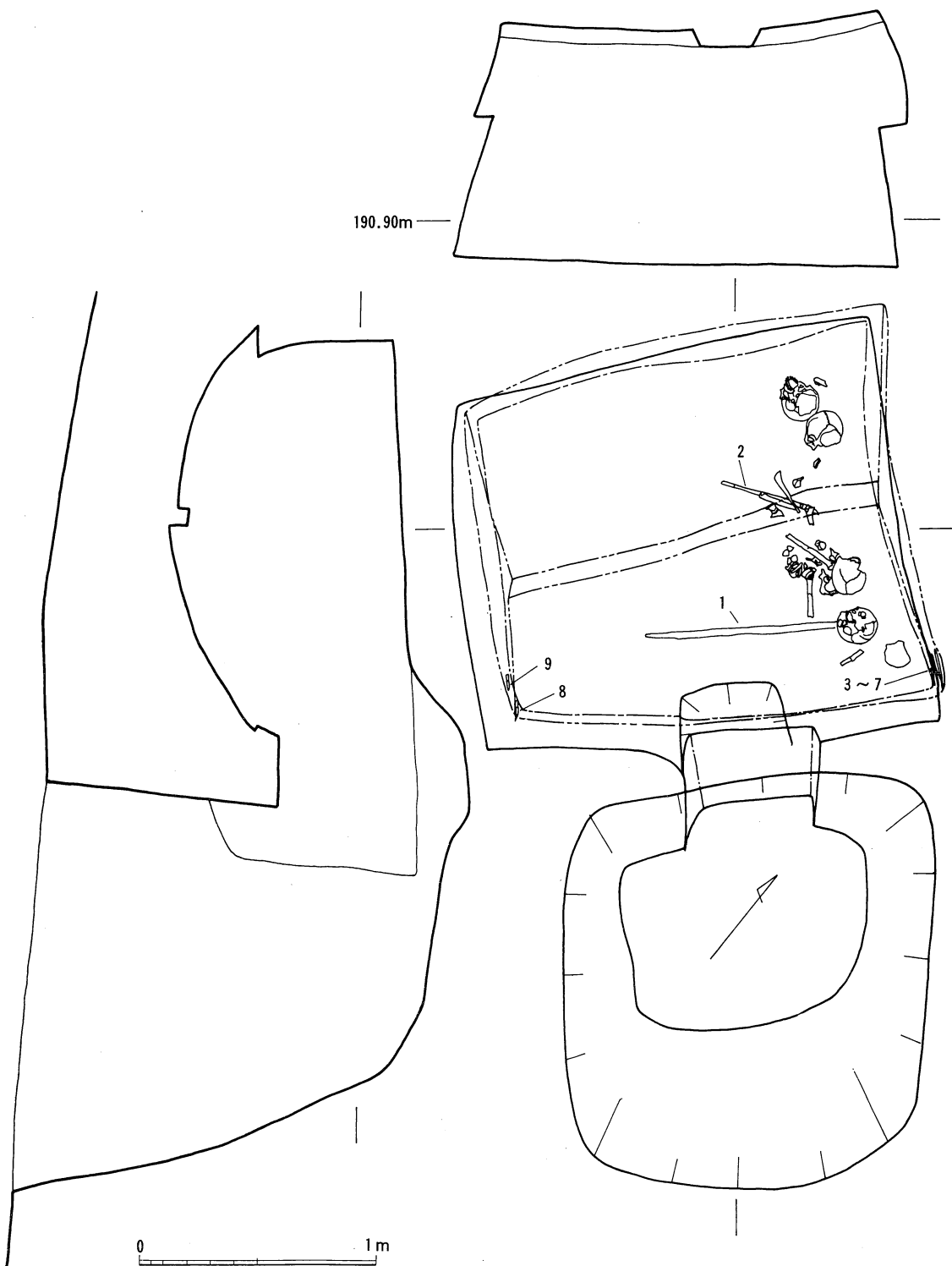
G-9区の標高192mに位置し、主軸は北西で低位方向に向かい、前方6.5mには40号が所在し、38号と40号との主軸はほぼ直交する関係にある。堅坑は隅丸長方形で短辺に羨道をもつ。上場は173cm×156cm、下場は79cm×104cm、深さ概ね170cmである。堅坑の埋土は、アカホヤ、カシワバンの2~6cmの土塊等を含む黒色土であるが、全体の色は黒褐色を呈する。この埋土の最下層はやや硬質であった。羨門部周辺(羨門より横へ25cm、羨道の天井から60cmの深さ)は締まりがなくふかふかした黒色土であった。羨道は、平入りで両袖である。全長34cm、最小幅55cm、高さ80cmである。閉塞は、土層等から板使用であったと推定される。床面のレベルは、堅坑部では緩やかに下向しながら羨道に向かい、羨道部では10cmほど急に深くなり、玄室部になると、また、20cmほど高くなっている。遺構検出時の羨道の高さは、60cmほどで羨道の深くなっている部分は埋められて玄室の床面と同じレベルになっていて、その上に締まりがなくふかふかした黒色土が流れ込んでいた。

玄室は方形で、天井は切妻造りで稜線は明瞭であり、壁面の仕上げも丁寧である。天井部に





第28図 立切37号地下式横穴墓



第29图 立切38号地下式横穴墓

は、幅7cm、深い所で7cm浅い所でも4cmほど削り残して棟木を表現している。玄室は梯形ぎみの長方形で、規模は奥行161cm、幅188cm、高さ98cmである。壁は内傾して58cmほど立ち上がる。4壁に棚状施設をもち、幅は右棚が最大11cm、奥棚が最大13cm、左棚が最大8cm、手前棚が最大4cmほどである。玄門上にも幅等は狭いながら棚状施設は表現されていた。玄室内の左奥には、左奥の天井から吹き出したように積もった黒色土があった。

人骨は4体が埋葬され、副葬品は、剣、直刀、鉄鏃、刀子が出土した。

#### (2) 人骨の出土状況

人骨は玄室の右を頭位にして5体が埋葬されていた。人骨の遺存状態は悪く、頭蓋部分のみが残っているのが多く、また、天地逆になっているのもあった。これは、左奥の天井から吹き出した黒色土によるものと思われる。1号人骨は壮年の女性で、2号人骨は熟年の男性で、3号人骨は壮年の男性、4号人骨は熟年の女性、5号人骨は壮年で性別は不明

#### (3) 遺物 (第68図)

副葬品は棚状施設の上或いは床面に置かれている。直刀(1)は、4号人骨の下で鋒を右にして出土した。木質部が遺存し、目釘穴は1か所が確認できる。鞘口には木質の装具があり、中央に文様を施している区画された部分がある。把部分には把纏緒が認められるが、把頭までは続いていないので把頭装具があったのかも知れない。剣(2)は玄室中央で出土した。2号人骨に伴うものか。把縁には木製の把縁装具の痕跡と考えられる縦方向の木質部が遺存している。把はほぞを入れそこに茎を差し込んでいる。また、その端部には1mm程削られた固定用の部分がある。

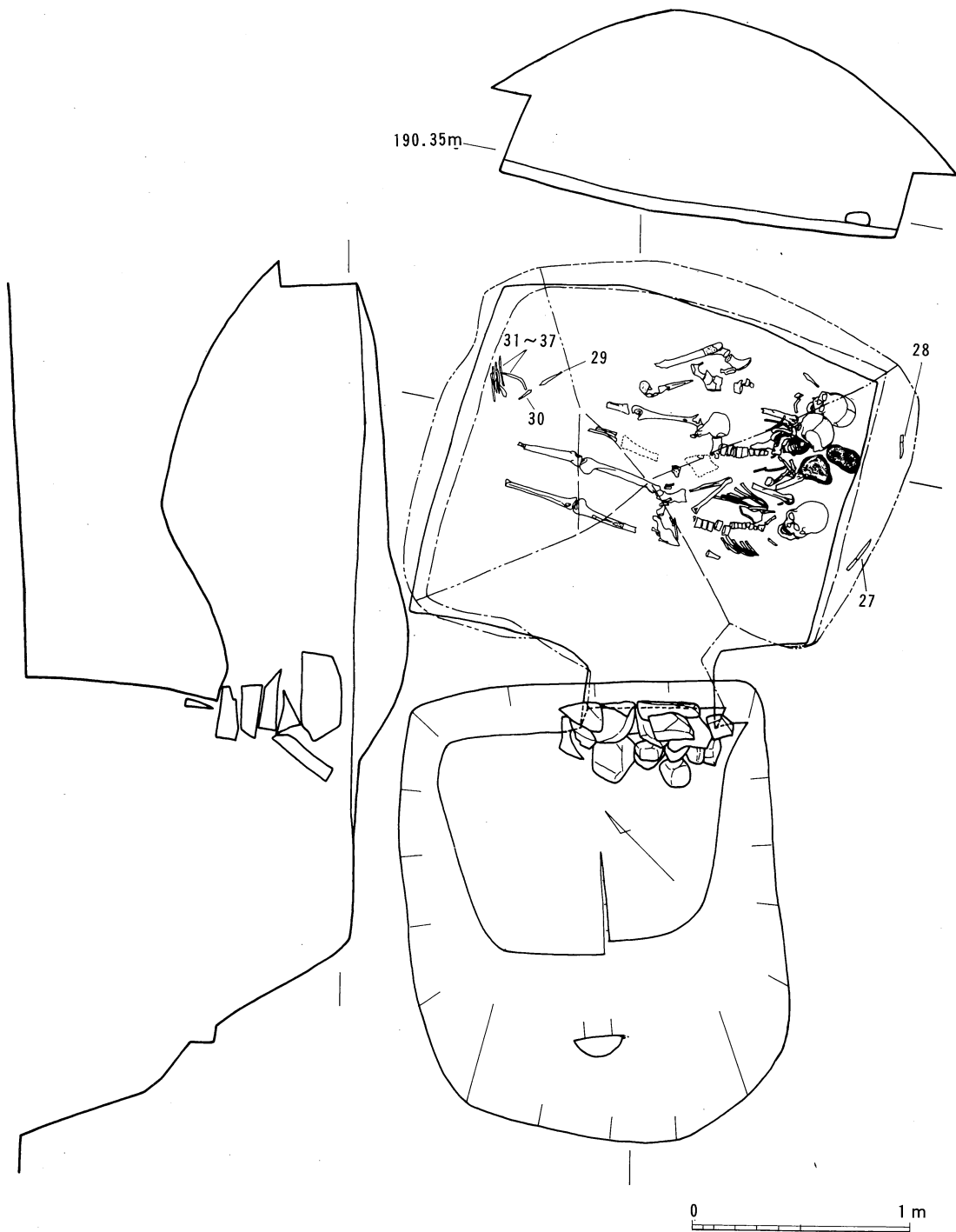
鉄鏃(3~7)は右棚状施設の右角で出土した。圭頭鏃である。刀子(8・10)は茎刀子である。刀子(8)は左棚状施設の上1cmほど左角の天井部に突き刺していた。把は鹿角製である。9は棚状施設上で出土した。

### 40 立切39号地下式横穴墓

#### (1) 遺構 (第27図)

F-7区の標高約193.5mに位置し、主軸は北東で高位方向に向かい、左前方約4mには35号が所在している。竪坑は隅丸長方形で、長辺に羨道を持つ。上場は105cm×161cm、下場は86cm×143cm、深さ55cmほどである。羨道は平入りの片袖で、全長約15cm、最小幅72cm、高さは43cmである。床面のレベルは、竪坑部が緩やかに下向き羨道付近でほぼ水平となって玄室へ続く。閉塞は、羨門閉塞で板を使用していたと思われる。玄室は羨道から「ハ」の字に開き、右壁はそのまま奥壁に続く。壁は外湾して立ち上がり、天井はほぼ平らである。玄室の規模は奥行78cm、幅130cm、高さ51cmである。

人骨は遺存していず、副葬品も出土していない。



第30图 立切40号地下式横穴墓

#### 4 1 立切40号地下式横穴墓

##### (1) 遺構 (第30図)

H-8区の標高192mに位置し、主軸は北西で低位方向に向かい、前方6.5mには40号が所在し、38号と40号との主軸はほぼ直交する関係にある。竪坑は半円長方形で短辺に羨道をもつ。上場は212cm×173cm、下場は104cm×95cm～141cm、深さ153cmで足掛け用の窪みが1か所ある。竪坑の埋土は、アカホヤ、カシワバンの2～3cmの土塊等を含む黒色土であるが、全体の色は黒褐色を呈するが、分層はできなかった。羨道は、平入りでやや左に偏る両袖である。全長32cm、最小幅59cm、高さ83cmである。床面のレベルは、竪坑は中央部から下向き、羨道下ではレンズ状に25cmほど深くなり、玄室では奥壁に向かって緩やかに高くなっていく。人骨の埋葬の際は、この窪みを埋めて竪坑と同じ高さとし貼床としている。その時の羨道の高さは59cmで玄室の高さは91cmである。閉塞は、河原石を使用して、河原石を羨門部に水平に積んでいる。

玄室は歪な長方形で、天井は寄棟造りで稜線はやや不明瞭で天井中央部では消えている。壁面の仕上げもわりに丁寧である。規模は奥行168cm、幅184cm、高さ91cm（掘り方面からの高さは106cm）である。壁は、右壁が外傾し、左壁が内傾し、奥壁は直立して立ち上がっている。その高さは30cm～40cm（掘り方面からの高さ）である。4壁に棚状施設をもち、幅は右棚が最大21cm、奥棚が最大15cm、左棚が最大18cmと広く、手前棚が最大8cmとやや狭い。

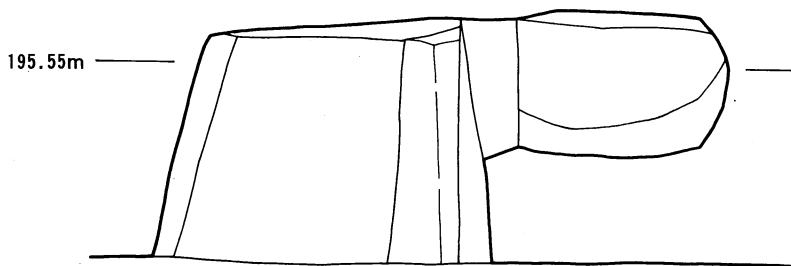
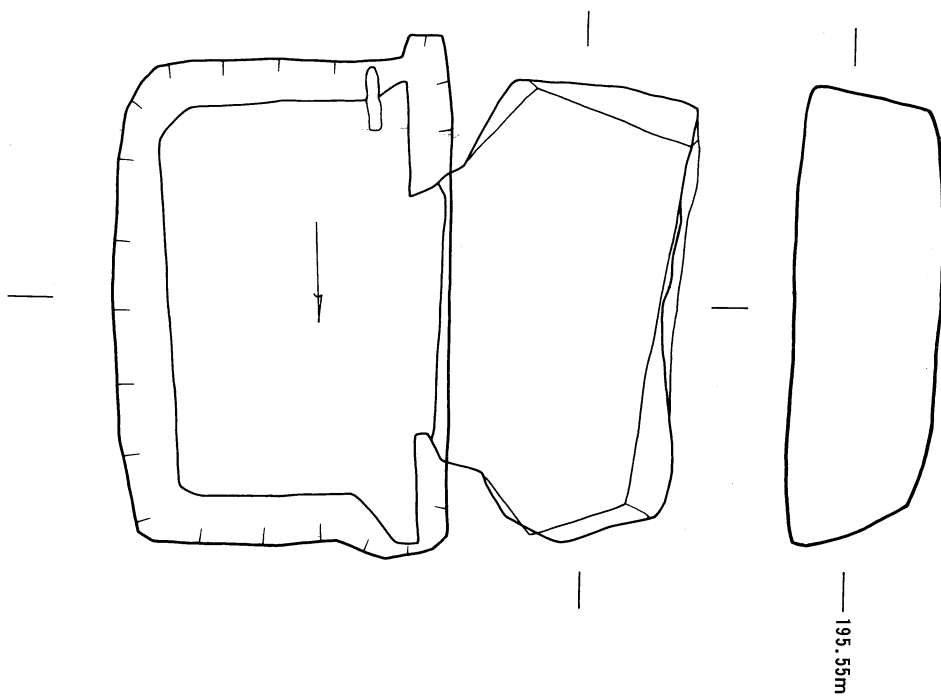
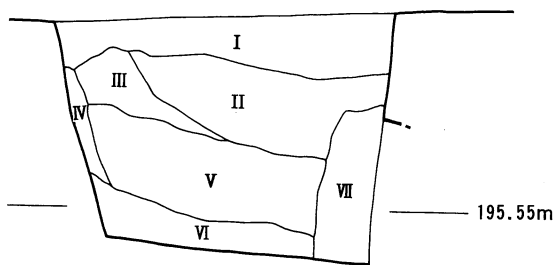
人骨は3体が埋葬され、副葬品は、鉄鏃、刀子が出土した。

##### (2) 人骨の出土状況

人骨は玄室の右を頭位にして3体が埋葬されていた。人骨の遺存状態は奥壁に近いほど悪いが、骨の各部の位置はそれ乱れていない。2号人骨の頭蓋が1号人骨の頭蓋に乗りかかっているが、これは2号人骨の頭が土塊を枕にしていたためであろう。1号人骨は壮年の女性で、2号人骨は熟年の女性で、3号人骨は熟年の男性である。

##### (3) 遺物 (第67図)

副葬品は、刀子(27・28)が右壁の棚状施設の上に、鉄鏃(29～37)が左壁ぎわの2号人骨の足元に置かれていた。配置の位置から刀子(28)は1号人骨に、鉄鏃(29～37)は2号人骨に、刀子(27)は3号人骨に伴うものか？。刀子2点は茎刀子で、刀子(27)は両関である。把については両刀子とも鏑のため不明である。鉄鏃30～32は、鏃身に逆刺をもち、さらに頸部にも片逆刺をもっている。鉄鏃33は鏑のため頸部の片逆刺であるが、同様の物であろう。鉄鏃34・34は典型的な長頸有腸袂の鏃で、鉄鏃36も同様であろう。



第31图 立切42号地下式横穴墓

## 4 2 立切42号地下式横穴墓

### (1) 遺構 (第31図)

C-9区、標高約196mの、29号とともに群内で最も高所に位置する地下式横穴である。丘陵の最高位地点に向かって玄室は構築されている。

竪坑は長方形を呈し、上端部で南北に170cm、東西に120cm、検出面からの深さは85cmを測る。

竪坑西側の羨門寄りには閉塞に伴う張り出し（北、南側）や、溝（南側）が遺存している。北側の張り出しは、間口が35cm、奥が10cm、南側のそれは不明瞭であるが、間口が10cm程度とみられる。また、竪坑の土層断面を観察すると、Ⅷ層とした羨門部分の層のみがやわらかく、有機質のものが腐食した痕跡を示しており、張り出しや溝の存在とあわせて、厚い板状のもので閉塞していたことがうかがえる。羨門は、幅90cm、高さ50cm、羨道長は20cmである。

玄室は平入り両袖となり、ほぼ南北方向に主軸をとる。平面プランは、若干不整な長台形である。

玄室の最大長は、幅（東西）が163cm、奥行（南北）が88cmとなる。高さは55cmで、天井はやや丸みを帯びるものの基本的には平らで、棟などの家屋を意識した作事の跡は認められない。

人骨、遺物の出土は皆無であった。

## 4 3 立切43号地下式横穴墓

### (1) 遺構 (第32図)

43号地下式横穴墓は、調査された72基の地下式横穴墓の中では北東西端部のA・B-7区の境に位置し、標高は195.5mと高位である。検出時には既に羨道部と玄室の天井部は陥没していた。

その調査の結果、竪坑の規模は上場が207cm×162cm、下場が148cm×113cmの横長不定形プランで、検出面（アカホヤ面）からの深さは73cmであり、断面は逆台形である。

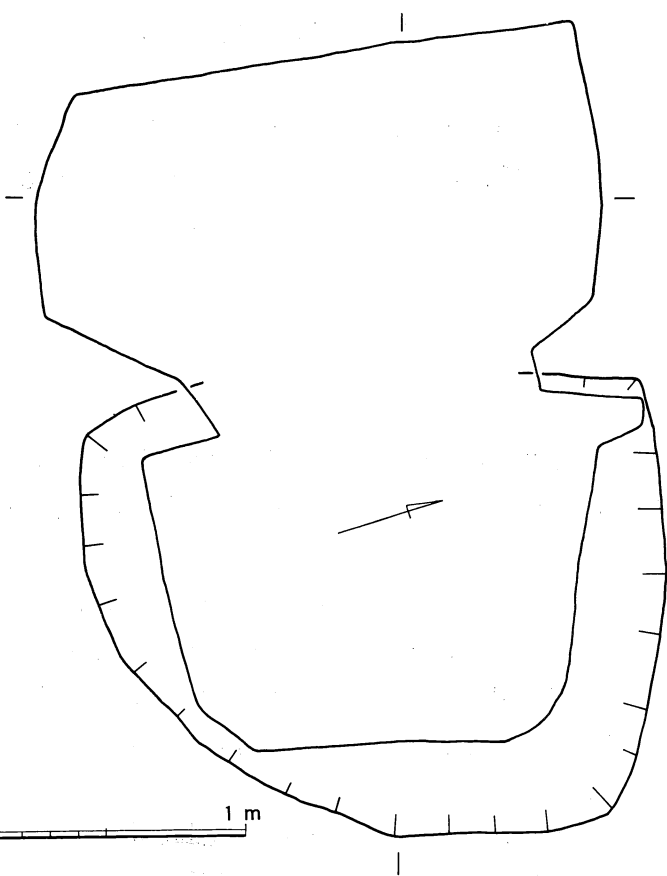
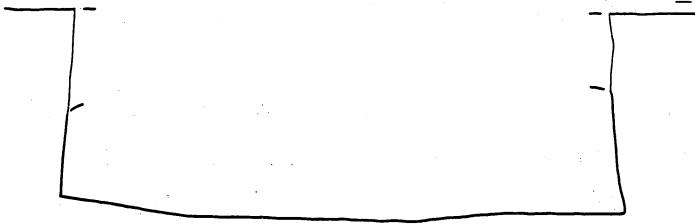
羨門から右側に幅17cm、長さ15cmの張り出しを設けているので羨門部板閉塞と推定される。竪坑と玄室の段はなく、同レベルである。羨門部幅111cm、玄門部幅125cmである。羨道部の主軸は東西方向で、羨門は東に開口している。

玄室は平入りの両袖式であるが、左袖が50cmであるのに対して右袖が22cmと短い。床面は奥行112cm、幅201cm、右壁長さ99cm、左壁長さ80cmの横長長台形プランである。天井部の高さは現存が41cmであるので、天井部の低いドーム形である。玄室の主軸は南北方向である。

### (2) 竪坑の土層

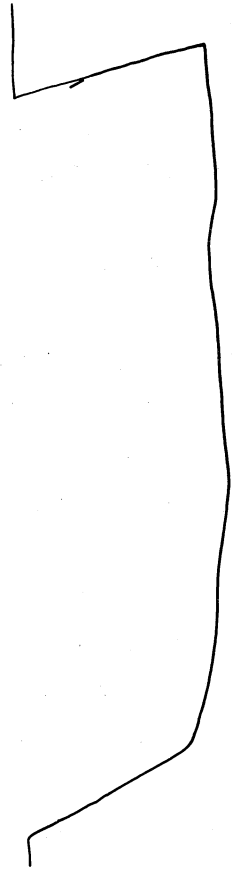
竪坑はアカホヤ上面で検出された。竪坑の埋土はⅠ層が黒色土層（アカホヤ粒子を少量含む）

195.700m



0 1 m

195.800m



第32图 立切43号地下式横穴墓



II層が黒色土層（径5cmのアカホヤ塊・褐色塊を含む）、III層が黒色土層（II層と同じ。非常に固い。）、IV層は黒色土層（径1cm以下のアカホヤ粒子・褐色ローム粒子を含む）、V層は黒色土層（3cmのアカホヤ塊はごく少量）、VI層は黒色土層（アカホヤ塊が多い）である。V層が板閉塞の痕跡である。

### （3）遺物（第68図）

副葬品は床面から鉄鏝が2本出土しているだけである。

#### 鉄鏝（第68図11）

2本の鉄鏝は錆で付着している。11は圭頭式鏝で刃部幅4.7cm、身長の見長は9.9cmである。11に付着している鉄鏝の形態は錆のため不明であるが、圭頭式鏝と推定される。

## 4 4 立切44号地下式横穴墓

### （1）遺構（第33図）

44号地下式横穴墓は、調査された72基の地下式横穴墓の中では北東部のB-7区の南端部に位置し、標高は195.5m～196.0mと高位である。検出時には既に羨道部と玄室の天井部は陥没していた。

その調査の結果、竪坑の規模は上場が220cm×120cm、下場が166cm×79cmの横長長方形プランで、検出面（アカホヤ面）からの深さは108cmであり、断面は逆台形である。

竪坑と玄室の境には9cmの段があり、羨門部は板閉塞と推定される。羨門部幅100cm、玄門部幅107cmである。羨道部の主軸は南北方向で、羨門は南に開口している。

玄室は平入りの両袖式であり、右袖が50cmであるのに対して左袖が49cmとほぼ等しい。床面は奥行118cm、幅207cm、右壁長さ98cm、左壁長さ94cmの横長長方形プランである。天井部の高さは現存が70cmである。玄室の主軸は東西方向である。副葬品は出土していない。

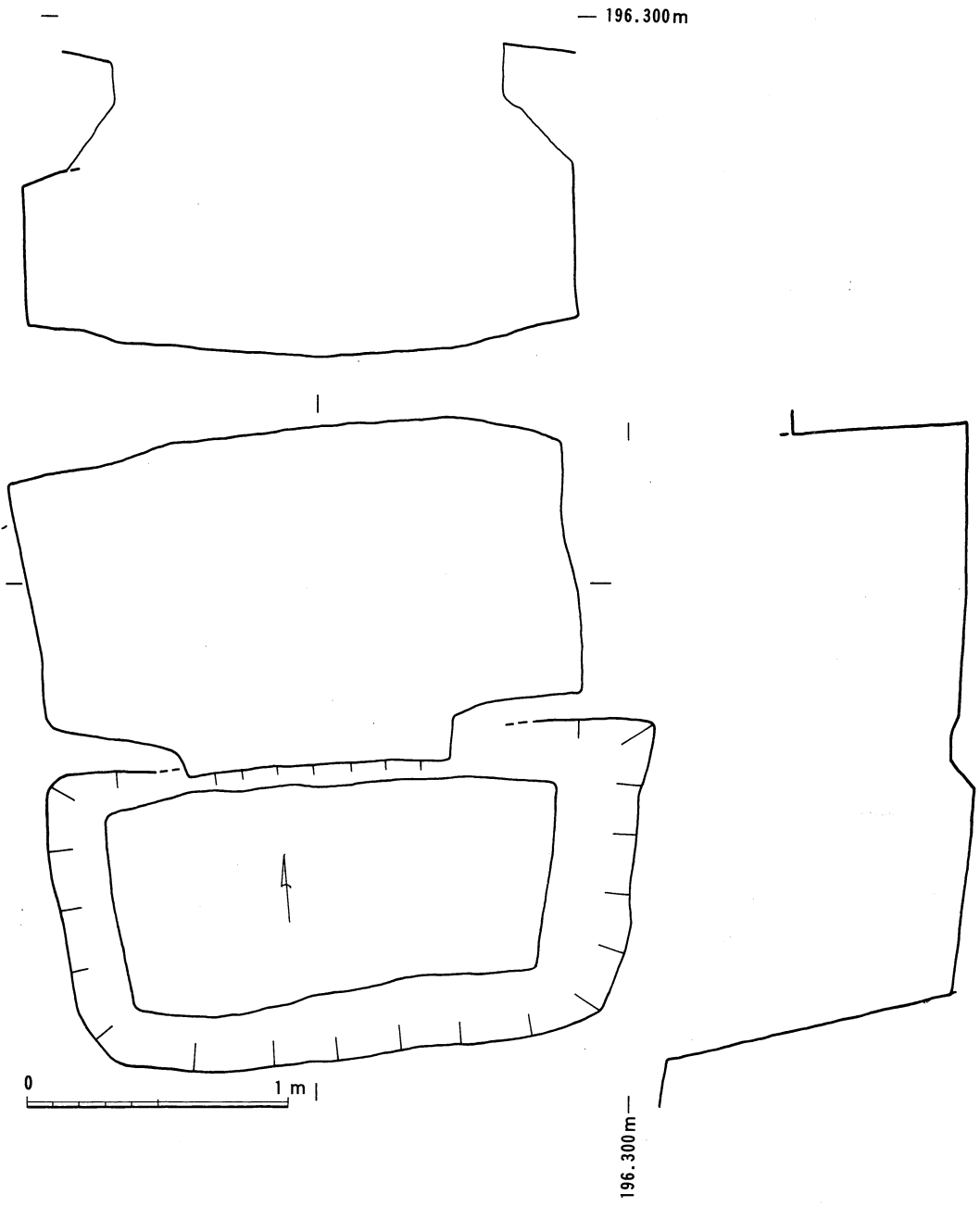
### （2）竪坑の土層

竪坑はアカホヤ上面で検出された。竪坑の埋土はI層が黒色土層（アカホヤブロックを少量含む）、II層が黒色土層（径5cmのアカホヤ塊・褐色ローム塊・黒色ローム塊を含む）、III層が黒色土層（アカホヤブロックの含有量が多い。）、IV層は黒褐色土層（径1cm以下のアカホヤ粒子・径3cm程度の褐色ローム塊を少量含む、非常に固く締まっている。）、V層は黒色土層（径1cm以下のアカホヤブロックを含む。締まりがない。）、VI層は黒色土層（V層と土質は同じ）である。VI層が板閉塞の痕跡である。

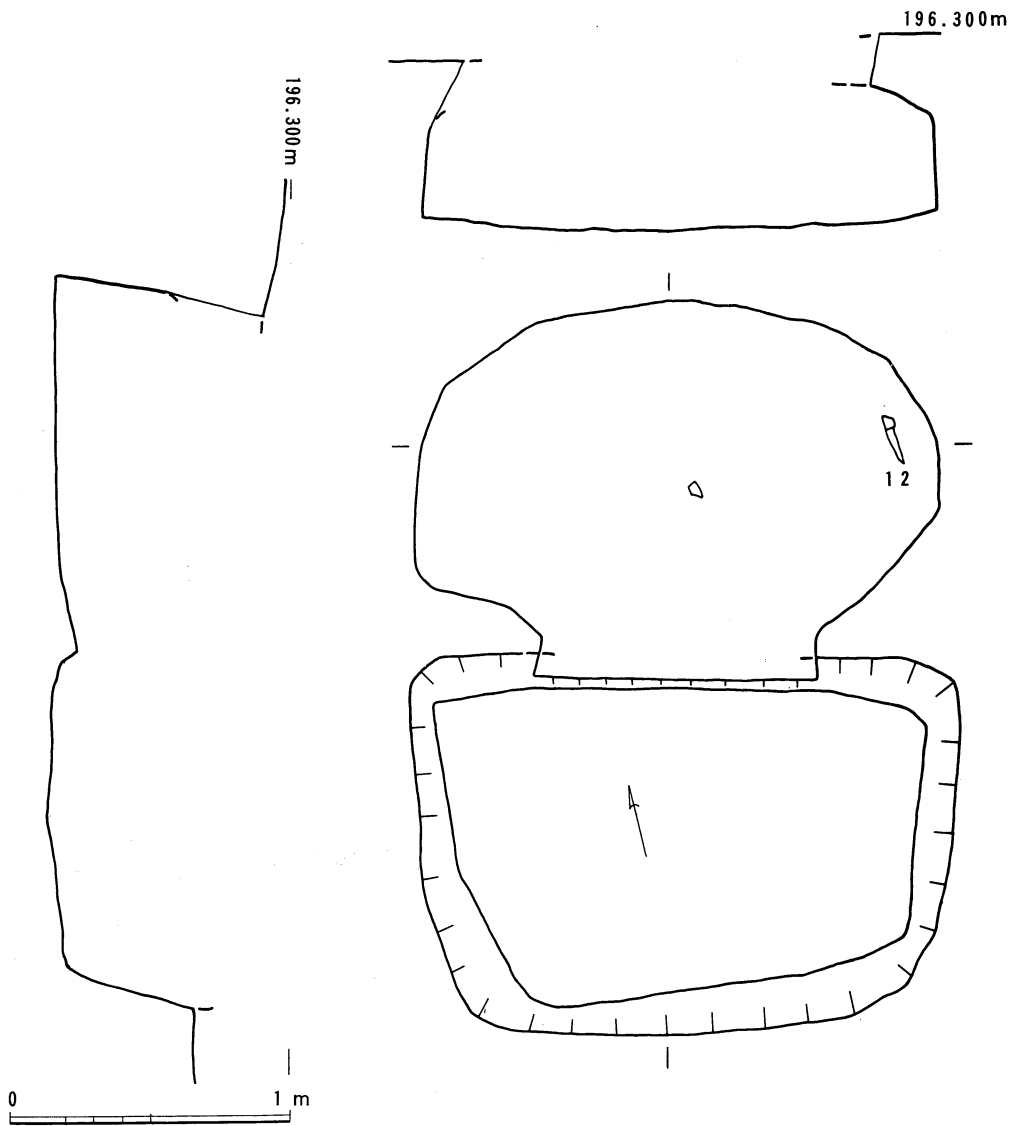
## 4 5 立切45号地下式横穴墓

### （1）遺構（第34図）

45号地下式横穴墓は、調査された72基の地下式横穴墓の中では北東部のB-6区の境に位置



第33图 立切44号地下式横穴墓



第34图 立切45号地下式横穴墓

し、標高は195.5mと高位である。検出時には既に羨道部と玄室の天井部は陥没していた。

その調査の結果、堅坑の規模は上場が190cm×135cm、下場が163cm×107cmの横長長方形プランで、検出面（アカホヤ面）からの深さは57cmであり、断面は逆台形である。

堅坑と玄室の境には6cmの段があり、羨門部は板閉塞と推定される。羨門部幅101cm、玄門部幅97cmである。羨道部の主軸はほぼ南北方向で、羨門は南に開口している。

玄室は平入りの両袖式であり、左袖は49cmと測れるが、右袖は弧状を呈する。床面は奥行120cm、幅185cmの横長楕円形プランである。天井部の高さは現存が48cmであり、天井の低いドーム形と推定される。玄室の主軸はほぼ東西方向である。

## （2）堅坑の土層

堅坑はアカホヤ上面で検出された。堅坑の埋土はⅠ層が黒色土層（径10cm前後のアカホヤブロックを含む）、Ⅱ層が黒色土層（径2cmのアカホヤ塊・褐色ローム塊・黒色ローム塊を含む）、Ⅲ層が黒色土層（土質はⅡ層と同じ。）、Ⅳ層は黒褐色土層（径5cm以下のⅠ層と同じ混入物を含み、非常に固く締まっている。）である。

## （3）遺物（第68図）

副葬品は床面から2本の鉄鏃が出土している。

### 鉄鏃（第68図12・13）

長さ2.1cm、幅0.6cmの楕円形の透かしを有する柳葉形鉄鏃の12は刃部幅2.8cm、同厚さ0.2cm、身長9.5cm、全長14.6cmであり、竹柄の部分は残っている。圭頭式鏃の13は刃部幅3.8cm、同厚さ0.3cm、現身長10.2cmである。

## 4 6 立切46号地下式横穴墓

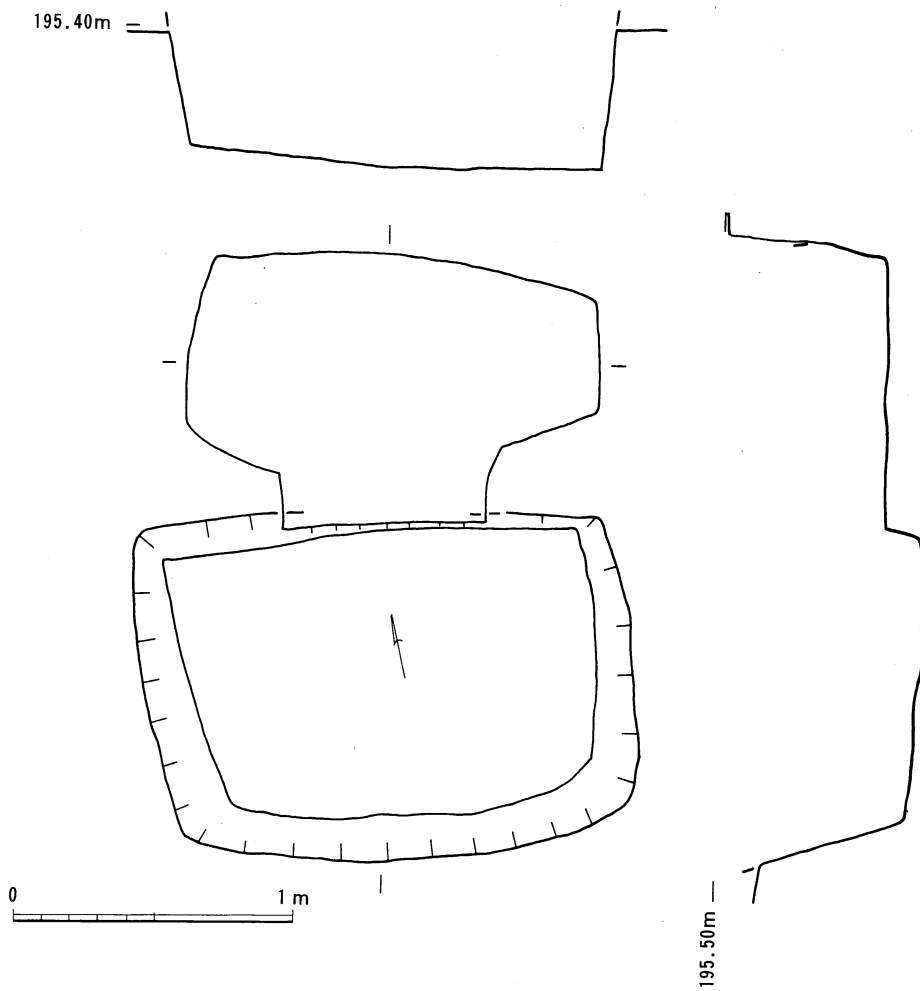
### （1）遺構（第35図）

46号地下式横穴墓は、調査された72基の地下式横穴墓の中では北東西端部のB-6区に位置し、標高は195m～195.5mと高位である。検出時には既に羨道部と玄室の天井部は陥没していた。

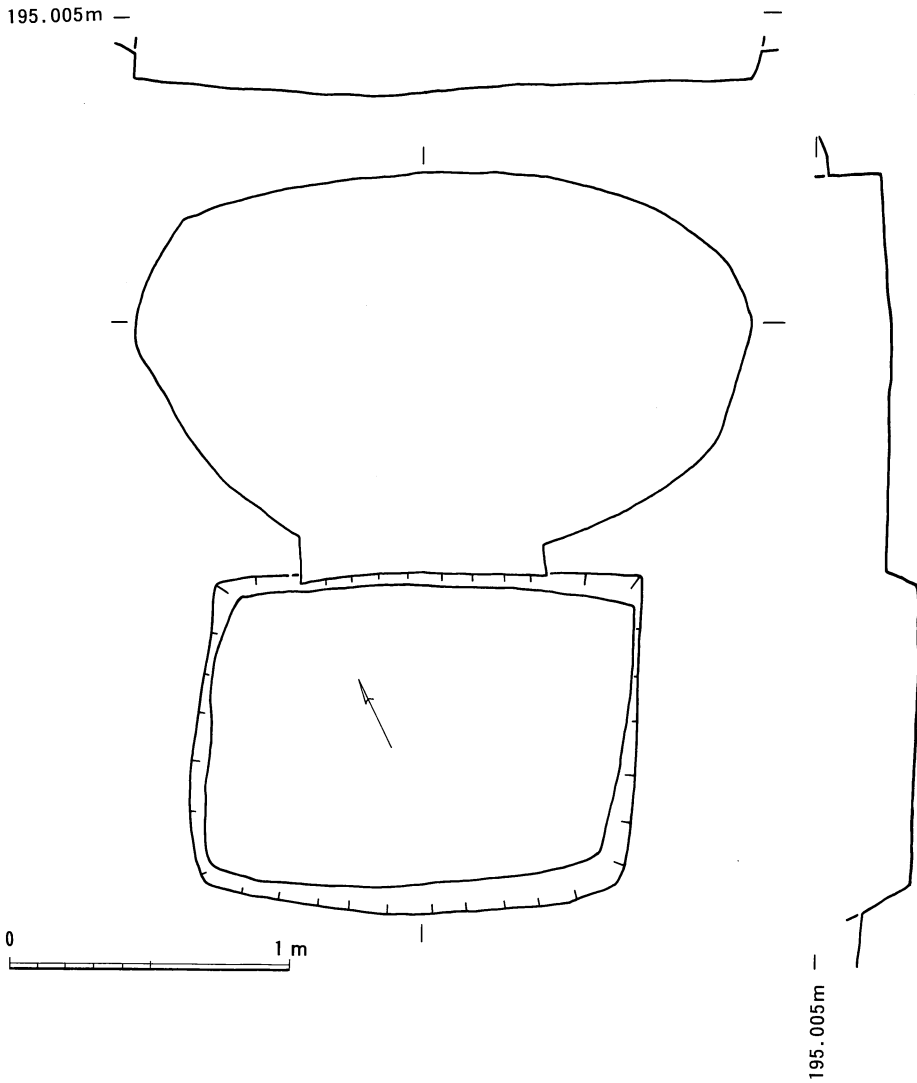
その調査の結果、堅坑の規模は上場が174cm×123cm、下場が142cm×102cmの横長長方形プランで、検出面（アカホヤ面）からの深さは56cmであり、断面は逆台形である。

堅坑と玄室の境には12cmの段があり、羨門部は板閉塞と推定される。羨門部幅74cm、玄門部幅80cmである。羨道部の主軸は北北東から南南西の方向で、羨門は南南西に開口している。

玄室は平入りの両袖式であり、右袖が37cmであるのに対して左袖が38cmとほぼ等しい。床面は奥行73cm、幅147cm、右壁長さ39cm、左壁長さ60cmの横長長方形プランである。天井部の高さは現存が23cmである。玄室の主軸は北北西から南南東である。副葬品は出土していない。



第35图 立切46号地下式横穴墓



第36图 立切47号地下式横穴墓

## (2) 竪坑の土層

竪坑はアカホヤ上面で検出された。竪坑の埋土はⅠ層が黒色土層（アカホヤブロック・褐色ローム塊を多く含む）、Ⅱ層が黒色土層（径10cmを越えるアカホヤ塊が目立つ。）、Ⅲ層が黒色土層（2cm以下の混入物を含むが、より固く締まる。）、Ⅳ層は黒褐色土層（アカホヤブロックと灰色ロームから構成されており、非常に固く締まっている。）である。

## 4 7 立切47号地下式横穴墓

### (1) 遺構 (第36図)

47号地下式横穴墓は、調査された72基の地下式横穴墓の中では中東部のB-7区の境に位置し、標高は195mと高位である。検出時には既に羨道部と玄室の天井部は陥没していた。

その調査の結果、竪坑の規模は上場が157cm×121cm、下場が147cm×107cmの横長長方形プランで、検出面（アカホヤ面）からの深さは19cmであり、断面は逆台形である。

竪坑と玄室の境には11cmの段があり、羨門部は板閉塞と推定される。羨門部幅88cm、玄門部幅87cmである。羨道部の主軸は北北東から南南西で、羨門は南南西に開口している。

玄室は平入りの両袖式であり、床面は奥行131cm、幅220cmの楕円形プランである。天井部の高さは現存が10cmである。玄室の主軸は北北西から南南東である。副葬品は出土していない。

## 4 8 立切48号地下式横穴墓

### (1) 遺構 (第37図)

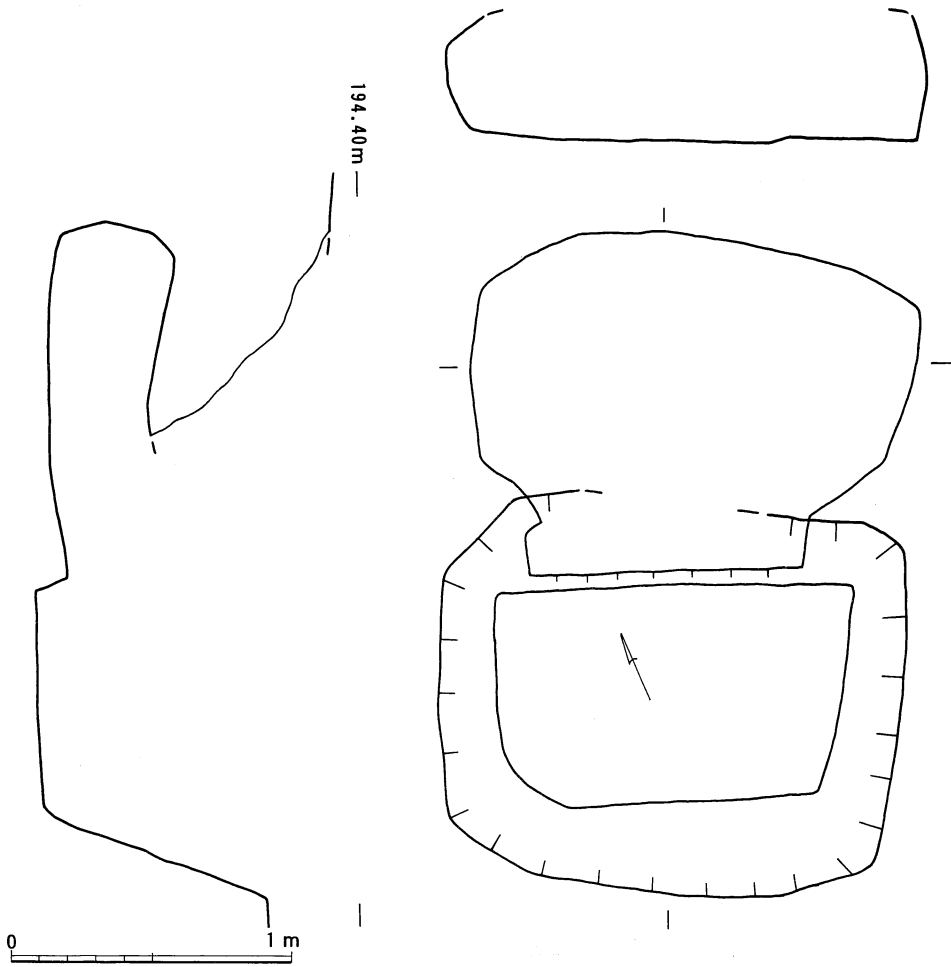
48号地下式横穴墓は、調査された72基の地下式横穴墓の中では北東部のB-4・5区の境に位置し、標高は194m～194.5mと中位である。検出時には既に羨道部と玄室の天井部の一部が陥没していた。

その調査の結果、竪坑の規模は上場が166cm×140cm、下場が123cm×77cmの横長隅丸長方形プランで、検出面（アカホヤ面）からの深さは88cmであり、断面は逆台形である。

竪坑と玄室の境には11cmの段があり、羨門部は板閉塞と推定される。羨門部幅98cm、玄門部幅96cmである。羨道部の主軸は北北東から南南西で、羨門は南南西に開口している。

玄室は平入りの両袖式であり、右袖が35cmであるのに対して左袖が30cmとほぼ等しい。床面は奥行102cm、幅160cm、右壁長さ55cm、左壁長さ62cmの横長楕円形プランである。天井部の高さは現存が41cmであり、玄室の形態は箱形である。玄室の主軸は北北東から南南西の方向である。副葬品は出土していない。

- 194.40m



第37图 立切48号地下式横穴墓



## (2) 竪坑の土層

竪坑はアカホヤ上面で検出された。竪坑の埋土はⅠ層が黒褐色土層（アカホヤブロック・褐色ローム塊・灰色ローム塊を若干含む）、Ⅱ層が黒色土層（特にアカホヤブロックが目立つ）、Ⅲ層が黒褐色土層（径10cm程度の混入物が多い。）、Ⅳ層は黒褐色土層（径1cm以下のアカホヤ粒子・径3cm程度の褐色ローム塊を少量含む、非常に固く締まっている。）、Ⅴ層は黒色土層（径2cm程度の混入物をごく少量含む。）、Ⅵ層は黒色土層（固く締まっている。）である。Ⅴ層が板閉塞の痕跡である。

## 4 9 立切49号地下式横穴墓

### (1) 遺構 (第38図)

49号地下式横穴墓は、調査された72基の地下式横穴墓の中では北東部のB-4区の南端部に位置し、標高は193.5m~194.0mと中位である。検出時には既に羨道部と玄室の天井部の半分が陥没していた。

その調査の結果、竪坑の規模は上場が206cm×125cm、下場が145cm×81cmの横長長方形プランで、検出面（アカホヤ面）からの深さは95cmであり、断面は逆台形である。

竪坑と玄室の境には8cmの段があり、羨門部は板閉塞と推定される。羨門部幅94cm、玄門部幅97cmである。羨道部の主軸は北北東から南南西方向で、羨門は南南西に開口している。

玄室は平入りの両袖式であり、床面は奥行106cm、幅161cmの横長楕円形プランである。天井部の高さは46cmで、箱形である。副葬品は出土していない。

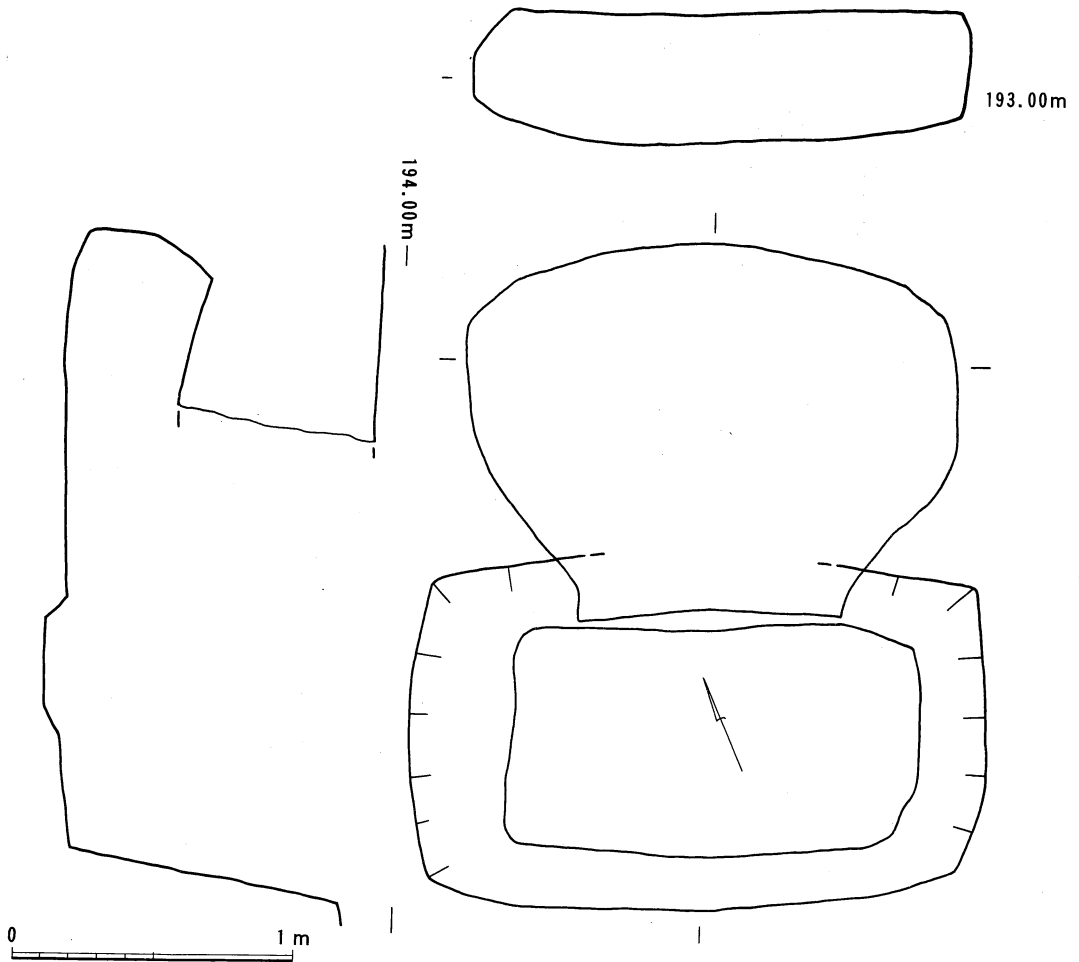
### (2) 竪坑の土層

竪坑はアカホヤ上面で検出された。竪坑の埋土はⅠ層が黒褐色土層（アカホヤブロック・褐色ローム塊・灰色ローム塊を少量含む）、Ⅱ層が黒褐色土層（混入物の割合が多い。）、Ⅲ層が黒色土層（混入物の割合が非常に高い。）、Ⅳ層は黒褐色土層（混入物の割合が多く、黒褐色土はほとんど見られない。）、Ⅴ層は黒色土層（褐色・灰色ローム塊が非常に固く締まる。）である。

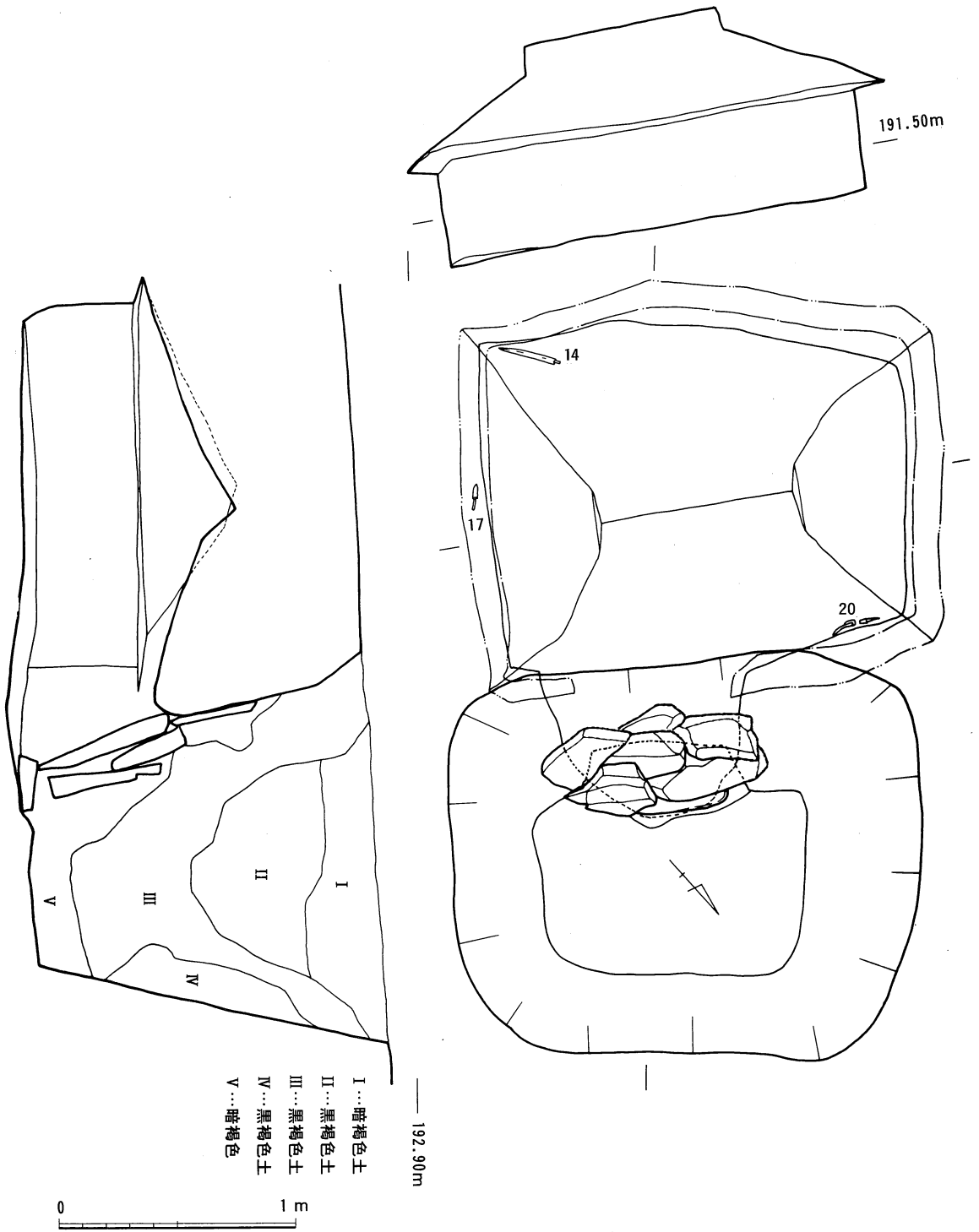
## 5 0 立切50号地下式横穴墓

### (1) 遺構 (第39図)

50号地下式横穴墓は標高約193mのB・C-3区に位置し、55号、56号と向き合いように玄室が造られている。竪坑部は隅丸方形を呈し、東西長軸1.97m、南北短軸1.64m、検出面からの深さ約1.56mを測る。竪坑から羨道部に向う主軸は、N-42°-Eを示し、玄室の主軸は竪坑のそれより11°北にずれている。羨道は竪坑南壁のやや東寄りに設けられ、羨門部の閉塞は扁平で長さ50~60cmの大型の川原石を垂直に立て行なわれている。また、羨道は竪坑床



第38图 立切49号地下式横穴墓



第39图 立切50号地下式横穴墓

面から5cm程一段下がり、玄室に向い緩やかに傾斜している。羨門床面幅約70cm、高さ約63cm、羨道長約63cm、玄門床面幅で約90cmを測る。玄室は平入りのいわゆる片袖式で、羨道が奥壁に向って左側（東）に片寄り、それぞれの羨道壁面から左袖約12cm、右袖70cmを測る。当遺跡で右袖がのびる形態の玄室を有するものとしては他には61号と65号がある。玄室床面は左辺1.37m、右辺1.05m、東西長軸1.77mの台形プランを呈し、天井部は寄棟造りで棟木部分を10cm程度高く「入り母屋」様に表現されている。床面から天井頂部までの高さは約90cmである。また、壁面には高さ40～50cmのところ幅約15cmの棚状施設が設けられ、玄室全体に巡っている。副葬品としては奥壁南隅の床面に剣一振（14）、右側壁北隅の床面には鉈（20）が二つに折れた状態で、そして左側壁の棚状施設中央から鉄鎌（17）がそれぞれ出土している。そのほか奥壁棚状態施設からは鉄鎌（16・18・19）や剣（15）が出土している。人骨については検出されなかつた。

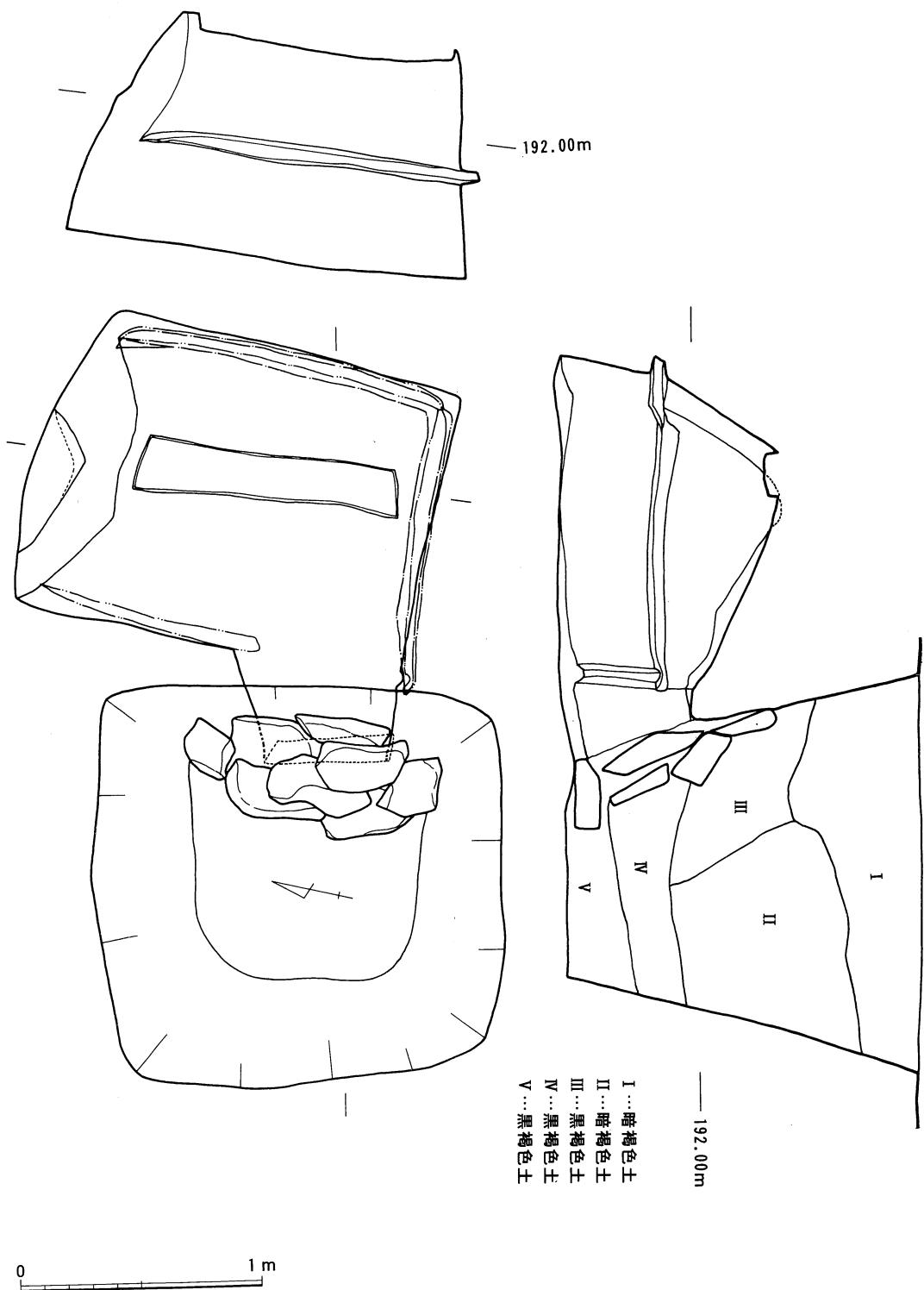
## （2）遺物 （第68図）

剣は2振ある。14は現存長26.1cm、最大幅2.5cmを測る。茎部には木質が遺存している。15は先端部が欠損しているが、鞘や柄の木質部が一部にみられる。現存長17.8cm、最大幅2.2cmを測る。関については錆化が著しいため明確ではない。鉄鎌は全部で4本出土している。16は無茎鎌で、逆刺部は両側とも折損している。現存長7.6cm、最大幅3.2cmを測る。鎌身には矢柄の先端と思われる木質部が錆着している。17は柳葉形鎌で、現存長11.1cm鎌身部5.8cm、最大幅2.1cmを測る。茎部には樹皮が横巻され、その下には樹皮を巻易くするためか木質が確認できる。全体に錆化が著しい。18は圭頭鎌で、刃部幅が7.1cmと幅広の形態をなし、鎌身部中央には径3mmの貫通した孔が開けられている。現存長14.6cmを測る。全体には小さなコブ錆が発生し、水平方向に亀裂が入っている。また、17同様茎部には樹皮が横巻され、その下に木質が認められる。19も圭頭鎌である。現存長28.8cmで、そのうち矢柄部分が18.8cmを測る。茎部には樹皮が横方向に巻き、その上から矢柄を挿入し、抜けにくくしている。鉈（20）は現存長19.3cm、刃部幅1.2cm、身幅0.9cm、身厚0.2cmを測る。下方部には木質の遺存がみられないことから、露出していた可能性がある。刃部は反りを有する。

## 5 1 立切5 1号地下式横穴墓

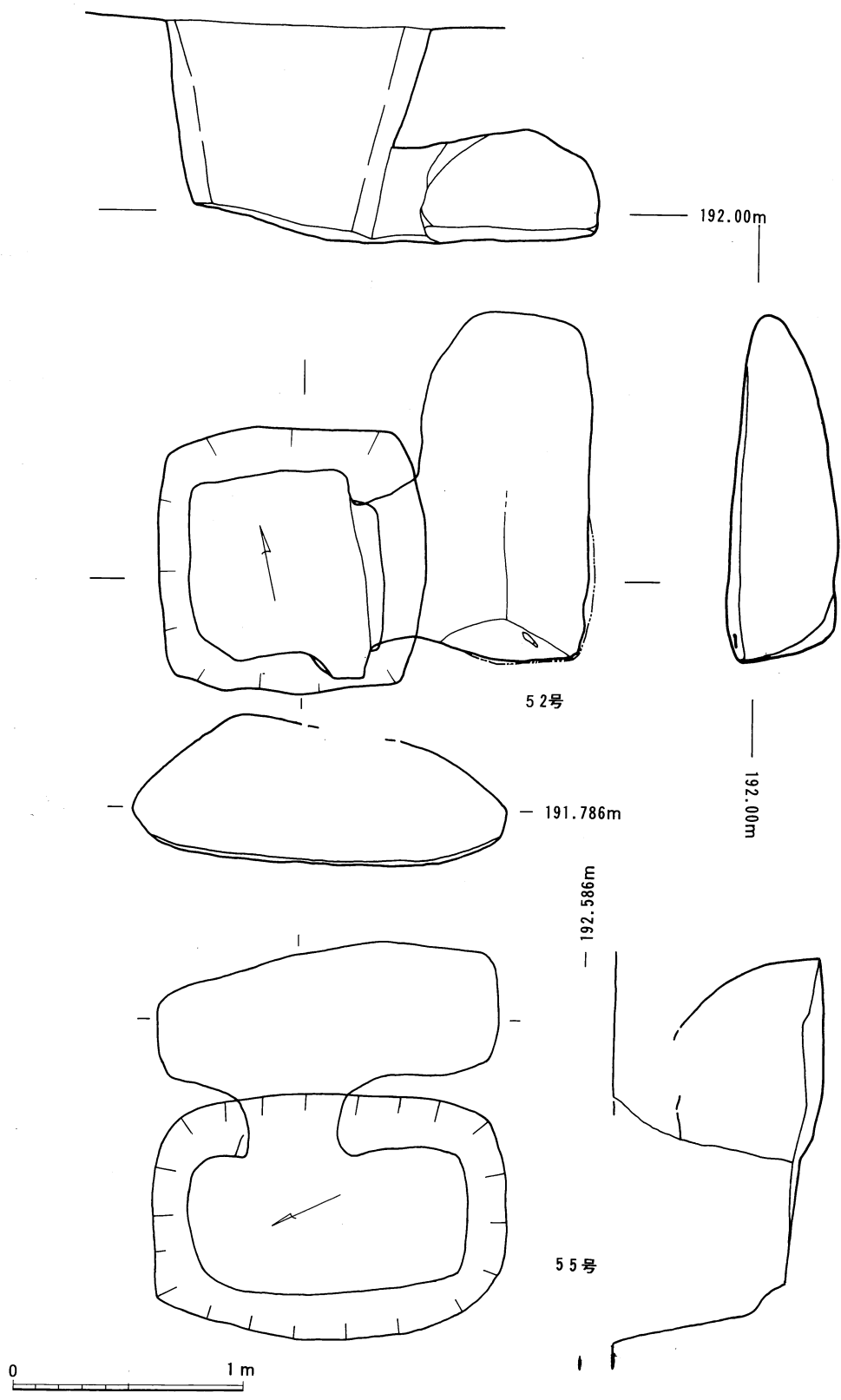
### （1）遺構 （第40図）

51号地下式横穴墓は標高約193mのB-3区に位置し、52号と近接し、玄室も同じ方向に造られている。竪坑部は隅丸方形を呈し、南北長軸1.71m、東西短軸1.63m、検出面からの深さ約1.47mを測る。竪坑から羨道部に向う主軸は、N-78°-Eを示し、玄室の主軸も竪坑のそれとほぼ一致している。羨道は竪坑東壁のやや南寄りに設けられ、羨門部は厚手で長さ50～60cmの大型の川原石によって塞がれている。竪坑床面から羨道、玄室床面はほぼ同じ高さである。



- I...暗褐色土
- II...暗褐色土
- III...黑褐色土
- IV...黑褐色土
- V...黑褐色土

第40图 立切51号地下式横穴墓



第41图 立切52号·55号地下式横穴墓

羨門床面幅約51cm、高さ約53cm、羨道長約42cm、玄門床面幅で約71cmを測る。玄室は平入りのいわゆる片袖式で、羨道右側壁からそのまま玄室右側壁に移行しているが、その途中には側壁を窪ませ羨道と玄室との境界を明確にしている。玄室床面は、南北長軸1.68m、東西短軸1.28mのやや丸味をもった長方形プランを呈し、天井部は寄棟造りで棟木部分を長さ約110cm、幅19cm、厚さ5～10cm程度浮彫して表現している。床面から天井頂部までの高さは約86cmである。また、壁面には高さ約40cmのところには幅約5cmの棚状施設が左側壁以外の壁面に設けられている。遺物や人骨については検出されなかった。

## 5 2 立切5 2号地下式横穴墓

### (1) 遺構 (第41図)

5 1号地下式横穴墓の南西隣のB-3区に位置する。竪坑-玄室の主軸は略東西方向をとる。

竪坑は方形を呈し、一辺の長さは検出面で115cm、下場で80cm、検出面からの深さは、西側では80cmであるのに対して、羨門部の東側では約95cmとなる。羨門部は板閉塞と推測されるがその痕跡は認められなかった。羨門幅は65cm、高さは40cm、羨道長は約20cm程度である。

玄室は平入りとなり、片袖に展開する。規模は、長軸(南北)方向に150cm、短軸(東西)方向に75cmで、平面プランは北側の隅のかなり丸まった、いわゆるP字形となる。天井高は、最高部でも47cmであり、北端部では天井が、明瞭な壁を形成せずに床面の高さまで落ちてくる。天井には、棟の表現がなされているものの不明瞭で、しかも玄室中央部付近から北では消失してしまう。玄室の北半分は、造作が雑であるという印象を受ける。人骨は遺存していないが、頭位は南側であったと推測される。

### (2) 遺物 (第69図)

玄室南端近くの床面より小形の圭頭鏃が1本出土しているのみである。1がそれである。残存長は7.7cm、鏃身長は推定で5.0cmである。全体に厚く錆化している。

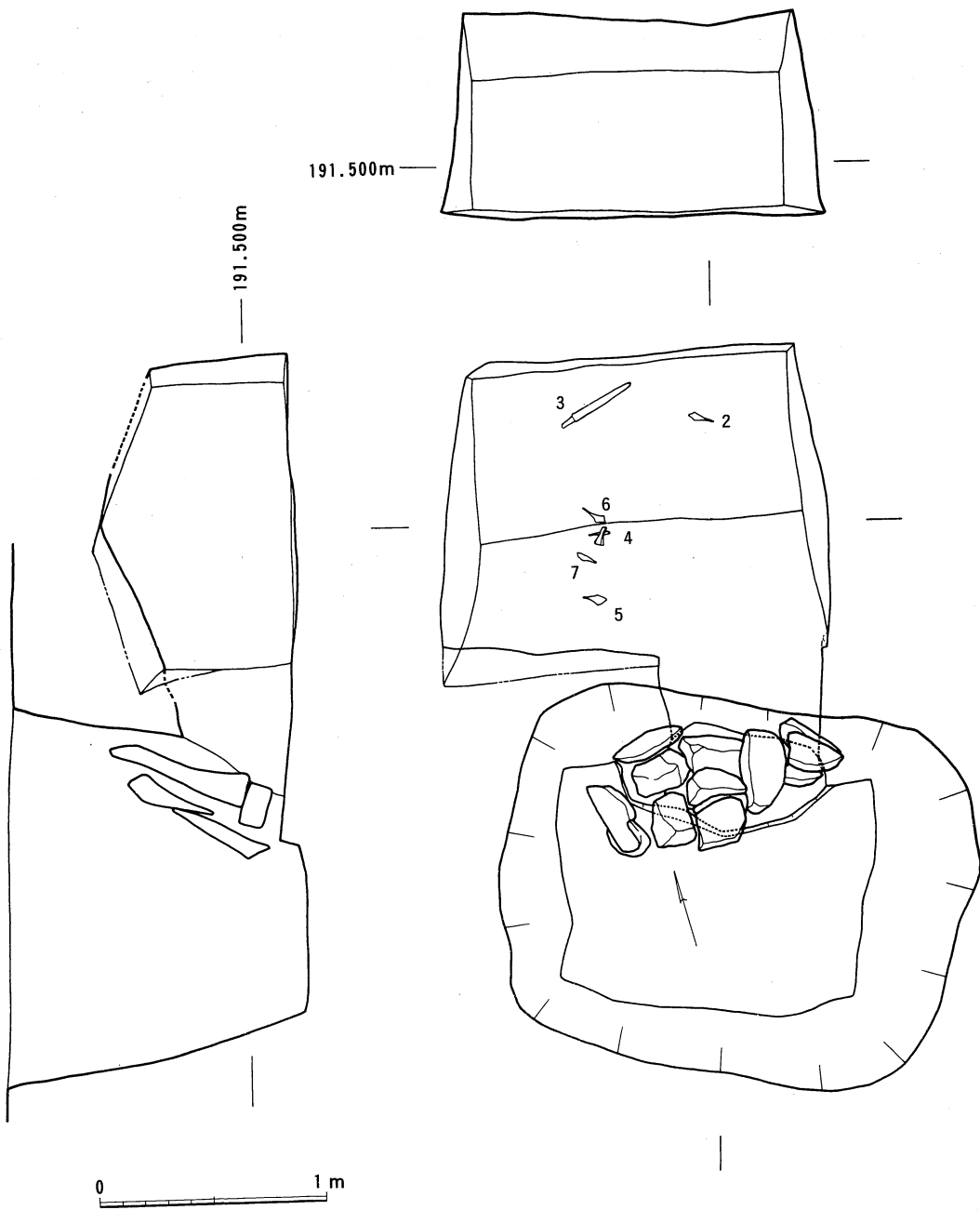
## 5 3 立切5 3号地下式横穴墓

### (1) 遺構 (第42図)

A-3区の標高約192m付近に位置する。竪坑-玄室の主軸は南北方向から若干東に偏している。

竪坑の規模は、上場で210cm×160cm、下場で135cm×100cm、検出面からの深さは130cmである。羨門部には、下場のレベルより10cmほど高い、地山削りだしによる段状の突出部が見られ、その高さから玄室に向かってわずかに下がっていく。

羨門部は20～50cm大の河原石によって閉塞される。羨門部の幅は65cm、高さは50cm、羨道長は床面で約55cmである。



第42図 立切53号地下式横穴墓



玄室は平入りで、切妻の家形の構造である。片袖タイプの範疇に含まれようが、右袖（東側）もわずかながら形成されている。床面の規模は、東西（棟）方向が170cm、南北方向が135cm、床面から棟までの高さは中央部で80cm、奥壁高は60cmを測る。

尚、人骨は遺存していなかった。

## （2）遺物（第69図）

玄室のほぼ中央部から奥壁寄りにかけて、鉄剣1本と鉄鏃5本が出土している。錆化が進み形状の不明なものが多い。3の鉄剣は、現存長35.5cm、関近くの幅2.8cmを計る。両方の関は刃部に対して鈍く曲がる。6は変形の圭頭鏃である。茎先端部近くに巻きつけた繊維の痕跡が見られる。

## 5 4 立切54号地下式横穴墓

### （1）遺構（第43図）

54号地下式横穴墓は、調査された72基の地下式横穴墓の中では北東西端部のA-2区の境に位置し、標高は192m～192.5mと低位である。竪坑と玄室は完全に残っていたが、竪坑の半分は道路の下にあるため調査できなかった。

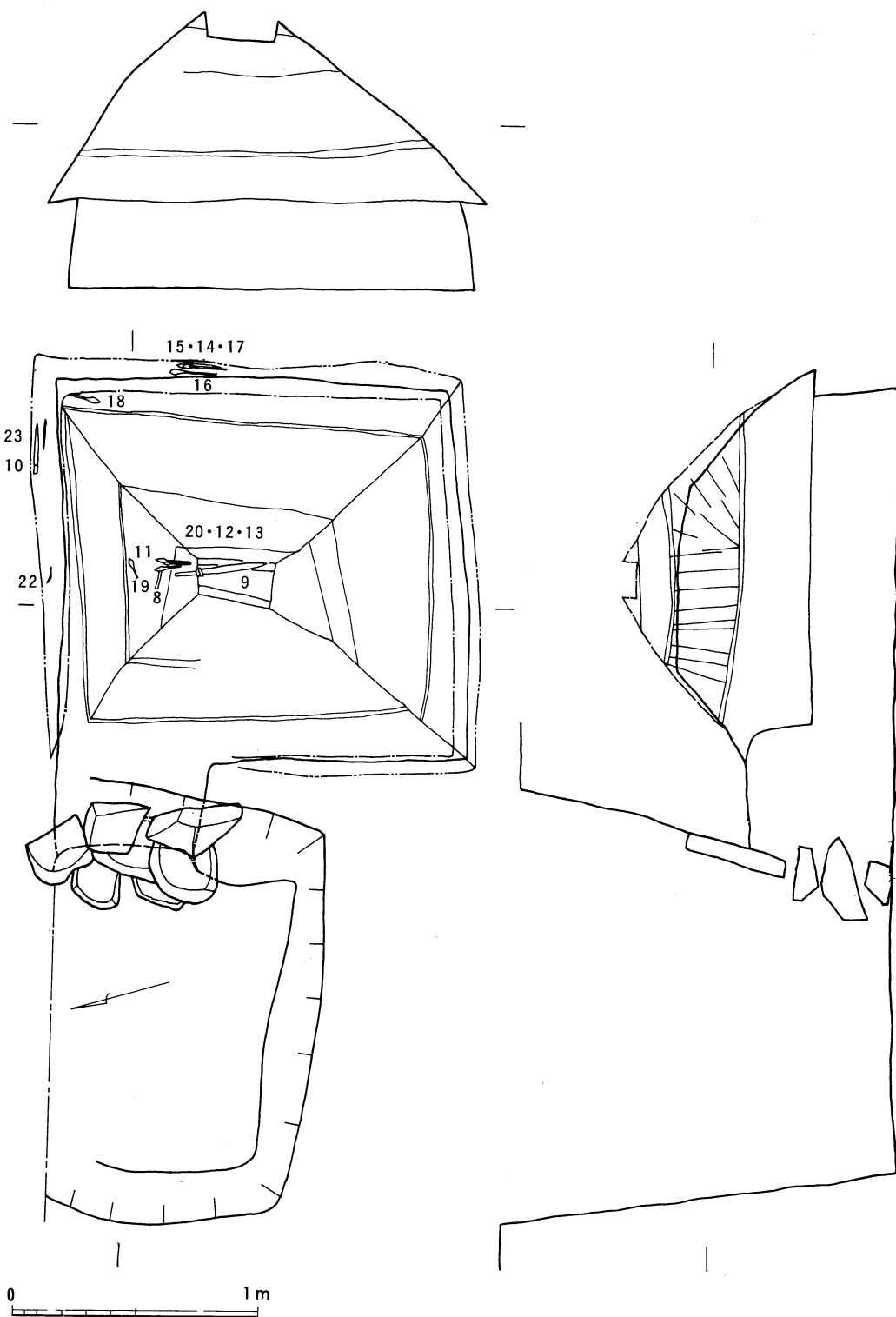
その調査の結果、竪坑の規模は上場が $103 + \alpha$  cm × 179cm、下場が $70 + \alpha$  cm × 128cmの長方形プランで、検出面（アカホヤ面）からの深さは160cmであり、断面は逆台形である。

羨門部は7個の河原石を使って長さ88cm、幅43cm、高さ85cmの厚みで閉塞されている。竪坑と玄室はほぼ同レベルであり、羨門部幅58cm、玄門部幅63cm、羨道部の高さは59cmである。羨道部の主軸は北北東から南南西の方向で、羨門は北北東に開口している。

玄室は平入り右袖の片袖式で、右袖が105cmである。形態は棟木を有する寄せ棟である。玄室は奥行157cm、幅166cm、右壁長さ151cm、左壁長さ156cmの横長長方形プランである。天井部の高さは112cmである。壁面の棚状施設は4面すべてにあり、右壁が幅10cm、左壁が12cm、奥壁が10cm、前壁が8cmである。床面からの高さは63cm～70cmである。棚状施設から上の壁面には左壁面の横方向の2本の朱線と縦方向の朱線を組み合わせているが、奥壁と右壁は横方向の2本と1本の朱線の組み合わせである。前壁は横方向の2本の朱線である。玄室の主軸は北北西から南南東の方向である。

### （2）竪坑の土層

竪坑はアカホヤ上面で検出された。竪坑の埋土はI層が黒褐色土層（径3cmアカホヤ塊・褐色ローム塊を少量含む。）、II層が黒褐色土層（径5cm以下の混入物をI層より多く含む。）、III層がにぶい暗褐色土層（径3cm以下の混入物を多く、黒色土塊若干含む。）、IV層は暗褐色土層（径5～10cmの混入物を含み、非常に固く締まっている。）である。



第43图 立切54号地下式横穴墓

### (3) 人骨の出土状況

玄室床面の中央部で歯と小骨片のみが出土しているが、性別・年齢は不明である。

### (4) 遺物 (第69図)

床面の中央(棟木の直下)から鹿角装剣1・柳葉式鉄鏃4・圭頭式鉄鏃1の組み合わせ、左棚状施設からは剣1・刀子1・鉋1の組み合わせ、中棚状施設は二段逆刺鉄鏃2・圭頭鉄鏃2の組み合わせであり、線刻のある圭頭式鉄鏃は床面の左隅上から出土している。剣と鉄鏃の切先が中棚状施設と左棚状施設の交差点に向いているのに対して、床面の鉄鏃は左棚状施設の方向に、床面の剣の切先は右棚状施設を向いている。副葬品は剣2・鉄鏃10の武器、刀子2・鉋1の工具の組み合わせである。

#### 剣 (第69図9・10)

剣は床面中央から9、左棚状施設から10が出土している。9が全長36.7cm、身長26.8cm、身幅2.8cmの短剣であり、柄部分が鹿角装で紐巻きである。目釘孔は2個有し、鞘部分は両面とも約8割程遺存している。10は全長34.3cm、身長24.0cm、身幅2.7cmの短剣であり、柄の木質部は良く遺存している。目釘孔は柄に隠れて不明である。鞘は4割程遺存している。

#### 鉄鏃 (第69図11~22)

鉄鏃は9本出土している。8・11~13は柳葉式、14・15は二段逆刺の腸扶柳葉式、16~19は変形圭頭斧箭式鏃である。

14・15は二段逆刺が良く残っており、身長8.0cm~8.7cm、矢柄を含む残存長20.0cm~22.3cmである。16~19の変形圭頭斧箭式は鏃身部の長さから大形のグループ(長さ10.0cm~11.1cm、幅3.7cm~4.6cm)の16、中形のグループ(長さ6.5cm~9.0cm、幅2.7cm~3.9cm)の17・18・19に分かれる。特に18は全長11.7cmで、鏃身部に長さ16mmの縦方向の一本の直線をタガネで施している。茎部には樹皮巻の矢柄が遺存している。

#### 茎刀子(第69図21・22)

茎刀子は2本出土しており、直背であるが、刃部と関の関係は不明である。特に21は全長3.3cmと短い。

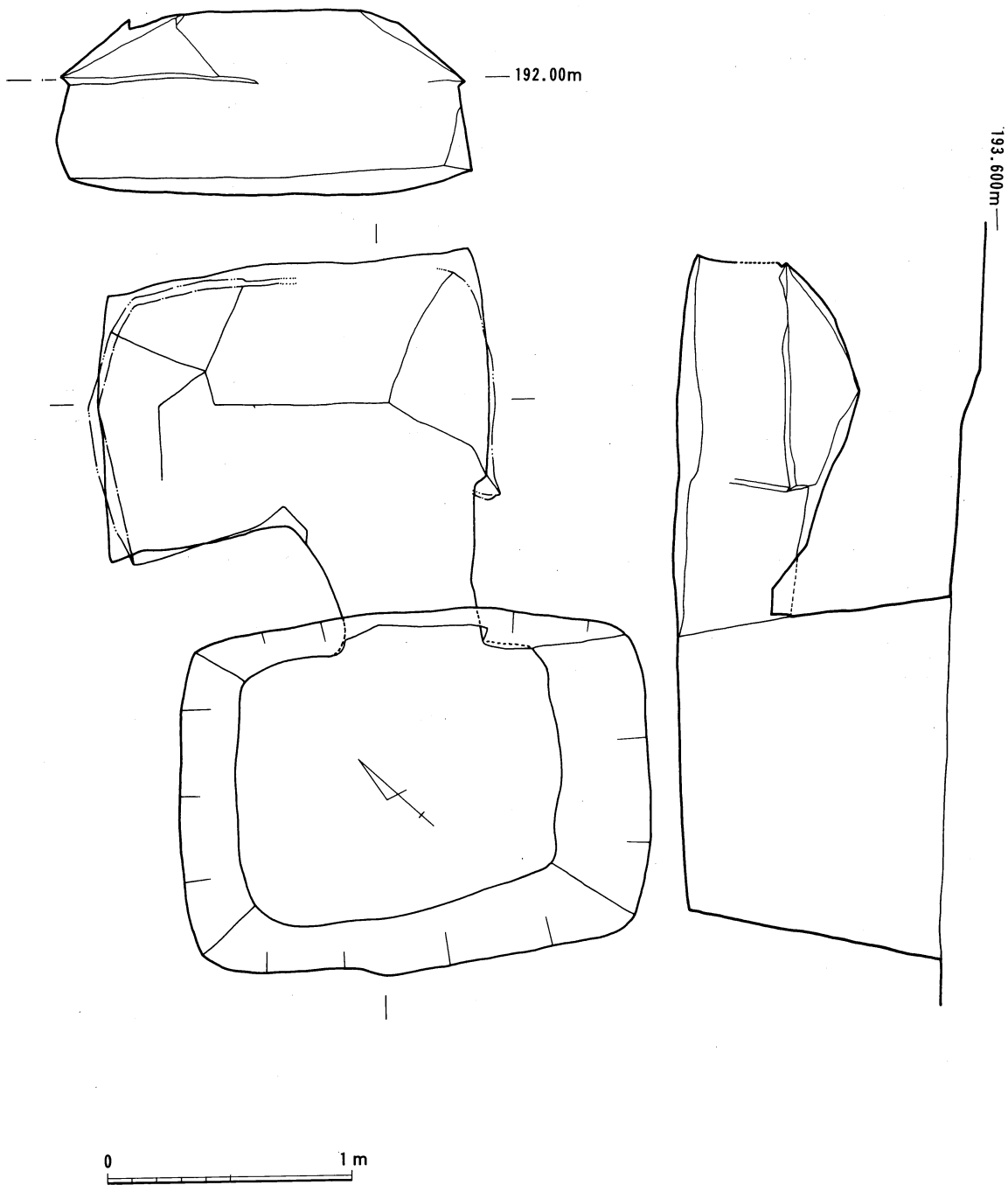
#### 鏃(第69図23)

23は刃部が反りをもつ断面三日月形で、刃部幅が狭くて短い刃部を有する。茎部には木質部が遺存しており、その上から樹皮を横巻きにして固定している。現長14.9cm、刃部長3.6cm、刃部幅1.1cmである。

## 5 5 立切55号地下式横穴墓

### (1) 遺構 (第41図)

55号地下式横穴墓は、調査された72基の地下式横穴墓の中では北東西端部のC-3区の境に



第44图 立切56号地下式横穴墓

位置し、標高は192.5m～193mと低位である。55号地下式横穴墓は50号地下式横穴墓・56号地下式横穴墓と向き合うように分布している。玄室は完全に遺存していた。

その調査の結果、竪坑の規模は上場が153cm×106cm、下場が122cm×58cmの横長長方形プランで、検出面（アカホヤ面）からの深さは98cmであり、断面は逆台形である。

羨門部は板閉塞と推定される。竪坑と玄室の境には段があり、玄室の方が低い。羨門部幅51cm、玄門部幅47cmである。羨道部の主軸は南南東から北北西の方向で、羨門は南南西に開口している。

玄室は平入りの両袖式であるが、右袖が62cmであるのに対して左袖が28cmと短い。天井の高さが53cm～62cmと低いドーム形である。床面は奥行61cm、幅148cm、右壁長さ46cm、左壁長さ31cmの横長長方形プランである。玄室の主軸は北北東から南南西の方向である。天井部の高さは53cm～62cmであり、副葬品はない。

## 5 6 立切5 6号地下式横穴墓

### (1) 遺構 (第44図)

56号地下式横穴墓は標高約192.5mのC-2区に位置し、50号、55号と玄室が向き合って分布している。また、西に3m離れた57号とは同じ方向に玄室が造られている。

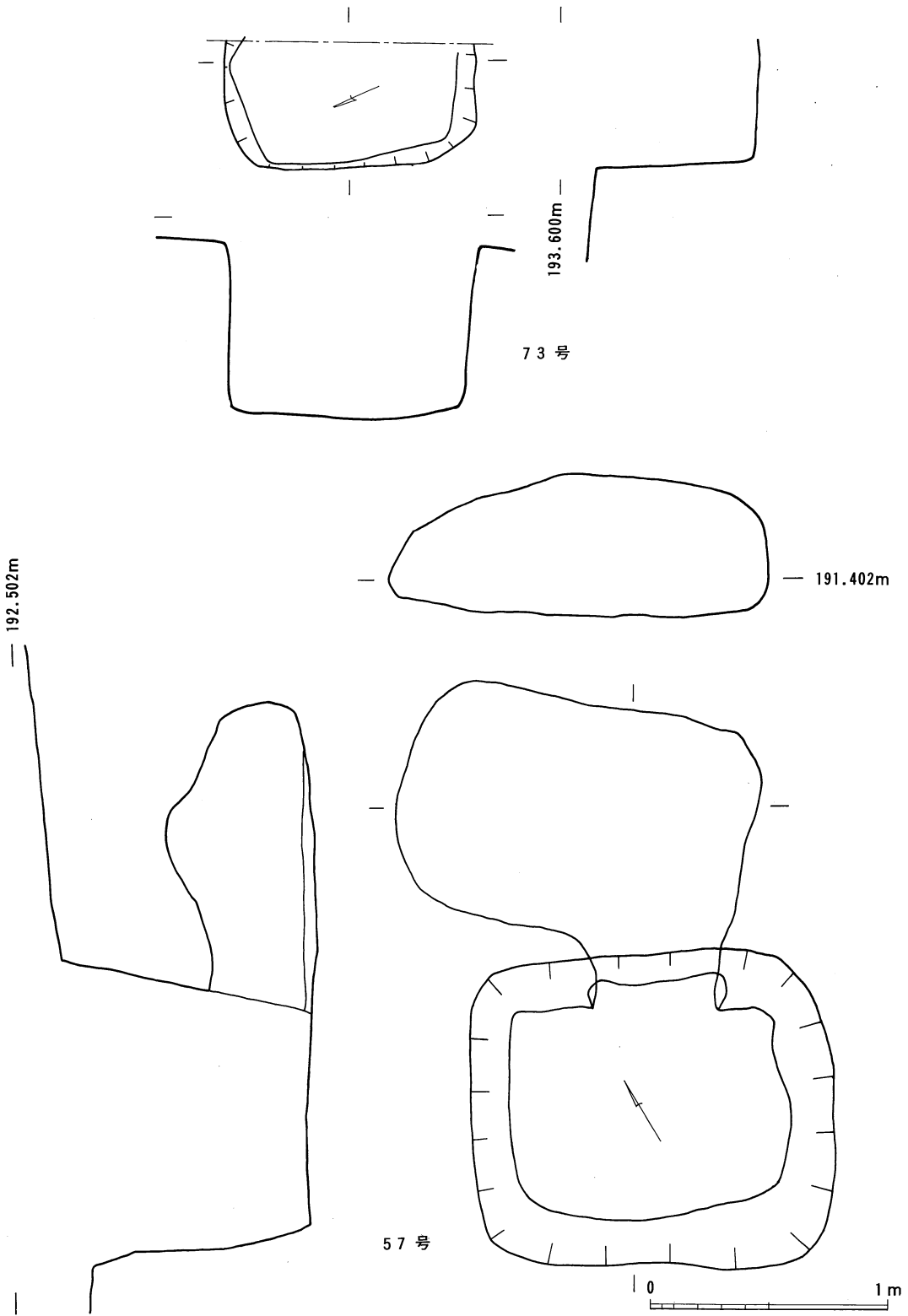
竪坑部は隅丸方形を呈し、南北長軸1.91m、東西短軸1.48m、検出面からの深さ約1.09mを測る。竪坑から羨道部に向う主軸は、N-41°-Eを示し、玄室の主軸は竪坑のそれより6°ほど東にずれている。羨道は竪坑東癖のほぼ中央に設けられ、羨門部は板閉塞と考えられる。竪坑床面から羨道、玄室床面はほぼ同じ高さで、玄室中央部から奥壁に向かってやや高くなる。羨門床面幅約63cm、高さ約38cm、羨道長約61cm、玄門床面幅で約77cmを測る。玄室は平入りのいわゆる片袖式で、羨道が奥壁に向かって右側（東）に片寄っている。玄室床面は、左辺1.07m、右辺0.93m、東西長軸1.6mの長方形に近い台形プランを呈し、天井部は寄棟造りで、床面から天井頂部までの高さは約74cmである。また、壁面には高さ約35cmのところには幅約5cmの棚状施設が左右側壁と奥壁に設けられているが、奥壁右側半分はすでに崩壊していた。遺物や人骨については検出されなかった。

## 5 7 立切57号地下式横穴墓

### (1) 遺構 (第45図)

57号地下式横穴墓は、調査された72基の地下式横穴墓の中では南東部のB-2区に位置し、標高は192m～192.5mと高位である。玄室は完全に遺存していた。

その調査の結果、竪坑の規模は上場が153cm×130cm、下場が119cm×89cmの横長長方形プランで、検出面（アカホヤ面）からの深さは98cmであり、断面は逆台形である。



第45图 立切57号・73号地下式横穴墓

堅坑と玄室の床面はほぼ同レベルである。羨門部幅52cm、玄門部幅59cmである。羨道部の主軸は北北東から南南西の方向で、羨門は南南西に開口している。

玄室は平入りの左袖の片袖式であり、左袖が65cmである。天井部の高さが59cmと低いドーム形の玄室である。床面は奥行96cm、幅147cm、左壁長さ66cmの横長隅丸方形プランである。天井部の高さは現存が70cmである。玄室の主軸は北北西から南南東の方向である。副葬品は出土していない。

## 5 8 5 8号地下式横穴墓

### (1) 遺構 (第46図)

B-2区の標高約192m付近に位置する。堅坑に対する羨道-玄室の方向は、北東をとる。

堅坑は隅丸の方形で、上場で135cm×125cm、下場で95cm×85cm、検出面からの深さは100cmで断面は逆台形である。埋土は、構築時の廃土であるアカホヤや褐色土のブロック(2~4cm大)を含む黒色・黒褐色土である。

羨門部は幅45cm、高さ35cmで、30~40cm大の河原石7個を用いて閉塞している。羨道は約40cmの奥行を持ち、床面は堅坑下底部より10cm程高くなってわずかに堅坑側に張りだしている。

玄室は、平入りで片袖タイプのものである。ただし右袖側も4cm程度ながら形成されている。玄室の平面プランは長方形を呈し、床面の規模は、幅(長軸側)が150cm、奥行が80cmである。屋根構造は、北西側の若干変形した切妻となり、天井には、幅12~25cmの棟が、長さ125cmにわたって厚さ3~5cmの浮き彫りで表現されている。床面から天井までの高さは60~70cmを測る。棚状施設は、左壁(北西)部分を除く三方向に見られる。床面からの高さは約30cm、幅は5~8cmである。奥壁のものは中程から南東側が崩壊していた。

尚、人骨は遺存していない。

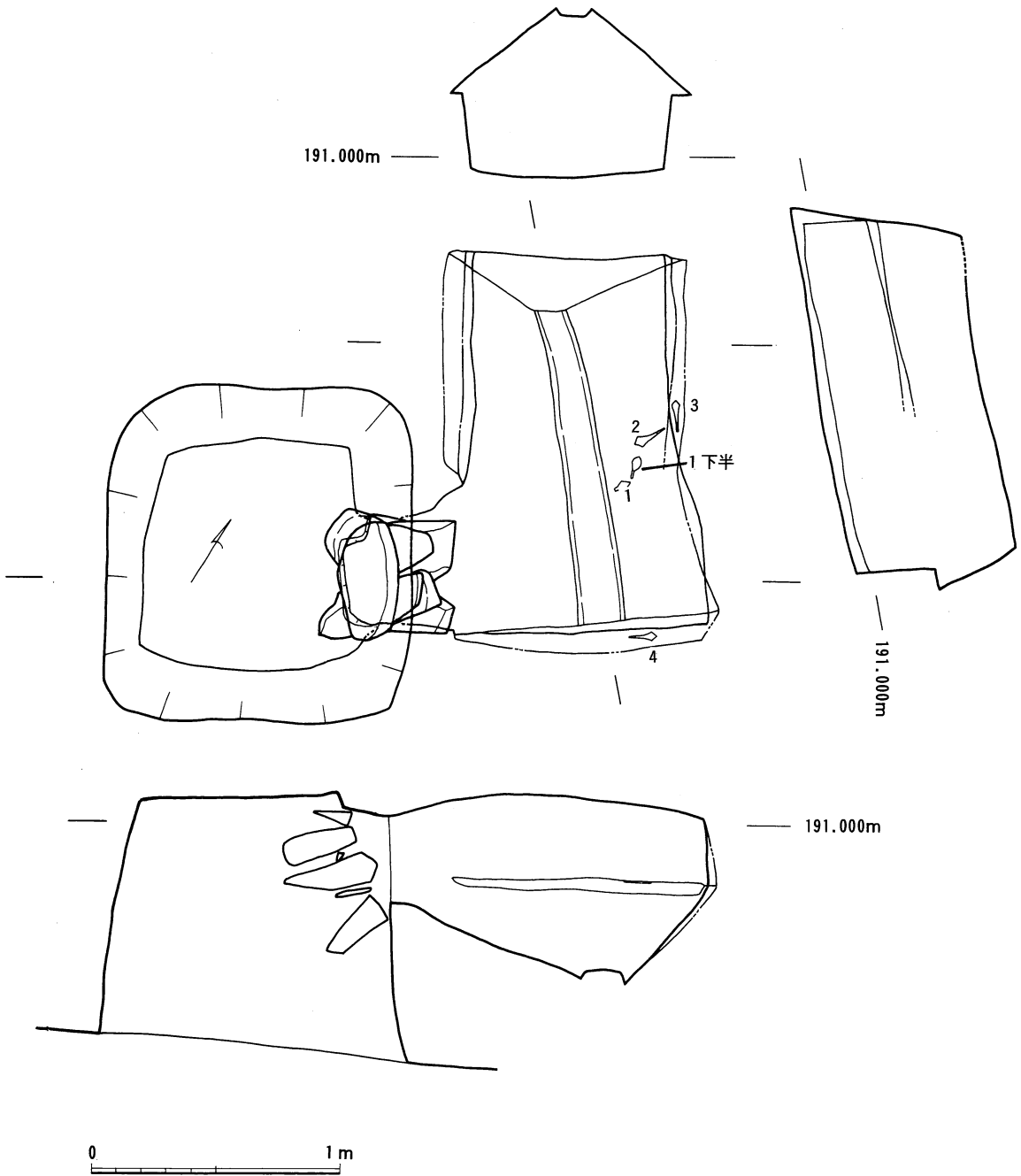
### (2) 遺物 (第70図)

圭頭鏃が4本出土している。うち2本は棚状施設上に置かれており、他の2本も棚状施設の崩落土中であつたことから、遺物の原位置は棚状施設上と推測される。4点とも竹柄や樹皮巻きが遺存している。1は、竹柄が銹化のために膨張している。

## 5 9 立切59号地下式横穴墓

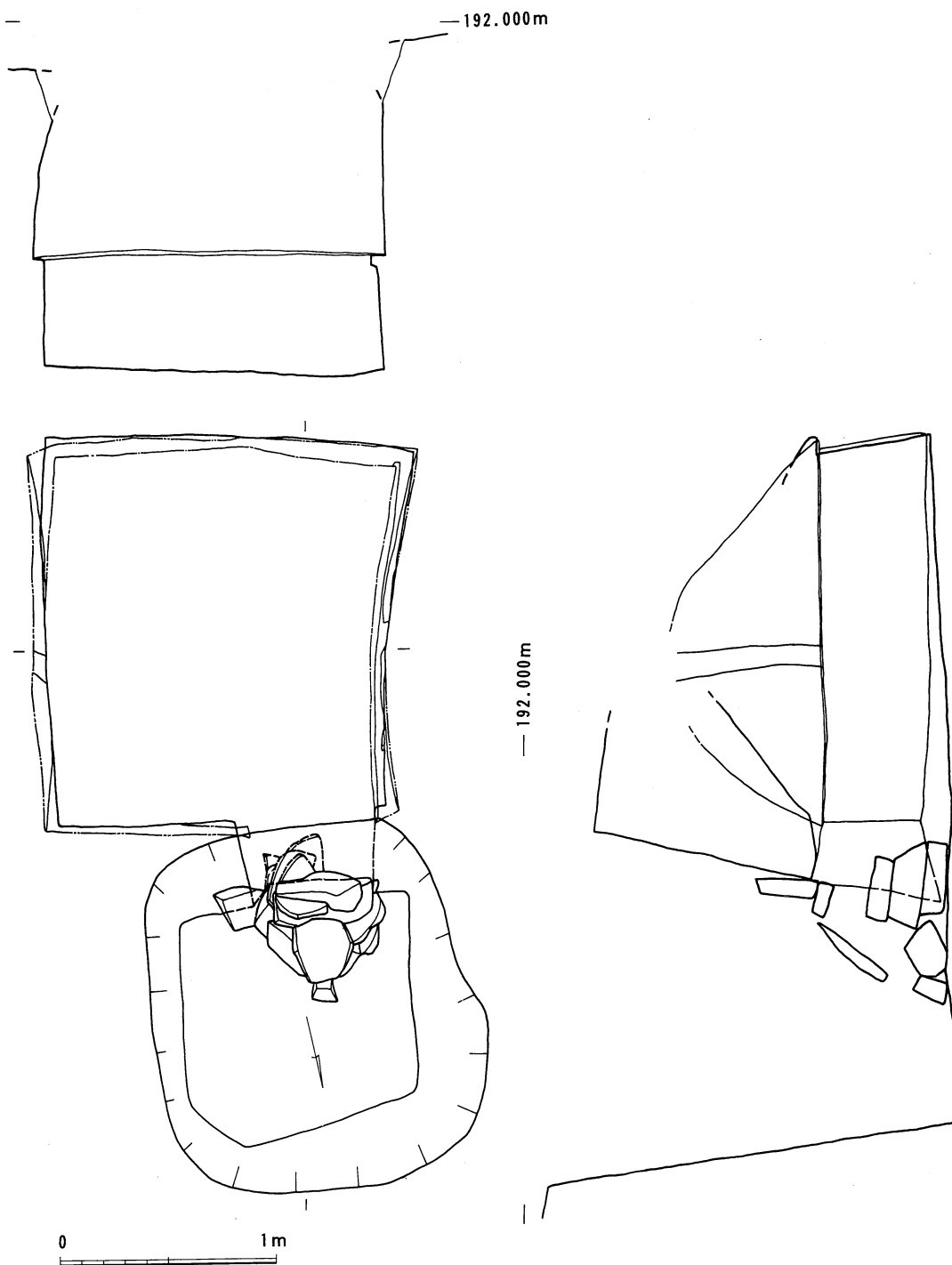
### (1) 遺構 (第47図)

59号地下式横穴墓は、調査された72基の地下式横穴墓の中では北東西端部のB-2区に位置し、標高は191.5m~192mと低位である。玄室は標高の低い方に設けている。天井部は調査中に陥没した。



第46图 立切58号地下式横穴墓





第47図 立切59号地下式横穴墓

その調査の結果、竪坑の規模は上場が153cm×168cm、下場が106cm×101cmの縦長長方形プランで、検出面（アカホヤ面）からの深さは173cmであり、断面は逆台形である。

羨門部は12個の河原石を使って長さ78cm、幅76cm、高さ97cmの厚みで閉塞されている。竪坑から玄室へ僅かに高くなっており、羨門部幅55cm、玄門部幅65cm、羨道部の高さは60cmである。羨道部の主軸は北北東から南南西の方向で、羨門は北北東に開口している。

玄室は平入り左片袖式で、左袖が81cmであるが、右袖が僅かに5cmである。切妻の家形で、左壁に幅9cmの束柱を、右壁には幅11cmの束柱を表現している。玄室は奥行172cm、幅153cm、右壁長さ163cm、左壁長さ177cmの四隅が広がる縦長長方形プランである。天井部の高さは122cmである。壁面の棚状施設は3面にあり、右壁が幅8cm、左壁が5cm、奥壁が8cmである。右壁の棚状施設は幅5cmの額状に張り出しており、床面からの高さは48cm～50cmである。玄室の主軸は北北西から南南東の方向である。

## （2）竪坑の土層

竪坑はアカホヤ上面で検出された。竪坑の埋土はI層が暗褐色土層（径2cm～4cm大のアカホヤ塊・径2cm大の褐色ローム塊を多く含む。）、II層が黒褐色土層（径0.5cm～2cm大のアカホヤを多く含む、径1cm大の褐色ロームを若干含む。）である。

## （3）遺物（第70図）

副葬品は右棚状施設の玄門寄りで刀1・鉄鏃2・茎刀子2が出土しており、刀1・鉄鏃2の武器、茎刀子2の工具の組み合わせである。

### 刀（第70図5）

5は現存長26.2cm、身幅1.8cm、身厚0.5cmの刀であるが、関部分が錆で隠れているために関の形態は不明である。目釘孔は1個有し、鞘部分・柄部分とも木質部が僅かに残る程度である。

### 鉄鏃（第70図6・7）

鉄鏃は2本とも変形圭頭斧箭式鏃である。6が身長14.0cm、幅4.6cm、7が身長11.0cm、幅4.7cmであり、6・7とも鏃身部の長さから大形のグループ（長さ10.0cm～11.1cm、幅3.7cm～4.6cm）に属する。7の茎部には樹皮巻の矢柄が残存している。

### 茎刀子（第70図9・10）

茎刀子は2本出土しており、9が直背であるのに対して10は反り気味である。9の関は刃部に対して斜行しているが、10は不明である。

## 60 立切60号地下式横穴墓

### (1) 遺構 (第48図)

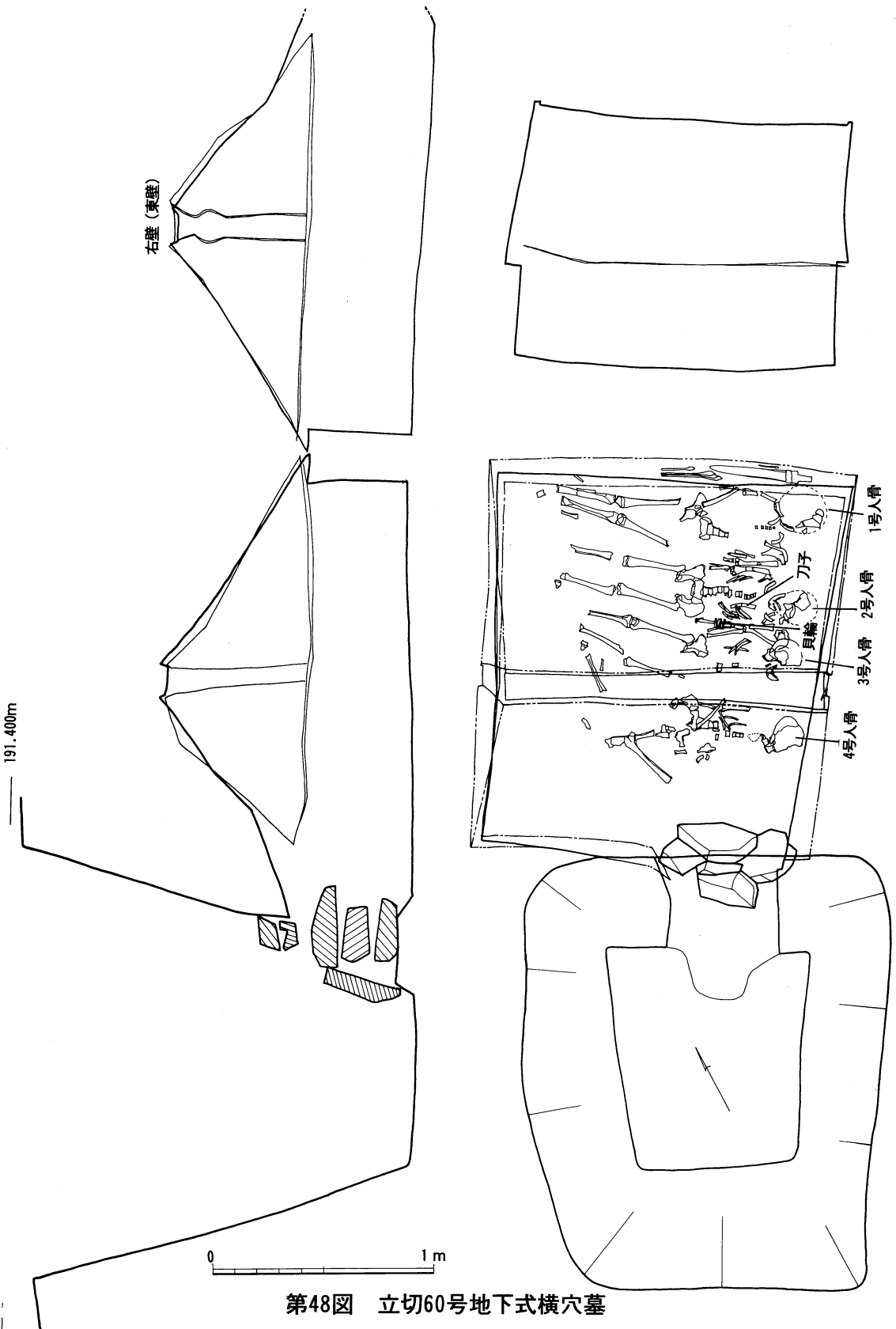
60号地下式横穴墓は、発掘区の最南端C-1区にあり、遺構全体では最も低い標高191.5mに位置する。遺構は竪坑・羨道・玄室いずれも完全に遺存している。竪坑の規模と玄室の規模がほぼ同等の平入、片袖タイプの切妻造の地下式横穴墓である。竪坑は遺構検出面で230cm×190cm、床面で115cm×100cm、深さ210cmの北側にやや幅の広い長方形プランをもっている。床面はフラットであるが羨門から約30cm前方より10cm高まって段を形成する。羨道入口は約7点の角板石によって閉塞され、うち1点は羨門に立てかけるように配置してある。羨道は間口60cm、高さ55cmで約50cmの奥行がある。玄室は東側の羨道壁がそのままのびて玄室の東壁を形成する、いわゆる片袖タイプである。規模は200cm×190cmのほぼ正方形プランで、主軸は竪坑主軸とほぼ直行している。屋根は切妻となり、稜線は極めて明瞭。両側壁には束柱の浮彫がみられる。東壁のそれは幅約10cm、長さ75cmにわたりやや斜行している。西壁のそれは同じく幅約13cm、長さ70cmわたり屋根隅から垂直におろされているが、屋根にちかい部分では円形に膨らみをもたせている。棚状施設は、羨道部を除いて床面からの高さ50cm、幅約10cm平均で全周している。

### (2) 人骨の出土状況

人骨は東側を頭位にして4体検出された。1号が壮年の男性、2号が小児、3号・4号が壮年の女性である。いずれもよく遺存していた。

### (3) 遺物 (第70図)

遺物は羨門に直面する奥壁の棚状施設上、および2号人骨付近にある。内訳は剣1振、鉄鏃6点、刀子3点、不明鉄製品1点である。このうち、刀子1点は玄室西壁に刺してあった。また、貝輪5点は2号人骨に装着され、刀子1点は同じく2号人骨の左胸にあたる部位から出土している。剣は茎を欠損している。現存長39.6cm、剣身幅は元幅3.6cm、断面は重ね薄く元重0.5cmを計測する。鉄鏃は6点出土した。うち5点は平根圭頭鏃である。大型鏃と鑄着して検出された3点のうちの最大幅3.4cmの1点には「\*」型の線刻印が刻されていた。全形が完成した後、タガネ状のもので数回パンチされて刻印されたものと推定される。裏面にもある。現在までに類似の例は報告されていない。17は1点のみ出土の片鑄造の柳葉鏃である。最大幅2.0cm、中ほどを欠損し全長は不明。8の刀子は右壁の束柱の浮彫と棚状施設が接する部分に突き刺してあったものである。現長7.2cmで先端部を欠いている。19は2号人骨(小児)の左胸にあたる部分から出土した鹿角装の刀子で全長14.0cm、刀身長6.0cmである。20~24は2号人骨の左腕に装着されていたイモガイ製の貝輪である。平均すると、復元推定口径6.0cm、幅0.9cmを測る。



第48図 立切60号地下式横穴墓

## 6 1 立切6 1号地下式横穴墓

### (1) 遺構 (49図)

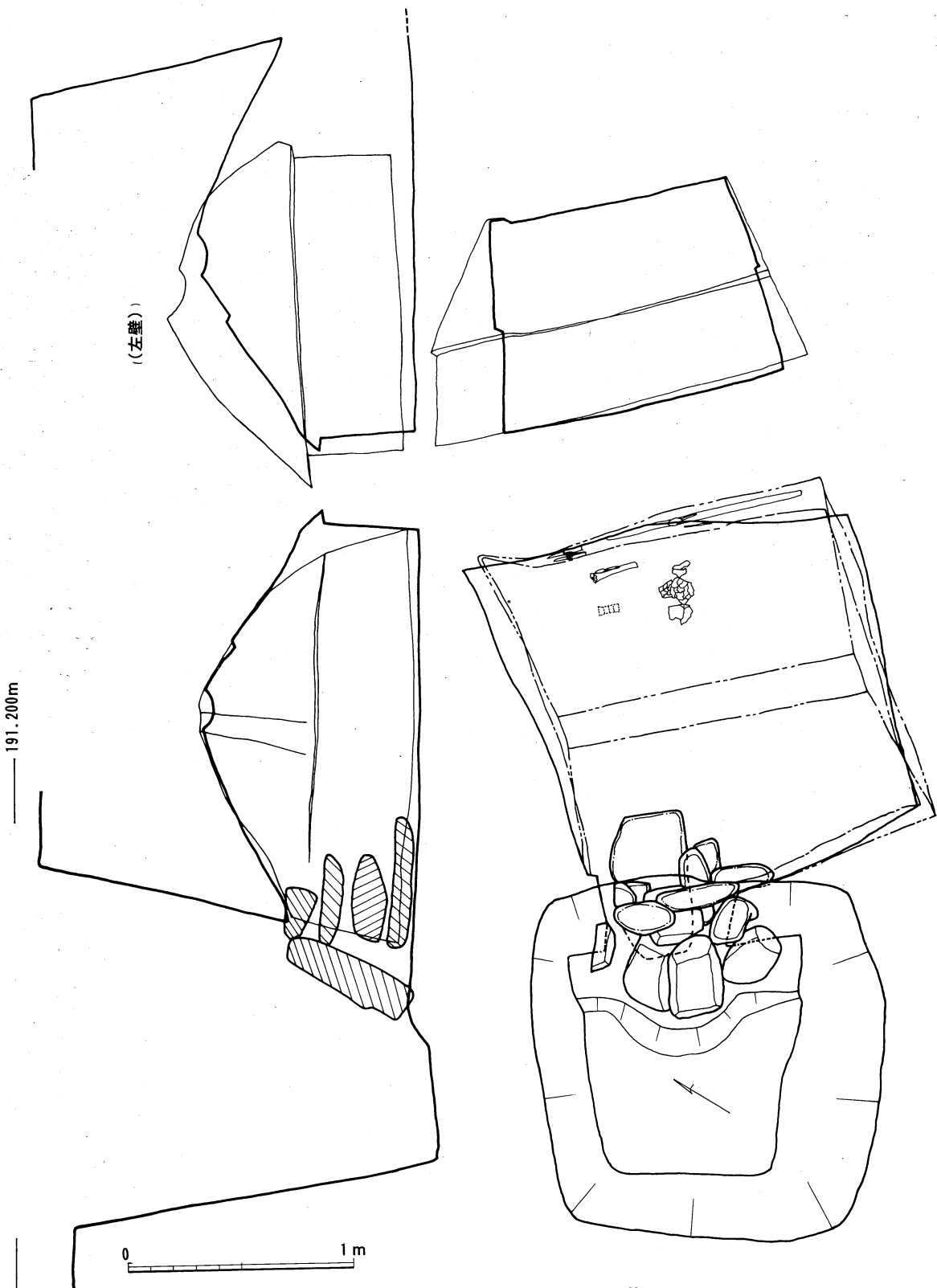
61号地下式横穴墓は、60号に隣接し調査区の最南端C-1区に位置する。遺構は竪坑、羨道、玄室からなる。竪坑と玄室はほぼ同規模で、羨道が極めて短いのを特徴とする平入切妻タイプである。竪坑は検出面からの深さが170cmあり、主軸方向をWNW-ESE方向にとり、長軸の一辺135cmのほぼ正方形状をとる。竪坑床面は羨門前面が床部より20cm一段高くつくられて羨道、玄室の床面と連続している。羨門は約15個の偏平な大板石をたてかけて閉塞している。羨門は竪坑の西壁の中央下に床面から高さ57cm、幅50cmのほぼ正方形状に穿たれて、玄室入口までの長さ35cmあり、玄室の西面にほぼ相対して構築されていた。玄室は羨門から西よりに片寄る片袖型となり、竪坑主軸から東へ幾分ずれて営まれている。平面形は奥壁（西壁）幅170cm、側壁（南壁）幅135cm、同じく側壁（北壁）幅140cmのほぼ正方形を呈する。床面から天井部までの高さ90cm、天井部は中央に竪坑主軸に直行する幅17cm、長さ135cmにわたって棟木が浮彫りされる。全体では切妻の屋根形となり、天井から側壁に至る線はゆるいカーブを描いている。また、両側壁の中央部には幅9～14cm、天井部から下にむかって長さ46cm、の棟持柱が浮彫りされており、その下端はやや幅広く軸も竪坑側にずれて曲がっている。玄室の側壁を巡る棚状施設は、床面からの高さ45～50cm幅3～15cmの規模で削り出されたものであるが、いずれの面もフラットとはいえず、とりわけ遺物を載せない南北両壁の棚状施設で著しい。西壁の棚は遺物を設置するために意図的に幅広く削りだされているもので平均幅12cmを測る。

### (2) 人骨

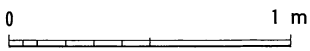
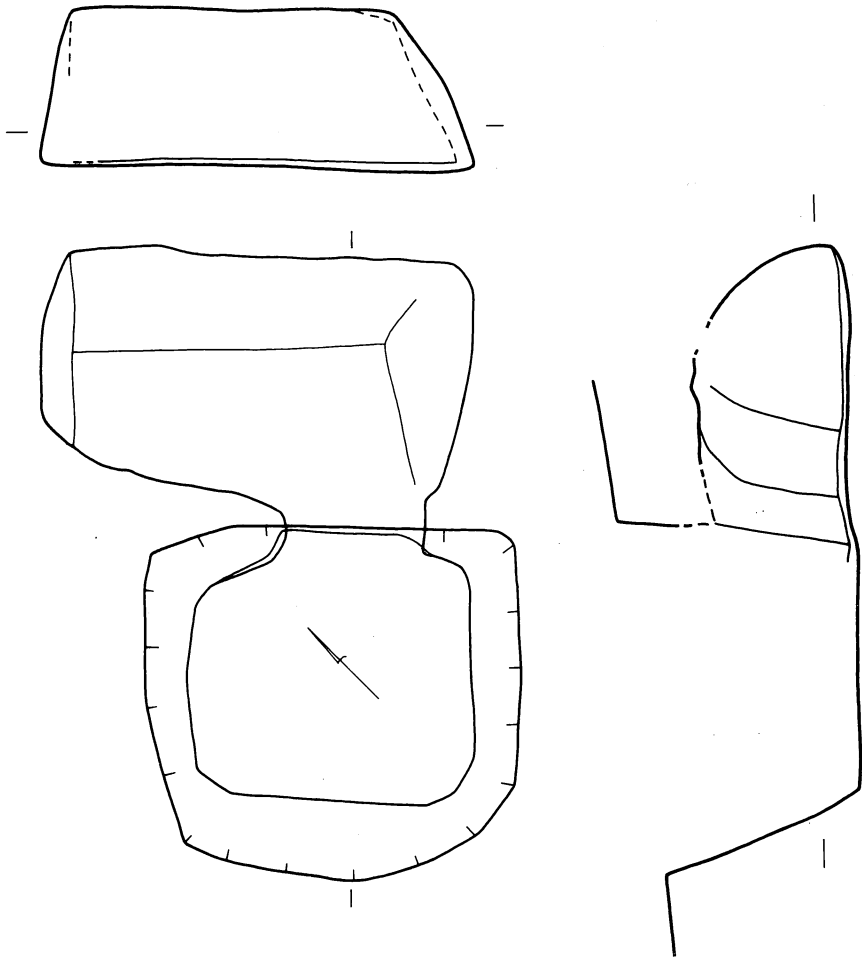
奥壁近くに、南東頭位で一体検出した。頭蓋骨、大腿骨、背骨の一部が残る。熟年の性別不明。

### (3) 遺物 (第71図)

遺物は羨門に対面する奥壁（西壁）に付設されている棚状施設に置かれていた。内訳は直刀1振、鉄鏃3本（うち1本は玄室床面に落下）、刀子2本である。1は鋒の先端を欠くもののほぼ完形を保つ直刀である。現存全長85.7cm、刀身68cm、茎長17.7cm。茎には、柄の木質部が一部遺存している。身幅は関寄りで3.0cm、鋒寄りで2.5cm、背幅0.7cmの細身である。鋸は断面倒卵形で木製の表面にはやや形骸化した直弧文が施されている。2・3・4は平根圭頭鏃となる。2・4には60号地下式横穴墓でみられたと同様な短線刻印がある。これらもタガネ状の工具でパンチされたものであろう。5は片鑄造の柳葉鏃である。6・7は鹿角装の刀子である。7は刀子身幅にくらべて柄幅を広くとっている。



第49図 立切61号地下式横穴墓



第50图 立切62号地下式横穴墓

## 6 2 立切62号地下式横穴墓

### (1) 遺構 (第50図)

62号地下式横穴墓は、調査された72基の地下式横穴墓の中では南端部のD-1・2区の境に位置し、標高は191m～191.5mと低位である。羨道部の天井部は陥没していた。

その調査の結果、竪坑の規模は上場が135cm×125cm、下場が102cm×83cmの横長方形プランで、検出面（アカホヤ面）からの深さは77cmであり、断面は逆台形である。

羨門部は板閉塞と推定される。竪坑と玄室の境には3cmの段があり、玄室の方が高い。羨門部幅57cm、玄門部幅52cmである。羨道部は主軸は北北東から南南西の方向で、羨門は南南西に開口している。

玄室は平入りの左片袖式であるが、左袖が85cmであるのに対して右袖は僅か4cmである。天井の高さが55cmと低いドーム形であるが、寄棟を意識しているが棟が不明瞭である。床面は奥行86cm、幅154cm、右壁長さ80cm、左壁長さ60cmの横長隅丸長方形プランである。玄室の主軸は北北西から南南東の方向である。

## 6 3 立切63号地下式横穴墓

### (1) 遺構 (第51図)

63号地下式横穴墓は、調査された72基の地下式横穴墓の中では南西部のE-2区に位置し、標高は191m～191.5mと低位である。玄室は完全に遺存していた。

その調査の結果、竪坑の規模は上場が153cm×130cm、下場が119cm×89cmの縦長長方形プランで、検出面（アカホヤ面）からの深さは98cmであり、断面は逆台形である。

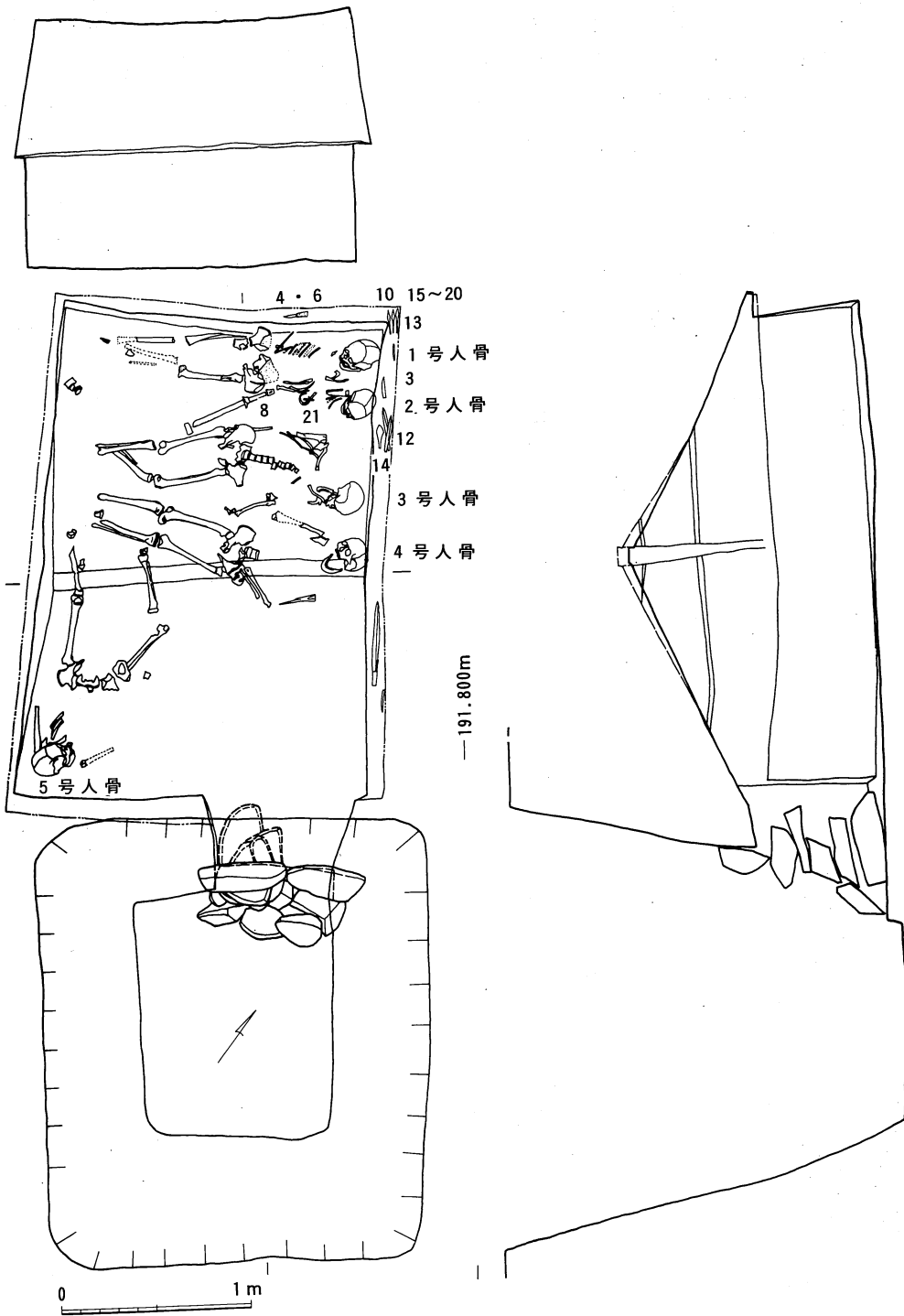
羨門部は14個の河原石を使って長さ76cm、幅88cm、高さ88cmの厚みで閉塞されている。竪坑と羨道の境には8cmの段があり、羨道・玄室が高い。羨門部幅60cm、玄門部幅81cm、羨道部の高さは70cmである。羨道部の主軸は北北西から南南東の方向で、羨門は南南東に開口している。

玄室は平入りの左片袖式であるが、左袖が99cmであるのに対して右袖が7cmと非常に短い。家形の形態で棟柱は幅8cm、深さ1cm～3cmの溝で表現し、東柱は左右壁面の棚状施設の上に幅2mm（断面三角形）の2本の溝で表現している。右壁面の東柱は棚状施設から上に34cmの所から3cm間隔で平行線を、更に上25cmの所から2cm間隔で平行線を線刻している。床面は奥行243cm、幅171cm、右壁長さ247cm、左壁長さ260cmの縦長長方形プランである。天井部の高さは128cmであり、壁面の棚状施設は四面すべてにあり、幅9cm～13cm、床面からの高さは52cm～58cmである。玄室の主軸は北北東から南南西の方向である。

### (2) 竪坑の土層

竪坑はアカホヤ上面で検出された。竪坑の埋土はI層が黒褐色土層（径1cm～2cm大のア





第51图 立切63号地下式横穴墓

カホヤブロック・径3cm大の褐色ロームブロックを若干含む。)、II層が黒褐色土層(径4cm大の褐色土ブロック多く含む。径5cm~6cm大のアカホヤブロック・径4cm大の黒色土若干含む。)、III層が黒褐色土層(径3cm~4cm大のアカホヤブロック・径3~4cm大の褐色土ブロックを多く含む)、IV層は黒褐色土層(径4cm~5cm大の褐色土ブロックを多く含む。径0.5cm大のアカホヤを若干含む。)である。

### (3) 人骨の出土状態

奥壁から右壁を頭位にして1号人骨(壮年の女性)、2号人骨(小児)、3号人骨(壮年の男性)、4号人骨(熟年の男性)が並んでいる。5号人骨(壮年の女性)の頭位は4体の人骨の頭位から約90度羨道部に振っている。1号人骨は頭蓋骨から脛骨・腓骨まで良く残っているが、右上腕骨から指骨、左足の指骨が完全に欠如している。2号人骨は頭蓋骨と肋骨だけが残っている。3号人骨は頭蓋骨から脛骨・腓骨まで残っているが、左手と両足の指骨を欠如している。4号人骨は頭蓋骨から脛骨・腓骨まで残っているが、肋骨と両足の指骨を完全に欠如している。5号人骨は頭蓋骨から脛骨・腓骨まで残っているが、右肋骨と両足の指骨を完全に欠如している。1号人骨から5号人骨まですべて頭蓋骨に赤色顔料が付着している。

### (4) 遺物 (第71・72図)

副葬品はすべて鉄器で、剣・鎌の武器、刀子の工具、鉄製釧の装身具の組み合わせである。床面からは1号人骨に伴うと考えられる剣、2号人骨(小児)の傍らから鉄製釧が出土している。奥壁の棚状施設から10の剣と4・6の刀子が、右棚状施設から13・15~20の鉄鎌(1号人骨の後ろ)、11の短剣と12・14の鉄鎌(2号人骨の後ろ)が、右棚状施設の羨道部寄りから9の剣と5の刀子が出土している。

#### 剣 (第71図8~11)

剣は4本出土している。全長42.0cmの長剣であるのに対して、11が20.5cmである。8は全長42.0cm、刃長30.0cm、刃幅3.2cm、茎長12.0cm、茎幅1.8cmを測る。目釘穴を2個有し、鞘と柄の木質が一部遺存する。柄には鹿角装の一部が残る。11は全長20.5cmであり、鞘と柄の木質は良く遺存している。目釘穴を1個有する。

#### 鉄鎌 (第71図12~20)

鉄鎌は8本出土しているが、すべて変形圭頭斧箭式鎌である。これらの変形圭頭斧箭式は鎌身部の長さから大形のグループ(長さ10.0cm~14.5cm、幅3.7cm~4.6cm)の12・16・17・18・20、中形のグループ(長さ6.5cm~9.0cm、幅2.7cm~3.9cm)の7・14・15に分かれる。14は全長13.1cm、身幅3.5cmを測り、身部に縦方向の長さ12cmの縦方向の直線をタガネで施している。16は全長18.2cm、身長13.0cm、身幅4.2cmである。

#### 茎刀子 (第72図3~6)

茎刀子は4本出土している。4本とも直背で刃部には関をつくり、関は刃に対して斜行して

いる3・5と直角になる6がある。身長は5.7cm～7.5cmを測り、茎には木柄を装着している。

鉄製釧 (第71図21)

径5.9cm、幅0.2cm、厚み0.6cmを測り、円形状を呈する。

#### 64 立切64号地下式横穴墓

##### (1) 遺構 (第52図)

D・E-3区の標高約192mの位置にある。主軸方向は、略NE-SWをとる。竪坑は大形の正方形で、一辺が検出面で195cm、下場で130cmを測る。検出面からの深さは中央部で140cmであり、羨門部に向かって15cm程度深くなって玄室の床面に続く。

羨門部は、長さ50cm、幅20cm程度の磔を12個程用いて閉塞している。うち、最上段のものは羨門に立てかけるような状態になっていた。羨門部の幅、高さともに65cm、羨道長は床面で45cmである。

玄室の平面プランは長方形であるが、左壁(北西側)の長さが105cmであるのに対して右壁(南東側)は130cmと若干長くなっている。玄室の構造は切妻の家形で、煩雑になるため図中では途中までしか表現していないが、天井には明瞭な棟の稜線が見られる。屋根と壁面の間の稜線は、あまり明瞭ではない。天井の高さは約80cmである。壁面には幅10cm程度の工具痕が残っている。

##### (2) 人骨

南東側を頭位として5体確認された。1号が熟年男性、2号・5号が小児、3号・4号は女性で、顔面に赤色顔料が施されていた。

##### (3) 遺物 (第72図)

奥壁近くの南東側より鉄剣1本、人骨頭部近くより刀子5本、さらに2号人骨の右前腕と3号人骨の左前腕にオオツタノハ製の貝輪が検出された。

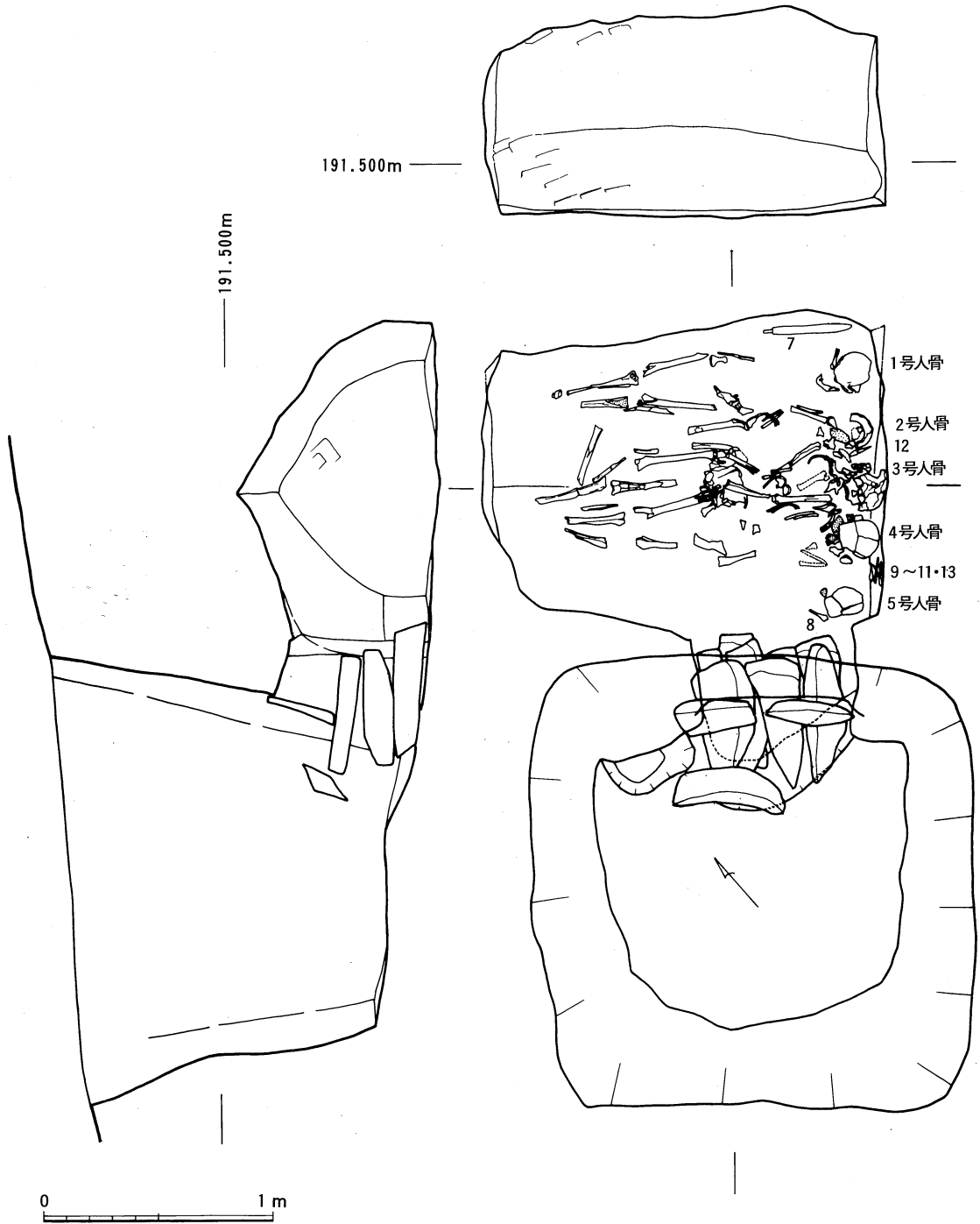
7の剣は、残存長35.0cm、最大幅3.0cmで、目釘穴が1つ開いている。刀子は、刃部、関の形態ともさまざまである。12には布の痕跡と考えられる付着物がある。8の鉄鏃は、変形の圭頭鏃で、竹柄、樹皮巻きが見られる。

14・15の貝輪は、図上ではそれぞれ1個体のように復元してあるが、出土状況を考えると、両者とも下半が腐食して上半のみが遺存したようである。どちらも裏面にはオオツタノハ特有のうねりが認められる。

#### 65 立切65号地下式横穴墓

##### (1) 遺構 (第53図)

65号地下式横穴墓は標高約191.5mのE・F-3区に単独で存在し、周辺には東10mに64号



第52图 立切64号地下式横穴墓

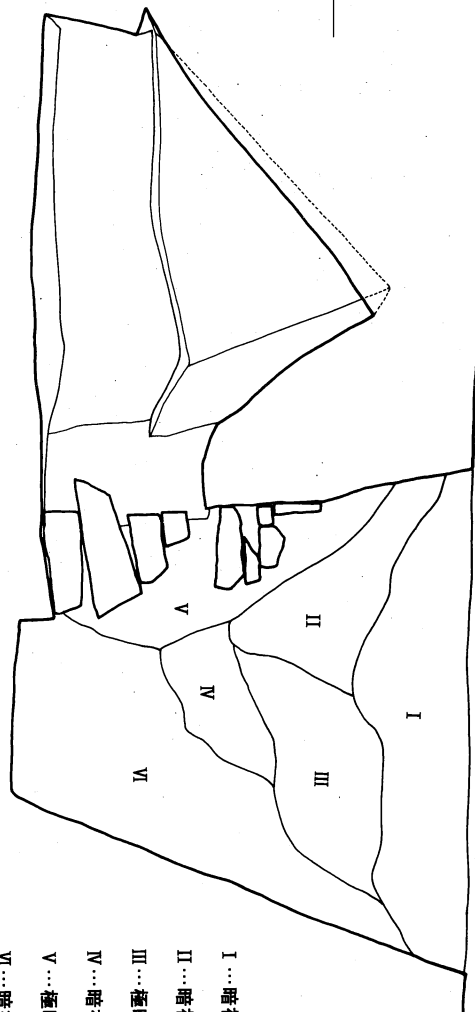
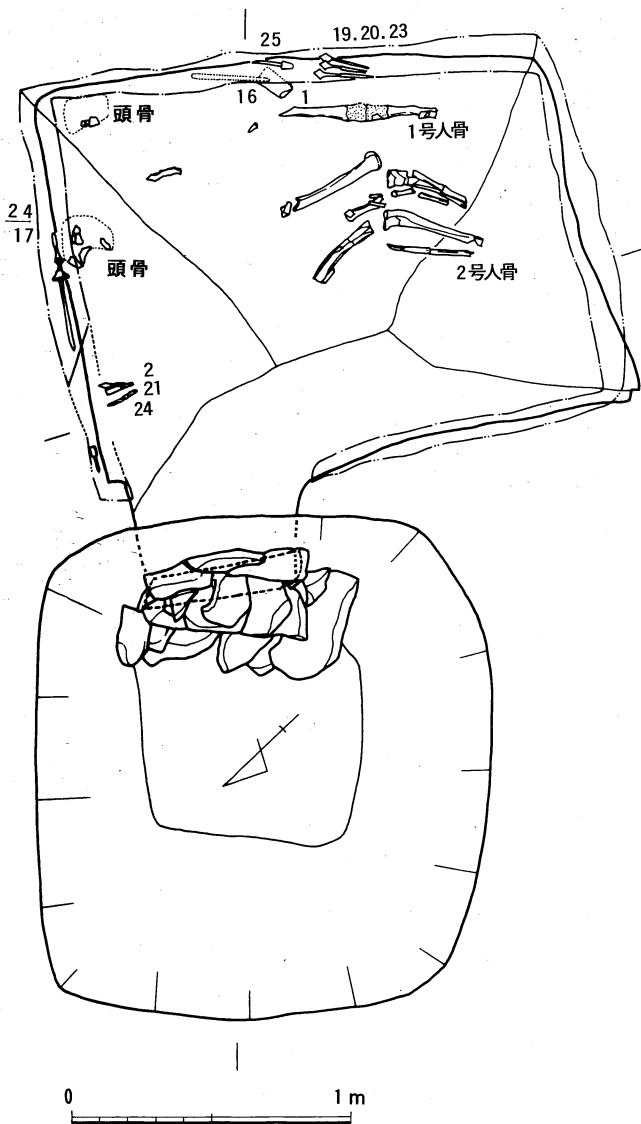
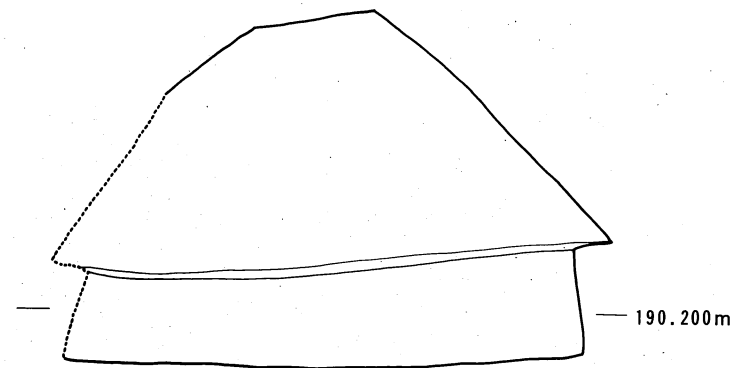
が、南東10mには63号がそれぞれ分布している。

竪坑部は隅丸方形を呈し、東西長軸1.79m、東西短軸1.63m、検出面からの深さ約1.68mを測る。竪坑から羨道部に向う主軸は、N-46° - Eを示し、玄室の主軸は竪坑のそれより18°ほど西にずれている。羨道は竪坑南東壁の東寄りに設けられ、羨門部は、厚手で長さ40~50cmの大型の川原石によって閉塞されている。竪坑床面から閉塞石の部分で13cm程度高くなり羨道、玄室へと続いている。羨門床面幅約52cm、高さ約60cm、羨道長約34cm、玄門床面幅で約66cmを測る。玄室はいわゆる片袖式の平入りで、羨道は奥壁に向って右側（東）に片寄っており、それぞれの羨道壁面から左袖約6cm、右袖117cmを測る。当遺跡で右袖がのびる形態の玄室を有するものとしては他には61号と50号がある。玄室床面は、左辺1.4m、右辺1.26m、東西長軸1.82mの台形プランを呈し、天井部は寄棟造りで、床面から天井頂部までの高さは約1.29mである。また、壁面には高さ約34cmのところ幅約13cmの棚状施設が全体に設けられているが、左壁の一部はすでに崩壊していた。

遺物は奥壁の棚状施設中央に鉄鏃3本(19・20・23)、刀子1本(25)、剣1本(16)が、その床面には両端折曲げの鋤先(1)が検出された。また、左側壁の棚状施設には鉄鏃(24)剣1振(17)、刀子1本(26)が、そしてその床面で出土した鉄鏃2本(21・2)と刀子1本(24)も既に崩壊している棚状施設にあったものと考えられる。人骨は頭蓋片や大腿骨など一部しか残存していなかったが、男性人骨2体が検出され、奥壁から順に1号、2号人骨とした。頭位は凡そ北東を示している。いわゆる片袖タイプの玄室に埋葬された人骨の頭位は短い袖側に置かれる傾向にあり、65号の場合、玄室形態差は、玄室主軸のちがいであり、両端折曲げの鋤(鏃)先が出土していることから時期差の可能性もある。

## (2) 遺物 (第72・73図)

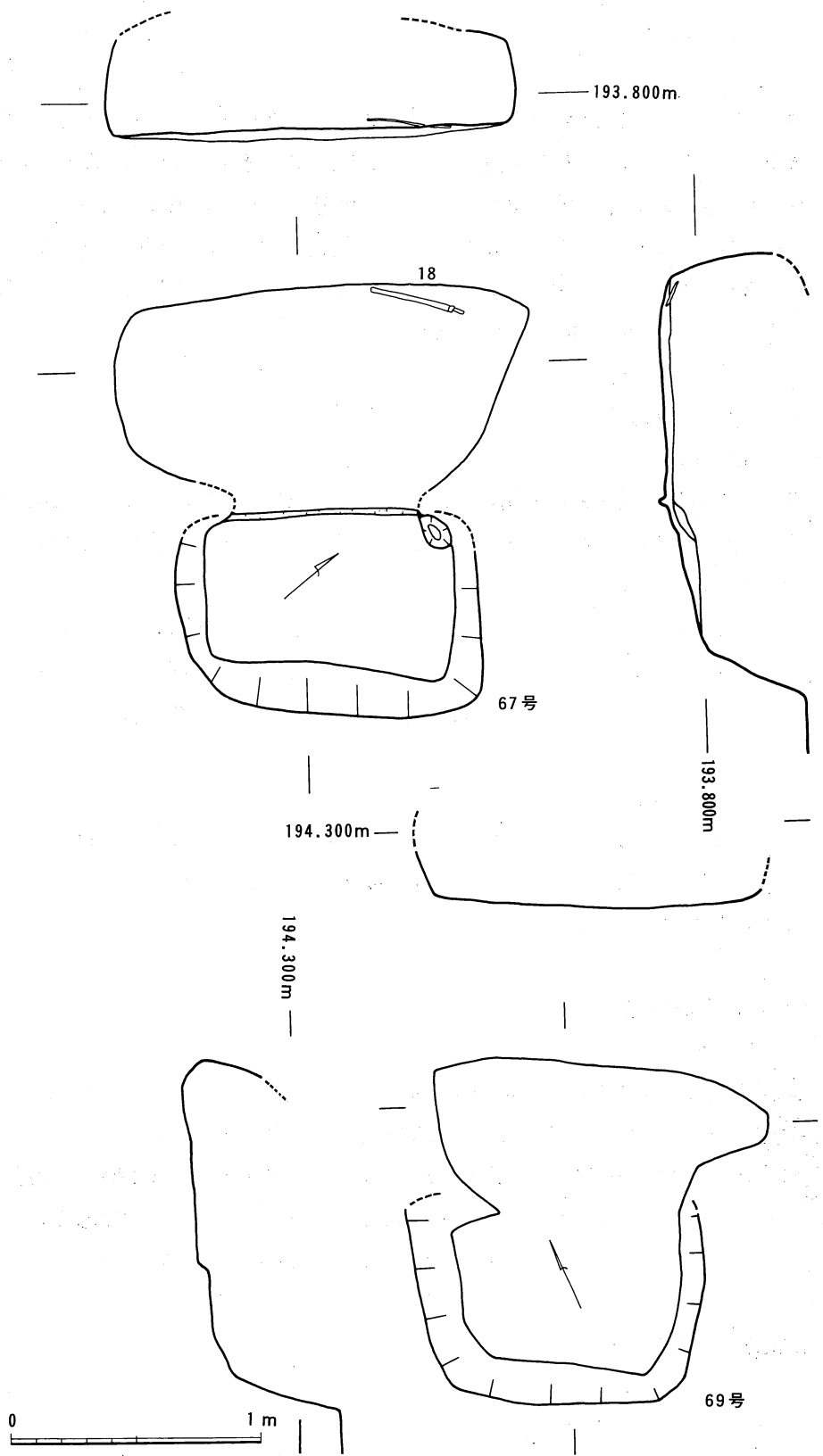
剣は2振ある。16は現存長23.4cm、最大幅1.9cmを測る。茎部には木質が遺存している。全体に錆化が著しい。17は鞘や把とも木製で、現存長30.6cm、最大幅2.6cmを測る。関については錆化が著しいため明確ではない。鉄鏃は全部で7本出土している。19~23は圭頭式鏃で、茎部には樹皮が横巻され、その上に矢竹が装着されている。19は現存長22.1cm、最大幅3.1cmを測る。全体に錆化が著しい。20は19よりやや大きく刃部も長い。現存長21.6cm、最大幅3.6cmを測る。21は小型で、現存長9.0cm、最大幅2.6cmを測る。全体に錆化が著しいが、表面には長さ約1.4cmの線刻らしい痕跡が確認できる。22は左刃部が欠損している。現存長16.7cm、最大幅3.6cmを測る。23は錆化が激しく先端が欠損し、鏃身部には亀裂が生じている。現存長17.5cm、最大幅2.6cmを測る。そのうち矢柄部分は9.5cmと比較的良好に残っている。24は長頸鏃で、現存長10.9cm、鏃身部2.9cm、最大幅1.3cmを測る。刃部は長三角形で、断面は両丸造りである。また、茎部には樹皮が横巻されている。2(第73図)は錆のため形態は不明だが、先の短い変形の圭頭鏃と考えられる。現存長9.5cm、最大幅2.7cmを測る。茎部には



- I... 暗褐色土
- II... 暗褐色土
- III... 極暗褐色土
- IV... 暗褐色土
- V... 極暗褐色土
- VI... 暗褐色土

— 191.000m

第53圖 立切65号地下式横穴墓



第54图 立切67号·69号地下式横穴墓

樹皮が横巻されている。25・26は茎刀子である。25は平造りで、角背を呈す。刃部の関付近でやや斜行し幅広くなる。茎には木質が遺存し、径2.5mmの目釘孔が施される。現存長14.7cm、身中央付近で幅1.2cmを測る。26も25と同様な形態と考えられるが、小型で現存長8.8cm、身中央付近で幅1.2cmを測る。茎部には木質部が遺存しているため関部及び茎は不明である。鋤（鍬）先は（第73図1）は長方形を呈し、左右を折り曲げて袋部を作られるが、木質は遺存していなかった。刃部幅11cm、長さ6cmを測る。

## 6 6 立切67号地下式横穴墓

### (1) 遺構 (第54図)

A・B-5区の68号地下式横穴の西隣に位置する。天井部は、調査時にはすでに原形を止めていなかった。竪坑-玄室の主軸は、SE-NWをとる。竪坑の規模は、検出面で120cm×80cm、下場で100cm×60cmである。

羨門部には、板閉塞に伴うと考えられる深さ3cm程度の溝や、小ピットが見られる。

玄室は平入りの両袖のもので、平面形は不整な長楕円形である。規模は、床面の最大長で、主軸側165cm、奥行80cm程度である。天井部の形態については、前述の通り言及できない。

人骨は認められなかった。

### (2) 遺物 (73図)

玄室の奥壁寄りから鉄剣が1本検出された(18)。全長35.2cm、最大幅2.9cmを測る。錆化のため若干反っている。目釘穴らしきものが3つ観察されるが、真中のものは疑わしい。刃部よりの1つのみが貫通している。

## 6 7 立切68号地下式横穴墓

### (1) 遺溝 (第55図)

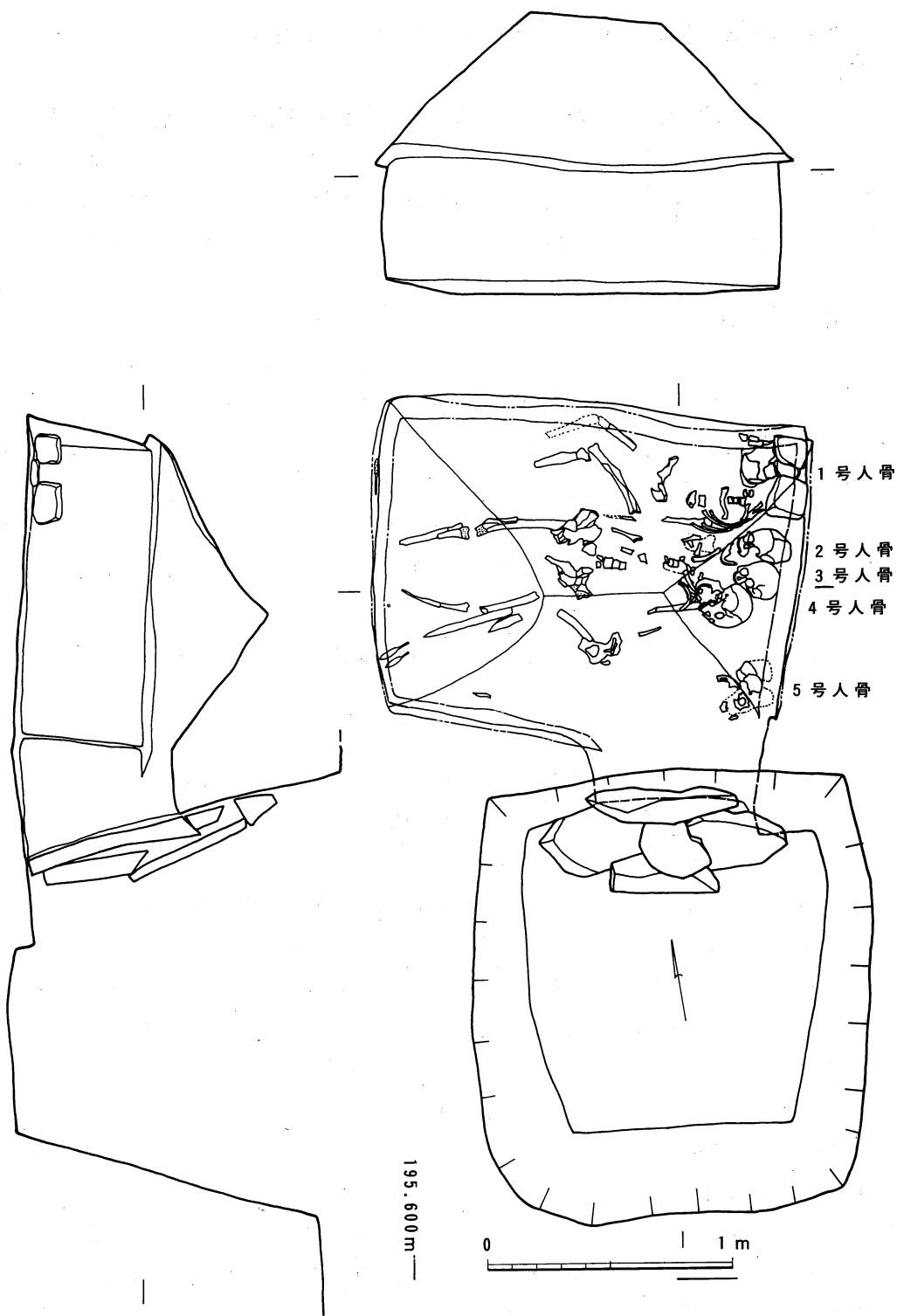
68号地下式横穴墓は、調査された72基の地下式横穴墓の中では北東部のA-5区に位置し、標高は194.5m~195mと中位である。竪坑・羨道部も完全に残っていた。

その調査の結果、竪坑の規模は上場が162cm×181cm、下場が120cm×120cmの縦長長方形プランで、検出面（アカホヤ面）からの深さは136cmであり、断面は逆台形である。

羨門部は6個の河原石を使って長さ44cm、幅102cm、高さ102cmの厚みで閉塞されている。竪坑と閉塞石との間に10cmの段があり、玄室が僅かに高い。羨門部幅67cm、玄門部幅76cm、羨道部の高さは63cmである。羨道部の主軸はほぼ南北方向で、羨門は南に開口している。

玄室は平入りの左片袖式であるが、左袖が82cmであるのに対して右袖が僅か3cmだけある。寄棟の家形である。床面は奥行128cm、幅174cm、右壁長さ114cm、左壁長さ123cmの横長長方形プランで、天井部の高さは113cmである。床面から50cmの高さで四面すべてに棚状施設が





第55图 立切68号地下式横穴墓

巡り、その幅は4cm～9cmである。玄室の主軸は東西方向である。

## (2) 竪坑の土層

竪坑はアカホヤ上面で検出された。竪坑の埋土はⅠ層が黒褐色土層、Ⅱ層が褐色土層、Ⅲ層がにぶい黄褐色土層（アカホヤブロックを含む）、Ⅳ層はにぶい黄褐色土層（アカホヤブロックが大きくなる）、Ⅴ層はにぶい黄褐色土層（黒色ローム塊を含む）、Ⅵ層はにぶい黄褐色土層（混入物の径が大きくなる）、Ⅶ層は暗褐色土層（Ⅴ層よりアカホヤブロックの割合が少ない）である。

## (3) 人骨の出土状態

玄室の北東隅には土塊を枕とする1号人骨を始めとして5体の人骨が右壁面を頭位として並んでいる。奥壁から1号人骨（壮年の男性）、2号人骨（小児）、3号人骨（小児）、4号人骨（壮年の男性）、5号人骨（年齢不明の男性）である。1号人骨は頭蓋骨から脛骨まで遺存しているが、右手と両足の指骨を欠如している。2号人骨・3号人骨は頭蓋骨のみ遺存している。4号人骨は頭蓋骨から脛骨まで遺存している。5号人骨は頭蓋骨・骨盤・大腿骨・脛骨の一部が遺存している。2号人骨の頭蓋骨にのみ赤色顔料が付着している。

## (4) 遺物 (第73図)

床面からは7の剣と4・5・8の鉄鏃が、左棚状施設からは3・6の鉄鏃が出土しており、剣・鏃の武器だけの組み合わせである。

### 剣 (第73図7)

剣は1本出土している。7は全長35.1cm、刃長28.0cm、刃幅2.9cm、茎長7.6cmを測る。鞘と柄には木質部が遺存するが、目釘孔は木質部のために読み取れない。

### 鉄鏃 (第73図3～6・8)

鉄鏃は5本出土しており、5の圭頭斧箭式鏃を除くとすべて柳葉式鏃である。柳葉式鏃は3・6のような身長7.2cmの先細りのものと、4のような身長6.9cmの先太りのものと、身長10.9cmの長手のものがある。すべて竹柄の上から樹皮を巻きつけている。4には茎部を差し込み易くするために竹柄の先端に切り込みを入れている。5の変形圭頭斧箭式は鏃身部の長さから大形のグループ（長さ9.7cm～11.1cm、幅3.7cm～4.6cm）に属する。

## 68 立切69号地下式横穴墓

### (1) 遺構 (第54図)

69号地下式横穴墓は、調査された72基の地下式横穴墓の中では北東部のA-5区に位置し、標高は195m～195.5mと高位である。検出時には既に羨道部と玄室の天井部は陥没していた。

その調査の結果、竪坑の規模は上場が115cm×85cm、下場が88cm×60cmの横長長方形プランで、検出面（アカホヤ面）からの深さは46cmであり、断面は逆台形である。

羨門部は板閉塞と推定される。竪坑と羨道部の境には5cmの段があり、玄室の方が低い。羨門部幅71cm、玄門部幅80cmである。羨道部の主軸は北北東から南南西の方向で、羨門は南南西に開口している。

玄室は平入りの両袖式であるが、右袖が27cmであるのに対して左袖は羨門と玄門が重なっている。床面は奥行43cm、幅131cm、右壁長さ10cm、左壁長さ41cmの横長楕円形プランである。天井部の高さは現存が24cmであり、天井部が低いドーム形と推定される。玄室の主軸は西北西から東南東の方向である。副葬品はない。

## 69 立切70号地下式横穴墓

### (1) 遺構 (第56図)

70号地下式横穴墓は、調査された72基の地下式横穴墓の中では北東部のA-6・7区の境に位置し、標高は195m～195.5mと高位である。検出時には既に羨道部と玄室の天井部は陥没していた。

その調査の結果、竪坑の規模は上場が141cm×107cm、下場が101cm×77cmの横長半円形プランで、検出面（アカホヤ面）からの深さは52cmであり、断面は逆台形である。

竪坑と羨道部との境には6cmの段があり、羨門部幅72cm、玄門部幅71cmである。羨門から右側に幅15cm、長さ30cmの張り出しを、左側には幅10cm、長さ20cmの張り出しを設けているので羨門部板閉塞と推定される。羨道部の主軸は北北西から南南東の方向で、羨門は南南東に開口している。

玄室は平入りの両袖式であり、右袖が50cmであるのに対して左袖が49cmとほぼ等しい。床面は奥行52cm、幅107cm、右壁長さ33cmの横長楕円形プランである。天井部の高さは現存が31cmであり、天井部の低いドーム形と推定される。玄室の主軸は東北東から西南西の方向である。副葬品はない。

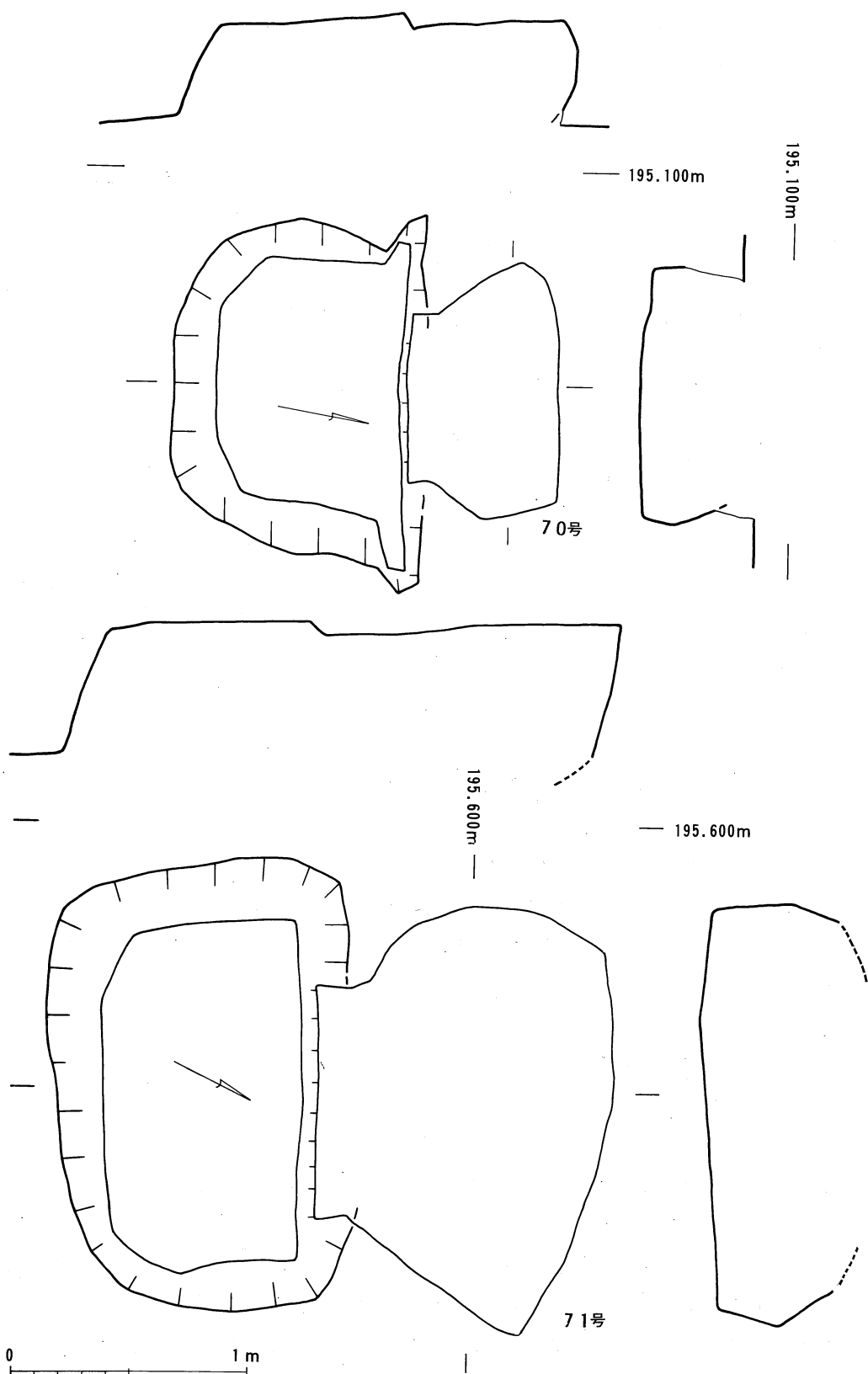
## 70 立切71号地下式横穴墓

### (1) 遺構 (第56図)

71号地下式横穴墓は、調査された72基の地下式横穴墓の中では北東西端部のA-6区に位置し、標高は195.5m～196mと高位である。検出時には既に羨道部と玄室の天井部は陥没していた。

その調査の結果、竪坑の規模は上場が191cm×122cm、下場が143cm×85cmの横長楕円形プランで、検出面（アカホヤ面）からの深さは65cmであり、断面は逆台形である。

竪坑と羨道部の境には6cmの段があり、玄室の方が高い。羨門部は板閉塞と推定される。羨門部幅98cm、玄門部幅98cmである。羨道部の主軸は北北西から南南東の方向で、羨門は南



第56图 立切70号·71号地下式横穴墓

南東に開口している。

玄室は平入りの両袖式であり、床面は奥行112cm、幅201cmの横長不定形プランである。

天井部の高さは現存が53cmであり、天井部の低いドーム形である。玄室の主軸は東北東から西南西の方向である。

## (2) 遺物 (第73図)

副葬品は床面から鉄鏃が2本出土しているだけである。

### 鉄鏃 (第73図9・10)

2本とも柳葉式の鉄鏃である。9は全長8.5cm、刃部幅2.1cm、身長6.9cmである。茎部は樹皮と紐を巻いていると共に鏃身部にも太い紐を巻いている。10は全長16.0cm、身長10.8cm、身幅3.8cmであり、9の2倍の法量である。茎部には樹皮巻きと竹柄が、鏃身関部には布目が遺存している。

## 7 1 立切72号地下式横穴墓

### (1) 遺構 (第57図)

72号地下式横穴墓は、調査された72基の地下式横穴墓の中では北東部のA-6区に位置し、標高は195.5m~196mと高位である。検出時には既に羨道部と玄室の天井部は陥没していた。

その調査の結果、竪坑の規模は上場が183cm×115cm、下場が170cm×110cmの横長長方形プランで、検出面(アカホヤ面)からの深さは60cmであり、断面は逆台形である。

竪坑と羨道部との境には15cmの段があり、玄室の方が高い。羨門部は板閉塞と推定される。羨門部幅105cm、玄門部幅110cmである。羨道部の主軸は西北西から東南東の方向で、羨門は東南東に開口している。

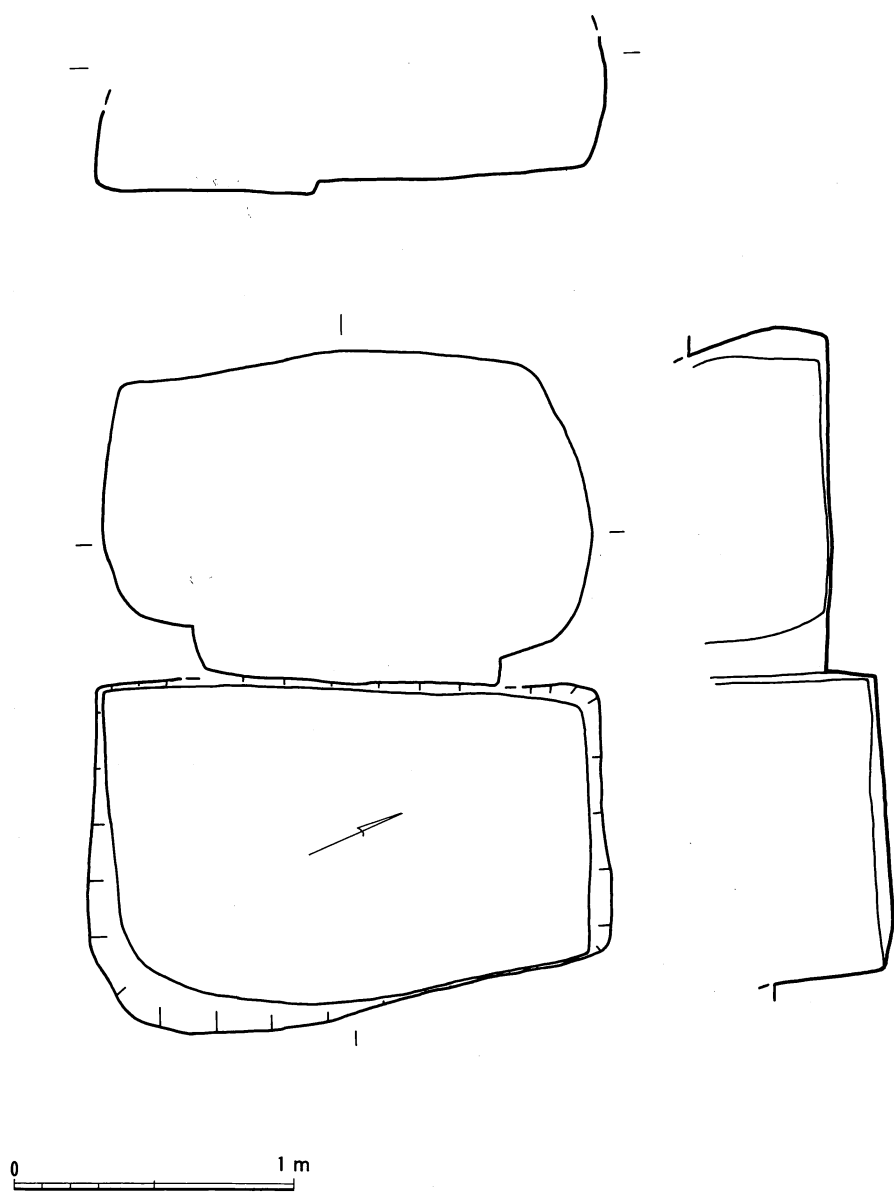
玄室は平入りの両袖式であり、右袖が21cmであるのに対して左袖が25cmとほぼ等しい。床面は奥行105cm、幅175cm、右壁長さ96cm、左壁長さ83cmの横長楕円形プランである。天井部の高さは現存が47cmであり、天井部の低いドーム形である。玄室の主軸は北北東から南南西の方向である。副葬品はない。

## 7 2 立切73号地下式横穴墓

### (1) 遺構 (第45図)

73号地下式横穴墓は、調査された72基の地下式横穴墓の中では南東部のB-4区に位置し、標高は193.5m~194mの中位である。鉄塔のために竪坑の半分のみが検出された。

その調査の結果、竪坑の規模は上場が59cm+ $\alpha$ ×105cm、下場が51cm+ $\alpha$ ×98cmの長方形プランで、検出面(アカホヤ面)からの深さは74cmであり、断面は逆台形である。羨門部は板閉塞で、北東方向に羨門部があると推定される。



第57図 立切72号地下式横穴墓

### 7 3 立切74号地下式横穴墓

#### (1) 遺構 (第58図)

74号地下式横穴墓は、調査された72基の地下式横穴墓の中では南東部のC-4区に位置し、標高は193.5m～194mと中位である。検出時には既に羨道部と玄室の天井部は陥没していた。

その調査の結果、竪坑の規模は上場が184cm×91cm、下場が163cm×67cmの横長長方形プランで、検出面（アカホヤ面）からの深さは46cmであり、断面は逆台形である。

竪坑と玄室はほぼ同一レベルであり、羨門部は板閉塞と推定される。羨門部幅105cm、玄門部幅111cmである。羨道部の主軸は北北東から南南西の方向で、羨門は南南西に開口している。

玄室は平入りの両袖式であるが、右袖が30cmであるのに対して左袖が9cmと非常に短い。床面は奥行139cm、幅197cm、右壁長さ122cm、左壁長さ138cmの横長長方形プランである。天井部の高さは現存が57cmである。玄室の主軸は東北東から西南西の方向である。

#### (2) 人骨の出土状況

年齢・性別不明の人骨が1体出土している。

#### (3) 遺物 (第73図)

##### 剣 (第73図11)

剣が1本出土しており、11は現長16.7cm、現刃長13.4cm、刃幅2.6cm、茎長3.4cmを測る。関部に銚元孔が2個、目釘穴が1個有する。

### 7 4 立切41号土坑

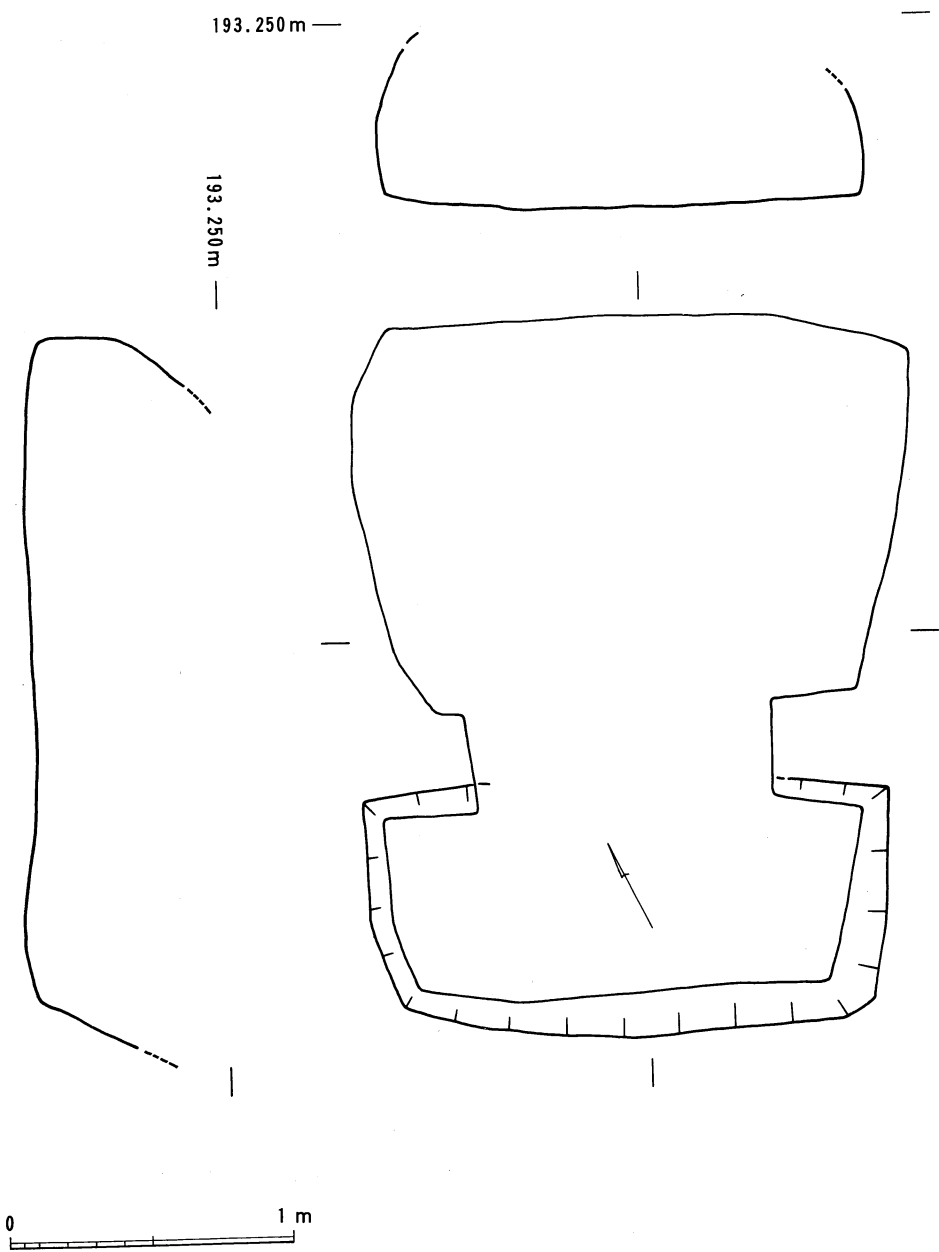
J-8区の標高190mに位置し、北4mに地下式横穴墓2号が所在している。主軸はE-4°-Sである。平面形は隅丸長方形で、長軸162cm、短軸79cm、深さは中央部で75cmである。壁際の埋土は、壁に沿っているため、土坑内に何等かの施設があったとも考えられるが詳細は不明である。土坑内から遺物等は出土していない。

### 7 5 立切66号土坑

H-5区の標高191.5mに位置し、北10mに地下式横穴墓1号、2号が所在している。主軸はN-38°-Eである。平面形は長方形で、長軸91cm、短軸81cm、深さは中央部で54cmである。土坑内から遺物等は出土していない。

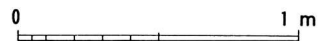
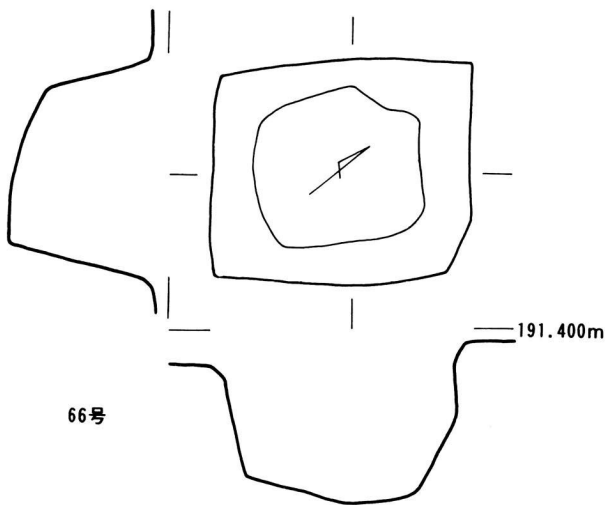
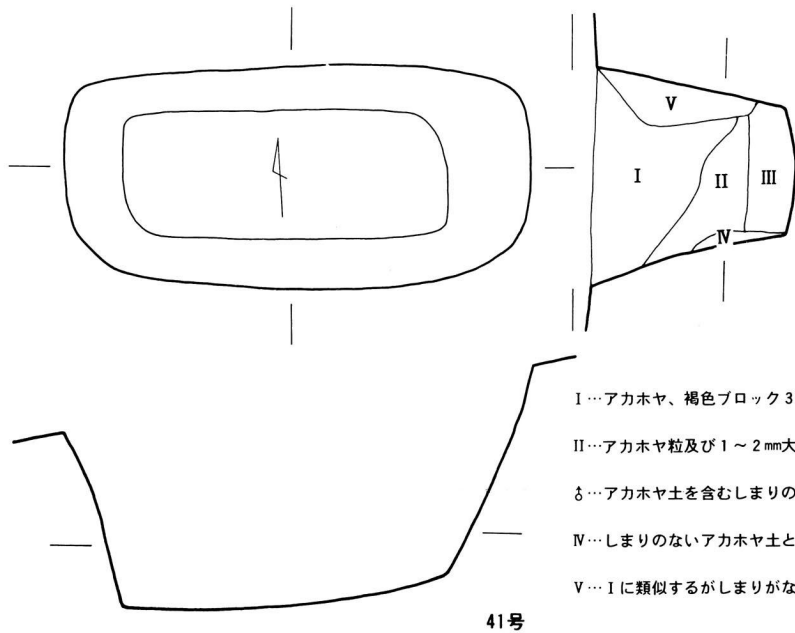
### 7 6 土器 (第73・74図)

土器は、A群、B群の2つの集中箇所を中心とする包含層出土のものと、地下式横穴墓の竪坑内から出土したものに大別できる。集中箇所からは、破碎された状態で出土している。以下、主要なものについて見ていく。



第58图 立切74号地下式横穴墓

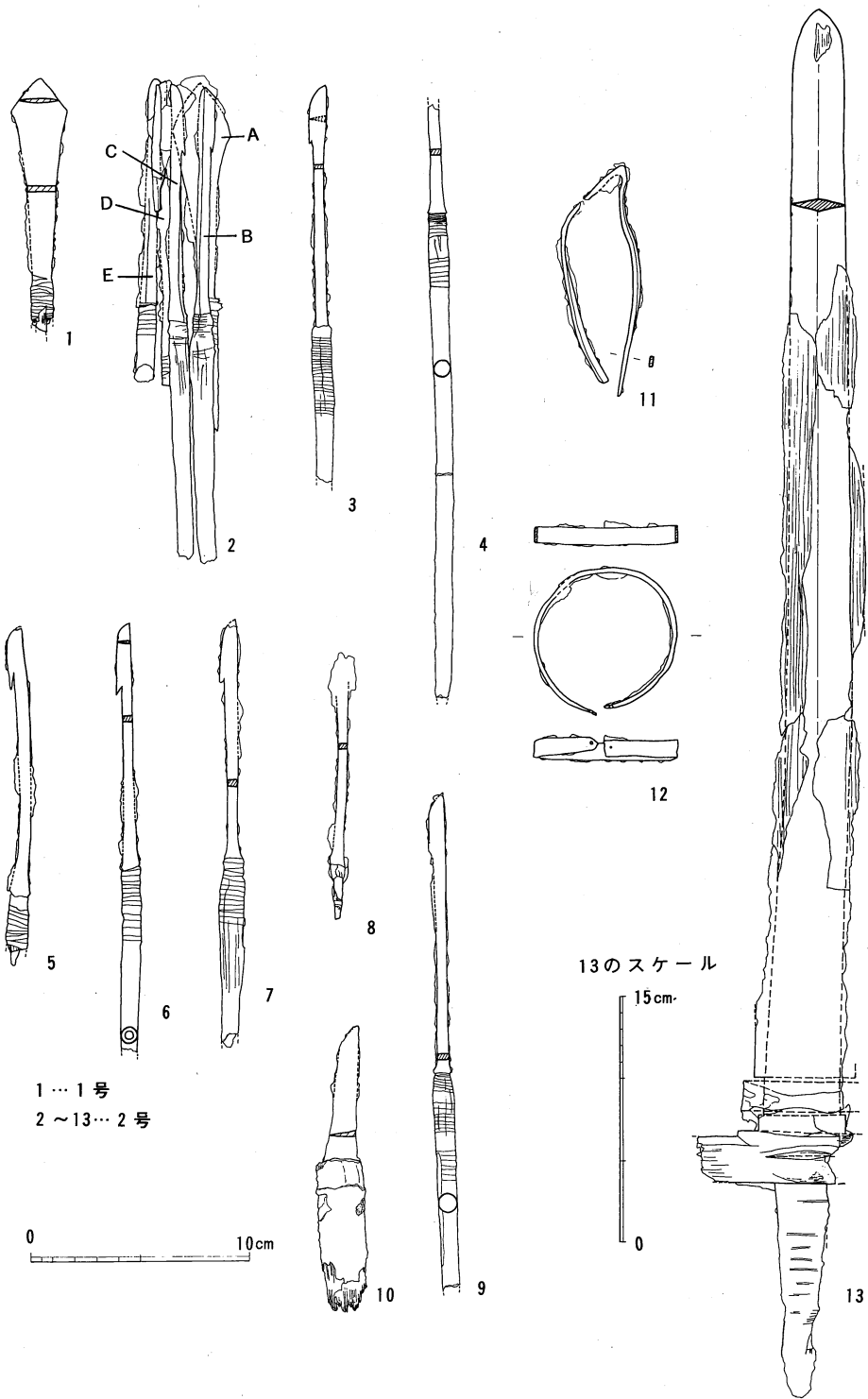




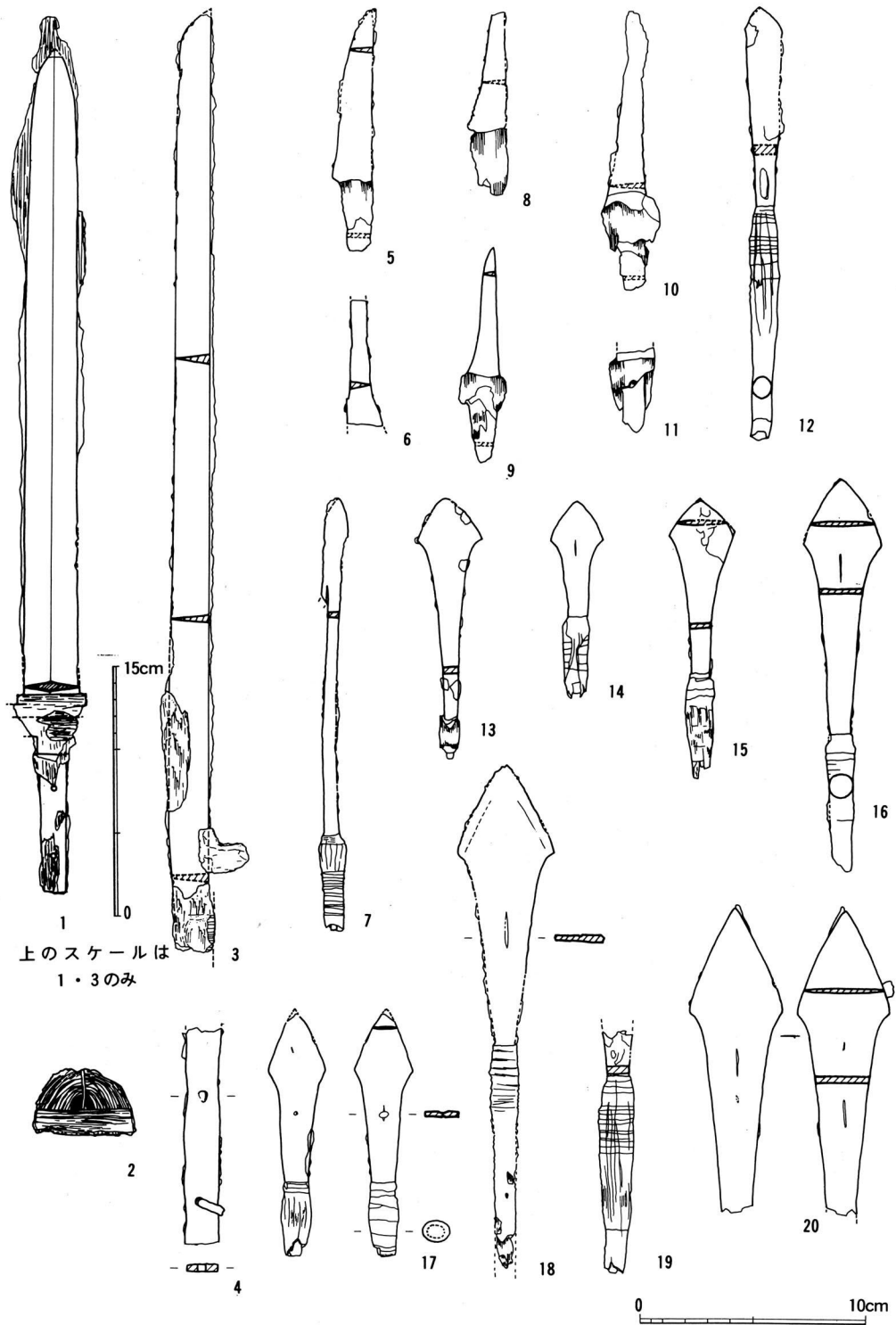
第59図 立切41号・66号土坑

第73図12は、45号地下式横穴墓の竪坑内より出土したもので、在地の小型壺の1型式と考えられるものである。底面には小さな突起が付されているが、これは南九州の小型壺にしばしば認められるものである。5世紀後半の所産と考えられる。第73図13は、B-8区から単独で出土した高杯の脚部である。外面調整はハケと削りに近いナデ、内面はハケで端部付近はヨコナデが施される。断面からは、脚部の外面上端部から杯部を接合していき、内部を充填していったと看取れる。第74図には壺形土器の破片を掲載している。4はA群出土の壺底部、6・9はB群の壺頸部である。突帯に「ハ」の字の刻みを施している。2は包含層出土（地点不明）のものである。白色・乳白色の砂粒を多く含む。外面に楡描波状文が施されている。内面はヨコハケによる調整がなされる。5は51号地下式横穴墓の竪坑周辺からの破片で、茶褐色を呈し、焼成は良好である。口縁端部は丸くおさまり内外面とも横方向のナデ調整である。

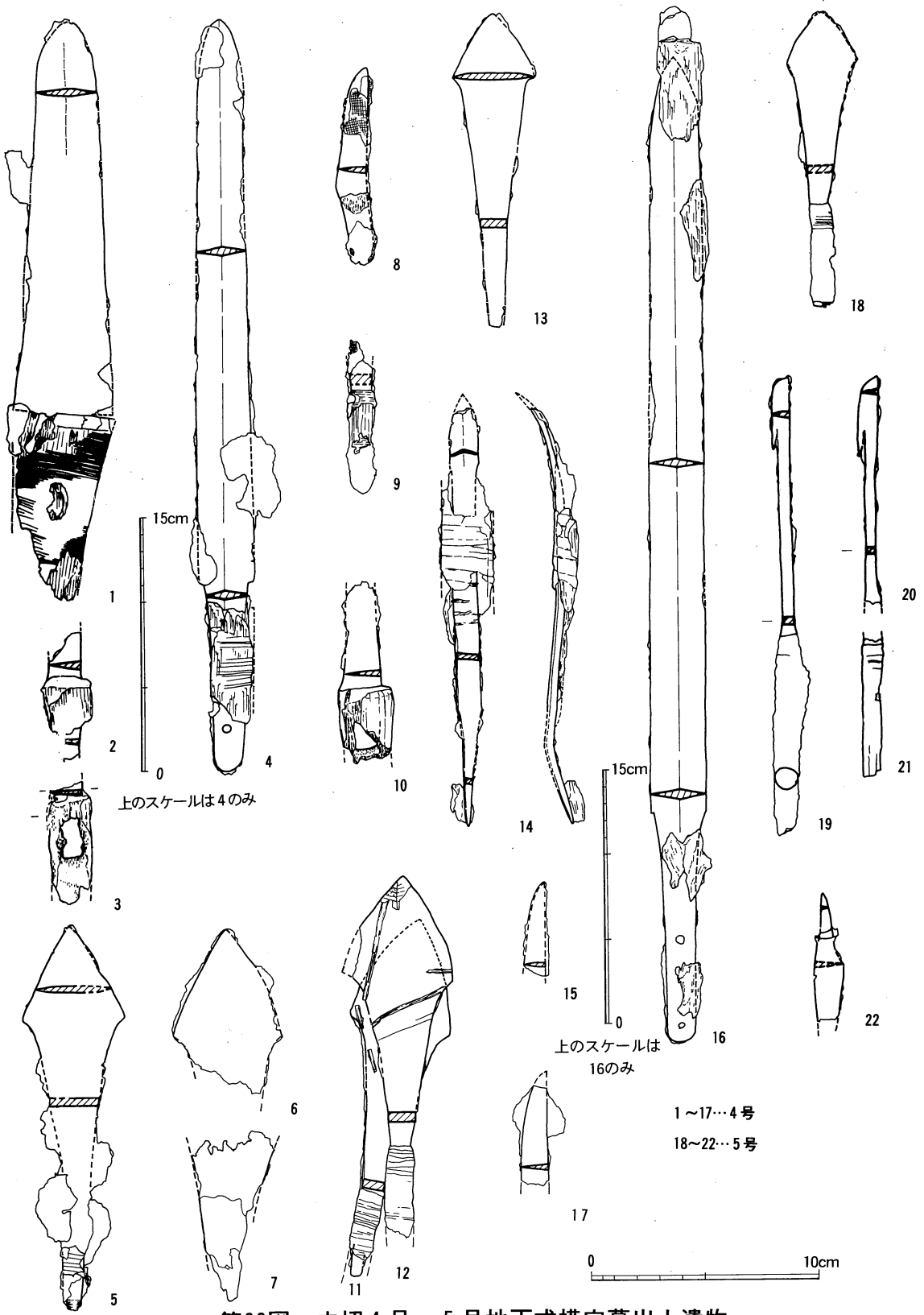
土器については詳細な実年代の不明なものが多いが、おおよそ地下式横穴墓の構築時期と重なりと推測している。特に集中地域のA群は、地下式横穴墓の空白域に存在するため、地下式横穴墓の構築、葬送と関連するものと考えられる。



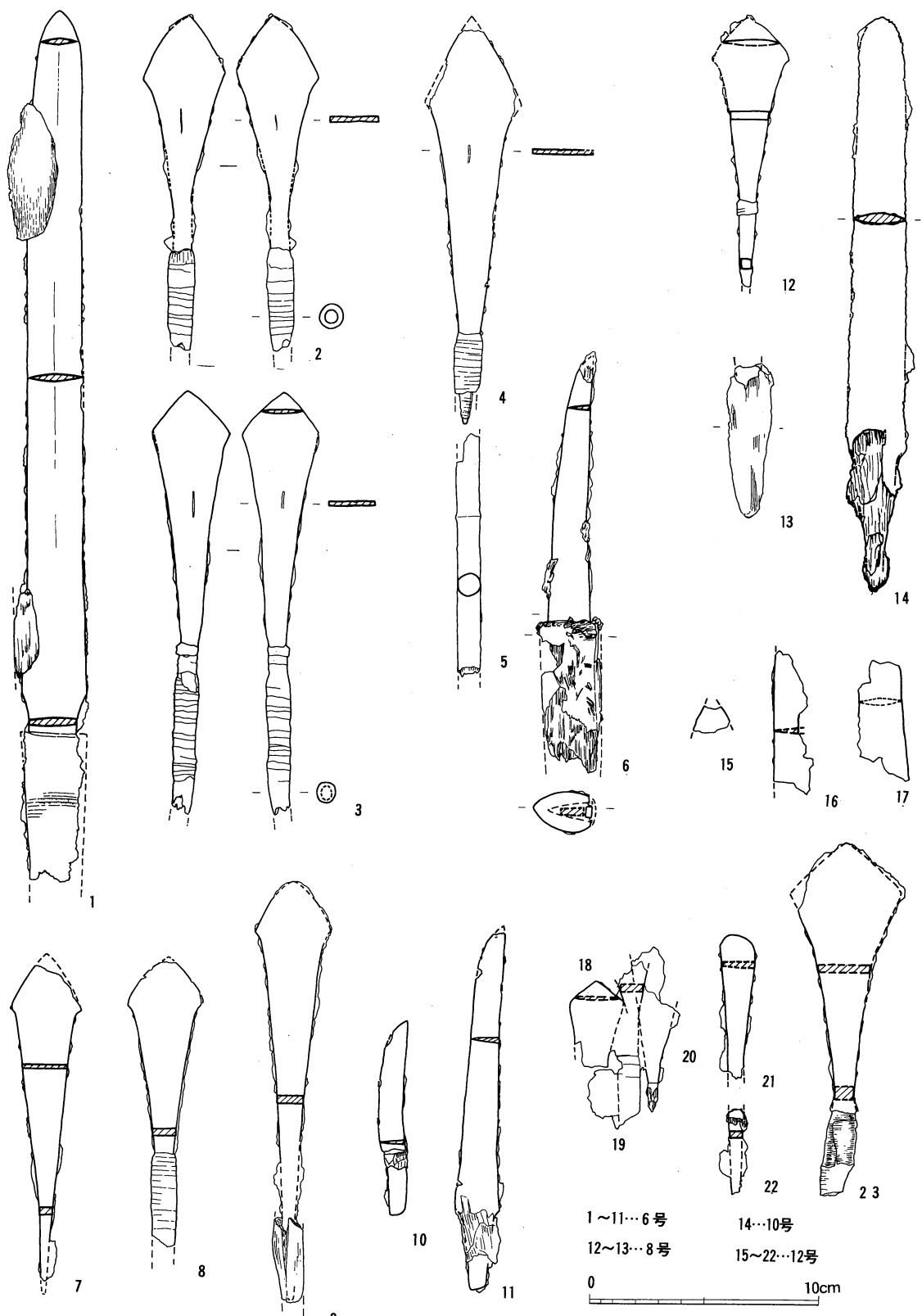
第60図 立切1号・2号地下式横穴墓出土遺物



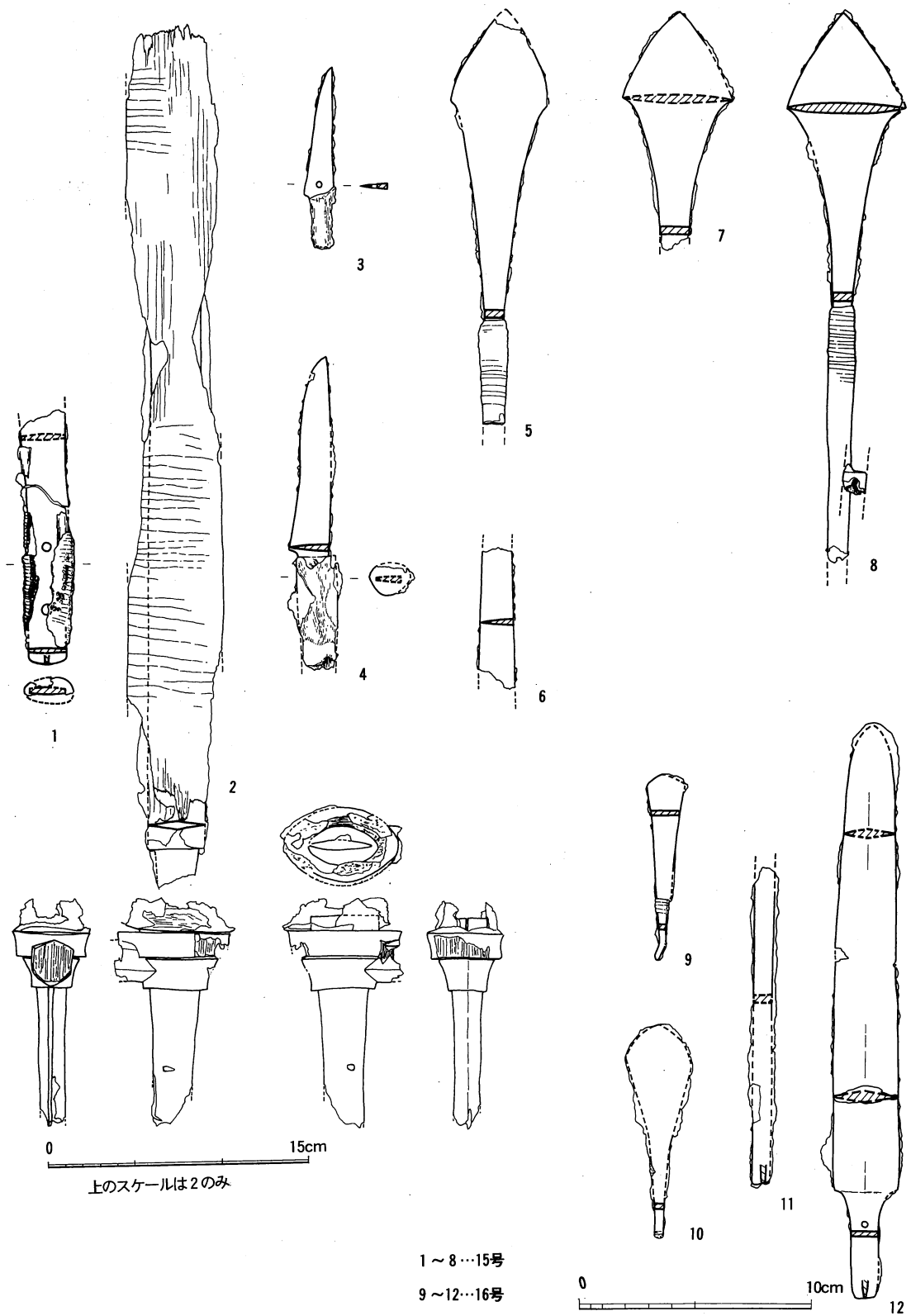
第61図 立切 3号地下式横穴墓出土遺物



第62図 立切4号・5号地下式横穴墓出土遺物



第63图 立切6号·8号·10号·12号地下式横穴墓出土遺物

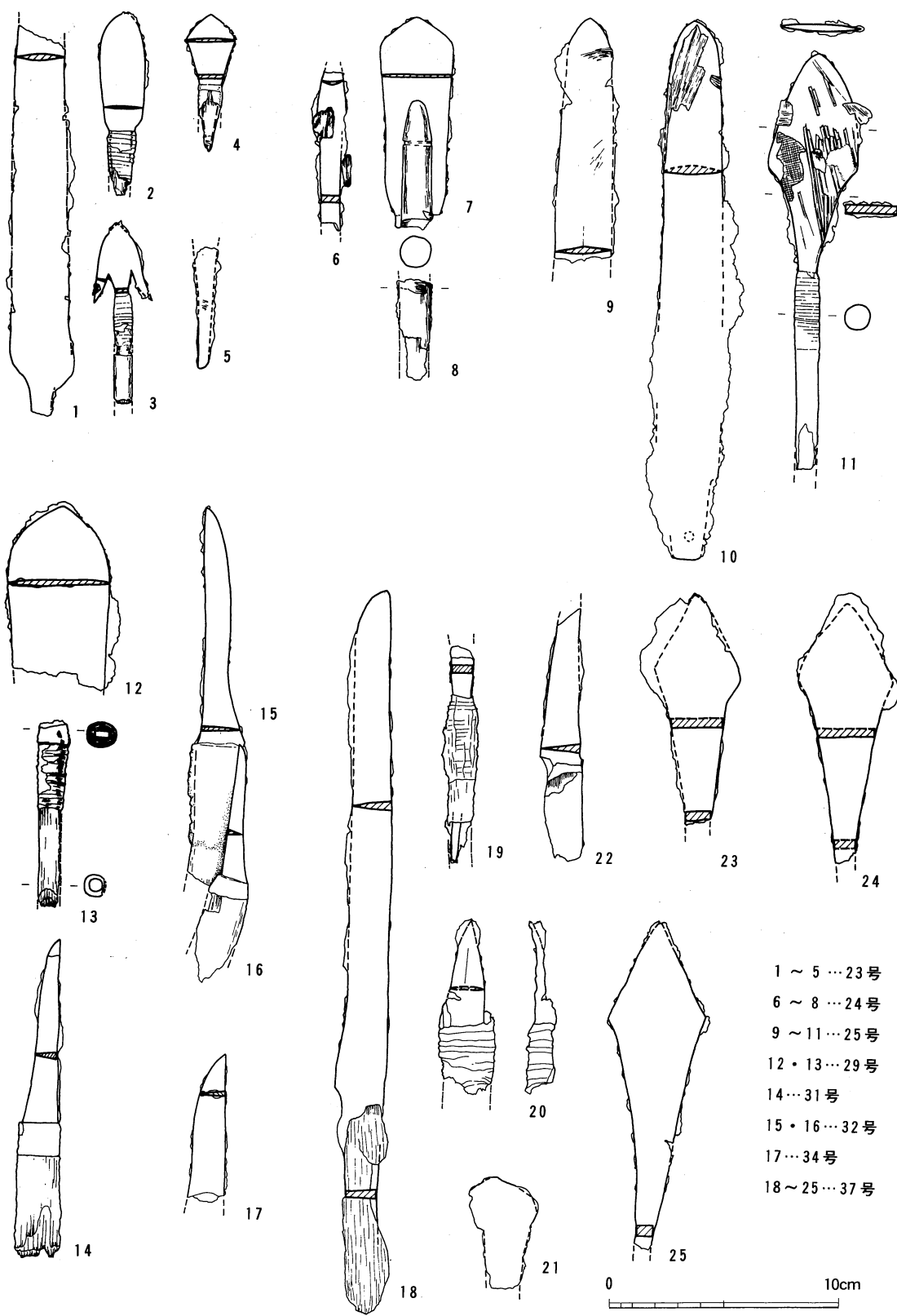


上のスケールは2のみ

1~8...15号

9~12...16号

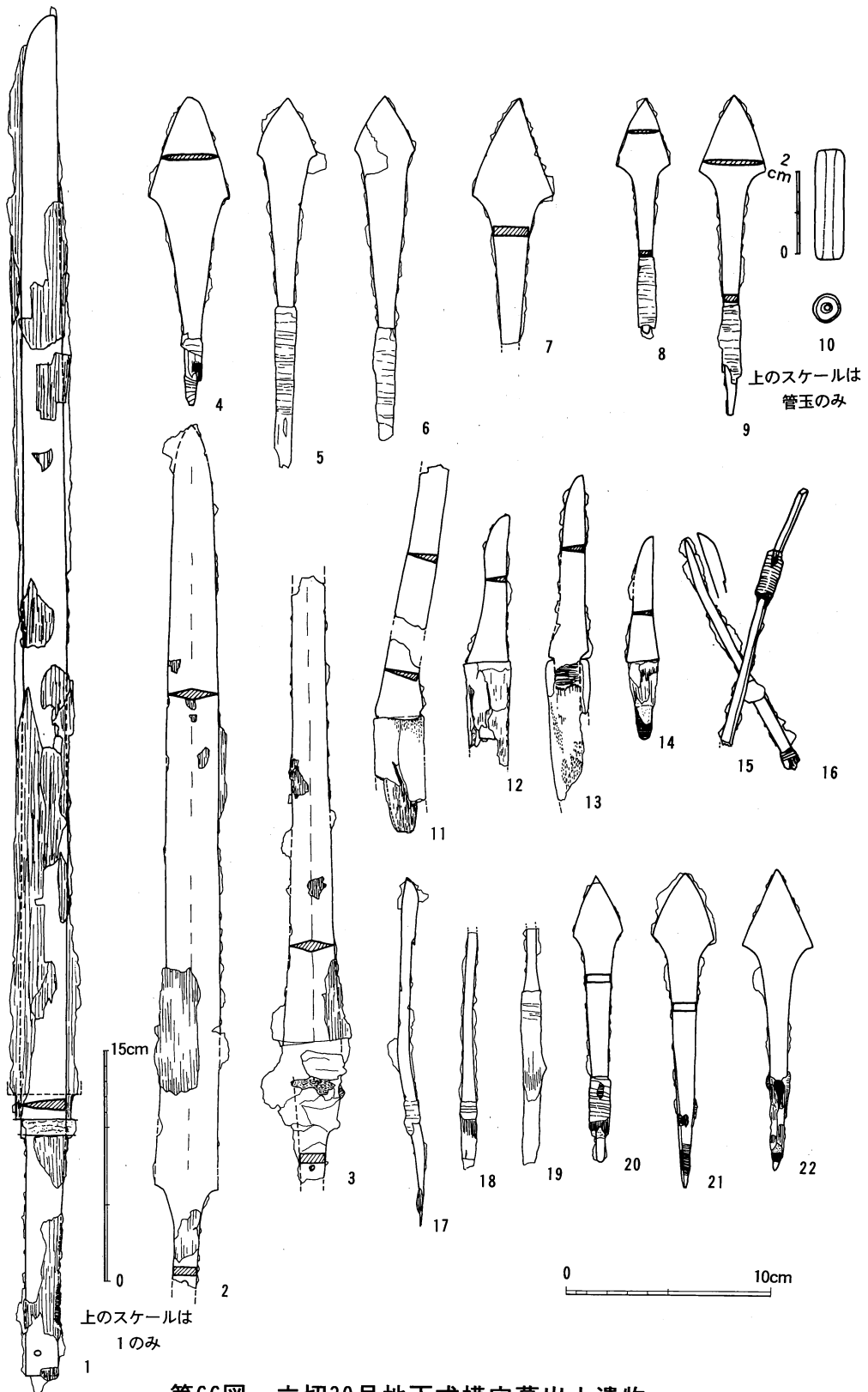
第64図 立切15号・16号地下式横穴墓出土遺物



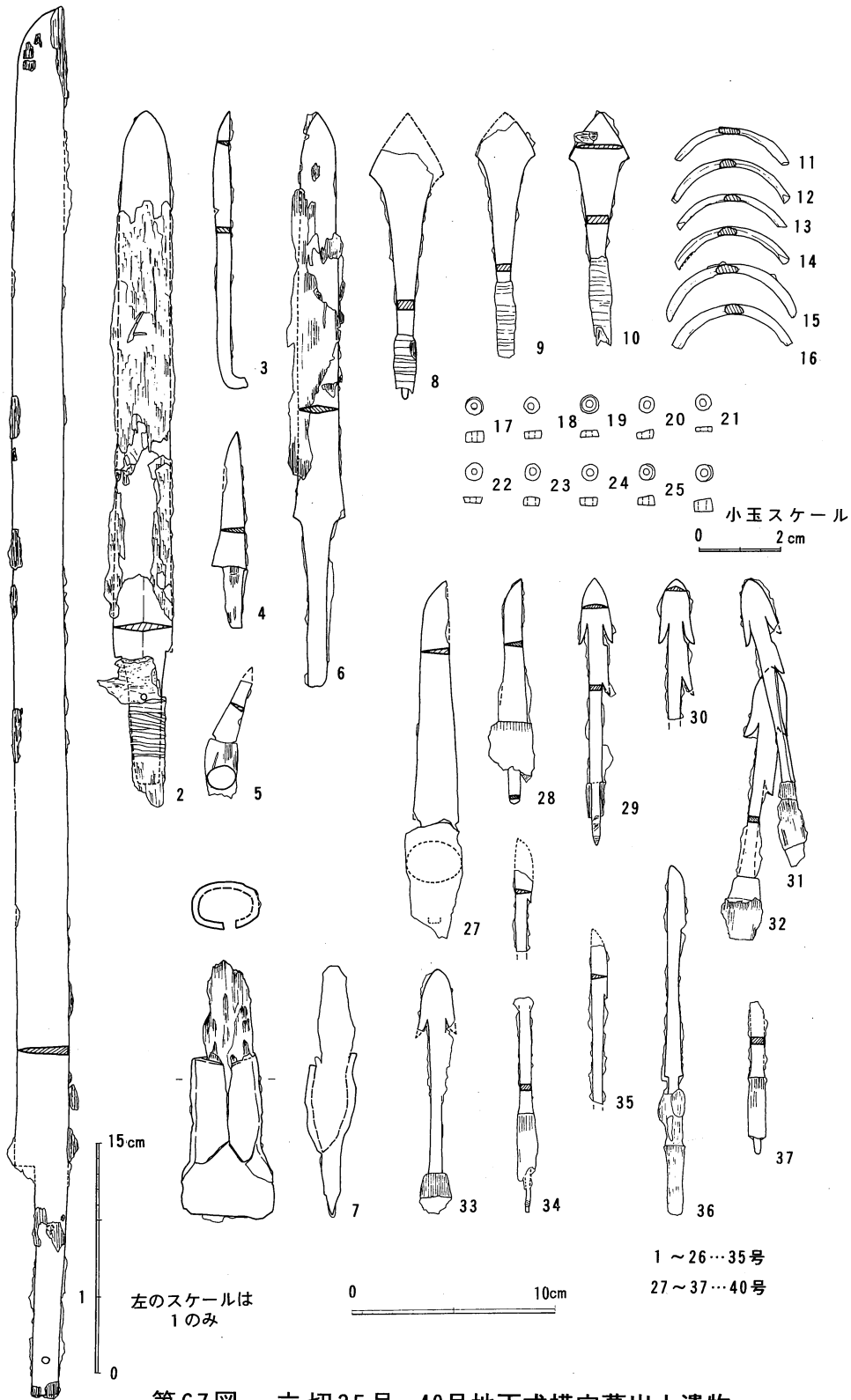
- 1 ~ 5 ... 23号
- 6 ~ 8 ... 24号
- 9 ~ 11 ... 25号
- 12 · 13 ... 29号
- 14 ... 31号
- 15 · 16 ... 32号
- 17 ... 34号
- 18 ~ 25 ... 37号

第65图 立切23号·24号·25号·29号·31号·32号·34号·37号地下式横穴墓出土遺物

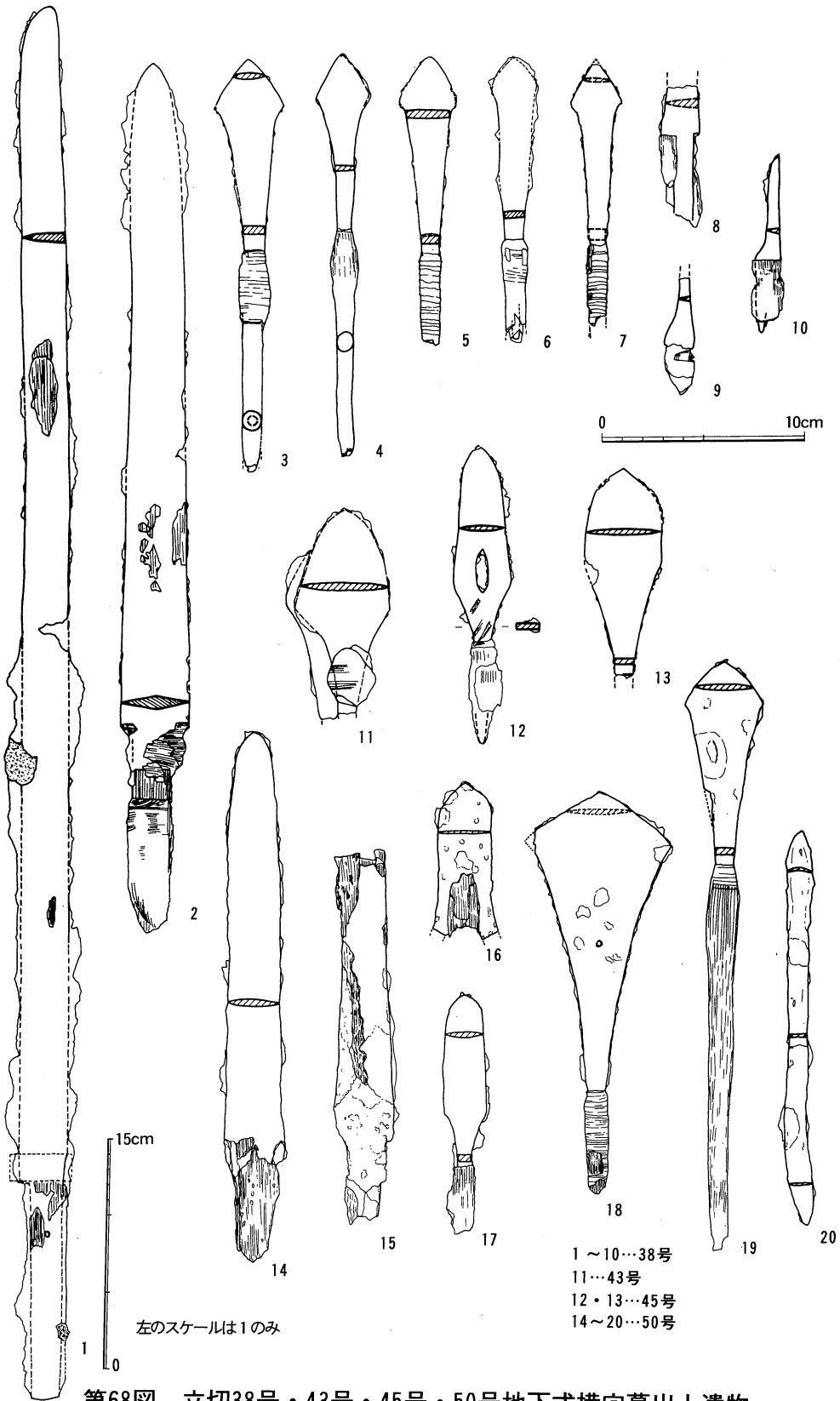




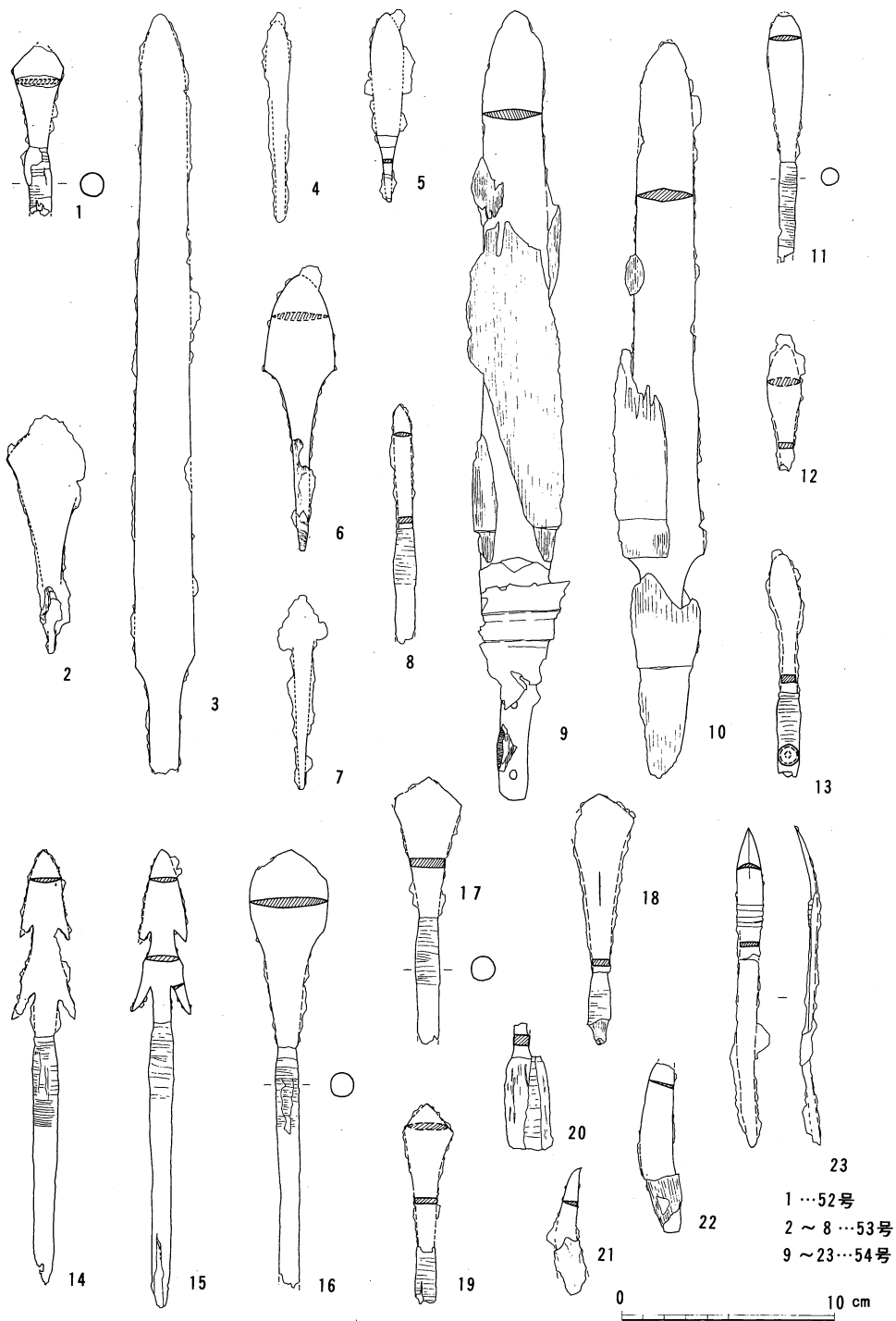
第66図 立切30号地下式横穴墓出土遺物



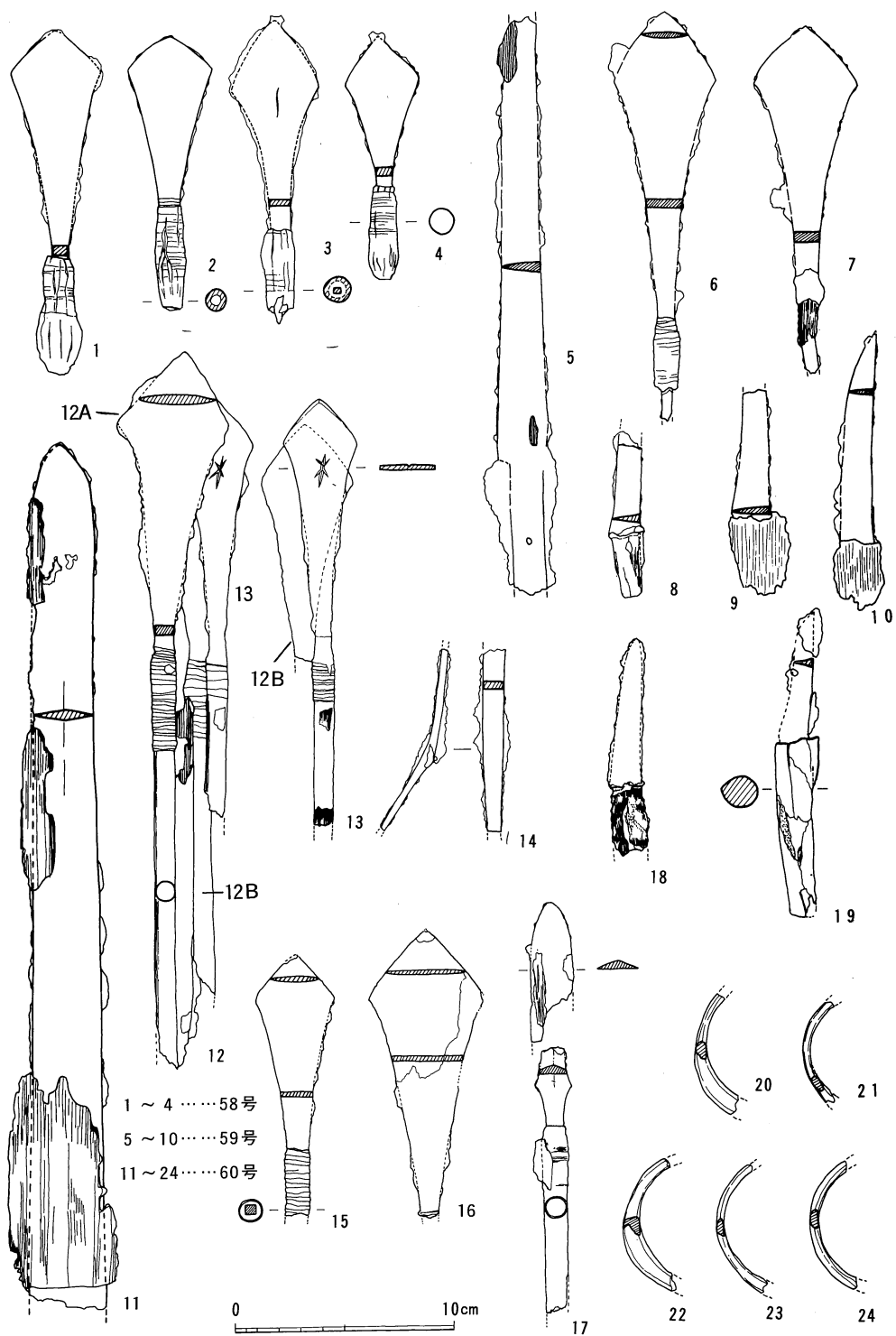
第67図 立切35号・40号地下式横穴墓出土遺物



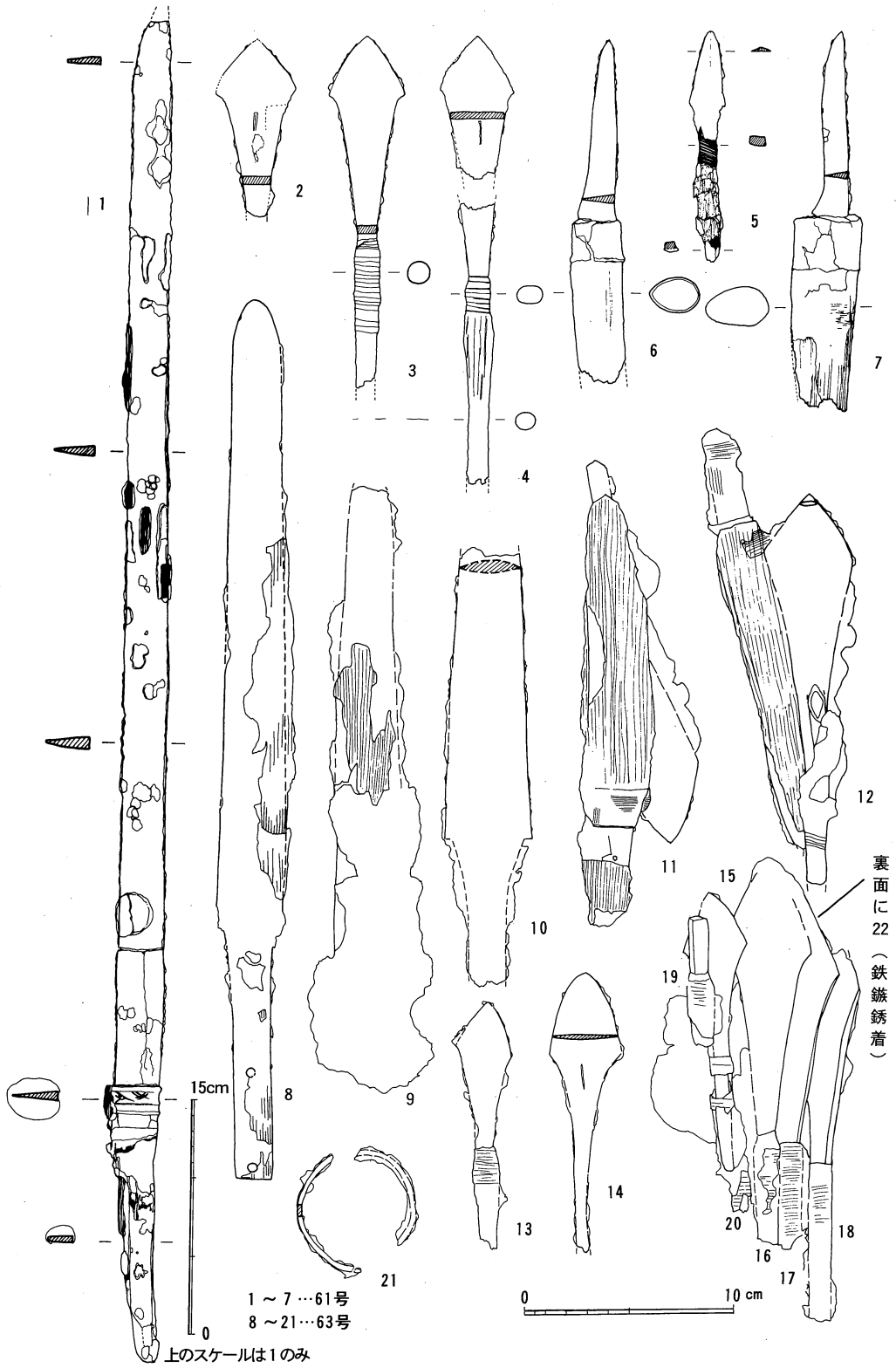
第68図 立切38号・43号・45号・50号地下式横穴墓出土遺物



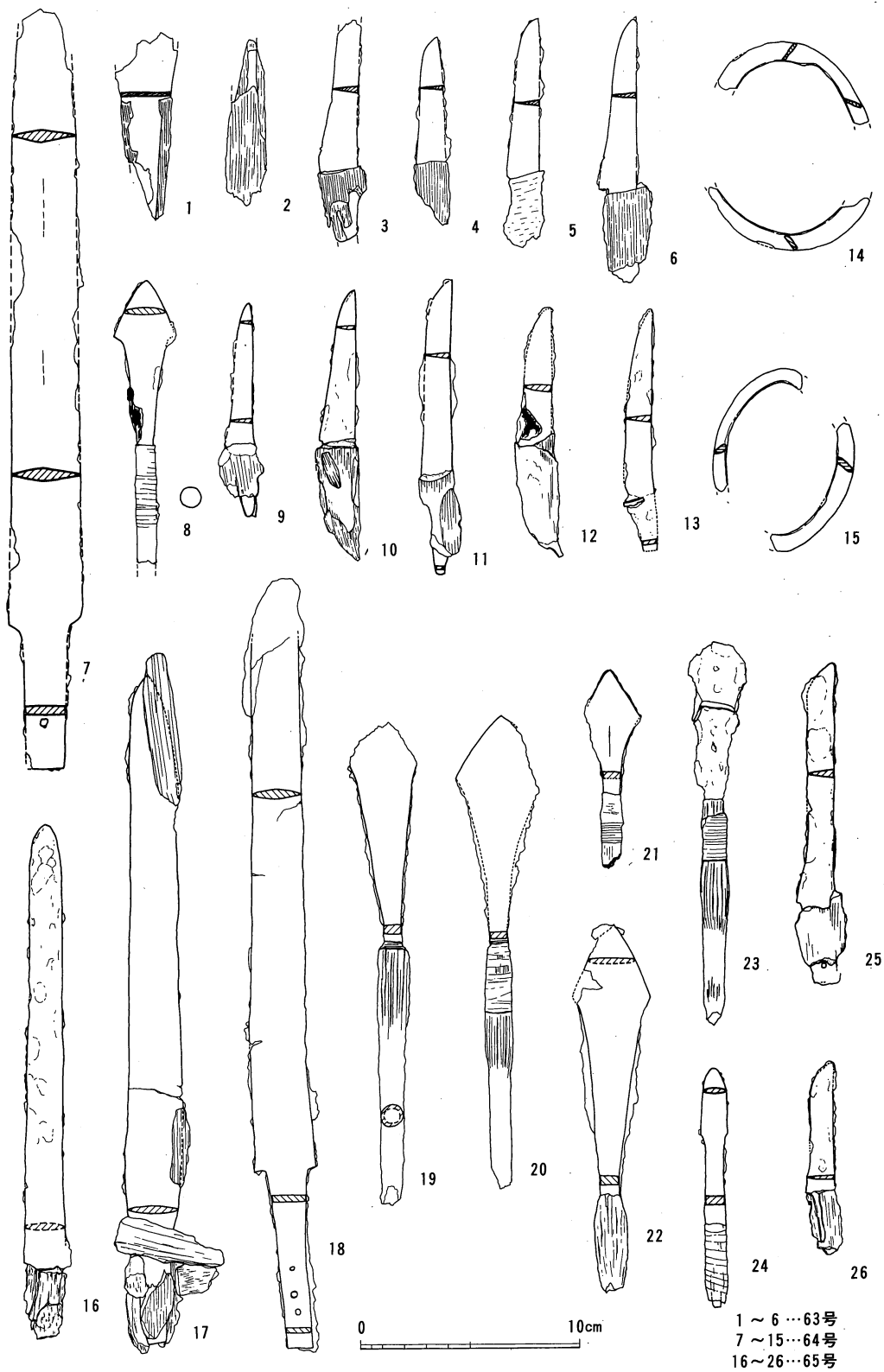
第69图 立切52号·53号·54号地下式横穴墓出土遺物



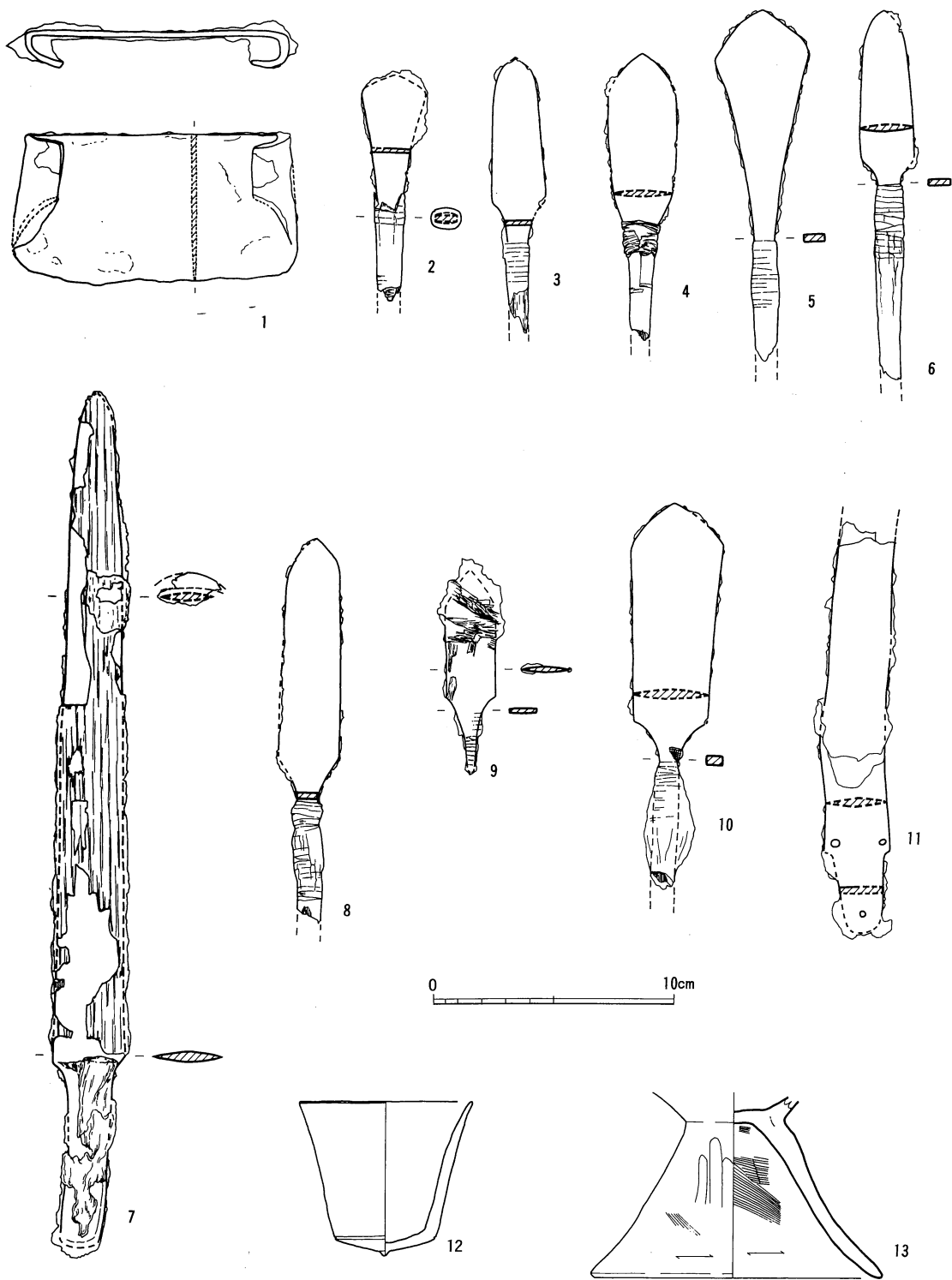
第70图 立切58号·59号·60号地下式横穴墓出土遺物



第71図 立切61号・63号地下式横穴墓出土遺物



第72图 立切63号·64号·65号地下式横穴墓出土遺物



1...65号

9~10...71号

13 B-8区

2...67号

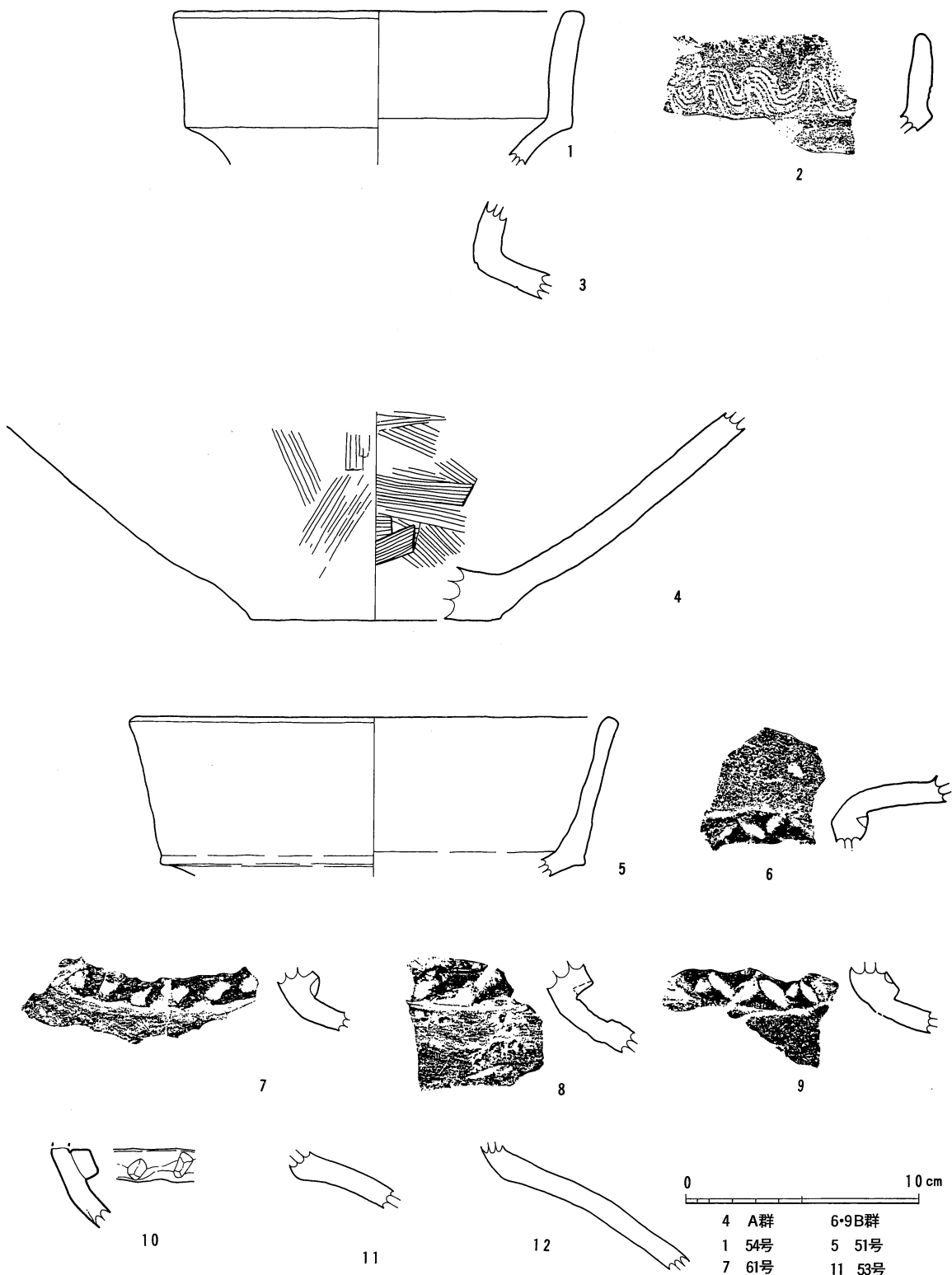
11...74号

3~8...68号

12...45号

第73图 立切45号·65号·67号·68号·71号·74号地下式横穴墓他出土遺物





第74图 立切18号·51号·53号·54号·61号地下式横穴墓，立切A群·B群他出土土器

# 鉄 器 計 測 表

## 凡 例

1. 計測値の単位は全て *cm* である。遺存状態の良好なものや、特に必要と思われるものについては、大まかではあるが 0.01 *cm* まで計測している。
2. ( ) 内の数値は現存値、< > 内の数値は推定値である。推定値は、計測箇所の欠損部分が比較的少なく、本来の形状を復元し得るものについて記載している。
3. 厚さは、特に記載のない限り、できるだけ遺存状態の良い箇所を選んで計測した。
4. 幅は最大部分で計測した。  
1 剣の刃部幅は現存最大幅を記載しているが、遺存が良好な場合は関部で計測し、計測値に「最大」を付している。  
逆刺のある鉄鏃の身幅は、逆刺を除外した部分の最大幅を計測した。

# 1. 剣

	図面番号	出土地下式横穴墓番号	全長	刃長	刃幅	刃厚	備考
1	第60図-13	2	84.1	66.9	4.6	0.6	
2	第61図-1	3	50.5	38.7	3.1	0.5	
3	第62図-1	4		17.4	最大<4.4>	0.33	
4	第62図-4	4	44.3	33.1	2.9	0.48	
5	第62図-16	4	<57.9>	<44.4>	3.3	0.6	
6	第63図-1	6		29.7	2.8	0.34	
7	第63図-14	10	<24.5>	18.8	2.6	0.5	剣の先端部のみ
8	第63図-15	12					
9	第63図-16	12		(6.2)			
10	第63図-17	12		(5.3)	1.9	0.26	
11	第64図-1	15	(11.0)				基部のみ・厚さ0.28
12	第64図-2	15			3.0	0.5	
13	第64図-12	16	24.7	20.0	2.85	0.46	
14	第65図-1	23	(17.0)	<14.3>	2.5	0.3	
15	第65図-9	25		(10.7)	2.5	0.33	
16	第65図-10	25	23.5	19.9	3.0	<0.38>	
17	第66図-2	30	(42.0)	37.2	最大3.1	0.5	
18	第66図-3	30	(29.4)	(22.7)	2.6	0.45	
19	第67図-2	35	43.7	35.5	最大3.8	0.5	
20	第67図-6	35	28.1	19.8	最大<2.6>	0.4	
21	第68図-2	38		32.6	最大3.4	0.65	
22	第68図-14	50	<25.5>	19.7	2.8	0.37	
23	第68図-15	50	(18.0)	<17.8>	最大3.0	0.3	
24	第69図-3	53	(35.5)	29.9	最大2.8		
25	第69図-9	54	36.8	26.8	最大3.3	0.45	
26	第69図-10	54		23.9	2.8	0.6	
27	第70図-11	60		(39.8)	3.5	0.45	
28	第71図-8	63	42.2	30.1	最大3.1		
29	第71図-9	63			(2.4)		
30	第71図-10	63	(21.0)	(14.0)	最大4.2	0.6	
31	第71図-11	63					
32	第72図-1	63	(8.5)		2.3	0.2	
33	第72図-2	63					72-1の下部(頸部)
34	第72図-7	64	(34.8)	(28.0)	最大3.4	0.6	
35	第72図-16	65		20.2	1.9	0.3	
36	第72図-17	65	30.6	24.5	2.6	0.3	
37	第72図-18	67	35.2	26.9	最大2.9	0.45	
38	第73図-7	68	35.5	27.9	最大3.0	0.45	
39	第73図-11	74	(17.1)	(13.8)	最大2.7	0.37	

2. 刀							
	図面番号	出土地下式横穴墓番号	全長	刃長	刃幅	刃厚	備考
1	第61図-3	3	(55.8)	<48.6>	2.3	0.55	
2	第61図-4	3					茎部のみ
3	第65図-18	37		21.7	2.2	0.4	
4	第66図-1	30	87.8	71.4	関近<2.9	関近<0.7	
5	第67図-1	35	90.1	74.4	3.2	0.53	
6	第68図-1	38	90.8	<75.4>	3.1	0.65	
7	第70図-5	59	(26.2)	(20.3)	2.2	0.5	
8	第71図-1	61	<86.0>	<69.3>	3.0	0.5	

### 3. 鉄鏃

	図面番号	出土地下式横穴墓番号	全長	身長	身幅	備考
1	第60図-1	1	(11.5)	9.1	2.5	
2	第60図-2A	2		<9.3>	<2.9>	
3	第60図-2B	2		10.4	0.7	
4	第60図-2C	2		<10.4>	<0.7>	
5	第60図-2D	2		10.6	<0.7>	
6	第60図-2E	2		10.1	<0.7>	
7	第60図-3	2		11.0	0.78	
8	第60図-4	2		(5.0)	(0.5)	
9	第60図-5	2	(15.4)	<12.3>	0.8	
10	第60図-6	2		11.3	0.7	
11	第60図-7	2		<10.8>	0.85	
12	第60図-8	2	(13.2)	(9.7)	<0.45>	
13	第60図-9	2		<12.8>	0.8	
14	第61図-7	3		15.1	1.0	
15	第61図-12	3		8.9	1.7	
16	第61図-13	3	11.7	<7.9>	2.85	
17	第61図-14	3	<8.6>	5.2	2.3	刻印有り
18	第61図-15	3		<8.1>	<2.9>	
19	第61図-16	3		11.4	3.5	刻印有り
20	第61図-17	3	<11.1>	<7.7>	2.6	刻印有り
21	第61図-18	3		12.5	4.3	刻印有り
22	第61図-19	3		(2.0)	(1.4)	
23	第61図-20	3		(13.6)	4.1	刻印有り
24	第62図-5	4	17.0	<12.0>	4.5	
25	第62図-6	4		(7.4)	4.8	
26	第62図-7	4	(7.6)		3.65	
27	第62図-9	4		(2.2)	(1.05)	
28	第62図-11	4	16.1	12.1	4.5	

	図面番号	出土地下式横穴墓番号	全長	身長	身幅	備考
29	第6 2 図-1 2	4	<15.2>	11.9	<5.0>	
30	第6 2 図-1 3	4	(13.8)		3.6	
31	第6 2 図-1 8	5	13.0	8.5	3.1	
32	第6 2 図-1 9	5		11.3	0.8	
33	第6 2 図-2 0	5		<10.1>	0.85	
34	第6 2 図-2 1	5				62-20の矢柄
35	第6 3 図- 2	6		10.1	3.1	刻印有り
36	第6 3 図- 3	6		11.0	3.35	刻印有り
37	第6 3 図- 4	6	<17.7>	<13.8>	<4.2>	刻印有り
38	第6 3 図- 7	6	<14.2>	<10.5>	<3.1>	
39	第6 3 図- 8	6		<8.5>	<3.3>	
40	第6 3 図- 9	6	18.2		3.3	
41	第6 3 図-1 2	8	(11.7)	7.9	3.35	
42	第6 3 図-1 8	12		(3.7)	<2.3>	
43	第6 3 図-1 9	12				
44	第6 3 図-2 0	12	(7.2)			
45	第6 3 図-2 1	12		(6.2)	1.45	
46	第6 3 図-2 2	12				茎部のみ・長さ3.2 幅0.6
47	第6 3 図-2 3	12		<11.3>	<4.8>	
48	第6 4 図- 5	15		(13.3)	<4.3>	
49	第6 4 図- 7	15		(10.2)	4.8	
50	第6 4 図- 8	15		12.6	<5.1>	
51	第6 4 図- 9	16	8.1	5.4	1.6	
52	第6 4 図-1 0	16	9.2	5.85	2.9	
53	第6 5 図- 2	23		5.1	1.95	
54	第6 5 図- 3	23		3.1	2.0	
55	第6 5 図- 4	23	6.0	3.05	<2.2>	
56	第6 5 図- 5	23	(5.3)			茎部のみ・最大幅0.95
57	第6 5 図- 7	24		8.5	3.25	
58	第6 5 図-1 1	25		9.5	3.9	
59	第6 5 図-1 2	29		(8.0)	4.4	
60	第6 5 図-1 3	29				65-12の茎部・幅0.6
61	第6 5 図-1 9	37	(9.4)	(2.2)	(1.0)	
62	第6 5 図-2 1	37		(4.5)		
63	第6 5 図-2 3	37		(10.1)	<3.8>	
64	第6 5 図-2 4	37		(11.2)	<4.1>	
65	第6 5 図-2 5	37	(14.2)	13.7	4.3	
66	第6 6 図- 4	30	15.0	11.7	3.9	
67	第6 6 図- 5	30		10.1	2.9	
68	第6 6 図- 6	30		11.3	2.9	
69	第6 6 図- 7	30		(11.9)	4.0	
70	第6 6 図- 8	30	11.4	7.6	<2.6>	

	図面番号	出土地下式横穴墓番号	全長	身長	身幅	備考
71	第66図-9	30	15.6	10.2	3.3	
72	第66図-15	30	(13.0)		(0.45)	
73	第66図-16	30		<11.4>	(0.7)	
74	第66図-17	30	(16.9)	<11.0>	0.75	
75	第66図-18	30		(8.2)	(0.65)	
76	第66図-19	30		(3.0)	(0.9)	
77	第66図-20	30	<13.8>	<9.6>	2.4	
78	第66図-21	30	15.2	10.8	3.0	
79	第66図-22	30	14.6	9.9	3.4	
80	第67図-8	35	<14.0>		<3.6>	
81	第67図-9	35	(11.5)	<8.3>	<3.0>	
82	第67図-10	35		7.0	<3.0>	
83	第67図-29	40	13.1	10.0	1.5	
84	第67図-30	40		(6.8)	1.5	
85	第67図-31	40		10.0	1.6	
86	第67図-32	40		10.4	1.9	
87	第67図-33	40		10.0	1.8	
88	第67図-34	40		(9.7)	1.0	
89	第67図-35	40		(7.8)	0.8	
90	第67図-36	40		10.4	0.9	
91	第67図-37	40	(8.5)	(3.8)		
92	第68図-3	38		9.4	<3.4>	
93	第68図-4	38		8.5	2.6	
94	第68図-5	38	(13.4)	9.7	2.75	
95	第68図-6	38	13.9	8.9	2.2	
96	第68図-7	38		<9.0>	2.5	
97	第68図-11A	43		(10.0)	4.7	
98	第68図-11B	43				
99	第68図-12	45	<14.7>	<9.6>	2.8	透かし有り
100	第68図-13	45		10.1	3.8	
101	第68図-16	50	7.6	7.6	3.2	無茎鏃
102	第68図-17	50	<11.1>	8.4	2.1	
103	第68図-18	50		14.6	<7.1>	小孔有り
104	第68図-19	50		10.0	3.9	
105	第69図-1	52	(7.7)	<5.0>	2.4	
106	第69図-2	53	(11.1)	(7.8)		
107	第69図-4	53	9.4		1.1	
108	第69図-5	53	8.8	5.7	<1.6>	
109	第69図-6	53	12.9		3.4	
110	第69図-7	53	(9.1)			
111	第69図-8	54		5.8	0.8	
112	第69図-11	54		<7.0>	1.65	

	図面番号	出土地下式横穴墓番号	全長	身長	身幅	備考
113	第69図-12	54		(5.8)	1.6	
114	第69図-13	54	10.3	6.4	<1.4>	
115	第69図-14	54		8.7	2.2	二段逆刺
116	第69図-15	54		8.1	2.1	二段逆刺
117	第69図-16	54		9.2	3.6	
118	第69図-17	54		6.5	<3.3>	
119	第69図-18	54	11.7	8.3	<3.2>	刻印有り
120	第69図-19	54	9.6	6.6	2.3	
121	第69図-20	54		(1.6)		茎部の一部のみ残
122	第70図-1	58		<10.2>	<4.1>	
123	第70図-2	58		7.4	3.9	
124	第70図-3	58	14.0	<9.5>	4.1	刻印有り
125	第70図-4	58		<6.6>	3.4	
126	第70図-6	59	(18.8)	13.9	4.7	
127	第70図-7	59	(15.9)	<11.1>	4.7	
128	第70図-12A	60		13.5	<5.3>	
129	第70図-12B	60		10.8	4.3	
130	第70図-13	60		11.0	3.4	刻印有り
131	第70図-15	60	(11.8)	<8.9>	3.6	
132	第70図-16	60		<13.0>	<5.4>	
133	第70図-17	60			1.9	
134	第71図-2	61		(8.5)	3.8	刻印有り
135	第71図-3	61		9.7	3.6	
136	第71図-4	61			3.5	
137	第71図-12	63		<13.3>	4.3	
138	第71図-13	63		7.0	2.9	
139	第71図-14	63	(13.4)		3.5	
140	第71図-15	63	13.2	7.9	3.1	
141	第71図-16	63		<12.8>	<4.2>	
142	第71図-17	63				
143	第71図-18	63		(10.5)	<3.7>	
144	第71図-19	63				頸部一部残・長さ2.5、幅0.5
145	第71図-20	63	(13.6)	<10.9>		
146	第71図-22	63	(12.9)	(10.1)		
147	第72図-8	64		7.5	2.9	
148	第72図-19	65		(10.0)	3.1	
149	第72図-20	65		10.3	3.8	
150	第72図-21	65		5.7	(2.1)	刻印有り
151	第72図-22	65		12.3	<3.5>	
152	第72図-23	65		(6.9)	(2.6)	
153	第72図-24	65	10.9	7.0	1.2	
154	第73図-2	65	<9.4>	4.9	<2.1>	

	図面番号	出土地下式横穴墓番号	全長	身長	身幅	備考
155	第73図-3	68		<7.6>	<2.2>	
156	第73図-4	68		7.0	2.8	
157	第73図-5	68		9.6	3.9	
158	第73図-6	68		7.2	2.3	
159	第73図-8	68		10.9	2.5	
160	第73図-9	71	<8.5>	<6.0>	2.1	
161	第73図-10	71		10.7	3.9	

#### 4. 鉄斧

	図面番号	出土地下横穴墓番号	全長	刃部幅	袋状部径	重量
1	第67図-7	35	8.1	4.4	2.6	136g木質と含浸の樹脂含む

#### 5. 鉞

	図面番号	出土地下横穴墓番号	全長	刃部最大	身幅	身の太さ	備考
1	第62図-14	4	<19.3>	1.3	1.0	0.27	
2	第64図-11	16	(13.7)		0.9	0.33	身部の一部
3	第65図-6	24	(6.9)	<1.3>	0.85		
4	第65図-20	37	(7.1)	1.7			刃部のみ
5	第68図-20	50	19.3	1.2	0.9	0.2	
6	第69図-23	54	14.9	1.3	0.9	0.2	
7	第70図-14	60	(8.4)		1.0	0.35	身部の一部
8	第71図-5	61	11.1	1.7	0.8	0.4	

#### 6. 茎刀子

	図面番号	出土地下式横穴墓番号	全長	刃長	刃関部幅	刃部厚さ	備考
1	第60図-10	2		6.1	1.5	0.25	
2	第61図-5	3	10.8	7.5	1.8	0.2	
3	第61図-6	3		(5.5)		0.3	
4	第61図-8	3		(5.3)	1.65	0.2	
5	第61図-9	3	9.6	5.7	1.4	0.17	
6	第61図-10	3	(12.4)	(8.1)	1.65	0.2	
7	第61図-11	3					茎部のみ・厚さ0.3
8	第62図-2	4	(5.1)	(1.9)	1.55	0.35	
9	第62図-3	4		(0.5)	<1.5>	0.17	
10	第62図-8	4	8.6	5.5	1.4	0.28	
11	第62図-10	4	(7.4)	(4.7)	1.9	0.3	
12	第62図-15	4		(4.1)		0.18	
13	第62図-17	4		(5.4)		0.25	
14	第62図-22	5		3.2	1.2	0.25	
15	第63図-6	6		<11.5>	1.9	0.27	
16	第63図-10	6	8.5	5.6	1.1	0.18	



	図面番号	出土地下式横穴墓番号	全長	刃長	刃関部幅	刃部厚さ	備考
17	第63図-11	6	<15.8>	<12.3>	2.0	0.22	
18	第63図-13	8					
19	第64図-3	15	7.7	5.4	1.25	0.23	
20	第64図-4	15		8.6	1.7	0.28	
21	第64図-6	15		(6.1)		0.27	
22	第65図-14	31		<8.1>	<1.7>	0.28	
23	第65図-15	32		10.3	2.0	0.23	
24	第65図-16	32		5.8	1.2	0.2	現存身幅最大1.6
25	第65図-17	34		(6.5)		0.25	
26	第65図-22	37		(6.8)	1.8	0.35	
27	第66図-11	30	(16.2)		2.3	0.37	
28	第66図-12	30	10.9	7.1	2.1	0.28	
29	第66図-13	30	<14.9>	8.9	1.9	0.35	
30	第66図-14	30	9.8	5.9	1.6	0.2	
31	第67図-4	35	9.6	6.6	1.65	0.25	
32	第67図-5	35	<6.3>	3.9	1.2	関部0.15	
33	第67図-27	40	<16.7>	11.9	<2.2>	0.5	
34	第67図-28	40	11.1	7.0	1.4	0.25	
35	第68図-8	38	(6.7)		1.9	<0.4>	
36	第68図-9	38		(3.4)	1.4	0.2	
37	第68図-10	38	8.7	5.1	1.2	0.23	
38	第69図-21	54		<3.4>	1.4	0.23	
39	第69図-22	54	(8.0)	(5.4)	1.4	0.15	
40	第70図-9	59		(5.7)	1.8	0.45	
41	70図-10	59		<9.8>	1.6	0.25	
42	第70図-8	60	(7.6)	(4.7)	1.45	0.3	
43	第70図-18	60		16.9	1.5		
44	第70図-19	60		5.7	1.35	0.25	
45	第71図-6	61		8.5	1.8	0.4	
46	第71図-7	61		8.8	1.75	0.3	
47	第72図-3	63	(10.1)	(6.7)	1.8	0.3	
48	第72図-4	63		5.6	1.4	0.2	
49	第72図-5	63		7.2	1.5	0.25	
50	第72図-6	63		<7.8>	1.7	0.25	
51	第72図-9	64	9.8	6.5	1.4	0.25	
52	第72図-10	64		7.2	1.6	0.2	
53	第72図-11	64	13.5	9.1	1.5	0.27	
54	第72図-12	64		6.3	<1.5>	0.3	
55	第72図-13	64	11.1	8.6	1.3	0.3	
56	第72図-25	65	14.6	10.9	1.8	0.35	
57	第72図-26	65		5.9	1.3	0.2	

7. 蕨手刀子

	図面番号	出土地下式横穴墓番号	全長	刃長	刃関部幅	刃部厚さ	備考
1	第67図-3	35	13.6	4.5	0.9	0.25	

8. 鋏先

	図面番号	出土地下式横穴墓番号	全長	幅	厚さ	備考
1	第73図-1	65	6.1	11.0~<11.9>	0.2	

9. 鉄釧

	図面番号	出土地下式横穴墓番号	直径	幅	厚さ	備考
1	第60図-12	2	6.7	0.7	0.15	両端に小孔有り
2	第71図-21	63	6.0	0.6	0.23	端部に小孔有り、一端は欠損

10. 毛抜き状鉄器

	図面番号	出土地下式横穴墓番号	全長	幅	厚さ	備考
1	第60図-11	2	10.3	0.5	0.15	

### III ま と め

立切地下式横穴墓群では、2次にわたる発掘調査で72基の地下式横穴墓、土坑2基及び地下式横穴墓群に伴うと考えられる土器群が2群検出された。72基もの地下式横穴墓の発見は、300余基の地下式横穴墓から成るえびの市小木原地下式横穴墓群に次ぐ地下式横穴墓群である。今回の調査は、丘状地形の町道の西の頂部から西斜面の約8000㎡であり、地下式横穴墓の分布状況から見て町道の東斜面にも分布すると考えられ、立切地下式横穴墓群では総数100基は所在すると推定される。

#### 構造について

切地下式横穴墓群の構造を、羨道、玄室、天井の形態から次のように分類する。地下式横穴墓は羨道の形態からⅠ類が片袖、Ⅱ類が両袖の2つの大別する。さらに玄室の平面形等から次のように分類される。A類は玄室の平面形が方形、長方形或いは梯形で、天井は家形である。棚状施設（形態上は家形屋根の庇の部分に当たる。）をもつ例が多く、また、副葬品もこの上に置かれることが多い。B類は平面形がA類に類似し長方形を基本としているが、天井は平ら或いはアーチである。C類は平面形が楕円形で、天井は平ら或いはアーチである。D類は玄室の平面形が先のいずれにも入りがいたものであり、天井は平ら或いはアーチである。B類では竪坑の羨門部両端に板閉塞用の施設である抉りのあるものをB'類とする。B'類はⅠ類にはない。立切地下式横穴墓群では、大半が羨門閉塞であり、37号の1基のみが竪坑上部閉塞である。竪坑上部閉塞は、加久藤盆地（現在のえびの市）に多く見られる閉塞法で小林以東では極端に少なくなる。今回は、37号の玄室等の形態が羨門閉塞の玄室の形態と同じであったので特に分類の観点にいれていないが、高原町、小林市では、羨門閉塞の地下式横穴墓群の中で竪坑上部閉塞の併存する例がある。高原町旭台地下式横穴墓群では13基中1基、小林市新田場地下式横穴墓群では8基中1基など注目される在り方は示している。

調査された72基で、玄室の構造が判明している71基をこの分類法でいくと次のようになる。Ⅰ-A類は天井の形態から次のように細分される。切妻造りのものは4、15、37、51、53、59、60、61、63号で、寄棟造りのものは6、50、54、56、58、65、68号、家形で稜線が崩れ一部アーチ状を呈するものは52、62、64号である。Ⅰ-B類では天井が平らなものは16号で、アーチ状のものは16号である。Ⅰ-C類は8号で、Ⅰ-D類は12、39号である。

Ⅱ-A類で天井が切妻造りであるものは38号、寄棟造りであるのは1、3、35、40号、家形で稜線が崩れ一部アーチ状を呈するものは2、30、31、32号である。Ⅱ-B類は玄室が角のある長方形のものは17、21、23号、平面形が長方形で辺がやや外湾ぎみのものは24、44、46、72、74号、羨道が一方にやや偏り片袖ぎみのものは、5、9、11、26、34、55号、袖が逆「ハ」に開き奥壁がやや外湾ぎみのものは、7、20、22、24、25、28、48、67、69、71号である。Ⅱ-

B'類は10、27、29、42、43、70号である。II-C類は14、18、33、36、45、47、49号で、II-D類は13、19号である。

この様に分類される地下式横穴墓の玄室の規模を大中小で分けると、I-A類は大・中・小があり、小型のものは天井がアーチ状を呈する。B・C類は中型の傾向が強い。II-A類は大型の傾向があり、II-B類は中型の傾向が強いが、小型のものもあり、II-C類は中、小型のである。

堅坑と羨道の関係を見ると、I類で羨道が堅坑の短辺につくのは、23基（この場合は堅坑上部閉塞の37号を除く）中12基ある。12基の中で11基はA類であり、A類では18基中11基が羨道を堅坑の短辺に羨道をもつといえる。II類についてみると47例中は10例で、10例の中にはA類の9基すべてが含まれ、残り1基はII-C類の33号であるが、堅坑はやや乱れた形態を呈している。この33号を除くと、A類以外のII類は長辺に羨道がつくということになる。羨道が堅坑の短辺につく地下式横穴墓は、I類とII類で22例となり、22例の中にA類が20基含まれており、羨道が堅坑の短辺につくタイプは、A類に卓越しているといえよう。

羨道の最小幅は、河原石使用例が多いA類はほぼ40cm～65cmの中に収まり、板使用例の多いB、C類は広くなる傾向があり、B'類は、80cm～115cmと広がっている。

#### 閉塞法について

立切地下式横穴墓群では閉塞は、河原石と板使用があり、河原石使用は71基中21基（30%）で、他は板閉塞である。使用状況を構造分類別に見ると、I類では24例中16例（71%）、II類では47例中5例（11%）である。分類別について見ると、I-A類では19基中14基（74%）、I-B類では2基中1基、I-C類で1基中1基である。II-A類では9基中5基（55%）で、II-B、B'、C、D類には見られない。

河原石使用の閉塞法は、河原石を羨道に石を水平に積み数個を立掛ける方法と河原石を羨門上等に立掛ける方法の2種類があり、前者は21基中17基（81%）である。後者の6基は、I-A類の、50、51、53、68号、I-B類の16号、I-C類の8号である。この6基の羨道は、68号以外は堅坑の長辺或いは堅坑が方形で区別しがたい。

#### 装飾について

地下式横穴墓の装飾は、赤色顔料の塗布、赤色顔料を使用して垂木等を表現、線描、レリーフによる棟木の表現等がある。立切地下式横穴墓群では、赤色顔料の塗布は2号と25号、赤色顔料を使用して垂木等を表現しているのは54号、レリーフにより棟木、束柱等を表現しているのは、I-A類の51号、59号、60号、63号、II-A類の38号である。装飾をしているのは、I-A類に多く、また、レリーフで束柱を表現しているのはA類でも切妻造りの地下式横穴墓で、寄棟造りの場合は棟木のみである。線描の例は、3号、2号で棟木の表現がある。

## 軸の方位と頭位について

立切地下式横穴墓群では、72基の中で丘状地形の頂部B・C-8・9区に立地する27・28・29・42号以外は、南・西斜面に分布している。その主軸は、低位方向に向かうのが3、7、30、32、33、35、38、50、54、59、63号、等高線に平行するのが9、11、55、61号であり、他は主軸が丘状地形の頂部に向う高位方向である。主軸が低位方向或いは等高線に平行している地下式横穴墓を見ると、3号については1号の主軸とほぼ直交する関係にあり、同様な例は、8号と9号、38号と40号、30号と31号、55号と56号等がある。また、7号については3号と向かい合う関係にあり、同様な例は、35号と34号、50号と56号、59号と60号等がある。この様な例は、他の地下式横穴墓群では、高原町旭台地下式横穴墓群、須木村上ノ原地下式横穴墓群、えびの市久見迫地下式横穴墓群、同市馬頭地下式横穴墓群、宮崎市下北方地下式横穴墓群等で見られる。立切地下式横穴墓群では主軸の決定については、32号のように外れる例はあるが、地形と他地下式横穴墓との関係が重要な要素であったと考えられるようである。

頭位については、人骨が遺存し、当時の位置の保っている2・3号など17例について見ると、頭位は、I類では袖のない方の壁際である。63号では、最終埋葬と考えられる5号人骨が前壁の左袖に頭位があるが、1号～4号人骨は袖のない方の壁際である。また、II類では、右壁が頭位となっている。他の地下式横穴墓でも頭位はこの様な例が大半である。したがって、埋葬時頭位方向の決定は、方位を考えて頭位を決定しているのではなく、地下式横穴墓の構造と主軸が重要な要素であったと考えたい。

## 出土遺物について

出土遺物は、剣、直刀、鉄鏃、刀子、鉈、鉄斧、方形鍬先、毛抜状鉄器、貝輪、鉄輪、玉、櫛、朱玉があるが、鉈、鉄斧、毛抜状鉄器、貝輪、鉄輪、玉、櫛、朱玉の出土数は少ない。立切地下式横穴墓群では、遺物はA類の地下式横穴墓からの出土例が多く、組み合わせも諸県郡地域に多い剣、直刀、鉄鏃、刀子の組み合わせが大半である。剣、直刀には、木製の把縁装具等を持つものが多い。鉄鏃は、立切地下式横穴墓群では最も多く出土し、圭頭鏃、柳葉鏃、2段逆刺の柳葉鏃、長頸鏃等がある。その中で圭頭鏃は立切地下式横穴墓群では出土率は高い。圭頭鏃の鏃身部に線状の刻印のあるものが3号、6号、54号、60号等から出土している。刻印は、遺物整理中初めて県内で確認されたが、これまで調査されていた小林市新田場地下式横穴墓などの遺物にもあることが判明している。長頸鏃のうち、刃部が片刃形で頸部の長い長頸鏃はII-A類から出土し、頸部の短い長頸鏃はI-A類から出土している。I-A類から出土する鉄鏃は圭頭鏃が多く、2段逆刺の柳葉鏃を出土したのもI-A類の54号である。鉈は、II-B類の24号から1点出土したほかは、I-A類であり、また、方形鍬先、貝輪もI-A類である。玉は、管玉、平玉がII-A類の32号、35号から出土している。この様に遺物の出土状況は地下式横穴墓の構造と相関関係が認められ、I-A類が古く、II-A類は新しい様相をもつと言える。

土器は、堅坑内、4号、6号周辺及び16号、17号周辺で出土し、出土土器の器種は壺、高坏で甕はない。周辺出土の土器は葬送時等に使用されたものである可能性が高い。時期については2重口縁壺の口縁部に古い様相をもつものもあるが、5世紀代のものであろう。

立切地下式横穴墓群の築造時期は、副葬品の年代観からの上限は5世紀中頃で、下限は6世紀代と推定される。

II-A類の立切3号地下式横穴墓の1号人骨（熟年の男性）は、髪が生え際より後頭部にかけて大型の堅櫛1個が装着され、櫛歯も遺存している。2号人骨（壮年の男性）では小型の堅櫛が1個、3号人骨（小児で性別不明）では小型の堅櫛が2個装着されていた。同一の地下式横穴墓で複数の人骨に装着されていた例は、須木村上ノ原地下式横穴墓にある。上ノ原では、立切3号と同じ構造をもつ9号で1号人骨（女性）に大型の堅櫛が1個が装着され、2号人骨（男性）では小型の堅櫛が9個（5個は頭蓋骨周辺に落下していた。）が装着されていた。この2例は、被葬者の性別に差異はあるが、被葬者の性格を考える上で注目される。

#### 埋葬人骨について

72基中、23基で人骨76体が出土した。複数の人骨が埋葬されているのは16基、1体のみは7基であるが、後者で確実に単独葬といえるのは4基である。人骨が出土した地下式横穴墓の構造は、A類が16基、B類が6基、B'類が1基であり、これは、玄室が深く天井の陥没の少なく、また、閉塞法も関係しているしていると推定される。人骨の性別は、成人では男性が34体、女性が24体、不明7体で、男性が多く埋葬される傾向は指摘しうる。幼小児は11体である。

複数の人骨が埋葬されているのは16基の中で初葬が確実に確認できるのは14基である。うち8例が男性、5例が女性、小児が1例で、男性の比率が高い。小児の例は35号である。35号では、小児の他女性3体の計4体埋葬されており、人骨の配置状況、遺存状況等から同時埋葬の可能性もあり、初葬が小児とするには検討を要する。また、単独葬といえる4基では、男性が2例、女性が1例、不明1例である。

立切地下式横穴墓群出土人骨の形質は、付論で詳報されているが、当地域でこれまで出土した人骨の形質と同じく南九州の内陸部の特徴を持っているということである。

#### 地下式横穴墓の配置状況について

立切地下式横穴墓群で検出された72基の地下式横穴墓は、丘状地形の南斜面から西斜面に分布し、とくに南斜面に密集している。密集地であるA～D-3～5区では、堅坑間の距離は数mで、中には堅坑どうしが接しているようなものもあり、また、玄室を含めて見るとその間隔は1m以内のものもある。71基の地下式横穴墓の配置状況を、構造から分類された形式（大分類で2形式、中分類で9形式、小分類で17形式）の中で大分類と中分類を中心として見ていくこととする。

大分類のI類片袖タイプは、A～G-1～7区の範囲に分布し、とくにA～E-1～3区内

に密集し、その中でA～G区の標高191,5m～192,5mのコンタライン内は所在する地下式横穴墓はI類が大半で、片袖形式の地区の観がある。II類の両袖形式は、西斜面および193mから上に分布している。I類片袖形式とII類の両袖形式は、B～D-3・4区の標高193mラインを両形式の共存地帯として設けて、南北に別れて配置されている。

つぎに、構造、副葬品の質・量に優位性が認められたA類の分布状況を見ると、H-4区からB-9区のライン上に幅約8mの空白地帯をもって、南にI-A類が、北にII-A類が分布しており、まったく混在がない。I-A類の地下式横穴墓は、南斜面の191,5m～193mの間に、堅坑間は4,5m～15mの距離をもって配置されている。近接する地下式横穴墓の中で4号と6号は主軸が直交し、51号と56号、59号と60号とは向い合う関係があり、これを考慮すると7～8mの間隔がある。河原石立て掛けの閉塞は、I-A類の50号、51号、53号、68号、I-B類の16号、57号があるが、B・C-3区とA-5区に分布する。

II-A類について見るとI-6区からE-7区のライン上とJ-8区からD-10区のライン上に分布し、10m以上の間隔をもって、1号と3号、40号と38号、31号と30号の主軸は直交する関係をもって配置されている。

A類の地下式横穴墓は、I類については水平方向に7～8mの間隔が確保されて配置され、II類については垂直方向に10m以上の間隔が確保されて配置されていると言えよう。この様な例は、旭台地下式横穴墓群、大萩地下式横穴墓群B・C地区及び小林市新田場地下式横穴墓群で見られ、A類については、その配置法に規制があったとも考えられる。

I類は、A～D類に関係なくA～F-1～3区に集中することは先にふれたが、II類のB～D類については、II-A類と異なった分布をしている。II-A類は、D区以西の斜面に分布し、B～D類は、A～D-1～9区の南斜面から頂部に密集している。I・II-A類の分布地内では、5号・7号は4号・5号を、9号は8号を、55号は50号・56号を意識しているようで、A類との関係を指摘できる。4区から以北のB～D類は、主軸が高位方向でしかもその間隔は近接或いは数m以内の間隔であり、II-B～D類は密集する傾向があるようである。このような分布状況の中でも空白部が存在し、A-5～7区、C-4・5区、C・D-6・7区などとグルーピングできる。II-B～D類の配置法は、A類とは異なった意識のもとに配置していると看取できるが、この様な例は、大萩地下式横穴墓群F地区及び小林市東二原地下式横穴墓群で見られる。立切地下式横穴墓群で見られるように2種の配置法の変化は大であり、この変化は社会の変化に連動したものでろう。

今回、立切地下式横穴墓群は、71基の地下式横穴墓が調査され、中分類でも9形式の地下式横穴墓がある。この形式差は、配置状況からも時期差をあらわしていると考えられる。立切地下式横穴墓群は、配置法が大きく異なるという変動をえながら相当期間存続した墓地であったと推定される。